

資料1-2

# 泊発電所

## 火山影響評価について (補足説明資料)

令和6年10月4日  
北海道電力株式会社

## 目 次

1. 敷地から半径160km以内の範囲(地理的領域)にある第四紀火山カタログ	P. 3
2. 支笏カルデラ及び洞爺カルデラにおいて噴出した火碎流が敷地に到達した可能性評価	P.120
2. 1 支笏火碎流	P.122
2. 2 洞爺火碎流	P.132
参考文献	P.142

## 目 次

1. 敷地から半径160km以内の範囲(地理的領域)にある第四紀火山カタログ ..... P. 3  
 2. 支笏カルデラ及び洞爺カルデラにおいて噴出した小火山が敷地に到達した可能性評価 ..... P.120

2. 第四紀火山一覧 ..... P. 4  
 2. 第四紀火山カタログの整理方法 ..... P. 6

## 参考

滝川火山群(石山, コップ山) ..... P. 10	長磯 ..... P. 92
イルムケップ山 ..... P. 11	砂蘭部岳 ..... P. 93
暑寒別岳 ..... P. 12	濁川カルデラ ..... P. 94
藻岩山 ..... P. 13	渡島毛無山 ..... P. 98
積丹岳 ..... P. 14	北海道駒ヶ岳 ..... P. 99
赤井川カルデラ ..... P. 16	横津岳 ..... P. 106
支笏カルデラ(後カルデラ火山含む) ..... P. 18	木地挽山 ..... P. 108
ホロホロ・徳舜瞥 ..... P. 34	恵山丸山 ..... P. 109
オロフレ・来馬 ..... P. 35	恵山 ..... P. 110
俱多楽・登別火山群 ..... P. 36	函館山 ..... P. 115
鷺別岳 ..... P. 44	銭亀 ..... P. 116
虻田 ..... P. 46	後志海山 ..... P. 118
洞爺カルデラ(後カルデラ火山含む) ..... P. 48	
尻別岳 ..... P. 72	
羊蹄山 ..... P. 74	
ニセコ・雷電火山群 ..... P. 80	
写万部山 ..... P. 88	
狩場山 ..... P. 89	
カスベ岳 ..... P. 90	
勝澗山 ..... P. 91	

• P.122  
 • P.132  
 • P.142

## 第四紀火山一覧(1/2)

一部修正(R5/7/7審査会合)

- 敷地から半径160km以内の範囲(地理的領域)にある第四紀火山として抽出した32火山の一覧を次頁に示す。
- これら32火山については、それぞれ活動履歴及び噴出量-年代階段ダイアグラムを整理した上で、将来の火山活動可能性評価を実施している。
- また、火山噴出物の分布についても整理している。
- 「地理的領域にある第四紀火山の抽出方法」については以下に、「活動履歴及び噴出量-年代階段ダイアグラムの整理方法」についてはP6～P7に、「火山噴出物分布の整理方法」についてはP8にそれぞれ示す。

## 【地理的領域にある第四紀火山の抽出方法】

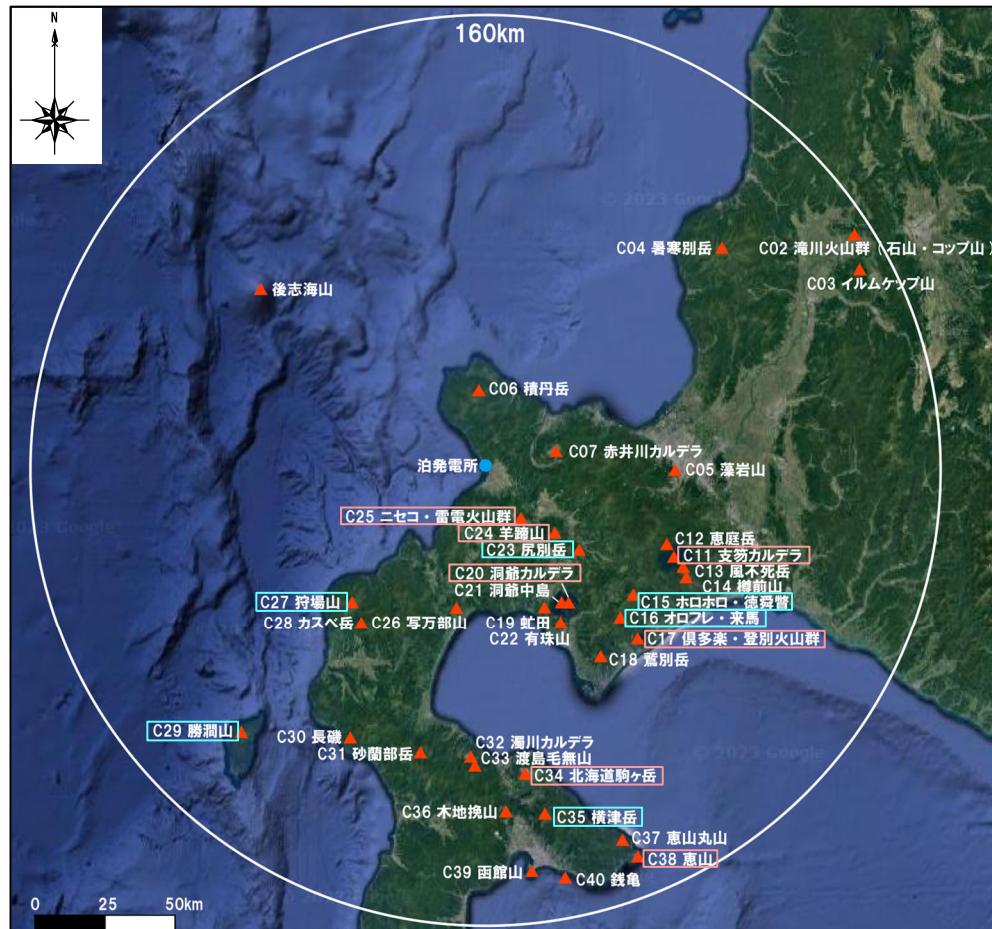
- 地理的領域にある第四紀火山については、中野ほか編(2013)「日本の火山(第3版)」及び中野ほか編(2013)に基づくweb版のデータベース(以降、産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」と呼ぶ)に示された第四紀火山から31火山を抽出した。
- 中野ほか編(2013)においては、年代測定により第四紀であることが判明している海底火山も多数あるが、活動的ではないものは表現していないとされている。
- このため、西来ほか編(2012)に示された後志海山を抽出し、地理的領域にある第四紀火山については、後志海山を加えた32火山とした。

## 1. 敷地から半径160km以内の範囲 (地理的領域) にある第四紀火山カタログ

## 第四紀火山一覧 (2/2)

一部修正(H28/2/5審査会合)

敷地から半径160km以内の範囲(地理的領域)にある第四紀火山



## 敷地から半径160km以内の範囲(地理的領域)にある第四紀火山の位置図

(第四紀火山の位置は産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」に基づく。)

地図Navi (ver.1.2.1 20230302)を基に作成)

番号	火山名	敷地からの距離(km)	活動年代
C02	瀧川(たきかわ)火山群 (石山(いしやま)、コップ山(こっぺやま))	石山: 128.2 コップ山: 151.3	約1000-170万年前 (石山:約200万年前、コップ山:約170万年前)
C03	イルムケップ山(いるむけっぺやま)	146.1	約250万年前
C04	暑寒別岳(しょかんべつだけ)	111.5	約400-200万年前
C05	藻岩山(もいわやま)	66.0	約260-240万年前
C06	積丹岳(しゃこんだけ)	26.5	約250-200万年前
C07	赤井川(あいかいがわ)カルデラ	25.3	約210-130万年前
C11	支笏(しこつ)カルデラ(後カルデラ火山含む)	74.8	約4万年前にカルデラ形成
	C12 恵庭岳(えにわだけ)	68.6	約1万8000年前以前に活動開始
	C13 風不死岳(ふっぷしだけ)	77.7	約4万年前以前
	C14 檜前山(ひのまきさん)	80.2	約9000年前に活動開始
C15	木戸ホロ・徳舞管(とくしゅんべつ)	68.0	約170-160万ないし約60万年前
C16	オロフレ・来馬(らいば)	70.2	来馬岳: 約60-50万年前 オロフレ山: 活動年代は不明
C17	俱多楽(くたら)・登別(のぼりべつ)火山群	80.5	約11万年前以前
C18	鷺別岳(れしべつだけ)	77.8	約190万年前
C19	虻田(あぶた)	53.4	約180万年前
C20	洞爺(とうや)カルデラ(後カルデラ火山含む)	54.8	約11万年前にカルデラ形成
	C21 洞爺中島(とうやなかじま)	55.1	約5-3万年前
	C22 有珠山(うすさん)	60.7	約3万年前に活動開始
C23	尻別岳(しりべつだけ)	43.6	約70-55万年前
C24	羊蹄山(ようていざん)	33.8	10万ないし数万年前以前
C25	ニセコ・雷電(らいでん)火山群	19.7	雷電火山群: 約160-50万年前 ニセコ火山群: 約150万年前以前
C26	写万部山(しゃまんべやま)	50.5	約260-250万年前
C27	狩場山(かりばやま)	66.1	約80-25万年前
C28	カスヘ岳(かすべだけ)	69.4	前期更新世
C29	勝洞山(かつまやま)	126.4	約70-20万年前
C30	長磯(ながいそ)	105.7	約220-140万年前
C31	砂蘭部岳(さらんべだけ)	102.2	約180万年前
C32	濁川(にごりがわ)カルデラ	101.9	約2万-1万3000年前
C33	渡島毛無山(おしまけなしやま)	105.3	ジェラシアン-カラブリアン(前期更新世前半-前期更新世後半)
C34	北海道駒ヶ岳(ほっかいどうこまがたけ)	109.0	約4万年前以前に活動開始
C35	横津岳(よこつだけ)	123.7	約170-14万年前
C36	本地挽山(きじひきやま)	120.6	約190万年前以前
C37	恵山丸山(えさんまるやま)	139.9	約20万年前
C38	恵山(えさん)	146.9	約5万年前以前
C39	函館山(はこだてやま)	142.7	約120-90万年前
C40	餃龟(げにかめ)	146.7	4万5000-3万3000年前の間
—	後志海山(しりべしかいざん)	101.2	約90万年前後(古くとも130万年)

### 完新世に活動があった火山

：全新世に活動を行っていないものの将来の活動可能性が否定できない火山

## 第四紀火山カタログの整理方法(1/3)

一部修正(R5/7/7審査会合)

## 【各火山の活動履歴及び噴出量-年代階段ダイアグラムの整理方法】

- 各火山の活動履歴及び噴出量-年代階段ダイアグラムの整理は、産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」及び西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」を基本参照とし、これらはweb上で更新がなされていることから、2024年8月時点のものを改めて確認するとともに、2022年7月15日に公開された産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2022)「大規模噴火データベース」についても、引用文献を含め確認した。
- 噴出物体積が不明な火山については、火山体体積が噴出物体積の目安になるものと考え、主に第四紀火山カタログ委員会編(2000)「日本の第四紀火山カタログ」に示される火山体体積について確認した。
- R3.10.14審査会合以降に実施した網羅的な文献調査から、火山の活動史をとりまとめたもの、噴出物についてより細かいユニット区分がなされているもの、噴出物体積を示しているもの、新たな噴出年代を示しているもの等を、評価に関連する文献として新たに抽出した。
- 新たな文献の抽出に当たっては、複数の文献で見解が異なる場合は、**より新しい査読論文或いは産業技術総合研究所が発刊するデータベース、地質図や資料集を重視した上で、テフラ層序から活動史を体系的にとりまとめているものや地質調査結果に基づく評価がなされているものを選定することを原則とした。**
- また、活動履歴及び噴出量-年代階段ダイアグラムをより体系的なものとするため、以下の考え方に基づく整理とした(次頁に、「勝澗山」を一例として、対応関係を示す)。
  - ①“火山の形式”及び“活動年代”的項目については、産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」及び西来ほか編(2012)を確認した上で、同記載であればいずれも引用元として注釈を付し、両文献のうち、より明確な記載、引用文献との対応関係がより明確である等の方があれば、そちらの文献記載を採用
  - ②“活動年代”的項目については、①で整理した活動年代と網羅的な文献調査も含め整理した活動履歴表に基づく活動年代とで差異が生じている場合は、活動履歴表に基づく活動年代を採用
  - ③網羅的な文献調査は、R3.10.14審査会合以降に実施していることを踏まえ、活動履歴表について、同審査会合資料からの変更点がある場合は、その内容を別表に記載

## (別表中における変更点の記載規則)

- 知見の追加に関するもの ⇒ 「…を追記した。」「…に付した。」
- 知見の見直しに関するもの ⇒ 「…に見直した。」
- 知見の取捨選択に関するもの ⇒ 「…を採用することとした。」「…に採用しないこととした。」
- R3.10.14審査会合以前に抽出していた知見の反映誤りの是正 ⇒ 「…修正を実施した。」

※知見の見直し及び取捨選択に関する記載については、別表中で下線を施している。

(P8へ続く)

## 第四紀火山カタログの整理方法(2/3)

一部修正(R5/7/7審査会合)

## 勝潤山の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C29 勝潤山
敷地からの距離	126.4km
火山の形式 <sup>※1,※2</sup>	溶岩ドーム?
活動年代 <sup>※3</sup>	約70-20万年前

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

※3 下表に示す勝潤山の活動履歴に基づく。



## 勝潤山活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
完新世				
更新世	不明			玉生(1978) 鷹澤(1992)
0.20±0.06Ma	流紋岩火山碎屑物 <sup>※4</sup>	0.01		新エネルギー総合開発機構(1994)
0.31±0.09Ma	勝潤山溶岩		0.2	第四紀火山カタログ委員会(2000)
0.71±0.11Ma	勝潤山溶岩	0.1		鹿野ほか(2006)
不明	勝潤山溶岩 流紋岩火山碎屑物	0.5		

※4 鹿野ほか(2006)によれば、当該流紋岩火山碎屑物は、勝潤山溶岩を直接被覆しており、両者の間に土壌が認められないことから、勝潤山溶岩噴出後まもなく当該流紋岩火山碎屑物を噴出した火碎噴火が起こったことを意味するとされている。

## R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

- R3.10.14審査会合資料においては、鹿野ほか(2006)に示された噴出物のうち溶岩のみを記載し、流紋岩火山碎屑物を記載していないことから追記するとともに、溶岩の名称についても、適正に記載できていなかったことから修正を実施した。
- また、噴出物名と噴出物体積の対応関係に誤りがあったことから、修正を実施した。
- 第四紀火山カタログ委員会編(2000)に示された火山体体積を追記した。

## 【考え方①】

「日本の火山(DB)」

○火山の型式・構造:溶岩ドーム?

○活動年代:約30万ないし20万年前

西来ほか編(2012)

○火山の型式:溶岩ドーム?

○活動時期:約30万ないし20万年前

⇒下線箇所を採用

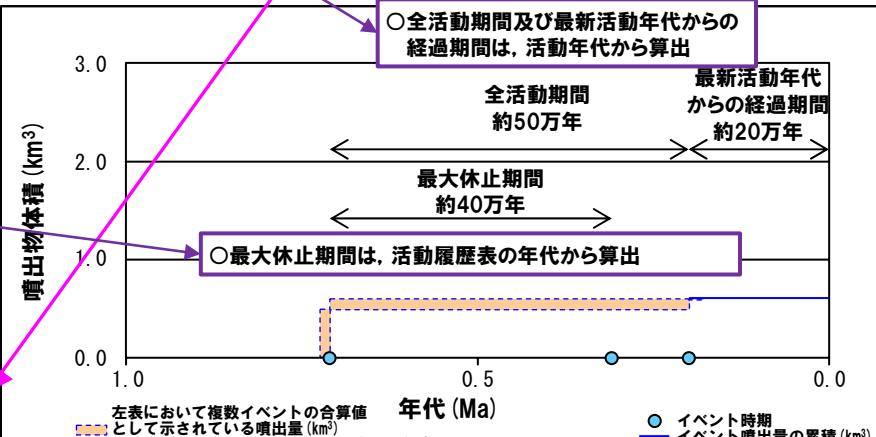
## 【考え方②】

⇒網羅的な文献調査も含め整理した活動履歴表に基づく活動年代と上記の活動年代に差異が生じている場合、“活動年代”の項目には、活動履歴表に基づく活動年代(0.71-0.20Ma=約70-20万年前)を採用

## 【考え方③】

⇒活動履歴表の整理において、R3.10.14審査会合資料からの変更点がある場合は、その内容を別表に記載

(産業技術総合研究所)



噴出量-年代階段ダイアグラム

## 第四紀火山カタログの整理方法 (3/3)

一部修正 (R5/7/7審査会合)

(P6からの続き)

## 【各火山の火山噴出物分布の整理方法】

- 火山噴出物(降下火碎物を除く)の分布については、複数の地質図幅等がコンパイルされ、火山岩(主に溶岩)、火碎流堆積物等と岩相が区分されている産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)を確認することを基本とし、より遠方に到達しているとされる文献がある場合はそちらも確認した。
- 降下火碎物の分布については、まず、以下の文献を確認した。
  - ・町田・新井(2011) : 2003年時点における更新世の広域テフラの分布等を体系的に取りまとめた文献
  - ・Uesawa et al. (2022) : 551の火山灰ユニットの等層厚線図を体系的に取りまとめた須藤ほか(2007)等に基づき、過去約15万年前以降の降下火碎物の分布をデータベース化した文献\*
- 次に、上記2文献に分布が示されていない降下火碎物については、個別に文献を収集し、分布状況を確認した。

## 【その他】

- 敷地から最も近い第四紀火山であるニセコ・雷電火山群及び隣接する羊蹄山の活動状況については、P6に示す活動履歴及び噴出量-年代階段ダイアグラムの整理方法に基づき抽出した知見以外でも、より新しい噴出年代又はその可能性が示されている知見があれば、両火山の活動可能性評価(完新世に活動した火山との評価)に影響はなくとも、活動履歴に記載した。
- 加えて、敷地に近い火山については、活動年代を問わず、継続的に知見の収集を実施することとした。

\*降下火碎物の分布確認及び作図には、当該文献の付録データベースのうち、TephraDB\_Prototype\_ver1.3 (Uesawa, 2023) を用いた。

余白

## 活動可能性評価

一部修正(H28/2/5審査会合)

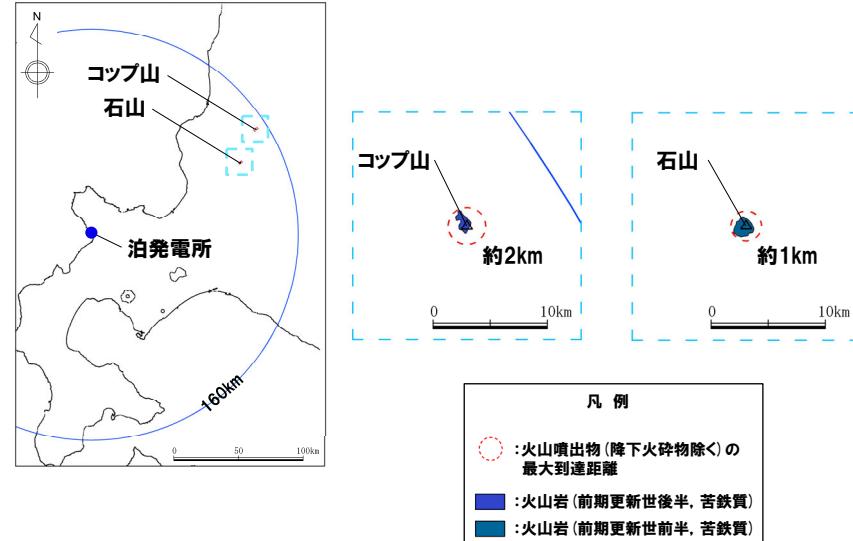
## 滝川火山群(石山, コップ山)の概要

火山名 <sup>※1</sup>	CO2 滝川火山群(石山, コップ山)
敷地からの距離	石山: 128.2km コップ山: 151.3km
火山の形式 <sup>※1</sup>	単成火山群(溶岩丘?)
活動年代 <sup>※2</sup>	滝川火山群: 約1000-170万年前 石山: 約200万年前 コップ山: 約170万年前
評価	中川ほか(1993)によれば、滝川地域では中-後期中新世から鮮新世にかけて、引張応力場のもとで特徴的な火成活動が発生し、この活動は第四紀初め <sup>※3</sup> にはすべて停止したとされていることから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

※3 2009年の第四紀境界の変更以前の文献であることから、約180万年前程度を指す。

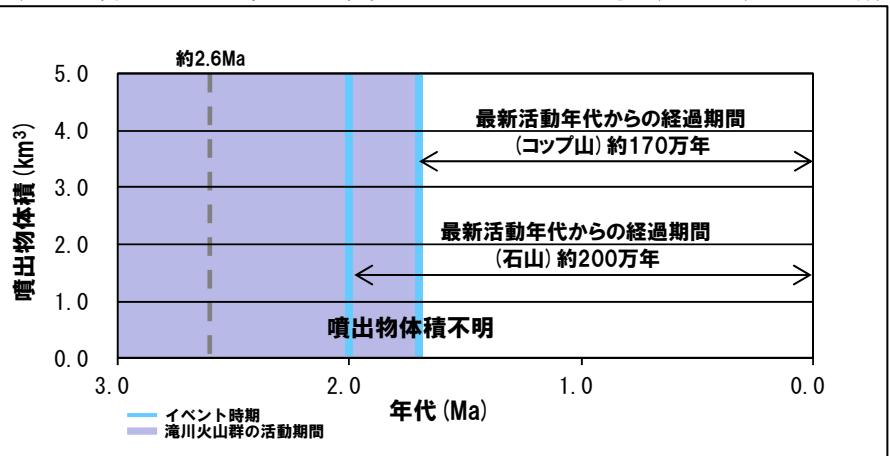


## 滝川火山群(石山, コップ山)の活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			中川ほか(1993) 第四紀火山カタログ 委員会編(2000)
	更新世 1.7±0.1Ma 2.0±0.2Ma	コップ山:玄武岩 石山:玄武岩	不明 不明	

R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

○第四紀火山カタログ委員会編(2000)に示された火山体体積を追記した。

滝川火山群(石山, コップ山)  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)

噴出量-年代階段ダイアグラム

## 活動可能性評価

一部修正 (H28/2/5審査会合)

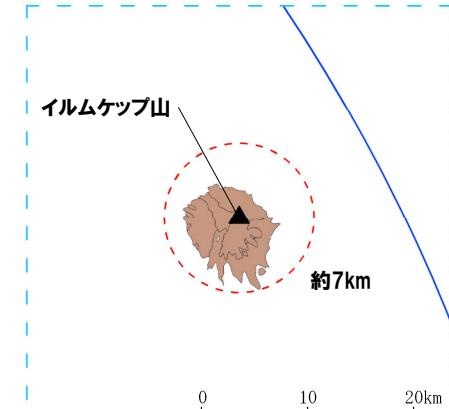
## イルムケップ山の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C03 イルムケップ山
敷地からの距離	146.1km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山
活動年代 <sup>※1</sup>	約250万年前
評価	中川ほか (1993) によれば、イルムケップ山が位置する滝川地域では中-後期中新世から鮮新世にかけて、引張応力場のもとで特徴的な火成活動が発生し、この活動は第四紀初め <sup>※3</sup> にはすべて停止したとされていることから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編 (2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

※3 2009年の第四紀境界の変更以前の文献であることから、約180万年前程度を指す。



凡 例

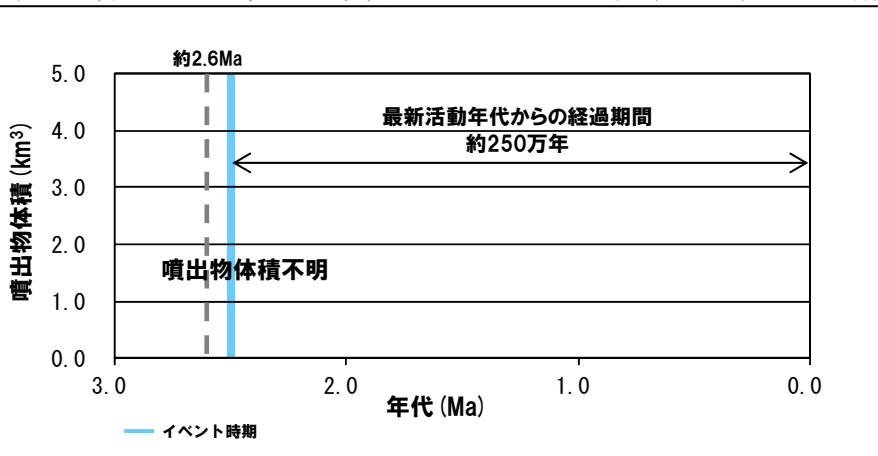
- : 火山噴出物 (降下火碎物除く) の最大到達距離
- : 火山岩 (前期更新世前半、中間質)

## イルムケップ山活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			佐川ほか (1988)
	更新世 2.5±0.1 Ma	音江山溶岩・イルムケップ 火山噴出物:安山岩	不明	広瀬ほか (2000)

R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

OR3.10.14審査会合資料においては、佐川ほか (1988) に示された火山噴出物について「玄武岩」と記載していたが、誤記であるため、「安山岩」に修正を実施した。  
○広瀬ほか (2000) に示された火山体体積を追記した。

イルムケップ山  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) より作成)

噴出量-年代階段ダイアグラム

# 暑寒別岳 (しょかんべつだけ)

## 活動可能性評価

一部修正 (H28/2/5審査会合)

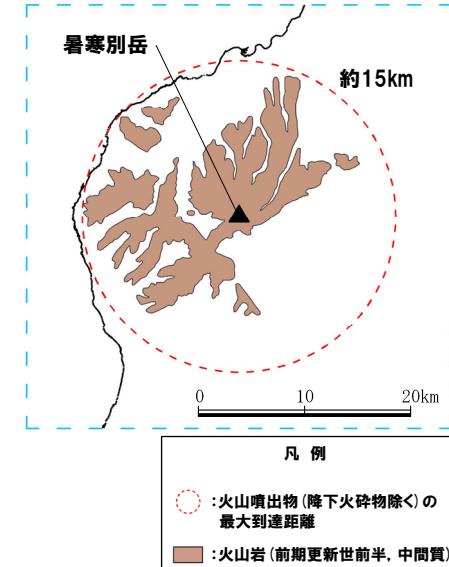
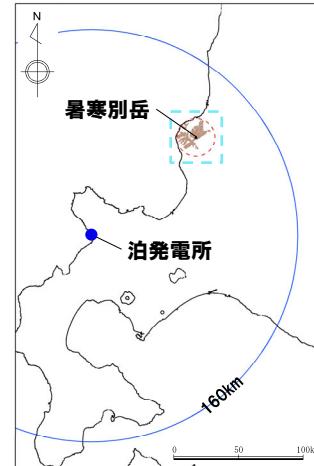
### 暑寒別岳の概要

火山名※1	C04 暑寒別岳
敷地からの距離	111.5km
火山の形式※2	成層火山
活動年代※1,※2	約400-200万年前
評価	最大休止期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。 なお、中川ほか(1993)によれば、暑寒別岳が位置する滝川地域では中-後期中新世から鮮新世にかけて、引張応力場のもとで特徴的な火成活動が発生し、この活動は第四紀初め※3にはすべて停止したとされている。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

※3 2009年の第四紀境界の変更以前の文献であることから、約180万年前程度を指す。



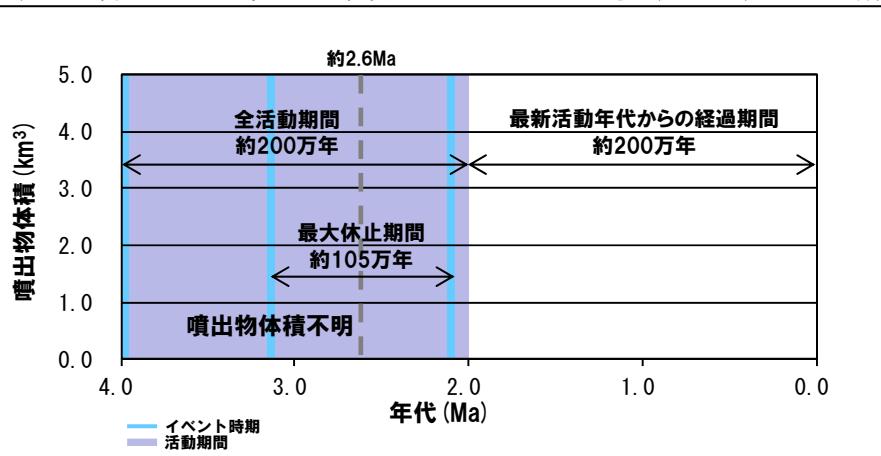
### 暑寒別岳活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km³)	火山体体積 (km³)	参考文献
第四紀	完新世			八木ほか (1987) 広瀬ほか (2000)
	更新世 2.07±0.20Ma	暑寒別岳:頂上溶岩 (安山岩)	不明	
新第三紀	鮮新世 3.12±0.14Ma	南暑寒岳:上部溶岩 (安山岩)	不明	八木ほか (1987) 広瀬ほか (2000)
	浜益玄武岩:橄欖石单斜輝石玄武岩 3.96±0.20Ma		不明	

R3.10.14審査会合資料からの  
活動履歴の変更点

○なし。

### 暑寒別岳 (産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)



噴出量-年代階段ダイアグラム

# 藻岩山(もいわやま)

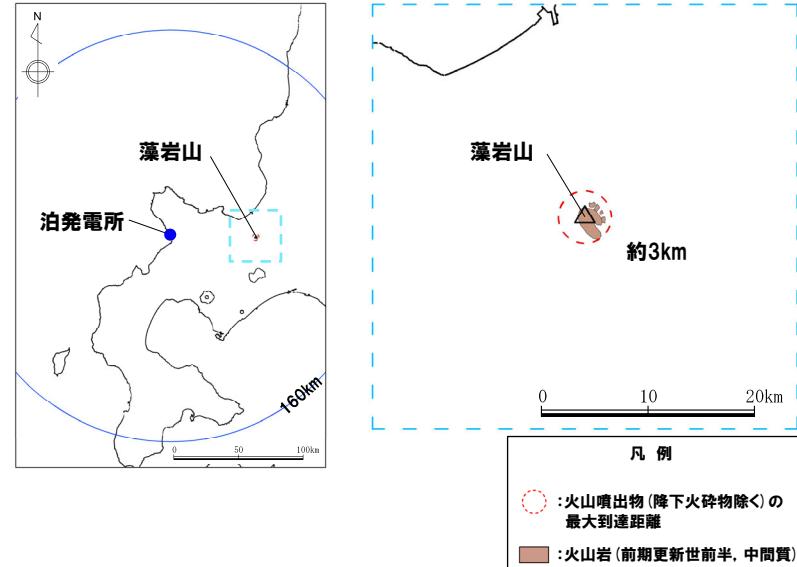
## 活動可能性評価

一部修正(H28/2/5審査会合)

### 藻岩山の概要

火山名*	C05 藻岩山
敷地からの距離	66.0km
火山の形式*	複成火山
活動年代*	約260-240万年前
評価	最大休止期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。

\*産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。



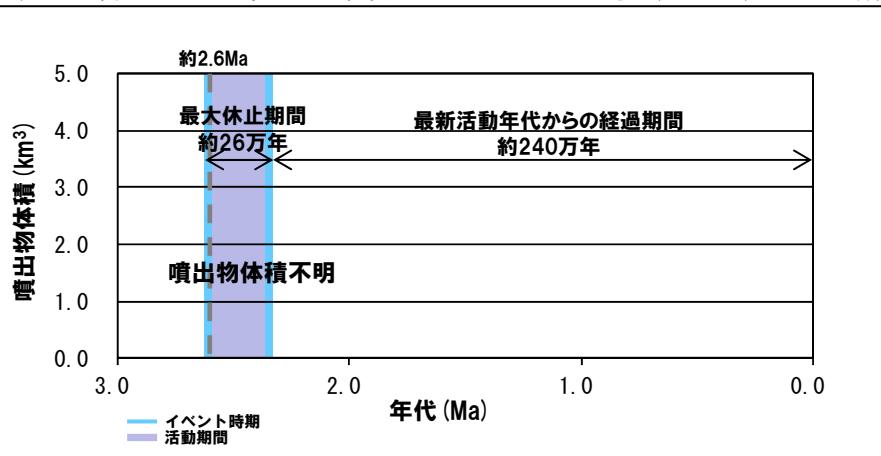
### 藻岩山活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			重野ほか (2007)
	更新世 2.35±0.06Ma	藻岩山溶岩: 橄欖石安山岩	不明	
	2.61±0.07Ma	藻岩山溶岩: 橄欖石安山岩	不明	

R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

○なし。

### 藻岩山 (産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)



噴出量-年代階段ダイアグラム

# 積丹岳 (しゃこたんだけ)

## 活動可能性評価

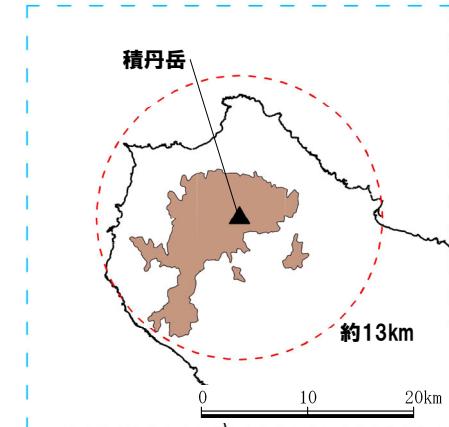
一部修正 (H28/2/5審査会合)

### 積丹岳の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C06 積丹岳
敷地からの距離	26.5km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山
活動年代 <sup>※1, ※2</sup>	約250-200万年前
評価	最大休止期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。



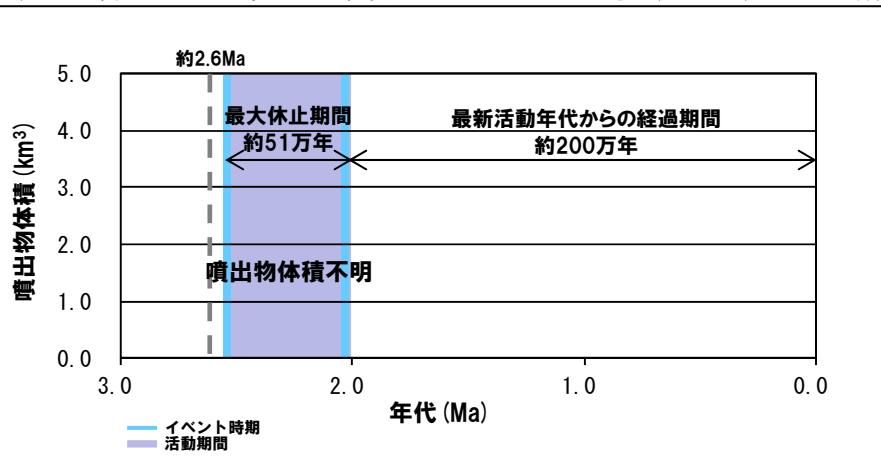
### 積丹岳活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			Watanabe (1990) 広瀬ほか (2000)
	更新世 2.03±0.10Ma	積丹岳安山岩	不明	
	2.54±0.13Ma	尾根内層:安山岩	不明	

R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

○なし。

### 積丹岳 (産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)



噴出量-年代階段ダイアグラム

余白

# 赤井川(あかいがわ)カルデラ

## 活動可能性評価 (1/2)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

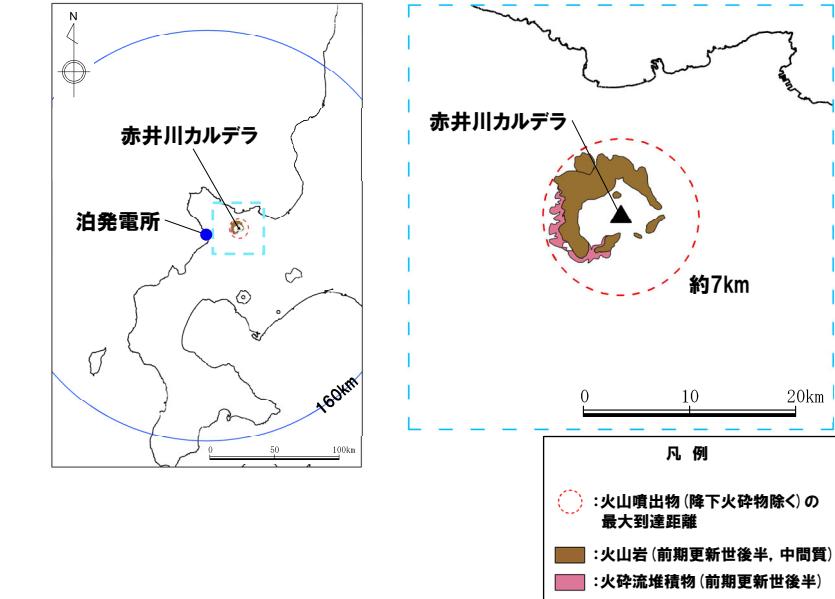
### 赤井川カルデラの概要

火山名 <sup>※1</sup>	C07 赤井川カルデラ
敷地からの距離	25.3km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山-カルデラ
活動年代 <sup>※3</sup>	約210-130万年前
評価	<p>長沢火山噴出物下部層については、横山ほか(2003)において、赤井川カルデラの外側に位置する余市川カルデラ(後期鮮新世に形成)の陥没に伴って生じた可能性があるものとされているが、現状、可能性の段階であると考えられることから、赤井川カルデラの活動に伴うものとして取り扱う。</p> <p>最大休止期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。</p>

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

※3 次頁に示す赤井川カルデラの活動履歴に基づく。



赤井川カルデラ  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)

## 活動可能性評価(2/2)

一部修正(H28/2/5審査会合)

## 赤井川カルデラ活動履歴

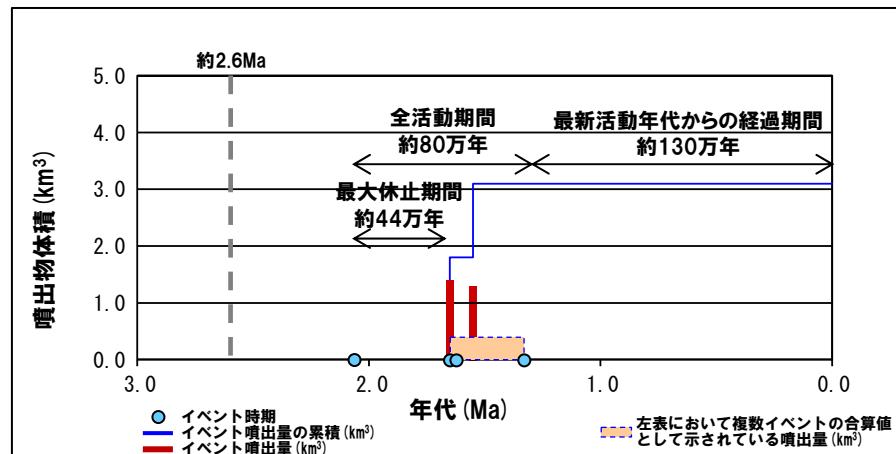
年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			
	更新世			
	不明	北丸山溶岩 <sup>※4</sup>	不明	
	不明	頂白山溶岩 <sup>※5</sup>	不明	
	1.33±0.02Ma	元服山溶岩	0.4 <sup>※7</sup>	第四紀火山カタログ委員会編(2000) 横山ほか(2003)
	1.55±0.06Ma	大黒山溶岩	1.3	
	1.65±0.07Ma	丸山溶岩	1.4	
	1.66±0.05Ma	山梨溶岩	0.4 <sup>※7</sup>	
	不明	長沢火山噴出物上部層: 流紋岩質溶結凝灰岩	不明	
	1.62±0.14Ma	長沢火山噴出物中部層: 流紋岩質溶結凝灰岩	不明	
	2.06±0.57Ma	長沢火山噴出物下部層 <sup>※6</sup> : 流紋岩質溶結凝灰岩	不明	

※4 横山ほか(2003)によれば、赤井川カルデラの形成については、南西部に発生した断続から長沢火山噴出物(中・上部層)が噴出し、引き続き生じた環状断続に沿って外輪山溶岩が噴出した後、カルデラ内の陥没が生じたとされている。また、陥没後の発達過程としては、カルデラ内の北縁にそれまでとは異なる化学組成の北丸山溶岩が中央火口丘を形成し、一連の火山活動は終了したとされている。このため、北丸山溶岩と外輪山溶岩の噴出には、大きな時間間隙がないものと考えられる。

※5 横山ほか(2003)によれば、頂白山溶岩は、大黒山の北側斜面に形成された、一連の外輪山溶岩よりも新規の産物であり、外輪山溶岩と化学組成が類似していることから、カルデラ内の陥没直前の噴出だった可能性もあるとされている。

※6 横山ほか(2003)によれば、長沢火山噴出物の下部層と中・上部層の間には、地質構造に明瞭なギャップが存在し、化学組成においても明瞭な差が認められることから、下部層と中部層の間に約40万年の火山活動の休止期間を持つ不連続が存在したと考えられるとしている。  
また、下部層は、赤井川カルデラ凹地に流入した火碎流であり、外側の余市川カルデラ(後期鮮新世に形成)の陥没に伴って生じた可能性があるものとされている。

※7 山梨溶岩と元服山溶岩を合わせた噴出物体積。



R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

○R3.10.14審査会合資料においては、横山ほか(2003)に示された噴出物のうち、長沢火山噴出物上部層、頂白山溶岩及び北丸山溶岩を記載していなかったことから追記した。

○R3.10.14審査会合資料においては、噴出物体積を、一括して「不明」としていたが、横山ほか(2003)に、山梨溶岩、丸山溶岩、大黒山溶岩及び元服山溶岩の噴出物体積が示されていることから追記した。

○横山ほか(2003)に示された、長沢火山噴出物に関する考察を注釈6に付した。

○第四紀火山カタログ委員会編(2000)に示された火山体体積を追記した。

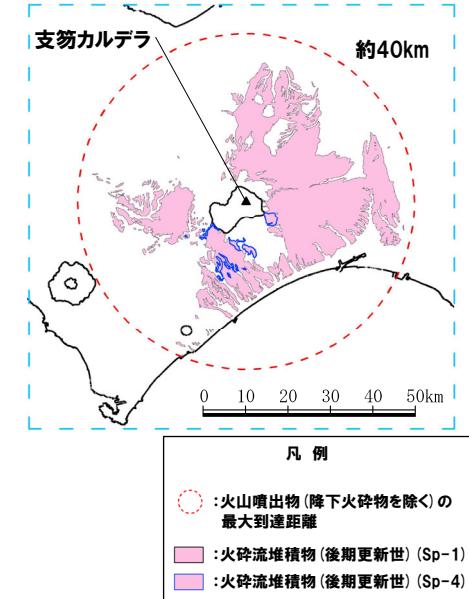
# 支笏(しこつ)カルデラ

## 活動可能性評価 (1/5)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

### 支笏カルデラの概要

火山名 <sup>※1</sup>	C11 支笏カルデラ (後カルデラ火山含む) C12 恵庭岳 C13 風不死岳 C14 樽前山
敷地からの距離	74.8km (恵庭岳:68.6km, 風不死岳:77.7km, 樽前山:80.2km)
火山の形式 <sup>※2</sup>	支笏カルデラ:火碎流台地-カルデラ 恵庭岳:成層火山, 火碎丘, 溶岩ドーム 風不死岳:成層火山, 溶岩ドーム 樽前山:火碎丘, 溶岩ドーム
活動年代 <sup>※3</sup>	支笏カルデラ:約4万年前にカルデラ形成 恵庭岳:約1万8000年前以前に活動開始 風不死岳:約4万年前以降 樽前山:約9000年前に活動開始
評価	約1万年前以降に活動しており, 完新世に活動した火山として抽出する。



### 支笏カルデラ

(産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) より作成)

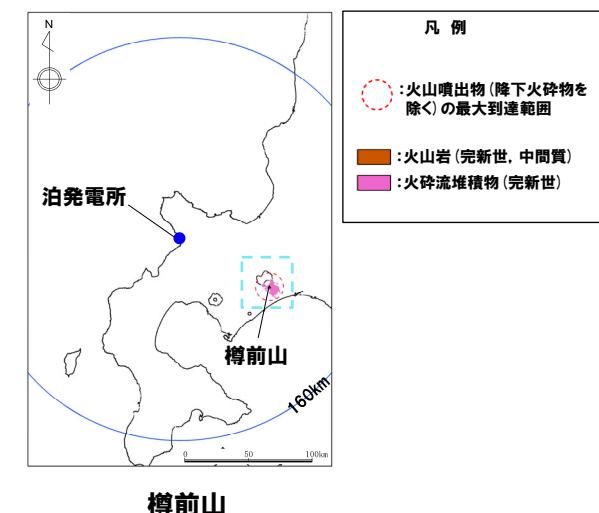
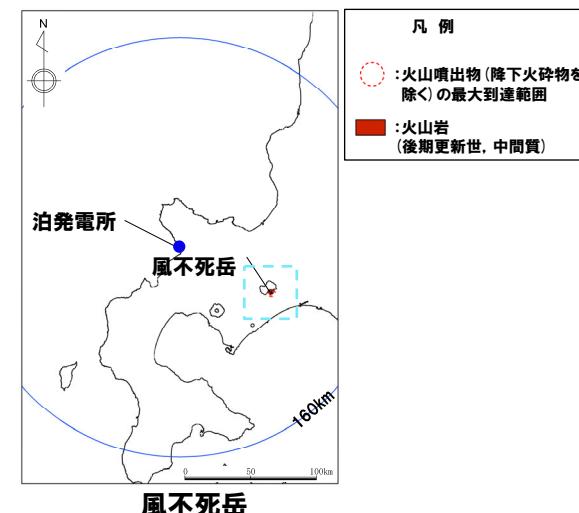
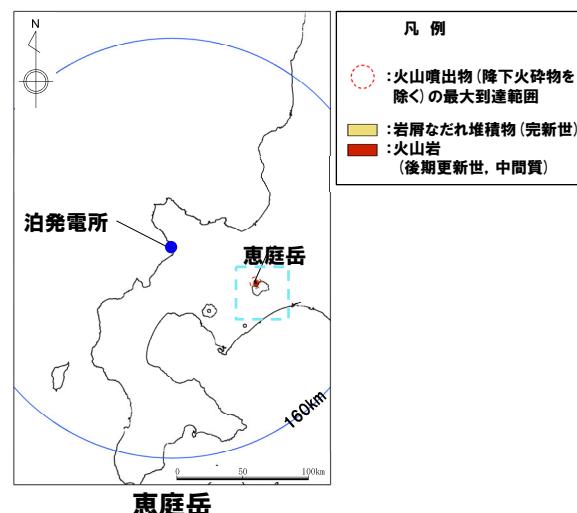
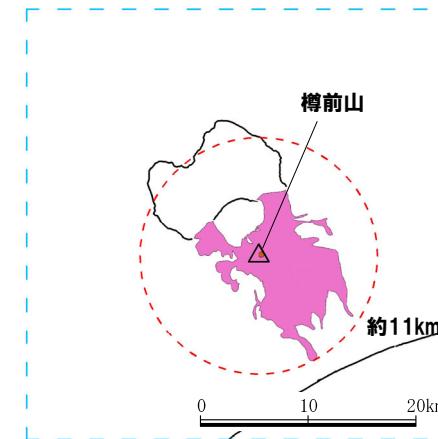
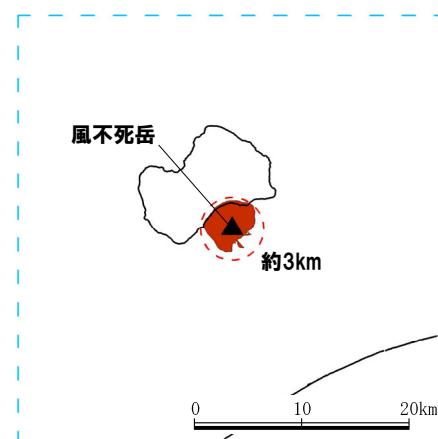
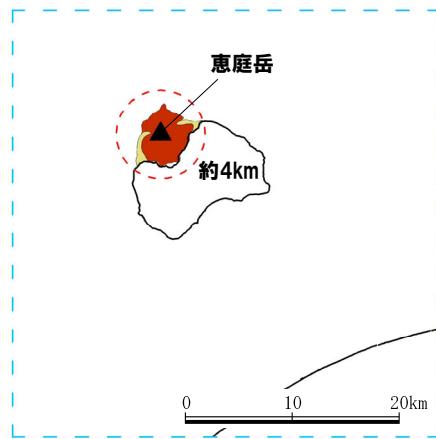
※1 産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編 (2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

※3 P21~P22に示す支笏カルデラ, 恵庭岳, 風不死岳及び樽前山の活動履歴に基づく。

## 活動可能性評価 (2/5)

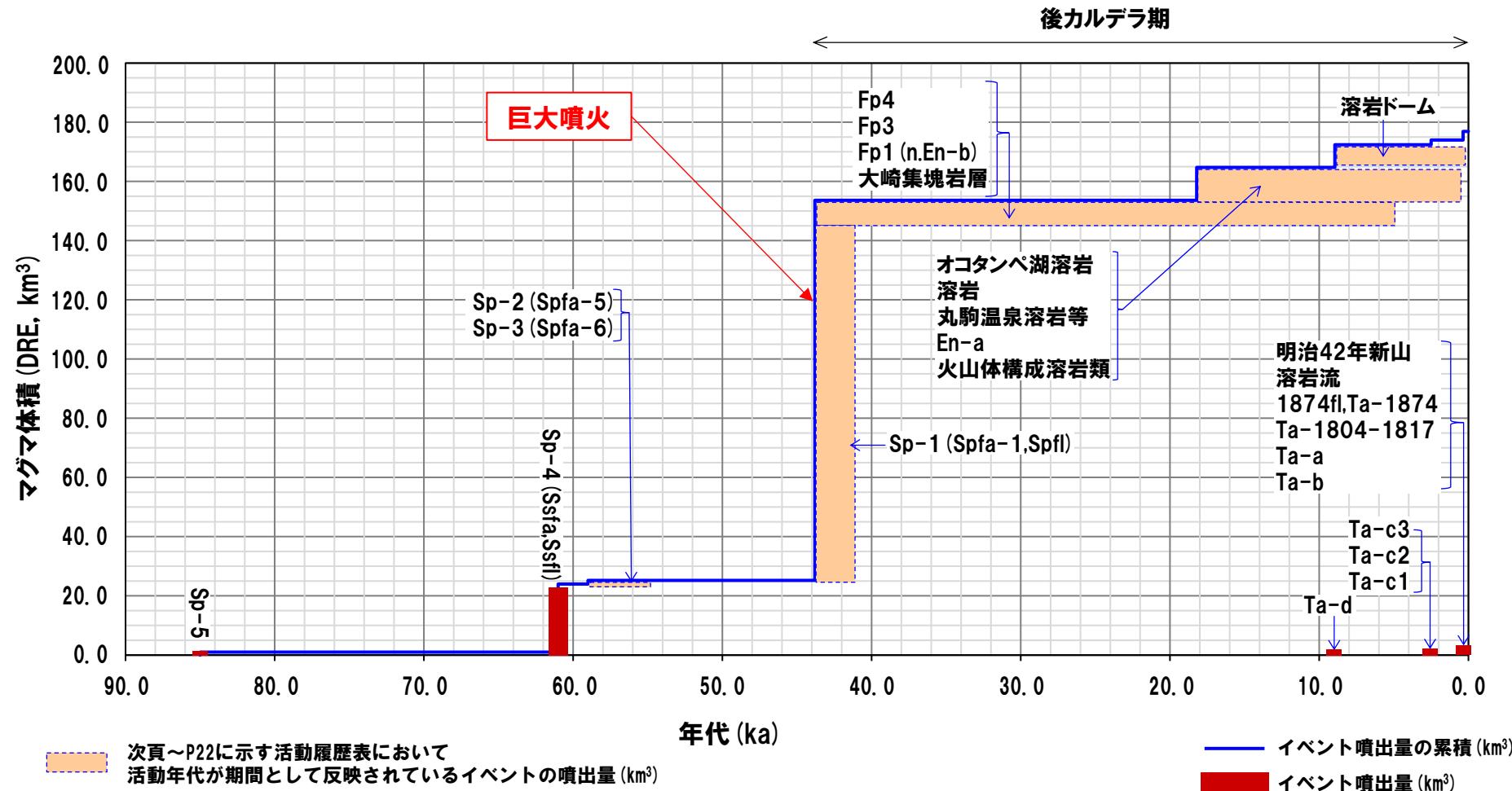
一部修正 (R5/1/20審査会合)



恵庭岳, 風不死岳及び樽前山の火山噴出物の分布範囲  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) より作成)

## 活動可能性評価 (3/5)

一部修正 (H28/2/5審査会合)



噴出量-年代階段ダイアグラム

# 支笏(しこつ)カルデラ

## 活動可能性評価 (4/5)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

### 支笏カルデラ活動履歴

年代	噴出物名	マグマ体積 (DRE, km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献	R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点 (支笏カルデラ)	
第四紀 更新世 カルデラ形成噴火 → 長期間的前駆活動 ↓				山元 (2014) 金田ほか (2020) Amma-Miyasaka et al. (2020) 産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2022) 宝田ほか (2022)		○R3.10.14審査会合資料では、山元 (2014) に基づき活動履歴を整理していたが、Sp-1のマグマ体積を「降下軽石と火碎流」と分けて示している金田ほか (2020)、支笏洞爺火山地域におけるテフラ層序と年代を体系的にとりまとめているAmma-Miyasaka et al. (2020) 及びSp-4のマグマ体積を示している宝田ほか (2022)に基づき見直した。 ○産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2022) に示された各噴火ステージを追記した。
	43.8-41.4ka Sp-1 (Spfa-1, Spfl) : ps, pfa, pfl	40~48 (降下軽石) 80 (火碎流)	1.2	—		
	ca.55ka Sp-2 (Spfa-5) : pfa	1.2	—			
	ca.59ka Sp-3 (Spfa-6) : pfa	16~23 <sup>*4</sup>	—			
	ca.61ka Sp-4 (Ssfa, Ssfl) : pfa, afa, sfa, sfl	[smaller than VEI5 class <sup>*5</sup> ]	—			
	ca.85ka Sp-5 : pfa, afa					

\*4 宝田ほか (2022) によれば、Sp-4のマグマ体積は、16~23km<sup>3</sup> (DRE) とされていることから、噴出量-年代階段ダイアグラムにおいては、23km<sup>3</sup>として図示している。

\*5 Amma-Miyasaka et al. (2020) によれば、Sp-5の噴出規模は、概算として「smaller than VEI5 class」とされていることから、噴出量-年代階段ダイアグラムにおいては、マグマ体積 (DRE) を1km<sup>3</sup>として図示している。

### 恵庭岳活動履歴

年代	噴出物名	マグマ体積 (DRE, km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献	R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点 (恵庭岳)	
第四紀 完新世 0.254-0.505ka	水蒸気爆発 オコタン岩屑流 ボロビナイ岩屑流 オコタンベ湖溶岩 溶岩	11.1	5.7	第四紀火山カタログ委員会編 (2000) 山元 (2014)		○R3.10.14審査会合資料においては、山元 (2014) に示された火山体構成溶岩類の噴出年代「18.21ka」を記載していたが、この年代は、En-aの下位であるとの層序関係から推定されたものであり、以前とする方が適切であることから、「18.21ka以前」に修正を実施した。 ○R3.10.14審査会合資料においては、山元 (2014) に示された水蒸気爆発及びボロビナイ岩屑流の年代「—」を記載していたが、オコタン岩屑流の年代に記載していた「0.254-0.505ka」が、水蒸気爆発、オコタン岩屑流及びボロビナイ岩屑流の年代幅を示すものであることから、その旨が分かる様、修正を実施した。 ○産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2022)において、恵庭岳を給源とする火山噴出物として、春日井ほか (1974) に基づきEn-c (>26ka) を示しているが、春日井ほか (1974) よりも新しくかつ査読論文である山縣 (1994) に以下の記載がなされていることから、活動履歴に採用しないこととした。
	2.04ka					
	9.52ka					
	15.62ka 丸駒温泉溶岩等 18.21ka En-a 18.21ka以前 火山体構成溶岩類					

・春日井ほか (1974) は、支笏カルデラ東方の千歳川周辺に分布し、Spflの直上にある降下軽石をEn-cと命名した。しかし、この降下軽石とSpflとの間には火山灰土が認められないことから、これはSpfl・Spfa-1と一緒に噴火の堆積物と考えられる。

○第四紀火山カタログ委員会編 (2000) に示された火山体体積を追記した。

# 支笏(しこつ)カルデラ

## 活動可能性評価 (5/5)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

### 風不死岳活動履歴

年代	噴出物名	マグマ体積 (DRE, km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献	R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点 (風不死岳)	
第四紀	完新世 4.475ka 8.465ka 不明	Fp4 Fp3 Fp2	8.4	第四紀火山 カタログ委員 会編 (2000) 山元 (2014) Amma- Miyasaka et al. (2020)	R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点 (風不死岳)	○R3.10.14審査会合資料においては、山元 (2014) に示された大崎集塊岩層の噴出年代「43.96ka」を記載していたが、この年代は、Sp-1 (支笏カルデラ) の上位であるとの層序関係から推定されたものである。
	更新世 25.5ka 不明 不明 不明 不明 不明	Fp1 (n.En-b) 第3期溶岩 露煙の沢溶結凝灰岩 第2期溶岩 第1期溶岩 金次郎沢集塊岩層				○Sp-1の噴出年代は、山元 (2014) の「43.96ka」からAmma-Miyasaka et al. (2020) の「43.8-41.4ka」に見直したことから、これに合わせ、大崎集塊岩層の噴出年代も「43.8-41.4ka」に見直した。
	43.8-41.4ka以降	大崎集塊岩層				○第四紀火山カタログ委員会編 (2000) に示された火山体体積を追記した。

### 樽前山活動履歴

年代	噴出物名	マグマ体積 (DRE, km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献	R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点 (樽前山)	
第四紀	完新世 19世紀以降 A.D.1909 A.D.1883 A.D.1874 A.D.1867 A.D.1804-1817 A.D.1739 A.D.1667 2.0ka 2.5ka 2.5ka 8.950ka 8.95-0.146ka	19世紀以降噴火 明治42年新山 溶岩流 1874fl, Ta-1874 溶岩ドーム Ta-1804-1817 Ta-a Ta-b Ta-c3 Ta-c2 Ta-c1 Ta-d (d1,d2) 溶岩ドーム	(水蒸気爆発) 0.02 0.00001 0.20 (6.28に包含) 0.03 1.60 1.10 0.03 1.40 0.14 1.40 6.28	4 (火碎丘) 1.8 (火碎流噴出物)	第四紀火山 カタログ委員 会編 (2000) 山元 (2014)	○R3.10.14審査会合資料においては、山元 (2014) に示されたTa-dを記載していたが、この降下火碎物は、上位の岩相ユニットであるTa-d1と下位の岩相ユニットであるTa-d2からなるため、これらのユニットを追記した。
	○第四紀火山カタログ委員会編 (2000) に示された火山体体積を追記した。					

余白

## 火山噴出物の分布(降下火碎物を除く)(1/5)

一部修正(R5/7/7審査会合)

- 支笏火碎流堆積物の分布範囲として、次頁に宝田ほか(2022)の支笏火碎流堆積物分布図を示す。
- 宝田ほか(2022)は、最新の野外地質調査と文献調査に基づき、支笏火碎流堆積物の現存分布範囲及び層厚等をまとめた、産業技術総合研究所発刊の地質図及びその解説書であり、産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)よりも遠方に当該堆積物の分布が示されている。
- また、宝田ほか(2022)が参照している文献には、R5.1.20審査会合資料において、支笏火碎流堆積物の分布範囲として引用していた、産業技術総合研究所編(2003)、町田・新井(2011)、山元(2016)及びAmma-Miyasaka et al.(2020)も含まれている。
- このため、宝田ほか(2022)を支笏カルデラの火山噴出物の分布を示す代表文献として扱う。

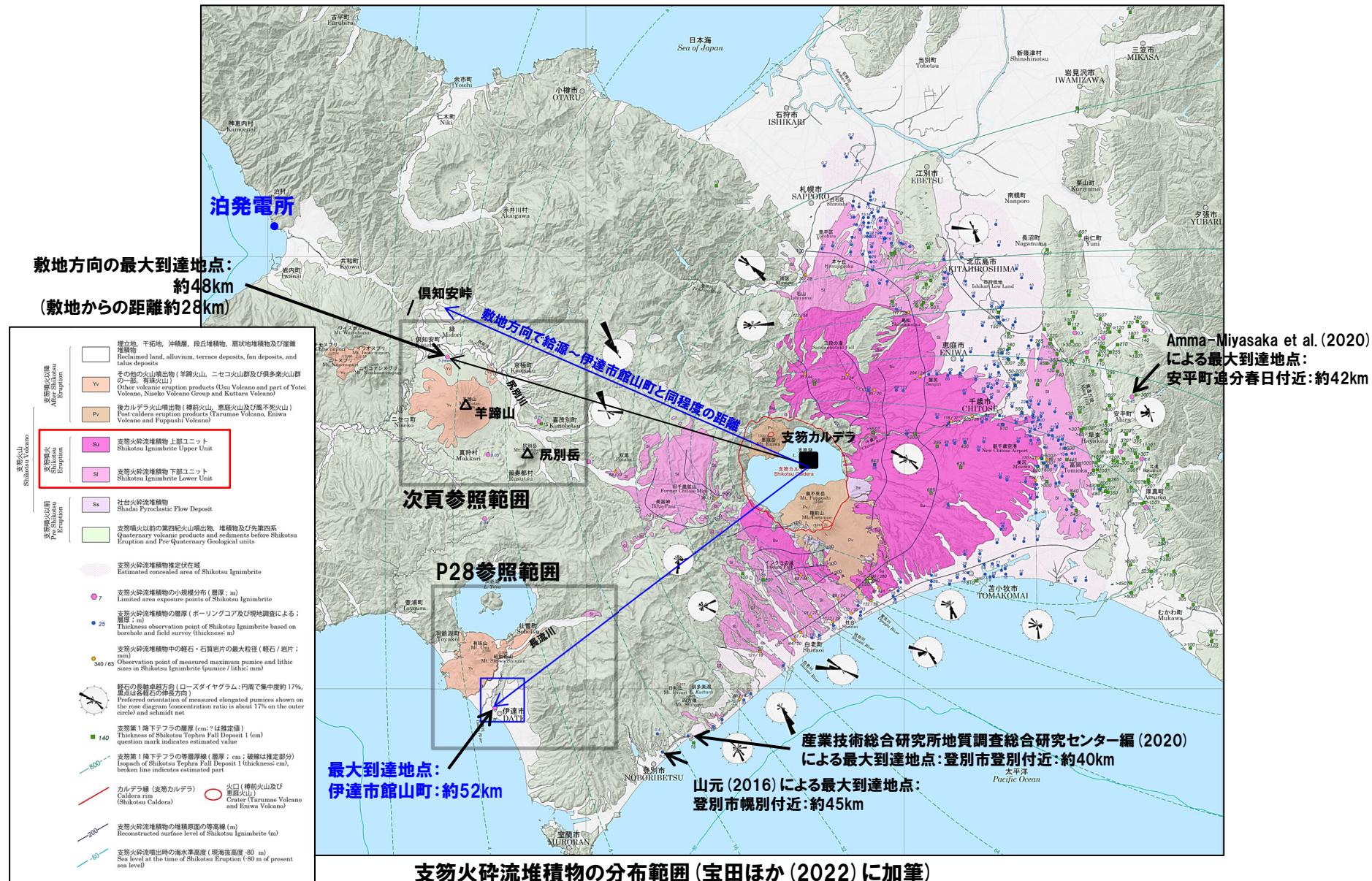
## 【宝田ほか(2022)確認結果】

- 同文献に基づくと、支笏火碎流堆積物(Spfl)は、支笏カルデラ周辺に広範囲に認められる(次頁参照)。
- 支笏カルデラから敷地方向(北西～西方向)では、羊蹄山北側地点(給源から約48km)まで認められるが、当該堆積物はreworkとされている(P26参照)。
- 支笏火碎流堆積物(Spfl)の最大到達距離は、支笏カルデラから南西方向に位置する伊達市館山町までの約52kmであり、層厚は1mである(詳細はP28参照)。

## 支笏(しこつ)カルデラ

## 火山噴出物の分布 (降下火碎物を除く) (2/5)

再掲 (R5/7/7審査会合)



# 支笏(しこつ)カルデラ

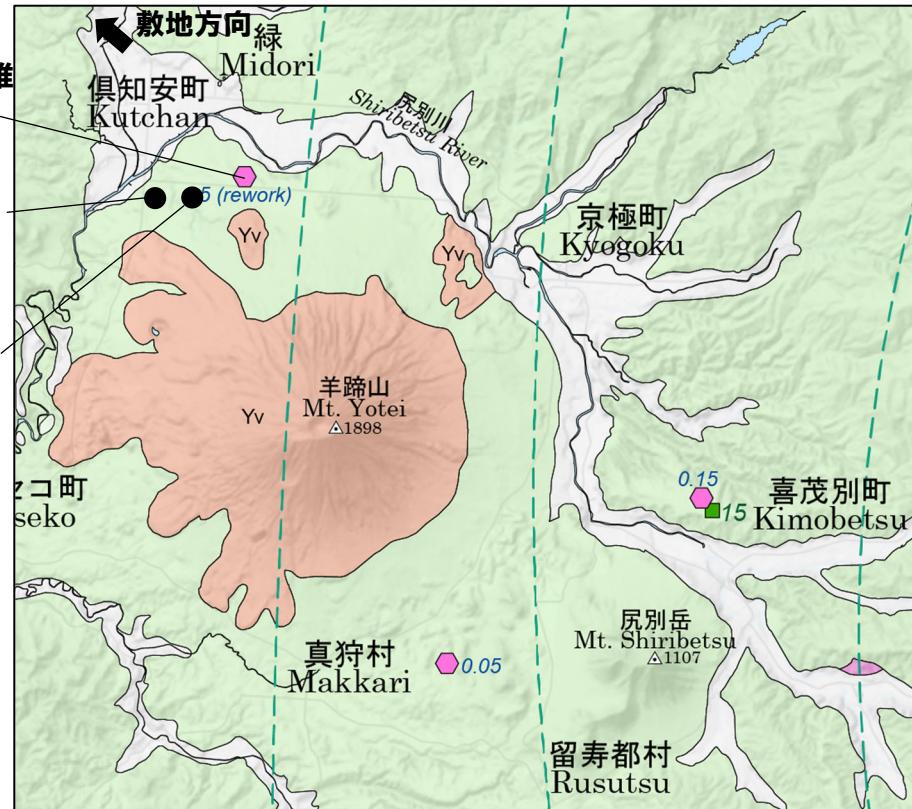
## 火山噴出物の分布(降下火碎物を除く)(3/5)

再掲(R5/7/7審査会合)

羊蹄山北側地点の支笏火碎流堆積物(rework)分布地点

井上ほか(2022)に示された自衛隊駐屯地の支笏火碎流堆積物(再堆積層)分布地点

嵯峨山ほか(2021)に示されたG-4露頭の支笏火碎流堆積物(再堆積物)分布地点



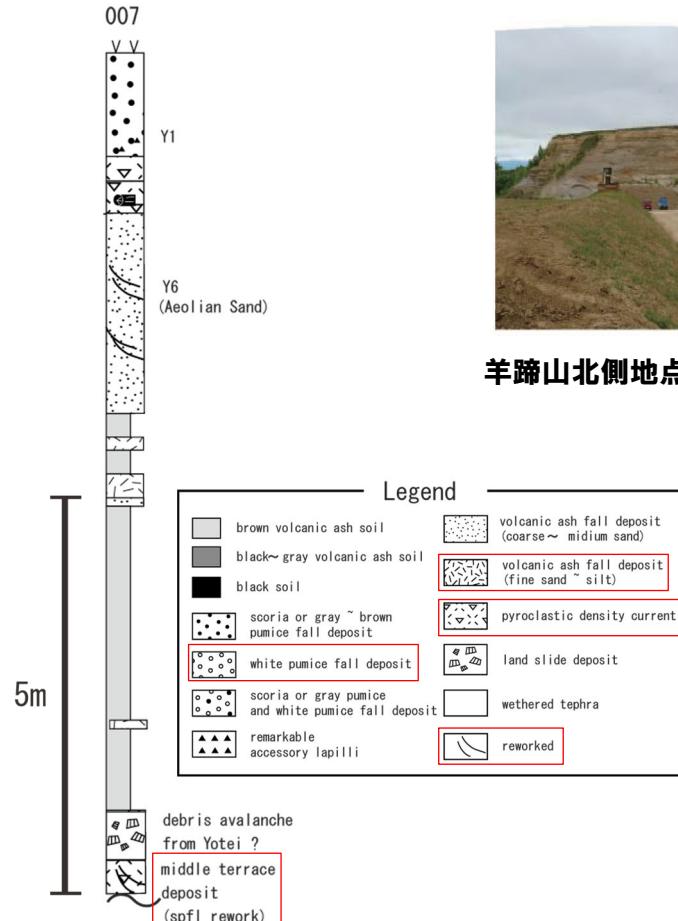
支笏火碎流分布図のうち尻別岳～羊蹄山付近の拡大図(宝田ほか(2022)に加筆)

【羊蹄山北側地点の支笏火碎流堆積物(rework)について】

- 宝田ほか(2022)によれば、羊蹄山北側地点において、支笏火碎流堆積物(Spfl)のrework(層厚5m)が認められるとされ、その記載は、Uesawa et al. (2016)の007地点及びNakagawa et al. (2016)のSTOP 3-3に対応するものと考えられる(次頁参照)。
- Uesawa et al. (2016)によれば、当該堆積物は中位段丘堆積物を構成する支笏火碎流堆積物の再堆積層(Spfl rework)とされている(次頁参照)。
- Nakagawa et al. (2016)によれば、当該地点はSpflに対比される軽石と火山灰で構成され、堆積物にはクロスラミナ構造及び軽石は丸みを帯び、インブリケーションが認められるとされている。以上の層相から、かつて存在した湖に火碎流が直接又は間接的に流入したことが示唆されるとしている。
- 嵯峨山ほか(2020, 2021)によれば、当該地点を含む俱知安付近は、支笏火碎流到達当時、湖(古俱知安湖)が存在していたとされている。
- 嵯峨山ほか(2021)によれば、羊蹄山北側地点付近の土取場(G-4露頭、Uesawa et al. (2016)の007地点の約1.5km西方)において、斜層理を呈する淘汰不良な、火山灰と軽石からなる堆積物が認められ、火山灰分析を基に、当該堆積物を支笏火碎流堆積物(Spfl)の再堆積物と解釈したとされている(次頁参照)。
- 井上ほか(2022)においては、俱知安町高砂の自衛隊駐屯地(Uesawa et al. (2016)の007地点の約3.5km西方)において、支笏火碎流堆積物(Spfl)由来の軽石を含む成層した凝灰質砂礫層が認められ(次頁参照)。シルト層や砂層が挟在及びチャネル構造が認められることから、当該堆積物は古俱知安湖に流入した支笏火碎流堆積物(Spfl)の再堆積層と解釈したとされている。
- ・上記の論文を踏まえると、当該堆積物が軽石を含む本質物で構成され、流水に伴う堆積構造等を示すことから、支笏火碎流が古俱知安湖に直接又は間接的に流入し、湖底に厚く堆積した堆積物と考えられる。したがって、羊蹄山北側地点は、文献においてはrework又は再堆積物とされているが、敷地方向の最大到達地点と評価した。

## 火山噴出物の分布(降下火砕物を除く)(4/5)

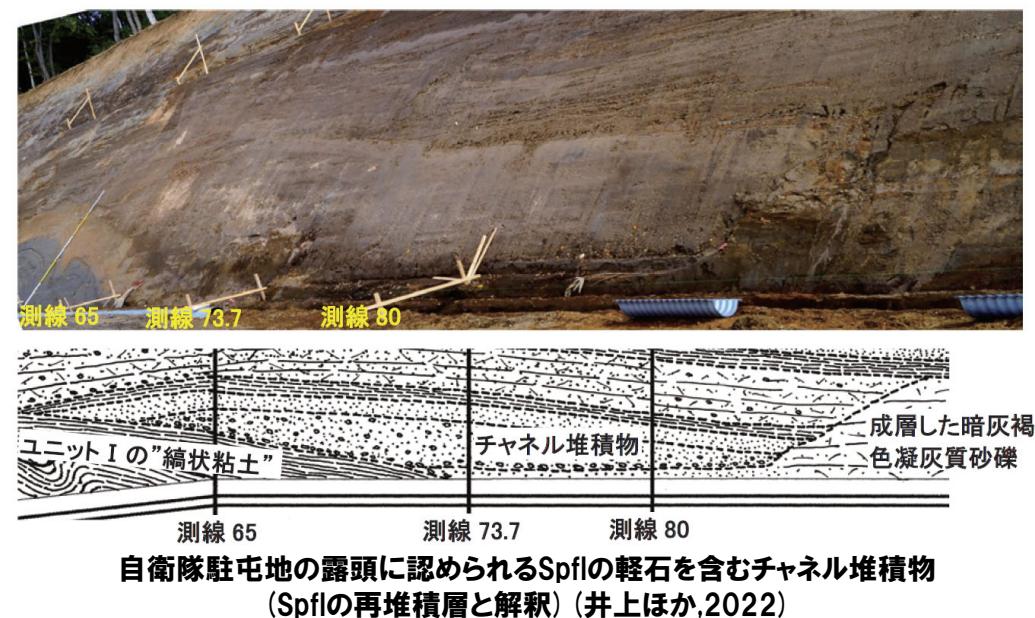
再掲(R5/7/7審査会合)



007地点(羊蹄山北側地点)の柱状図  
(Uesawa et al. (2016)に加筆)

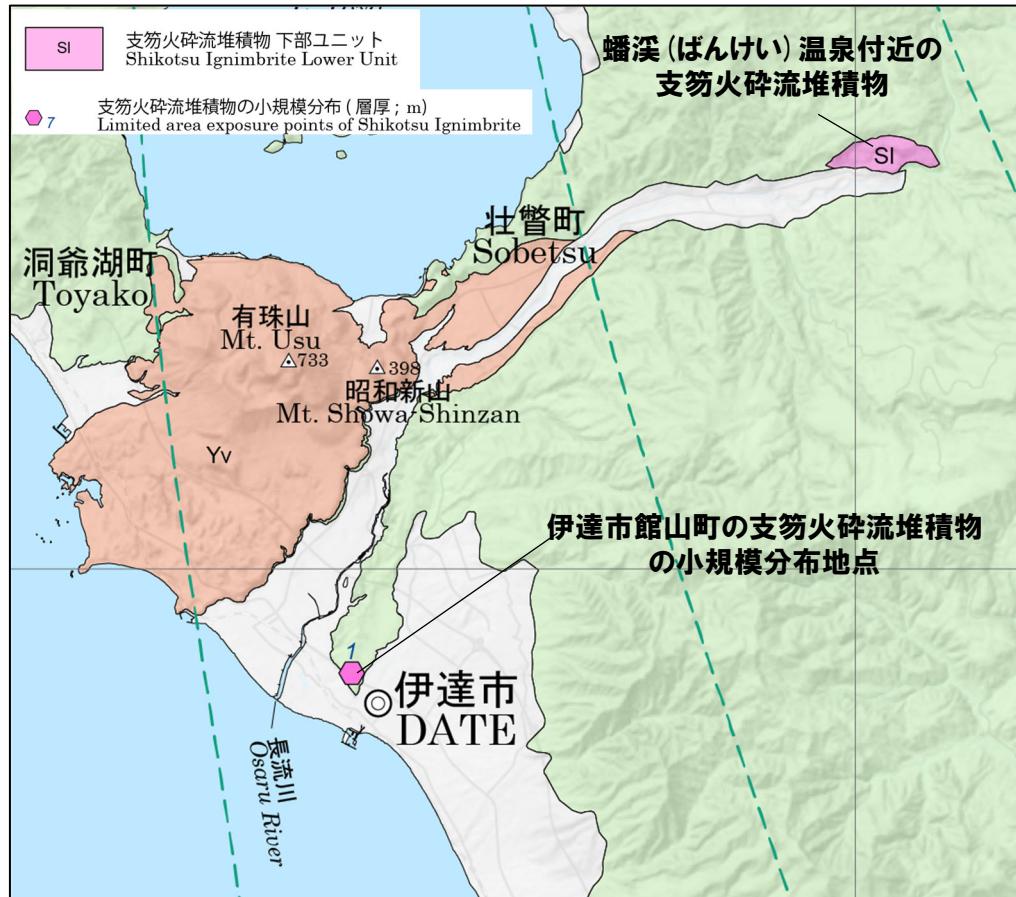


羊蹄山北側地点付近の土取場(G-4露頭)に認められる、Spflの再堆積物と解釈される、斜層理を呈する淘汰の悪い堆積物(火山灰と軽石含む)(嵯峨山ほか, 2021)



## 火山噴出物の分布(降下火碎物を除く)(5/5)

再掲(R5/7/7審査会合)



支笏火碎流分布図のうち伊達市付近の拡大図(宝田ほか(2022)に加筆)

## 【伊達市館山町に認められる支笏火碎流堆積物について】

○当該地点は、最新の野外地質調査と文献調査に基づき、支笏火碎流堆積物の現存分布範囲及び層厚等をまとめた宝田ほか(2022)において支笏火碎流堆積物とされていることから、当該地点を支笏火碎流堆積物の最大到達地点として扱う。

○当該地点の支笏火碎流堆積物については、町田ほか(1987)の「1a地点」及び山縣・町田(1996)の「WS-13-2地点」に対応すると考えられ、以下の文献に記載がなされている。

- ・町田ほか(1987)によれば、伊達市館山町の支笏火碎流堆積物について、クロスラミナが発達し炭化木を含む火碎流堆積物とみられるテフラ層とされている。
- ・山縣・町田(1996)によれば、伊達市館山町の支笏火碎流堆積物について、ラミナをもつ或いはその上部にはクロスラミナが顕著に発達した部分が認められるとしている。
- ・町田・新井(2011)では、支笏火碎流堆積物について、当該地点を含む伊達市館山町付近を通る長流川沿いに支笏火碎流堆積物の分布が示されている。

○一方で、支笏火碎流堆積物の火口からの距離と層厚の関係を取りまとめている山元(2016)によれば、支笏火碎流堆積物の分布に当該地点が含まれていない。

○また、長流川沿いの露頭調査を実施しているGoto et al. (2018)においても、洞爺火碎流堆積物及びKt-2(降下軽石)は記載されているが、その上位に支笏火碎流堆積物は記載されていない。

## 【R5.1.20審査会合時点(宝田ほか(2022)発刊以前)における、伊達市館山町地点の当社評価】

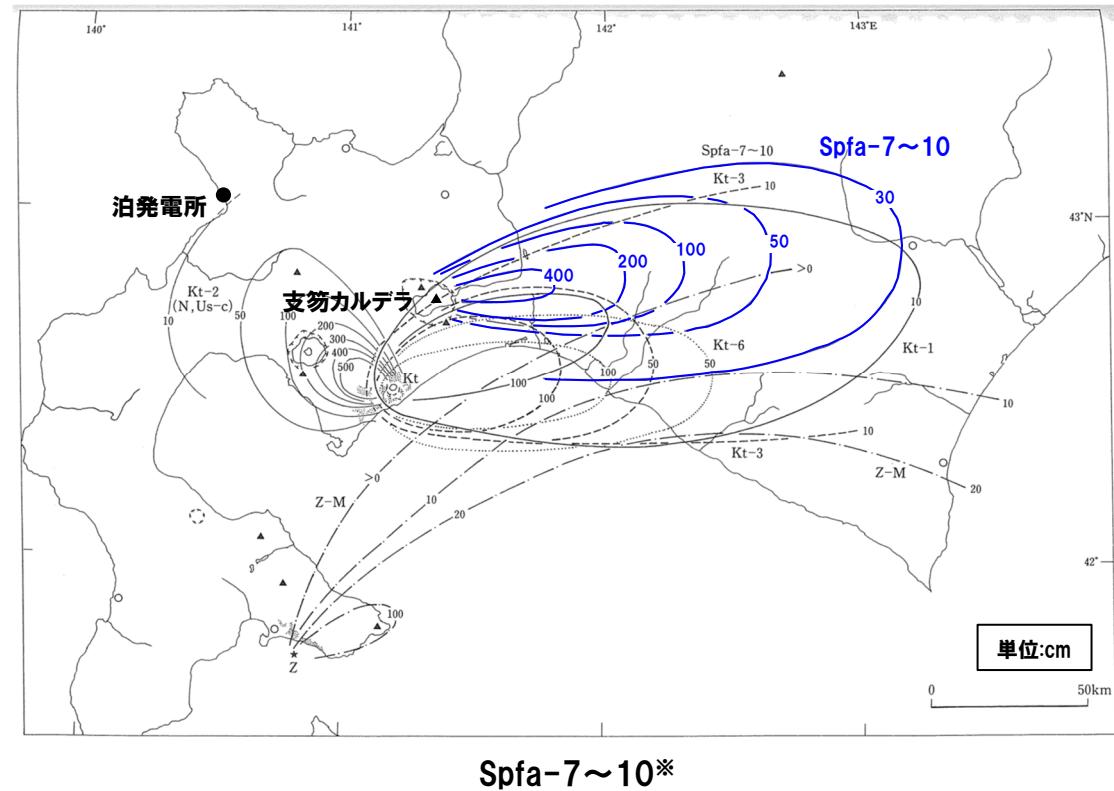
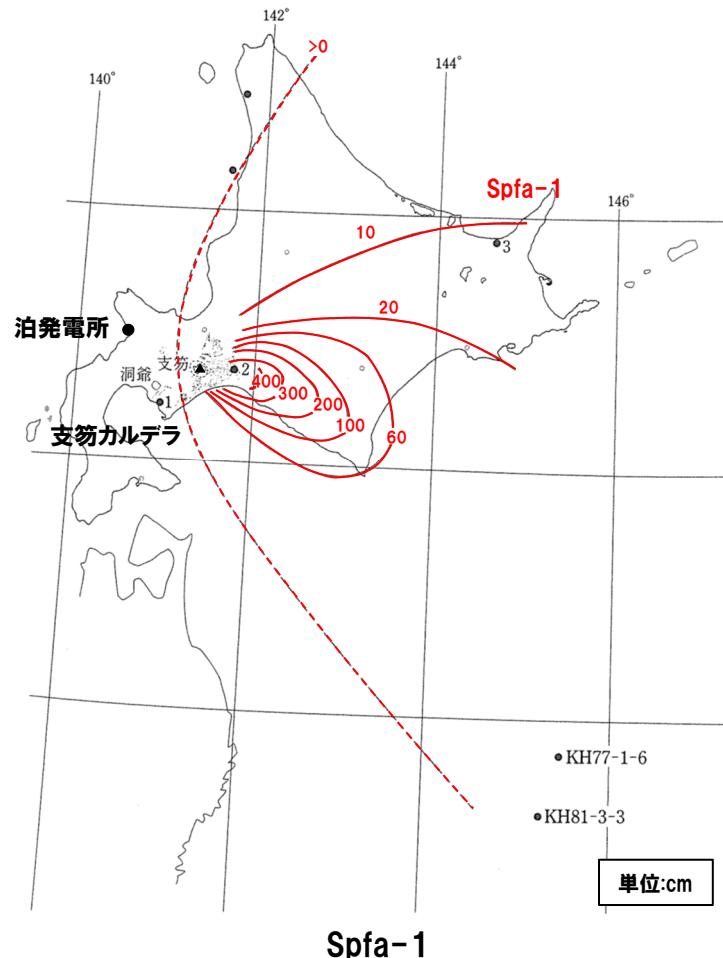
○町田ほか(1987)及び山縣・町田(1996)によって、当該地点の堆積物がクロスラミナを伴うと記載されていることから、火碎流本体ではなく二次堆積物である可能性もあると考えていた。

○このため、山元(2016)及びGoto et al. (2018)においても当該地点を支笏火碎流分布地点として示していなかったことも踏まえ、支笏火碎流の最大到達地点として評価していなかった。

# 支笏(しこつ)カルデラ

## 降下火碎物の分布 (1/5)

再掲 (R5/7/7審査会合)

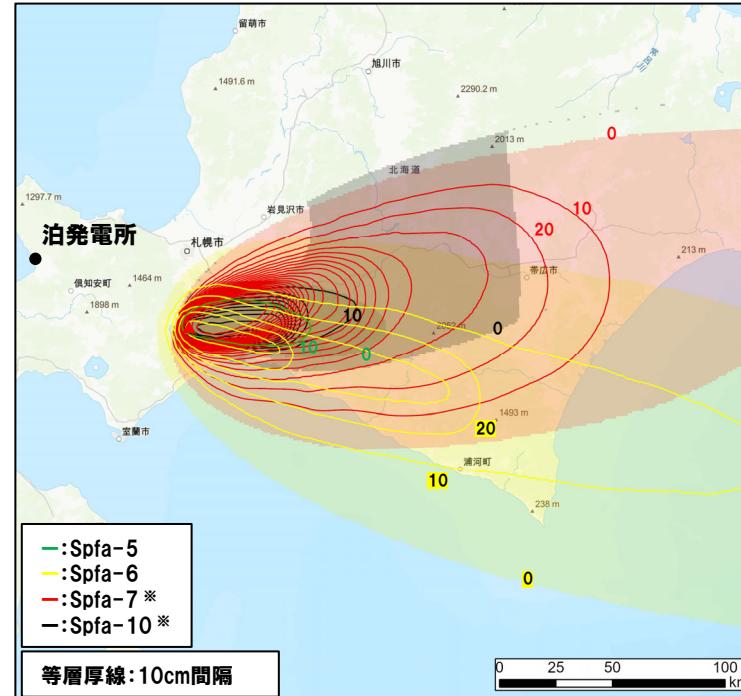
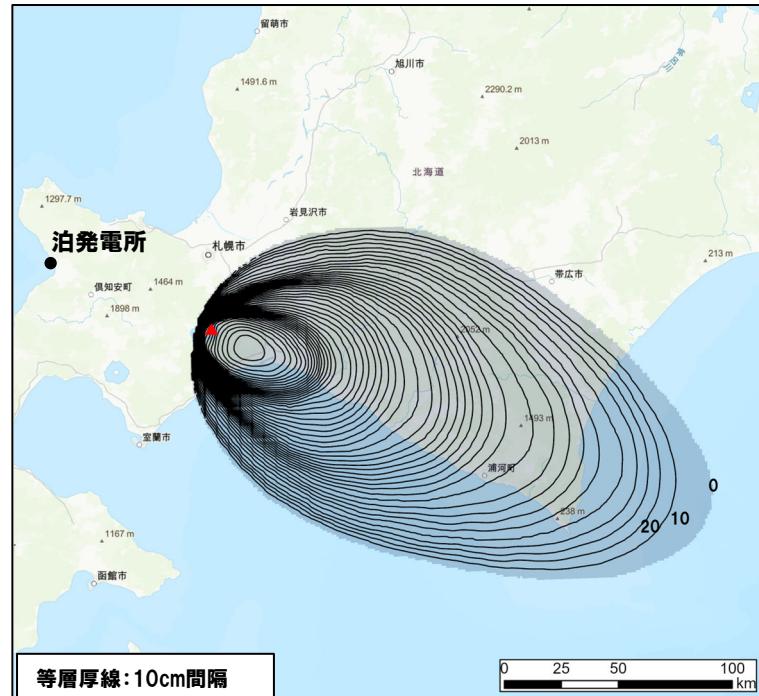


※町田・新井 (2011) でSpfa-7~10とされている降下火碎物は、Amma-Miyasaka et al. (2020) に示されるSsfa1に対応する。

支笏カルデラの降下火碎物の分布範囲  
(町田・新井 (2011) に加筆)

## 降下火碎物の分布(2/5)

再掲(R5/7/7審査会合)

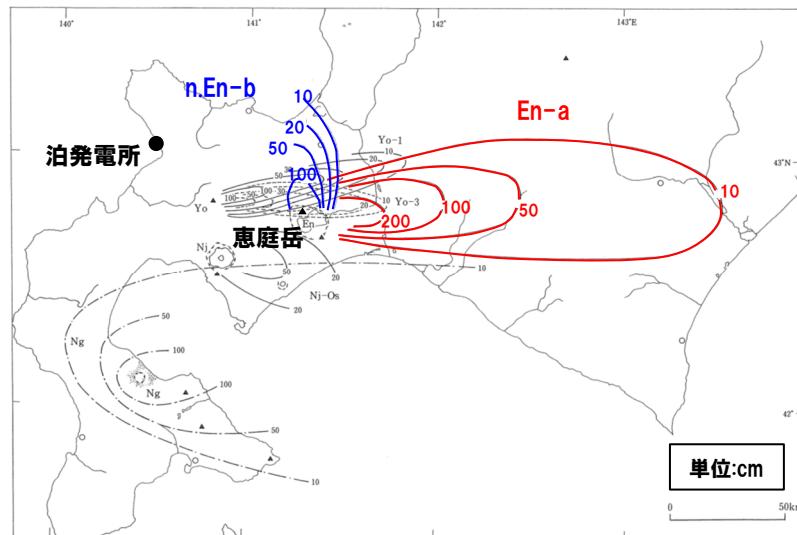


支笏カルデラの降下火碎物の分布範囲  
(Uesawa (2023) を基に作成)

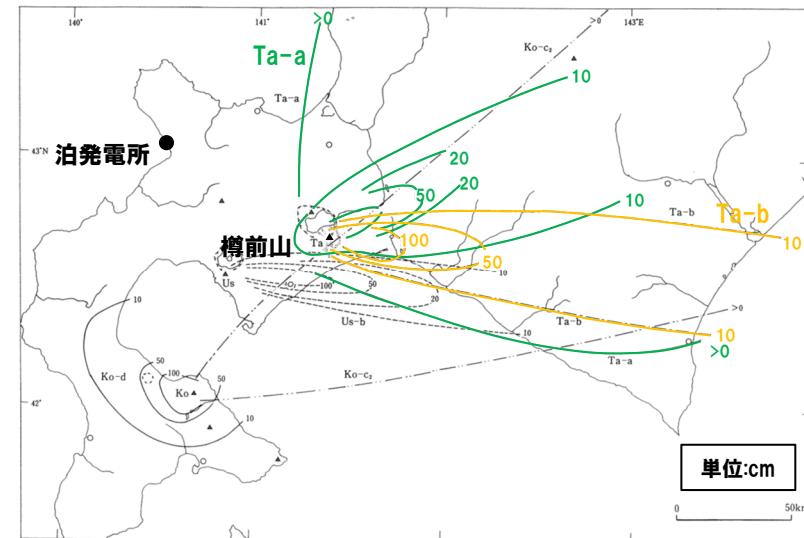
# 支笏(しこつ)カルデラ

## 降下火碎物の分布 (3/5)

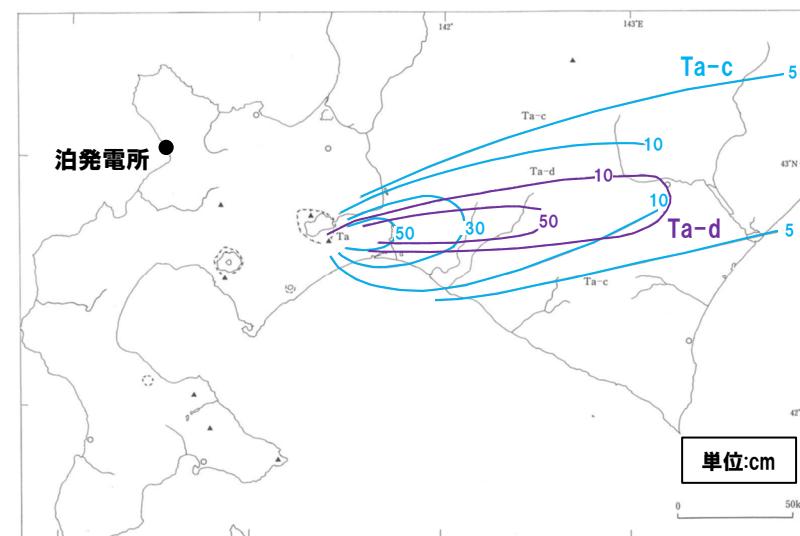
再掲 (R5/7/7審査会合)



恵庭岳 (En-a), 風不死岳 (n.En-b)



樽前山 (Ta-a, Ta-b)



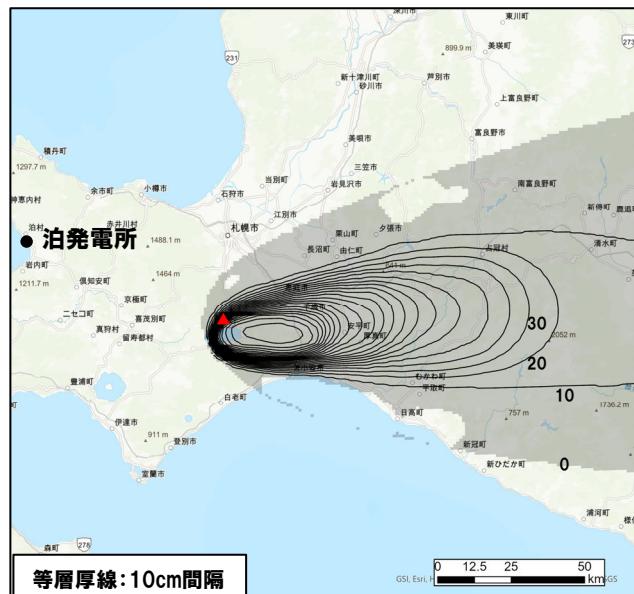
樽前山 (Ta-c, Ta-d)

恵庭岳, 風不死岳及び樽前山の降下火碎物の分布範囲  
(町田・新井 (2011) に加筆)

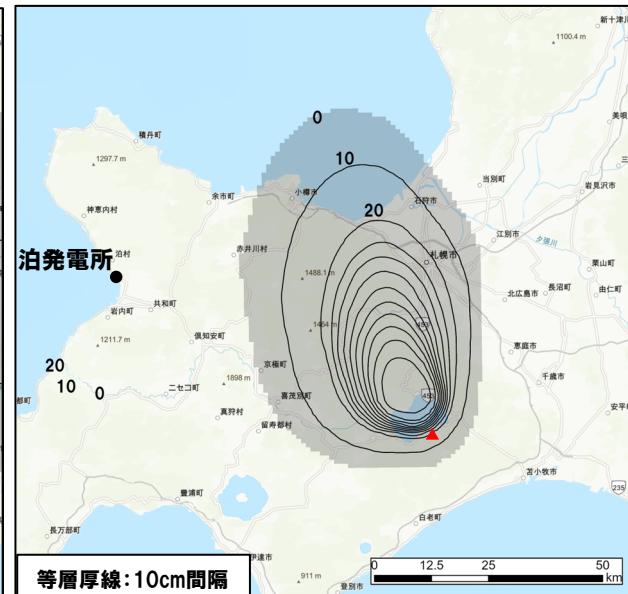
# 支笏(しこつ)カルデラ

降下火碎物の分布 (4/5)

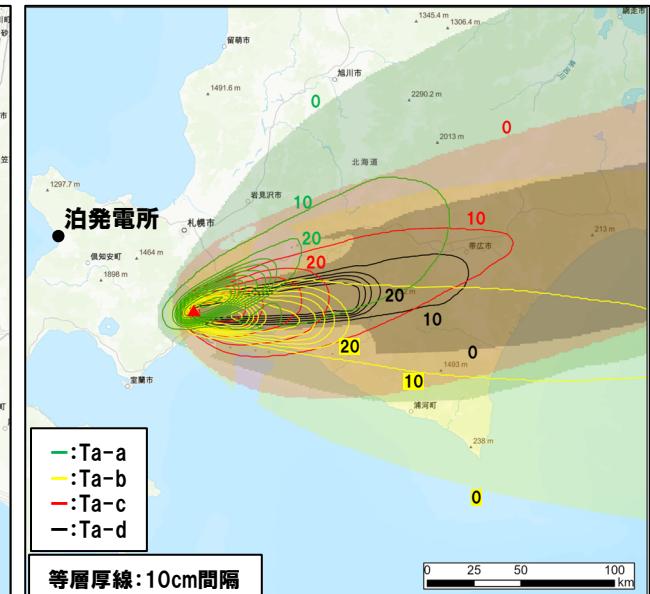
再掲 (R5/7/7審査会合)



恵庭岳 (En-a)



風不死岳 (n. En-b)

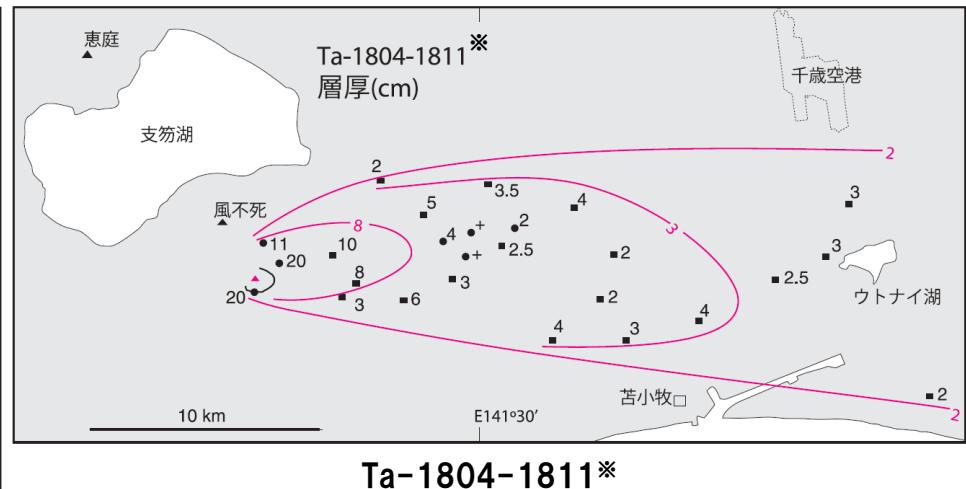
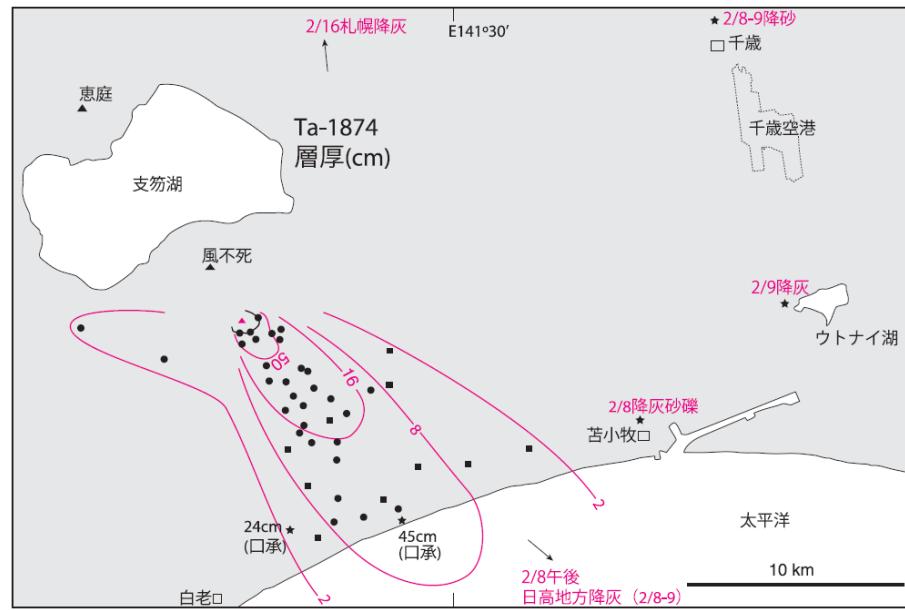


樽前山 (Ta-a, Ta-b, Ta-c, Ta-d)

恵庭岳, 風不死岳及び樽前山の降下火碎物の分布範囲  
(Uesawa (2023) を基に作成)

## 降下火碎物の分布 (5/5)

## 再掲 (R5/7/7審査会合)



※古川・中川(2010)の図中において、Ta-1804-1811と記されているが、これは樽前山の活動履歴(P22参照)において、Ta-1804-1817と記す噴火に対応するものと考えられる。

## 個別に収集した文献に基づく樽前山の降下火碎物の分布範囲 (古川・中川, 2010)

## 活動可能性評価

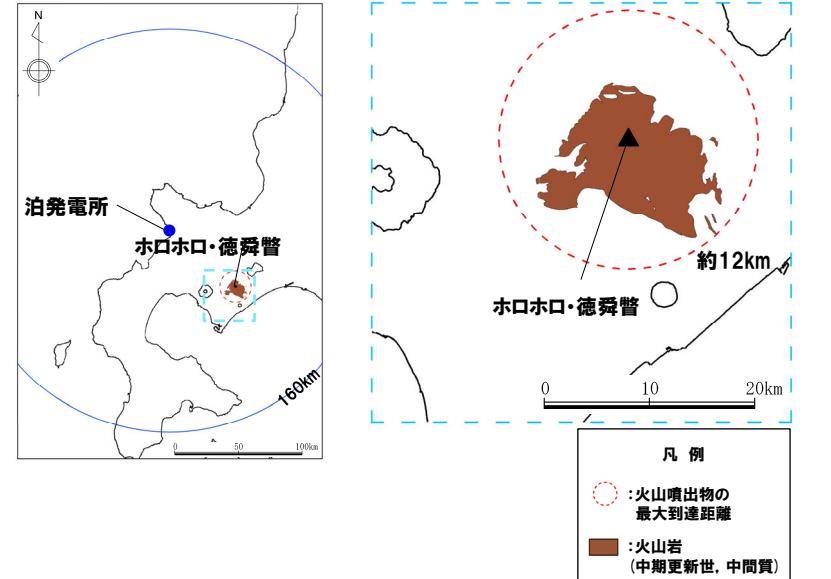
一部修正 (H28/2/5審査会合)

## ホロホロ・徳舜瞥の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C15 ホロホロ・徳舜瞥
敷地からの距離	68.0km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山
活動年代 <sup>※1, ※2</sup>	約170~160万ないし60万年前
評価	最大休止期間よりも最新活動年代からの経過期間が短いため、将来の活動可能性が否定できない火山として抽出する。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

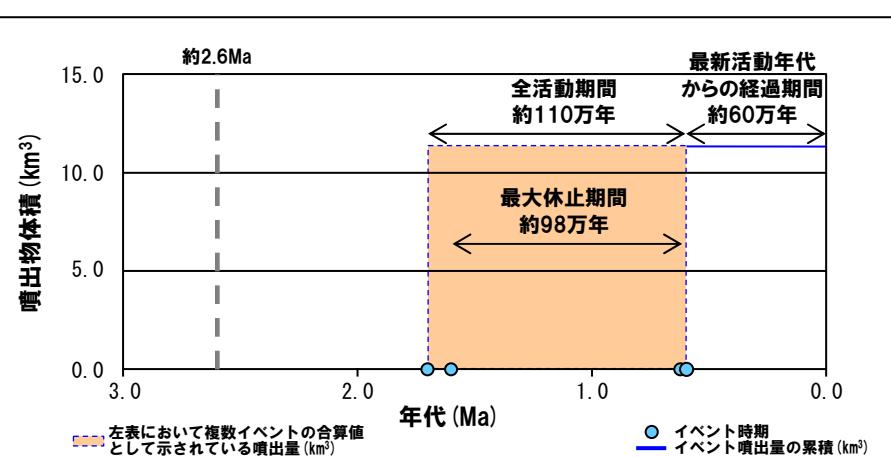


## ホロホロ・徳舜瞥活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			山口ほか (1978) Nakagawa (1992) 第四紀火山カタログ委員会編 (2000)
	更新世 0.6Ma	徳舜瞥溶岩	11.4 (溶岩流)	Amma-Miyasaka et al. (2020)
	0.62±0.03Ma			
	1.6Ma	ホロホロ溶岩	11.4	
	1.7Ma	徳舜瞥溶岩		

R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

- Amma-Miyasaka et al. (2020)に示された徳舜瞥溶岩の噴出年代 (0.62±0.03Ma) を追記した。
- 第四紀火山カタログ委員会編 (2000) に示された噴出物体積及び火山体体積を追記した。

ホロホロ・徳舜瞥  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) より作成)

噴出量-年代階段ダイアグラム

## 活動可能性評価

一部修正(H28/2/5審査会合)

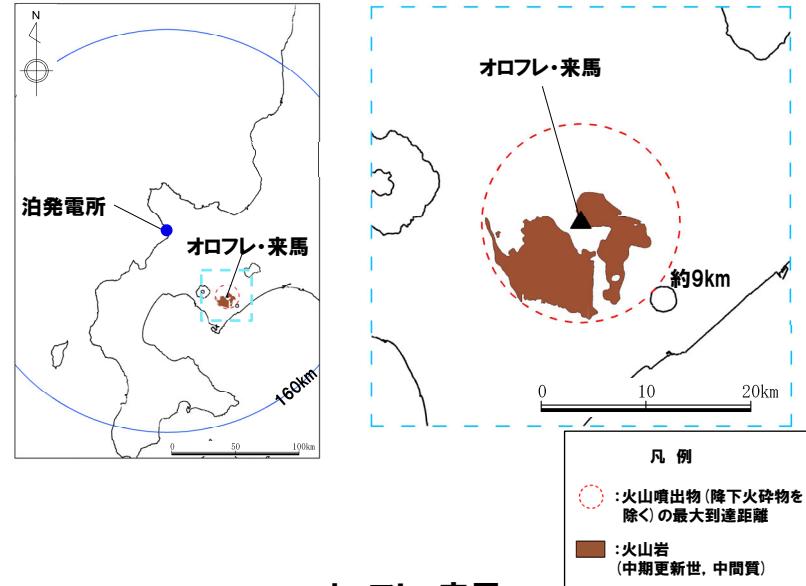
## オロフレ・来馬の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C16 オロフレ・来馬
敷地からの距離	70.2km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山
活動年代 <sup>※3</sup>	来馬岳:約60-50万年前 オロフレ山:活動年代は不明
評価	オロフレ山については活動年代が不明であることから、保守的に、将来の活動可能性が否定できない火山として抽出する。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

※3 下表に示すオロフレ・来馬の活動履歴に基づく。



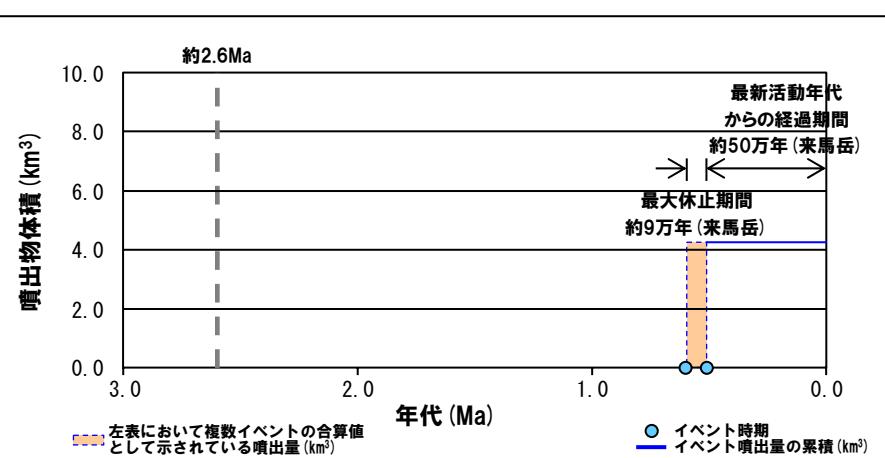
## オロフレ・来馬活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			Nakagawa (1992) 第四紀火山カタログ委員会(2000) Amma-Miyasaka et al. (2020)
	更新世 0.51±0.03Ma	来馬岳		
	0.6Ma	来馬山溶岩: 斜方輝石单斜輝石 安山岩	来馬岳: 4.2 (溶岩流)	
	(年代不明)	オロフレ山	オロフレ山: 0.8 (溶岩流) <sup>※4</sup>	

※4 オロフレ山の噴出物体積については、活動年代が不明であることから、噴出量-年代階段ダイアグラムに示していない。

R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

○Amma-Miyasaka et al. (2020)に示された来馬岳を給源とする噴出物の年代 (0.51±0.03Ma) を追記した。  
○第四紀火山カタログ委員会(2000)に示された噴出物体積及び火山体体積を追記した。

オロフレ・来馬  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)

噴出量-年代階段ダイアグラム

## 活動可能性評価 (1/3)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

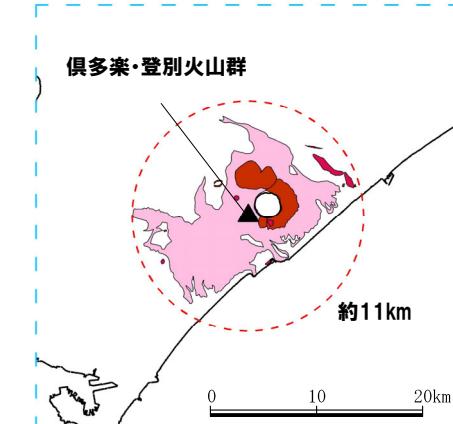
## 俱多楽・登別火山群の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C17 俱多楽・登別火山群
敷地からの距離	80.5km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山-カルデラ, 溶岩ドーム
活動年代 <sup>※3</sup>	約11万年前以降
評価	約1万年前以降に活動しており, 完新世に活動した火山として抽出する。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

※3 P39に示す俱多楽・登別火山群の活動履歴に基づく。



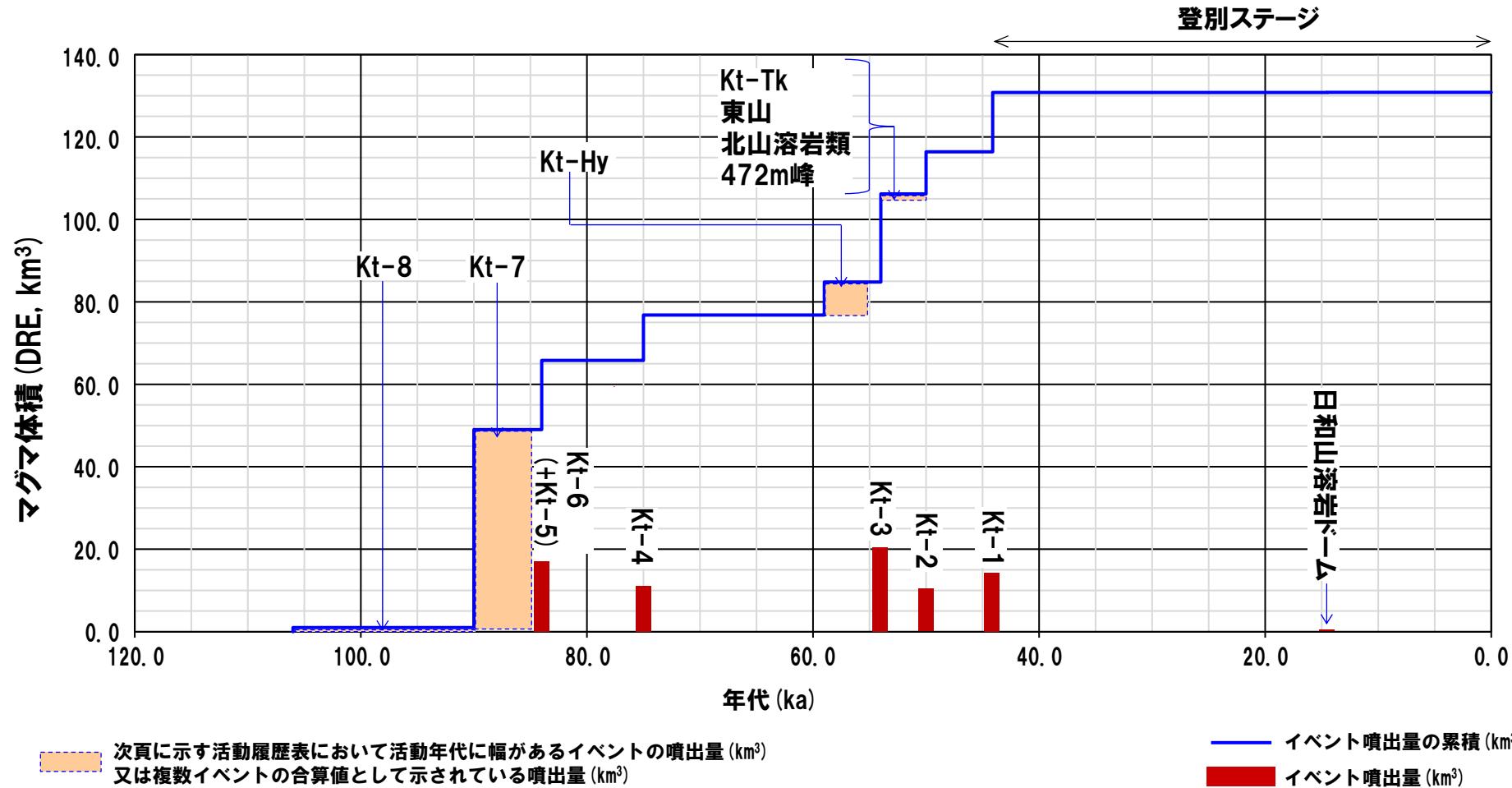
○ : 火山噴出物 (降下火碎物除く) の  
最大到達距離  
■ : 火山岩 (後期更新世, 珪長質)  
■ : 火山岩 (後期更新世, 中間質)  
■ : 火碎流堆積物 (後期更新世)

俱多楽・登別火山群  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)

余白

## 活動可能性評価(2/3)

一部修正(H28/2/5審査会合)



噴出量-年代階段ダイアグラム

## 活動可能性評価(3/3)

一部修正(H28/2/5審査会合)

## 俱多楽・登別火山群活動履歴

年代	噴出物名	マグマ体積 DRE (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世 A.D.1800頃 A.D.1800頃 8.5ka-A.D.1663	(裏地獄) (大湯沼) Nb-a~I <sup>※4</sup>	(水蒸気爆発) (水蒸気爆発) (水蒸気爆発)	
	更新世 登別 ステージ 14.5ka 不明	日和山溶岩ドーム 橋湖アグルチネット	0.04 不明	
	44.1ka クッタラ ステージ ca.50ka	Kt-1:pfa,pfl,ps,sfa	14.4 10.2	山縣(1994) 森泉(1998)
	竹浦ステージ (episode Kt-Tk) 不明	Kt-Tk:sfa	0.4	第四紀火山 カタログ委員 会編(2000)
	episode Kt-Kt 不明	東山 北山溶岩類	0.2 0.5	山元(2014)
	ca.54ka アヨロ ステージ 59-55ka	Kt-3:pfa,afa,ps,pfl Kt-Hy:pfa,ps,afa,pfl	20.1 7~8 <sup>※5</sup>	Amma- Miyasaka et al.(2020)
	ca.75ka ca.84ka	Kt-4:pfa,ps,pfl Kt-6(+Kt-5): pfa,ps,pfl	11 Kt-5:不明 Kt-6:16.8	Miura et al.(2022)
	90-85ka 先アヨロ ステージ	Kt-7:pfa,pfl Kt-8:pfa,afa,pfl	6~24 (pfa) <sup>※6</sup> 24 (pfl) <sup>※6</sup> [≤VEI5 class <sup>※7</sup> ] 不明	
	106-85ka 不明	石山溶岩流 地獄谷火砕丘	76.5 不明	

※4 後藤ほか(2013)によれば、12層の水蒸気噴火堆積物の各々の噴火堆積物の体積は10<sup>5</sup>m<sup>3</sup>オーダー、また、Goto et al.(2015a)によれば、Nb-aの噴出物体積は、4.6×10<sup>5</sup>m<sup>3</sup>とされている。

※5 Miura et al.(2022)によれば、成層火山の体積は6.7km<sup>3</sup>と推定され、表に示すマグマ体積はKt-Hyテフラの噴出物体積と成層火山体積の推定値を足し合わせた値とされている。

※6 Kt-7を噴出した噴火は、Amma-Miyasaka et al.(2020)によれば、噴出規模が概算として「VEI7 class」とされているが、具体的な数値が示されていないことから、Amma-Miyasaka et al.(2020)を含む複数の文献を参考に、当社で噴出物体積を算出した。その結果、Kt-7の噴出物体積は60~90km<sup>3</sup>となり、最大値である90km<sup>3</sup>は、Amma-Miyasaka et al.(2020)における「VEI7 class」と大きな矛盾はないものと考えられる。

マグマ体積(DRE)は、山元(2014)に基づき換算した値であり、Kt-7のマグマ体積は30~48km<sup>3</sup>(DRE)となったことから、噴出量-年代階段ダイアグラムにおいては、48km<sup>3</sup>として図示している。

※7 Miura et al.(2022)によれば、Kt-8の噴出規模は、概算として「≤VEI5 class」とされていることから、噴出量-年代階段ダイアグラムにおいては、マグマ体積(DRE)を1km<sup>3</sup>として図示している。

## R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

- R3.10.14審査会合資料では、山元(2014)に基づき活動履歴を整理していたが、俱多楽・登別火山群を含めた支笏洞爺火山地域におけるテフラ層序と年代を体系的にとりまとめているAmma-Miyasaka et al.(2020)及びKt-Hyテフラを対象に調査を実施し、俱多楽・登別火山群のテフラ層序を再検討しているMiura et al.(2022)に基づき見直した。
- 山縣(1994)及び森泉(1998)に示された各噴火イベントに伴う火山事象(pfa等)を追記した。
- 森泉(1998)及びMiura et al.(2022)に示された各噴火ステージを追記した。
- 後藤ほか(2013)及びGoto et al.(2015a)に示された水蒸気噴火堆積物の噴出物体積に関する知見を、参考として注釈4に付した。
- Miura et al.(2022)によれば、Kt-Hyに含まれる火砕密度流を遠方に堆積させるためには、高い位置エネルギーを有する山頂や噴煙柱が必要であると推定し、Kt-Hy噴出時に成層火山が存在していたとされている。一方、森泉(1998)は、Kt-Tkテフラ群噴出時に成層火山(竹浦火山)が形成されたと推定しているが、Miura et al.(2022)では、成層火山形成時期について具体的な考察がなされている。このため、成層火山の火山体体積については、Miura et al.(2022)に示すとおり、Kt-Hyテフラの噴出物体積と足し合わせた値(7~8km<sup>3</sup>(DRE))を採用することとした。
- 第四紀火山カタログ委員会編(2000)に示された火山体体積を追記した。

# 俱多楽(くったら)・登別(のぼりべつ)火山群

## 火山噴出物の分布(降下火碎物を除く)

一部修正(R3/10/14審査会合)

【産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020), 山縣(1994), 産業技術総合研究所編(2003)及びAmma-Miyasaka et al. (2020)確認結果】

○Kt-7(pfl)の最大到達距離は、俱多楽・登別火山群から北東方向に位置する厚真町付近までの約63kmであり、層厚は0.2mである。

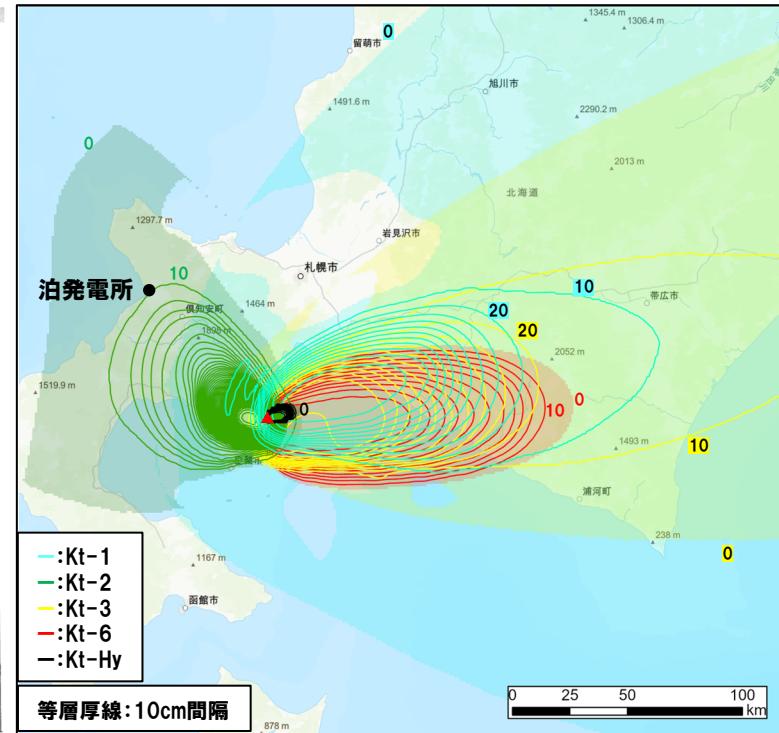
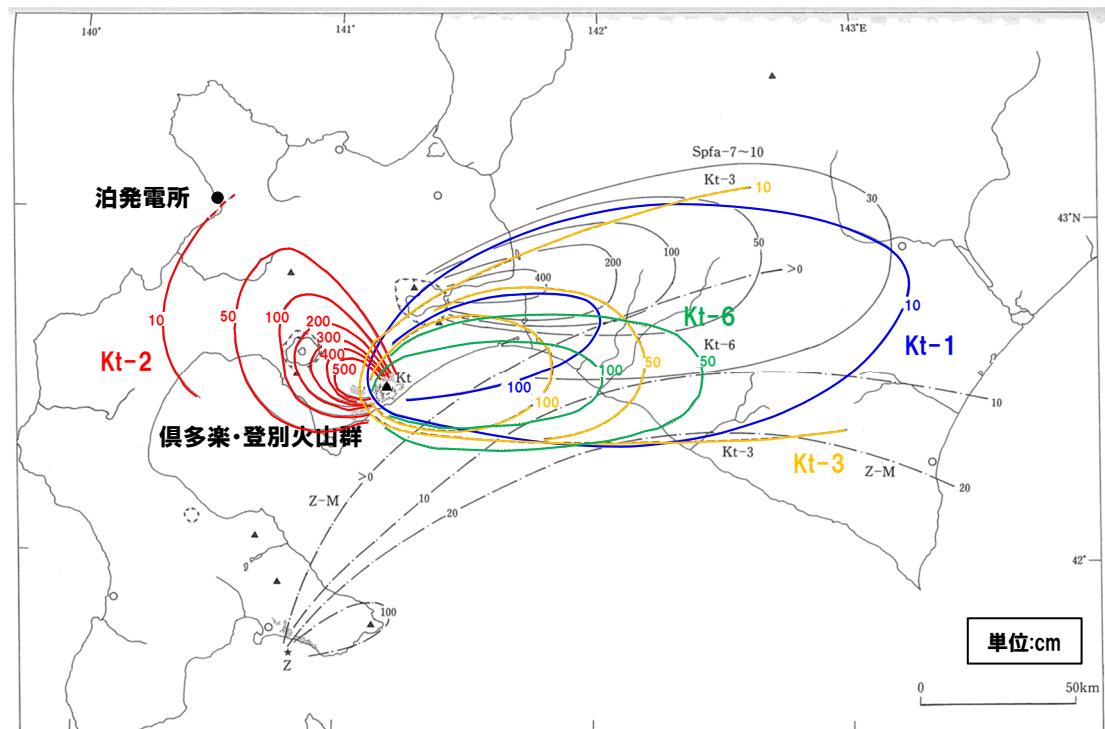


俱多楽・登別火山群の火山噴出物の分布範囲(産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)を基に作成)

# 俱多楽(くったら)・登別(のぼりべつ)火山群

降下火碎物の分布(1/2)

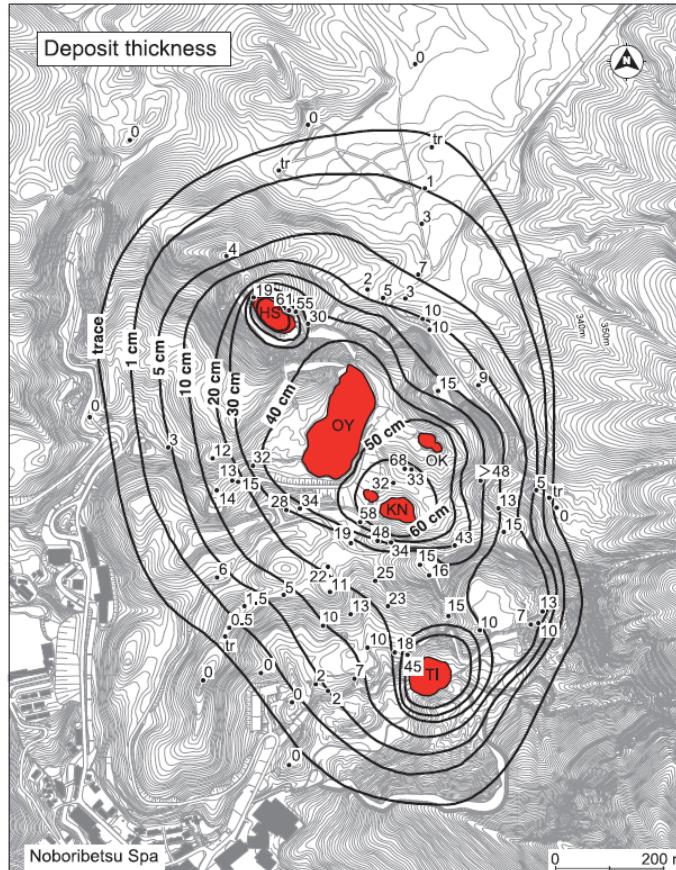
再掲(R5/7/7審査会合)



俱多楽・登別火山群の降下火碎物の分布範囲

## 降下火碎物の分布(2/2)

再掲(R5/7/7審査会合)



個別に収集した文献に基づく俱多楽・登別火山群の降下火碎物の分布範囲  
(Goto et al., 2015a)

余白

# 鷲別岳 (わしべつだけ)

## 活動可能性評価 (1/2)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

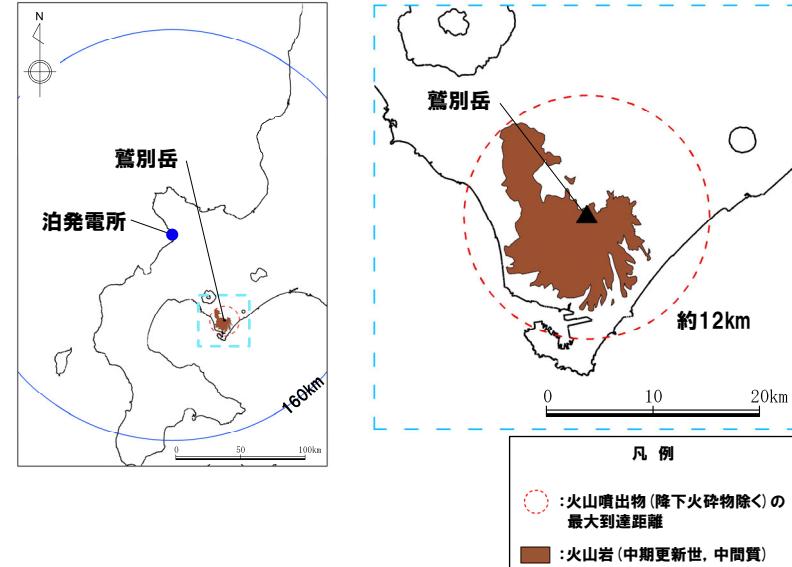
### 鷲別岳の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C18 鷲別岳
敷地からの距離	77.8km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山
活動年代 <sup>※3</sup>	約190万年前
評価	<p>Amma-Miyasaka et al. (2020)において、活動年代は約190万年前とされており、十分に長い活動期間は有さないものと考えられる。全活動期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。</p> <p>なお、兼岡・井田編 (1997)によれば、日本のような島弧火山は数十万年程度が平均的な活動期間と考えてよいとされている。</p>

※1 産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編 (2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

※3 次頁に示す鷲別岳の活動履歴に基づく。



鷲別岳  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) より作成)

# 鷲別岳 (わしべつだけ)

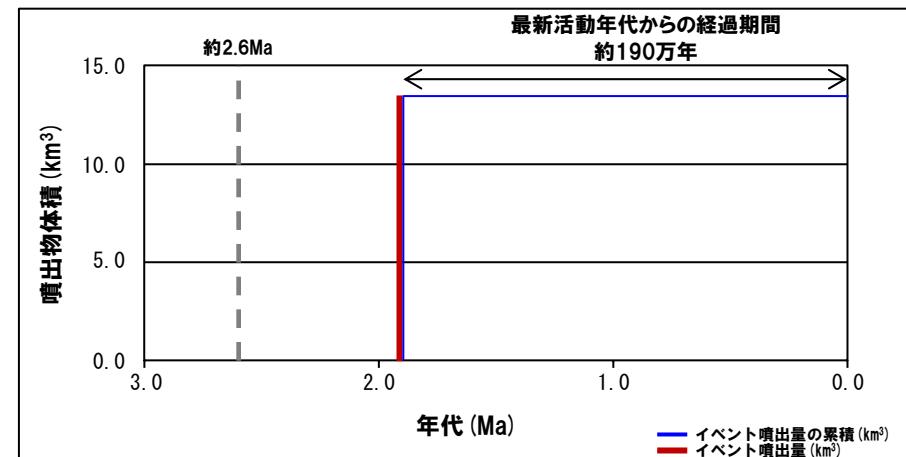
## 活動可能性評価 (2/2)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

### 鷲別岳活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			第四紀火山カタログ委員会編 (2000)
	更新世 1.87±0.08Ma	鷲別岳溶岩: 斜方輝石单斜 輝石安山岩 11.6 (火碎岩) 1.2 (溶岩流) 0.7 (溶岩円頂丘)	13.5	Amma-Miyasaka et al. (2020)

R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点	<ul style="list-style-type: none"> <li>○R3.10.14審査会合資料においては, Nakagawa (1992) に示された鷲別岳溶岩の噴出年代0.5Maを記載していたが, Amma-Miyasaka et al. (2020) に示された年代 (1.87±0.08Ma) とは大きな差異がある。</li> <li>○このため, Nakagawa (1992) よりも新しくかつ査読論文である Amma-Miyasaka et al. (2020) に示された年代に見直した。</li> <li>○第四紀火山カタログ委員会編 (2000) に示された噴出物体積及び火山体体積を追記した。</li> </ul>
---------------------------	--



噴出量-年代階段ダイアグラム

## 活動可能性評価

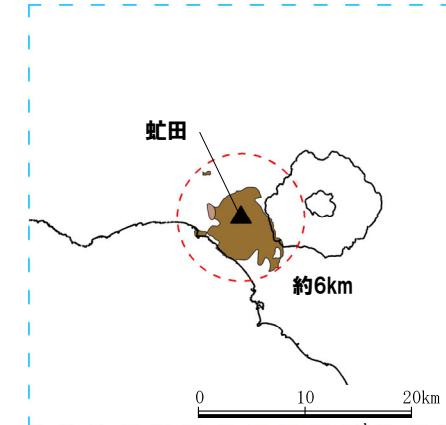
一部修正 (H28/2/5審査会合)

## 虻田の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C19 虻田
敷地からの距離	53.4km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山？
活動年代 <sup>※1</sup>	約180万年前
評価	<p>産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」において、活動年代は約180万年前とされているが、明瞭な活動期間が示されていないことから、十分に長い活動期間は有さないものと考えられる。全活動期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。</p> <p>なお、兼岡・井田編(1997)によれば、日本のような島弧火山は数十万年程度が平均的な活動期間と考えてよいとされている。</p>

※1 産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。



凡 例

- : 火山噴出物 (降下火砕物除く) の最大到達距離
- : 火山岩 (前期更新世後半, 中間質)
- : 火山岩 (前期更新世前半, 中間質)

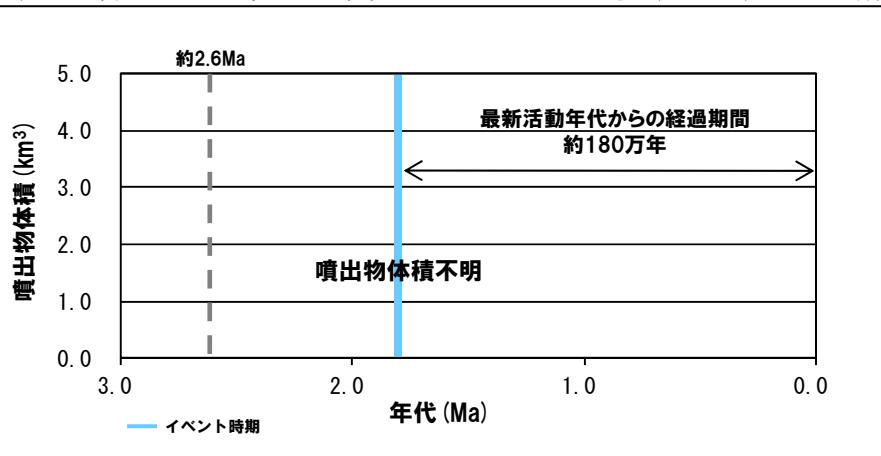
## 虻田活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			太田 (1956) 土居ほか (1958) 北海道立 地質研究所 (2003)
	更新世 1.8Ma	虻田火山噴出物 小花井溶岩 等	不明	不明

R3.10.14審査会合資料からの  
活動履歴の変更点

○なし。

虻田  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) より作成)



噴出量-年代階段ダイアグラム

余白

# 洞爺(とうや)カルデラ

## 活動可能性評価 (1/5)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

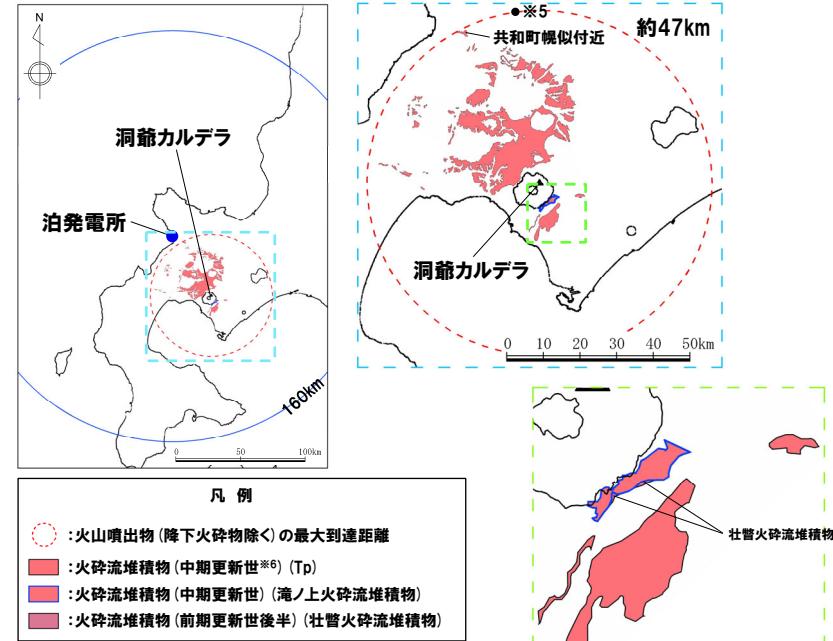
### 洞爺カルデラの概要

火山名 <sup>※1</sup>	C20 洞爺カルデラ (後カルデラ火山含む) C21 洞爺中島 C22 有珠山
敷地からの距離	54.8km (洞爺中島: 55.1km, 有珠山: 60.7km)
火山の形式	洞爺カルデラ: 火碎流台地-カルデラ <sup>※2</sup> 洞爺中島: 溶岩ドーム <sup>※1, ※2</sup> 有珠山: 成層火山, 溶岩ドーム <sup>※2</sup>
活動年代 <sup>※3</sup>	洞爺カルデラ: 約11万年前にカルデラ形成 <sup>※4</sup> 洞爺中島: 約5-3万年前 有珠山: 約3万年前に活動開始
評価	約1万年前以降に活動しており, 完新世に活動した火山として抽出する。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

※3 P51~P52に示す洞爺カルデラ, 洞爺中島及び有珠山の活動履歴に基づく。



### 洞爺カルデラ (産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)

※4 洞爺カルデラの形成時期について、産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」及び西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・噴火岩体データベース」では、「約14万年前にカルデラ形成」とされている。これは、以下に示す理由によると考えられる。

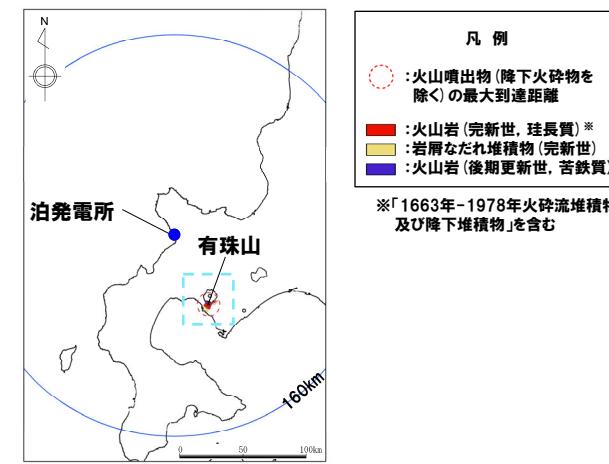
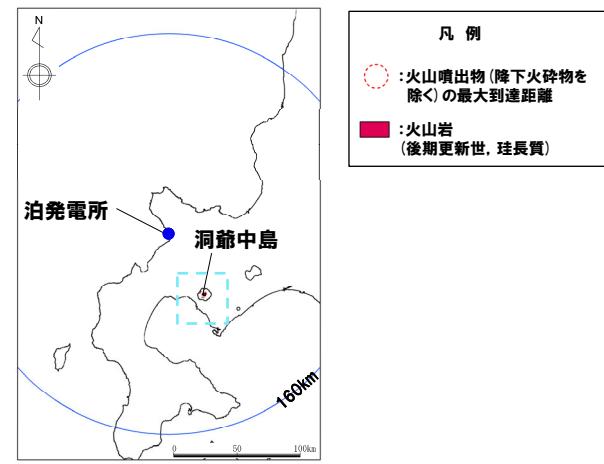
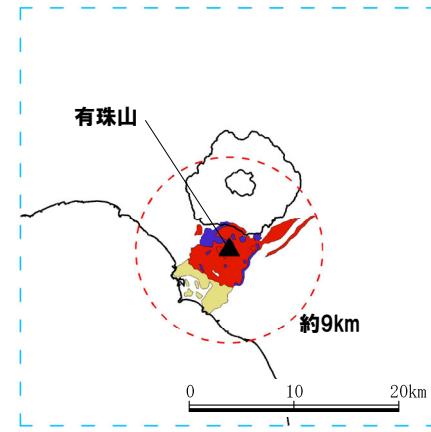
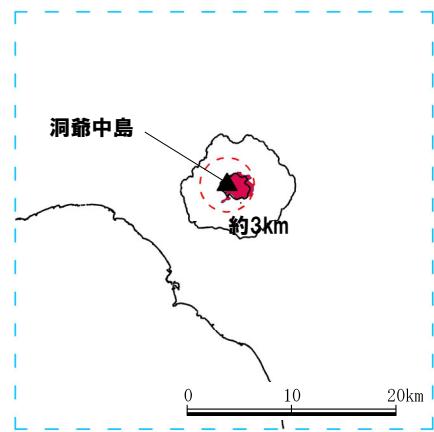
- 李(1993)においては、洞爺カルデラ起源の大規模な珪長質マグマによる噴出物は、火碎流堆積物の間に顕著な風化程度の差が認められることから2回のカルデラ形成期(Toya-1及びToya-2)があつたと判断されている。
- 同一著者によるその後の文献であるLee(1996)においては、従来、4つの異なるフェーズからなるひと続きの噴火であると考えられていた洞爺カルデラでの大規模火碎流噴火について、3回の別個の噴火であり、FT法年代測定結果から、その噴火年代は14万年前、10万年前、そして8万年前とされ、2回目の噴火が現在見られる洞爺カルデラを作った最も主要な噴火とされている。
- 一方、鷹澤ほか(2007)においては、洞爺火碎流を下位より、Tpfl I / II, Tpfl III 及びTpfl IVユニットに区分しているが、これらのユニット間に堆積間隙を示す堆積物の根拠は見出されず、これらのユニットを対象に実施したSAR法による平均Red TL年代は、Tpfl I / IIで132ka, Tpfl III 及びTpfl IVで113-114kaであり、後者は町田・新井(2003)が地形、テフラ対比から総合的に推定したToyaの年代(110~115ka)と良く一致しているとされている。この年代値の差については、今回の実験では多粒子(40~70粒子)を用いているので、年代の古い石英粒子の混入も否定できないとされている。
- また、Goto et al. (2018)は、洞爺カルデラ形成噴火噴出物(Tp)を大きく6つのユニットに区分しているが、李(1993)におけるToya-1及びToya-2は、それぞれGoto et al. (2018)におけるUnit2及びUnit3~Unit6に対比されている。
- これらのことから、洞爺カルデラ形成噴火について、Lee(1996)では3回の別個の噴火とされたが(上記下線箇所)、以降の文献(鷹澤ほか(2007)等)では別個の噴火ではなく、1輪廻の噴火として扱われており、この噴火年代として、「日本の火山(DB)」等のデータベースにおいては、Lee(1996)で示された年代値のうち、最も古い14万年前が採用されたものと考えられる。このため、「約14万年前にカルデラ形成」は、現行では、P51に示す洞爺カルデラの活動履歴のとおり、約11万年前にTpを噴出し、現在の洞爺カルデラを形成した噴火に対応するものと考えられる。

※5 Sanjo and Sugai (2023)によれば、洞爺カルデラから北方向に約47km離れた仁木町尾根内付近に洞爺火碎流堆積物の露頭があるとされている。洞爺カルデラから当該露頭までの距離は、洞爺カルデラから共和町幌似付近までの距離と同じである。

※6 産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)においては、洞爺火碎流堆積物の噴出年代は中期更新世に分類されているが、注釈4に示す理由から、約11万年前(後期更新世)と考えられる。

## 活動可能性評価 (2/5)

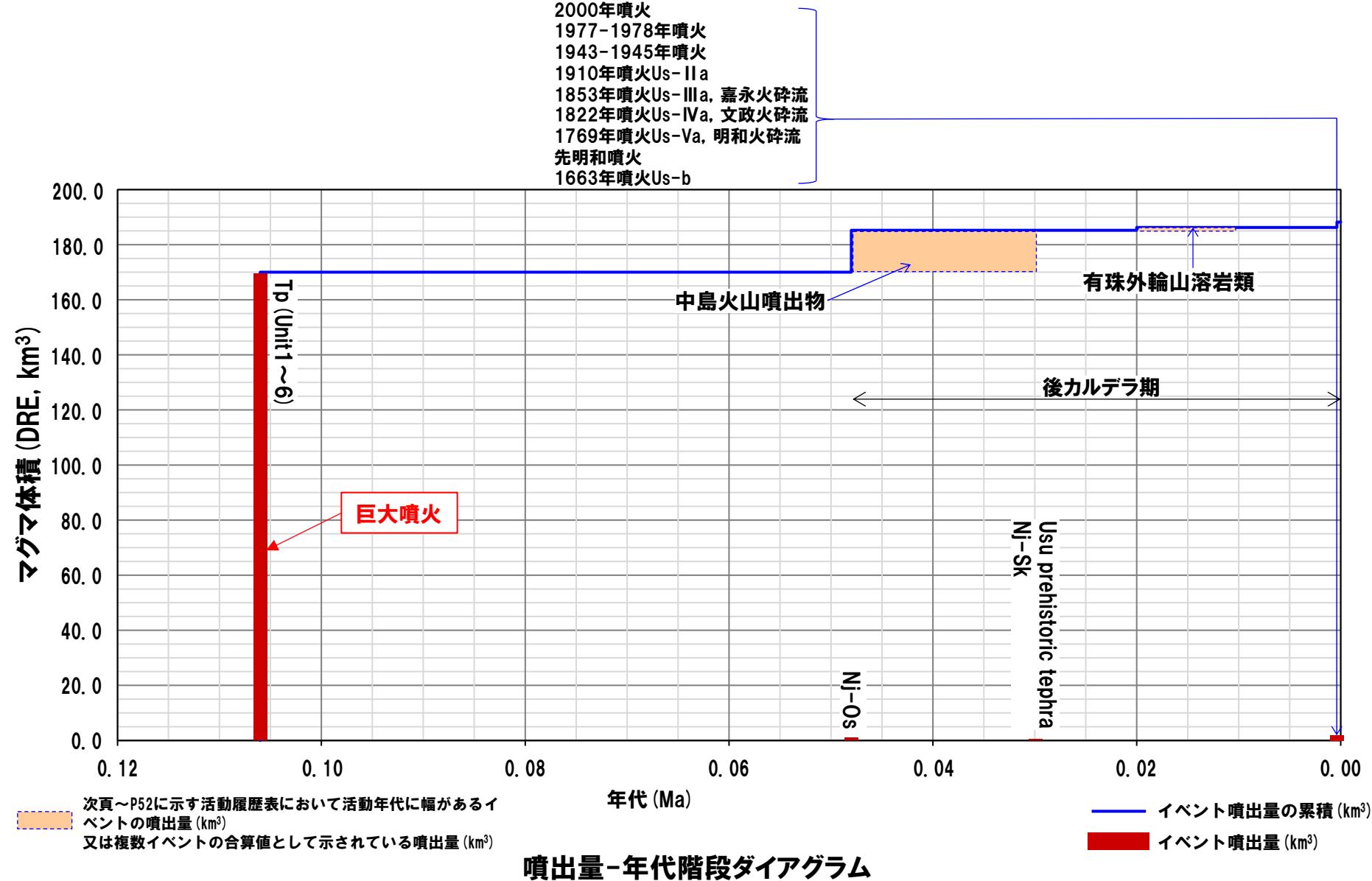
一部修正 (R5/1/20審査会合)



洞爺中島及び有珠山の火山噴出物の分布範囲  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)

## 活動可能性評価 (3/5)

一部修正 (R5/1/20審査会合)



## 活動可能性評価(4/5)

一部修正(H28/2/5審査会合)

## 洞爺カルデラ活動履歴

年代	噴出物名	マグマ体積 (DRE, km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			
	更新世 106ka <sup>*7</sup> Tp (Unit1~6) :afa,pfl	170	—	Goto et al. (2018) Amma-Miyasaka et al. (2020) 金田ほか (2020) 産業技術総合研究所 (2021)
	122.5ka Osr:afa,afa,pfl <sup>*8</sup>	不明	—	
	0.90±0.15Ma 滝ノ上火碎流堆積物	不明	—	産業技術総合研究所 (2021)
	1.59±0.33Ma 壯瞥火碎流堆積物	不明	—	後藤ほか (2021)
	不明 立香火碎流堆積物	不明	—	

\*7 東宮・宮城 (2020)においては、洞爺噴火の年代値については、MIS5dのピークより後の約106kaである可能性も含め、109±ca.3kaと考えておくのが妥当であろうとされている。

\*8 Osrは、金田ほか (2020)における長流川火碎流堆積物に対応する。

同文献においては、洞爺カルデラの南縁付近に、いずれも給源不明の壯瞥火碎流堆積物(熱ルミネッセンス年代測定値: 1.59±0.33Ma)とそれを覆う滝ノ上火碎流堆積物(熱ルミネッセンス年代測定値: 0.90±0.15Ma)が露出しており、これらの上位には、長流川火碎流堆積物が堆積しているとされている。長流川火碎流堆積物は、土壤を挟むものの、洞爺火碎流堆積物の直下に存在し、その年代も、カルデラ形成よりも約1万年前であることから、Tp噴火前の重要な長期的前駆活動とみなすことができるとされている。

しかし、長期的前駆活動については以下の様な知見もあることから、これらの火碎流堆積物(Osr、滝ノ上火碎流堆積物、壯瞥火碎流堆積物及び立香火碎流堆積物)を噴出した噴火のいずれも、洞爺カルデラの活動履歴に示すこととした。

- ・産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2022) では、壯瞥火碎流堆積物、滝ノ上火碎流堆積物及び長流川火碎流堆積物を噴出した噴火は、いずれもTp噴火の長期的前駆活動とされている。
- ・後藤ほか (2021) では、洞爺カルデラ地域において新たに発見した立香火碎流堆積物は、壯瞥火碎流堆積物の下位に位置することから、洞爺火碎流堆積物の先カルデラ期の火碎流堆積物の層序は、下位から立香火碎流堆積物、壯瞥火碎流堆積物、滝ノ上火碎流堆積物、長流川火碎流堆積物とされている。

R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点  
(洞爺カルデラ)

○R3.10.14審査会合資料では、山元 (2014) に基づき活動履歴を整理しているが、洞爺カルデラ形成噴火噴出物(Tp)をユニット区分しているGoto et al. (2018)、支笏洞爺火山地域におけるテフラ層序と年代を体系的にとりまとめているAmma-Miyasaka et al. (2020) 及び当該噴火のマグマ体積を示している産業技術総合研究所 (2021) に基づき見直した。

○洞爺カルデラ形成噴火以前の噴火について、金田ほか (2020) 及び後藤ほか (2021) に示された滝ノ上火碎流堆積物、壯瞥火碎流堆積物及び立香火碎流堆積物の知見を追記した。

○洞爺カルデラ形成噴火の年代値について、活動履歴に示すAmma-Miyasaka et al. (2020)の106kaと整合する、東宮・宮城 (2020) に示された109±ca.3kaを参考として注釈7に付した。

○一方、Marsden et al. (2021)においては、(U-Th) / He法を用いた新しい年代測定の結果、洞爺火碎流堆積物下位のKm-2(尻別岳起源)の噴出年代を96±5kaとし、洞爺火碎流の噴出年代は96±5kaより新しい可能性があることを示唆するとの報告がなされている。

○Marsden et al. (2021)における洞爺火碎流の噴出年代は、尻別岳を起源とする火碎流堆積物であるKm-2 (P73参照)を対象に絶対年代である(U-Th) / He法を適用し、そこから間接的に洞爺火碎流の年代を推定したものであることから、活動履歴には、支笏洞爺火山地域におけるテフラ層序と年代を体系的にとりまとめているAmma-Miyasaka et al. (2020)の年代値を採用することとした。

○洞爺カルデラ形成噴火以前の噴火に関する当社の取り扱いを注釈8に付した。

# 洞爺(とうや)カルデラ

## 活動可能性評価 (5/5)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

### 洞爺中島活動履歴

年代	噴出物名	マグマ体積 (DRE, km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			第四紀火山カタログ委員会編 (2000)
	更新世 ca.30ka	Nj-Sk <sup>※9</sup> :pumice-fall deposit 中島火山噴出物 (溶岩ドーム群: 中島-東山ドーム等)	0.01 15.09 <sup>※10</sup>	山元 (2014) Miyabuchi et al. (2014) 産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2022)
	48-30ka		5.0	
	ca.48ka	Nj-Os :pumice-fall deposit	0.11	

※9 Miyabuchi et al. (2014)によれば、Nj-Skの上位に、洞爺カルデラ内の水蒸気噴火に由来する火山豆石を含む褐色から灰色の微細な降灰層の互層が認められ、当該堆積物の総体積は0.077km<sup>3</sup>と推定されている。

※10 産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2022)によれば、中島火山噴出物のうちマグマ体積が最大のものは中島-東山ドームの14km<sup>3</sup> (DRE) とされている。

### R3.10.14審査会合資料 からの活動履歴の変更点 (洞爺中島)

○R3.10.14審査会合資料では、山元 (2014)に基づき活動履歴を整理していたが、後カルデラ期のテフラ層序と噴火史をとりまとめているMiyabuchi et al. (2014)及び産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2022)「大規模噴火データベース」に基づき見直した。

○産業技術総合研究所 (2022)においては、K-Ar及びU-Pb年代測定を実施した結果、中島火山はカルデラ形成噴火直後の0.10Ma頃から0.05Ma頃まで活動していたとされており、Miyabuchi et al. (2014)及び産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2022)「大規模噴火データベース」における活動年代と整合しない。

○産業技術総合研究所 (2022)の年代は、個々の溶岩に対しK-Ar及びU-Pb年代測定を適用したものであることにに対し、Miyabuchi et al. (2014)は、テフラ層序と噴火史をとりまとめているものであることから、活動履歴にはMiyabuchi et al. (2014)の年代値を採用することとした。

○Miyabuchi et al. (2014)に示された、洞爺カルデラ内の水蒸気噴火に由来する火山灰層について、参考として注釈9に付した。

○第四紀火山カタログ委員会編 (2000)に示された火山体体積を追記した。

### 有珠山活動履歴

年代	噴出物名	マグマ体積 (DRE, km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世 A.D.2000	有珠:2000年噴火	0.0006	
	A.D.1977-1978	有珠:1977-1978年噴火	0.05	
	A.D.1943-1945	有珠:1943-1945年噴火	0.006	
	A.D.1910	有珠:1910年噴火Us-IIa	0.002	
	A.D.1853	有珠:1853年噴火Us-IIIa, 嘉永火碎流	0.21	
	A.D.1822	有珠:1822年噴火Us-IVa, 文政火碎流	0.17	第四紀火山 カタログ委員会編 (2000)
	A.D.1769	有珠:1769年噴火Us-Va, 明和火碎流	0.07	有珠山: 曾屋ほか (2007)
	17世紀末	有珠:先明和噴火	0.0006	昭和新山:0.5 山元 (2014)
	A.D.1663	有珠:1663年噴火Us-b	1.50	Miyabuchi et al. (2014)
	ca. 8ka	外輪山:善光寺岩屑なだれ 外輪山:ドンコロ山スコリア	不明	Nakagawa et al. (2022)
	約1~2万年前	外輪山:有珠外輪山溶岩類	不明	
	ca.30ka	Usu prehistoric tephra :ash-fall deposits	1 <sup>※11</sup> , 0.02 <sup>※12</sup>	

※11 1663年噴火以降の活動によって形成された溶岩ドーム(有珠溶岩ドーム)のマグマ体積も一括計上されている。

※12 Miyabuchi et al. (2014)によれば、有珠外輪山溶岩のマグマ体積は、0.5km<sup>3</sup> (DRE) とされている。

### R3.10.14審査会合資料 からの活動履歴の変更点 (有珠山)

○R3.10.14審査会合資料では、1663年以降の活動年代について、「ka」で示していたが、分かりやすさの観点で、「西暦」に見直した。

○R3.10.14審査会合資料において示していた、山元 (2014)に基づく善光寺岩屑なだれの年代 (7.5ka)について、火山ガラスの定量分析と崩壊堆積物の輸送・堆積メカニズムを見直すことによって、当該岩屑なだれの年代を求めているNakagawa et al. (2022)の知見 (ca.8ka)に見直した。

○なお、善光寺岩屑なだれの年代については、20ka頃 (藤根ほか, 2016)、あるいは16ka (Goto et al. 2019)とする文献もあるが、Nakagawa et al. (2022)によれば、それらの年代は岩屑なだれ堆積物に取り込まれた古い土壤片の年代とされていることから、Nakagawa et al. (2022)の年代を採用することとした。

○R3.10.14審査会合資料において示していた、山元 (2014)に基づく外輪山の活動年代 (10ka)を、以下の理由から、曾屋ほか (2007)に示された活動年代 (約1~2万年前)に見直した。  
・外輪山は複数イベントによって形成されていることを踏まえると、山元 (2014)の引用元である曾屋ほか (2007)のとおり、幅のある活動年代として示すことがより適切と考えられる。

○Miyabuchi et al. (2014)に示されたUsu prehistoric tephraの知見を追記した。

○Miyabuchi et al. (2014)に示された、有珠外輪山溶岩のみ(有珠溶岩ドームを含まない)のマグマ体積を、参考として注釈12に付した。

○第四紀火山カタログ委員会編 (2000)に示された火山体体積を追記した。

## 火山噴出物の分布(降下火碎物を除く)(1/12)

一部修正(R5/1/20審査会合)

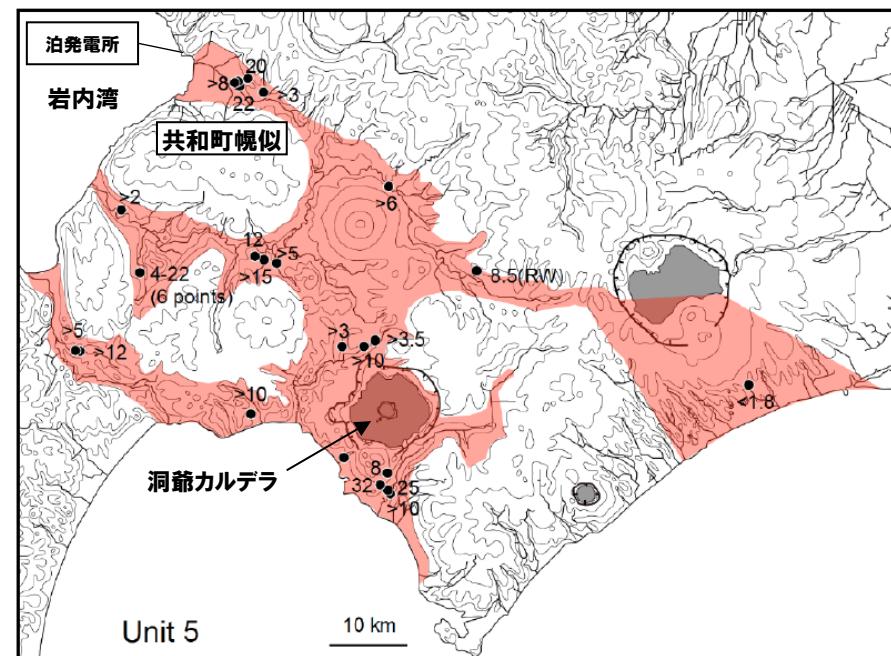
## 【Goto et al. (2018) 及び産業技術総合研究所(2022)確認結果】

- これらの文献に基づくと、洞爺火碎流堆積物は、敷地方向(北～北西方向)では共和町幌似付近まで確認され、この状況は産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)と調和的である。
- Goto et al. (2018)によれば、共和町幌似付近で確認される洞爺火碎流堆積物は、最も広範囲に広がっていることが示唆されるUnit2に区分されるものである。
- 一方で、産業技術総合研究所(2022)によれば、共和町幌似付近で確認される洞爺火碎流堆積物は、最も広範囲に広がっていることが示唆されるUnit5に区分されるものである。
- これらの文献に示される洞爺火碎流堆積物は、地質調査地点である共和町幌似付近を越え、岩内湾まで示されているが、これは、共和町幌似付近で確認される洞爺火碎流堆積物の層厚(12～22m)を考慮した推定によるものと考えられる。



(図中の数字は層厚を示す、単位:m)

洞爺火碎流堆積物のUnit2の分布と層厚  
(Goto et al. (2018)に加筆)



(図中の数字は層厚を示す、単位:m)

洞爺火碎流堆積物のUnit5の分布と層厚  
(産業技術総合研究所(2022)に加筆)

## 火山噴出物の分布(降下火碎物を除く)(2/12)

一部修正(R5/1/20審査会合)

## 【Goto et al. (2018)】

## (洞爺火碎流及び洞爺火山灰(Toya)の分布)

- 洞爺火碎流は、洞爺カルデラ周辺に広く分布するとされている。
- 洞爺火碎流は、洞爺カルデラから北側には42kmまで、西側には35kmまで広がっているとされている(奥村・寒川(1984)、町田ほか(1987)及び町田・新井(2003))。
- 洞爺火碎流に関連した広域テフラである洞爺火山灰(Toya)は、北海道東部や東北地方で確認されているとされている(例:下北半島の大間)。

## (洞爺火碎流堆積物の地質調査結果)

- 洞爺カルデラの形成過程を明らかにするため、主に洞爺カルデラの南側と北側(P56左図参照)において洞爺火碎流堆積物の地質層序学的調査を行ったとされている。
- 遠方の調査地点は、岩内(Location16)※1、熱郛(Location17)及び大間(Location18)であるとされている(P56左図参照)。
- 岩内(Location16)※1のいくつかの小規模な採石場において洞爺火碎流堆積物(層厚12m以上)がよく露出しているとされている。
- 大間(Location18)においては、海成段丘堆積物の上位に、洞爺火碎流堆積物(層厚15cm)が認められるとされている。

## (洞爺火碎流堆積物のユニット区分)

- 洞爺火碎流堆積物は、岩相の違いにより6つのユニット(Unit1～6)に区分できるとされている(P57左図参照)。
  - ・Unit1:細粒な降下火山灰。層厚は0.01～0.02mで、流紋岩質火山ガラスと無色鉱物、岩片を含む。
  - ・Unit2:ベースサージ堆積物(Unit2a)とそれを覆う軽石質火碎流堆積物(Unit2b-2d)。層厚は28.2～34.0mで、Unit2a, 2cには火山豆石が含まれる。
  - ・Unit3:複数の薄いサージ堆積物と降下火山灰(Unit3a)及びサージ堆積物(Unit3b, 3c)。層厚は4.4～7.7mで、Unit3aには火山豆石が含まれる。
  - ・Unit4:軽石質火碎流堆積物。層厚は3.4～3.9mで、直径7cm以下の白色軽石と直径50cm以下の礫を含む。
  - ・Unit5:石質岩片に富んだ基底礫(Unit5a)と軽石質火碎流堆積物(Unit5b)。層厚は7.5～24.0mで、Unit5aは直径3m以下の礫を含み、Unit5bは白色軽石とバンド状軽石を含む。
  - ・Unit6:石質岩片に富んだ基底礫(Unit6a)と軽石質火碎流堆積物(Unit6b)。層厚は6.4～6.5mで、Unit6bは白色軽石、バンド状軽石、灰色軽石を含む。
- 各ユニットに含まれる軽石・石質岩片及び基質に含まれる鉱物の組成分析等の結果、各ユニットを通してマグマ組成に大きな変化はなかったが、カルデラ形成噴火の最終段階でやや苦鉄質なマグマが関与していたとされている。



(次頁へ続く)

## 火山噴出物の分布(降下火碎物を除く)(3/12)

再掲(R5/1/20審査会合)

 (前頁からの続き)

【Goto et al. (2018)】

(洞爺カルデラの形成過程)

- 洞爺カルデラの形成過程は以下のとおり再現できたとされている。
  - ・カルデラ形成の爆発は、細粒火山灰(Unit1)をもたらした水蒸気爆発で始まった(次頁中央及び右図A)。
  - ・大規模な水蒸気爆発は大量の火碎流(Unit2)をもたらした(次頁中央及び右図B)。
  - ・繰り返し発生した水蒸気爆発はベースサージ(Unit3)をもたらした(次頁中央及び右図C)。
  - ・カルデラ崩壊はマグマ優勢の水蒸気爆発(Unit4)で始まった(次頁中央及び右図D)。
  - ・カルデラ崩壊は、大規模なマグマ優勢水蒸気爆発(Unit5)により、極限に至った(次頁中央及び右図E)。
  - ・カルデラ崩壊の最終段階(Unit6)において、マグマ性爆発が生じた(次頁中央及び右図F)。
- Unit2は、6つのユニットの中で最も広範囲に広がっていることが示唆されるとされている(次頁中央及び右図B)。
- 大間(Location18)に認められる堆積物は、含まれる軽石片(粒径5mm以下)が白色を呈するもののみであることから、おそらくUnit2に伴うco-ignimbrite ash<sup>※2</sup>であるとされている。
- また、Unit1～6は土壤層や再堆積物を挟在しないとされ、洞爺火碎流堆積物は、時間間隙のない一連の噴火で形成されたと考えられるとされている。

※1 Goto et al. (2018) に示される調査地点「岩内(Location16)」は、当社地形調査、地表地質踏査等の結果、洞爺火碎流堆積物を確認している共和町幌似付近に該当する。

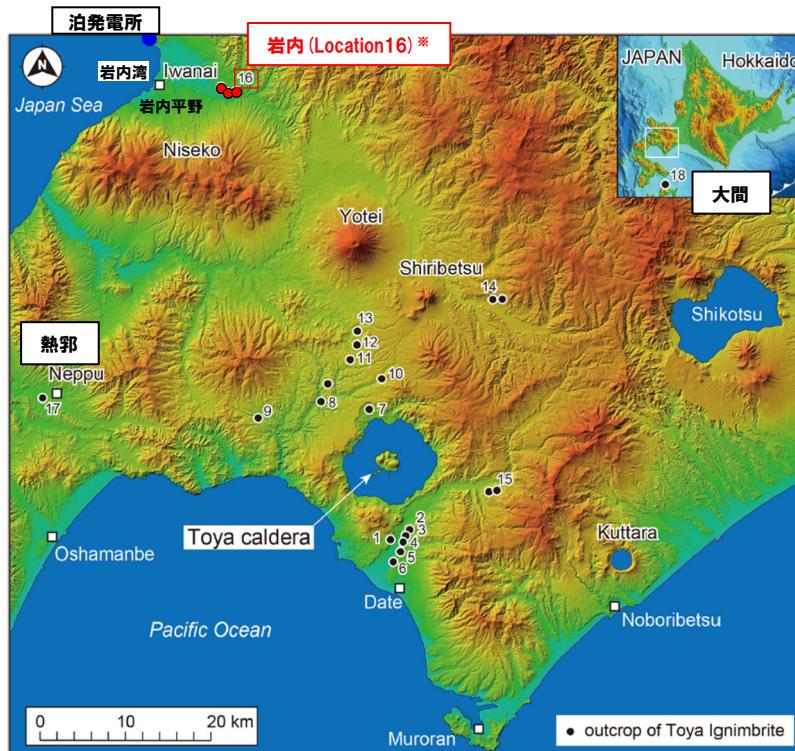
※2 東宮・宮城(2020)によれば、広域に分布する洞爺火山灰(Toya)は、大規模火碎流のco-ignimbrite ashと考えられているとされており、おそらく、特に規模の大きかったGoto et al. (2018)におけるUnit2, 5, 6に伴うものであろうとされている。

 (次頁へ続く)

# 洞爺(とうや)カルデラ

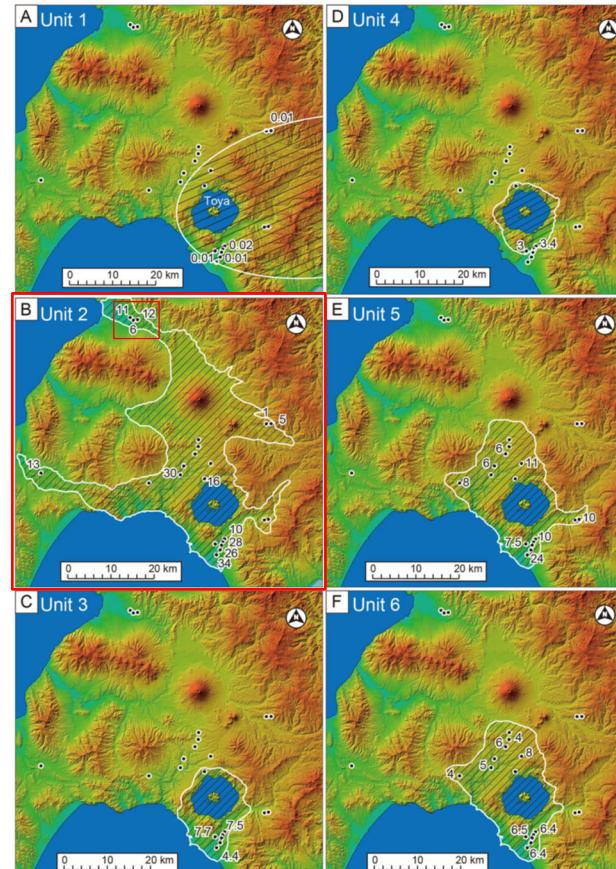
火山噴出物の分布(降下火碎物を除く)(4/12)

再掲(R5/1/20審査会合)

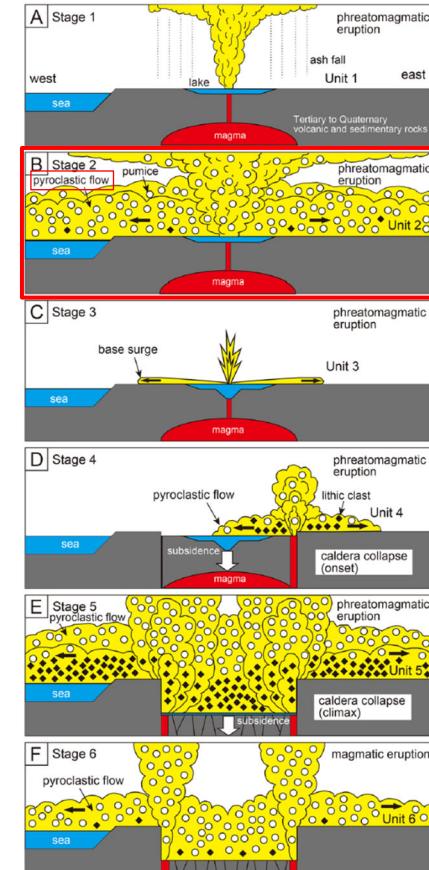


※Goto et al. (2018)に示される調査地点「岩内 (Location 16)」は、当社地形調査、地表地質踏査等の結果、洞爺火碎流堆積物を確認している共和町幌似付近に該当する。

調査地点(Goto et al. (2018)に加筆)



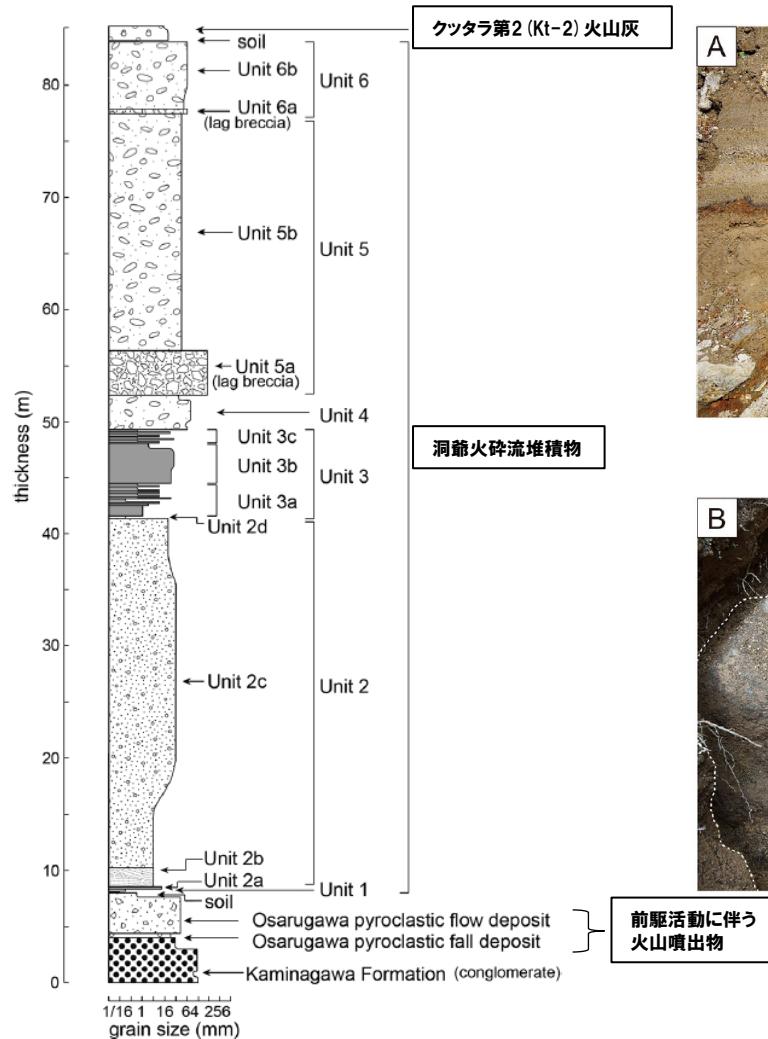
洞爺火碎流堆積物の各ユニット(Unit1~6)の分布と層厚  
(Goto et al. (2018)に加筆)



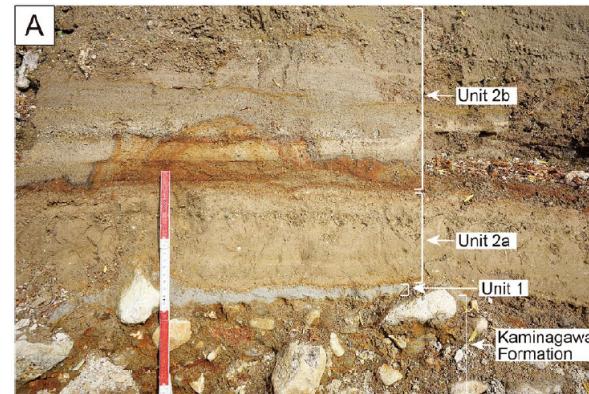
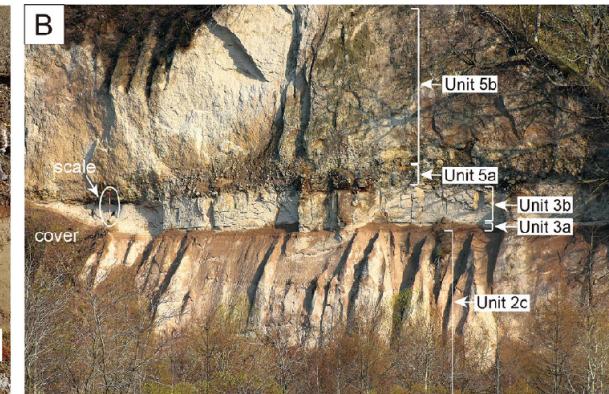
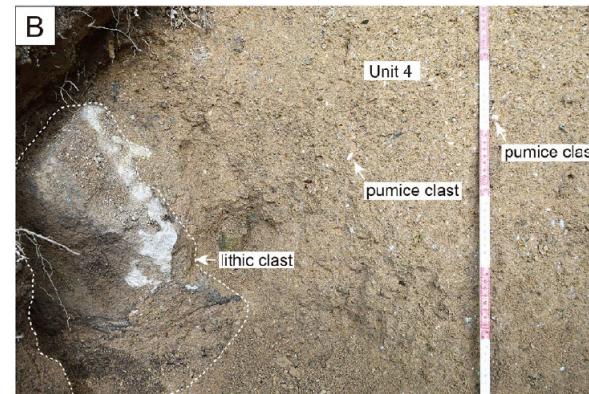
洞爺カルデラ形成の模式モデル  
(Goto et al. (2018)に加筆)

## 火山噴出物の分布(降下火碎物を除く)(5/12)

再掲(R5/1/20審査会合)



洞爺火碎流堆積物の模式柱状図 (Goto et al. (2018) に加筆)

上長和層とUnit1～2bの露頭写真  
(Goto et al. (2018) のFig. 7A)Unit2c～5bの露頭写真  
(Goto et al. (2018) のFig. 6B)Unit4の露頭写真  
(Goto et al. (2018) のFig. 8B)Unit5b～6bとKt-2火山灰の露頭写真  
(Goto et al. (2018) のFig. 9B)

## 火山噴出物の分布(降下火碎物を除く)(6/12)

一部修正(R5/1/20審査会合)

## 【産業技術総合研究所(2022)】

## (カルデラ形成噴火の層序・岩相とユニット区分)

- 洞爺火碎流について、各ユニットの岩相・層厚、ユニット境界部の産状、本質物質の最大粒径・種類および量比の層序変化を明らかにしたとされている。
- Goto et al. (2018) では本質物質を白色軽石、縞状軽石、灰色軽石の3タイプに区分しているが、当該報告書では新たに、斑晶量およそ5%以下の斑晶に乏しい白色軽石(CPタイプ)、斑晶量およそ10%以上の斑晶に富む白色軽石(CRタイプ)、縞状軽石および灰色軽石(gray, bandタイプ)の3つ(次頁参照)に区分して重量比を求めたとされている。
- Goto et al. (2018) に記載されている洞爺火碎流堆積物と比較して、本質物質の最大粒径やタイプ区分が本研究とは異なる結果となり、模式地域外での層序対比が変更されたほか、ユニット境界の産状についても新たな知見が得られたとされている。
- 洞爺火碎流堆積物の各ユニットについては、以下のとおり区分できるとされている(P60左図参照)。
  - ・Unit1:淘汰の良い細粒降下火山灰堆積物。洞爺湖北側でやや厚く、最大層厚は14cmで、粒子の大部分は纖維状に発泡したガラス片からなり、斜長石・石英・輝石の結晶片のほか変質した岩片もわずかに含まれる。
  - ・Unit2:火山灰質の火碎流主体の堆積物で、下位から褐色で火山豆石を含む細粒火山灰主体のサージ堆積物、灰白色で成層構造の発達したやや粗粒な軽石に富むサージ堆積物、淡桃色～白色の細粒の火山灰に富む厚く塊状の火碎流堆積物、淡桃色の細粒火山灰主体の成層構造の発達した薄いサージ堆積物に区分される。洞爺湖南側で最も厚く、最大層厚は35m程度で、洞爺湖南方の模式地域および洞爺湖北方地域で大小さまざまな脱ガスパイプが認められる。
  - ・Unit3:火碎サージ堆積物、降下火山灰堆積物、火碎流堆積物の互層。洞爺湖南側で最も厚く、模式地域における層厚は約10mで、下部と上部の成層構造が発達した互層は、ほかのユニットに比べてかなりかたく締まっている。
  - ・Unit4:淡灰色で粗粒な岩片に富む塊状の火碎流堆積物。連続性が悪く、模式地域及び洞爺湖北側10km以内にしか認められない。最大層厚は8m程度で、ユニット3との境界は明瞭で直線的。
  - ・Unit5:最下部の岩片濃集層とその上位の淡灰色で粗粒な軽石や岩片に富む塊状の火碎流堆積物。洞爺カルデラ形成噴火噴出物の中で最も広範囲に分布し、最大層厚は約32mで、層厚は洞爺湖からの距離が増してもあまり変化しない。本質物質の最大粒径は約20cm、岩片の最大粒径は75cmにも及ぶ。
  - ・Unit6:最下部の岩片濃集層とその上位の淡灰色で粗粒な軽石や岩片に富む塊状の火碎流堆積物からなり、最上部には薄いサージ堆積物も認められる。洞爺湖北側に厚く分布し、洞爺湖北側15kmの地域で層厚は15m以上、本質物質の最大粒径も20cmに及ぶ。

## (ユニットごとの分布図)

- 上述の各ユニットについて、層厚及び分布図が新たに示されている(P61左図参照)。
- 最も広範囲に分布するのはUnit5であり、給源の北西方向については、敷地に最も近い共和町幌似付近に、給源の南東方向については、苦小牧付近まで到達している。
- 共和町幌似に到達した火碎流堆積物について、Goto et al. (2018)においては、Unit2に区分されるものであるが、当該報告書においてはUnit5に区分がなされている。

## 火山噴出物の分布(降下火碎物を除く)(7/12)

一部修正(R5/1/20審査会合)

◀ (前頁からの続き)

## 【産業技術総合研究所(2022)】

## (遠方の降下火山灰と火碎流ユニットとの対比)

- 模式地域におけるユニットごとの石基ガラス組成と比較することにより、遠方(男鹿半島、大間、厚真、千歳)に分布するco-ignimbrite ashまでのユニット対比を試みたとされている。
- 給源の東方(厚真、千歳)で得られた試料は、本質物質の最大粒径は数-10mm未満で細粒の火山灰基質が大部分を占めており、淘汰の悪い噴出物であるとされている。また、そのガラス組成はUnit6に類似しているとされている。
- 給源の南方(男鹿半島、大間)で得られた試料は、大部分がガラス片からなり、わずかに鉱物片を含む、淘汰の良い降下火山灰であるとされている。また、そのガラス組成はUnit5に最も近いとされている。
- 洞爺のco-ignimbrite ash(いわゆる洞爺火山灰)は距離または方向によって給源となっているユニットが異なる可能性があり、Unit5由来のco-ignimbrite ashは洞爺湖南側遠方へ、Unit6由来のco-ignimbrite ashは洞爺湖東方に堆積しているとされている(P61右図参照)。

## (カルデラ形成噴火の推移)

- 堆積物の特徴、時間間隙の有無、および本質物質の構成物量比から、洞爺カルデラ形成噴火をステージ1およびステージ2の大きく2つに区分したとされている。
- ステージ1はUnit1～Unit3からなり、破碎度が高く火山豆石を大量に含むことから、水に富む環境下でのマグマ水蒸気噴火によって放出されたと考えられるとされている。
- その後やや長い時間間隙\*において始まったステージ2では、マグマ噴火によって火碎流堆積物が繰り返し堆積したとされている。

\*Unit4の最下部に直径30cmほどのUnit3堆積物のブロックが取り込まれているのが確認され、この様な産状は、Unit3全体が硬く締まった状態になってからUnit4の火碎流堆積物が噴出したことを示唆しており、Unit3堆積後にやや長い時間間隙があった可能性が考えられるとしている。



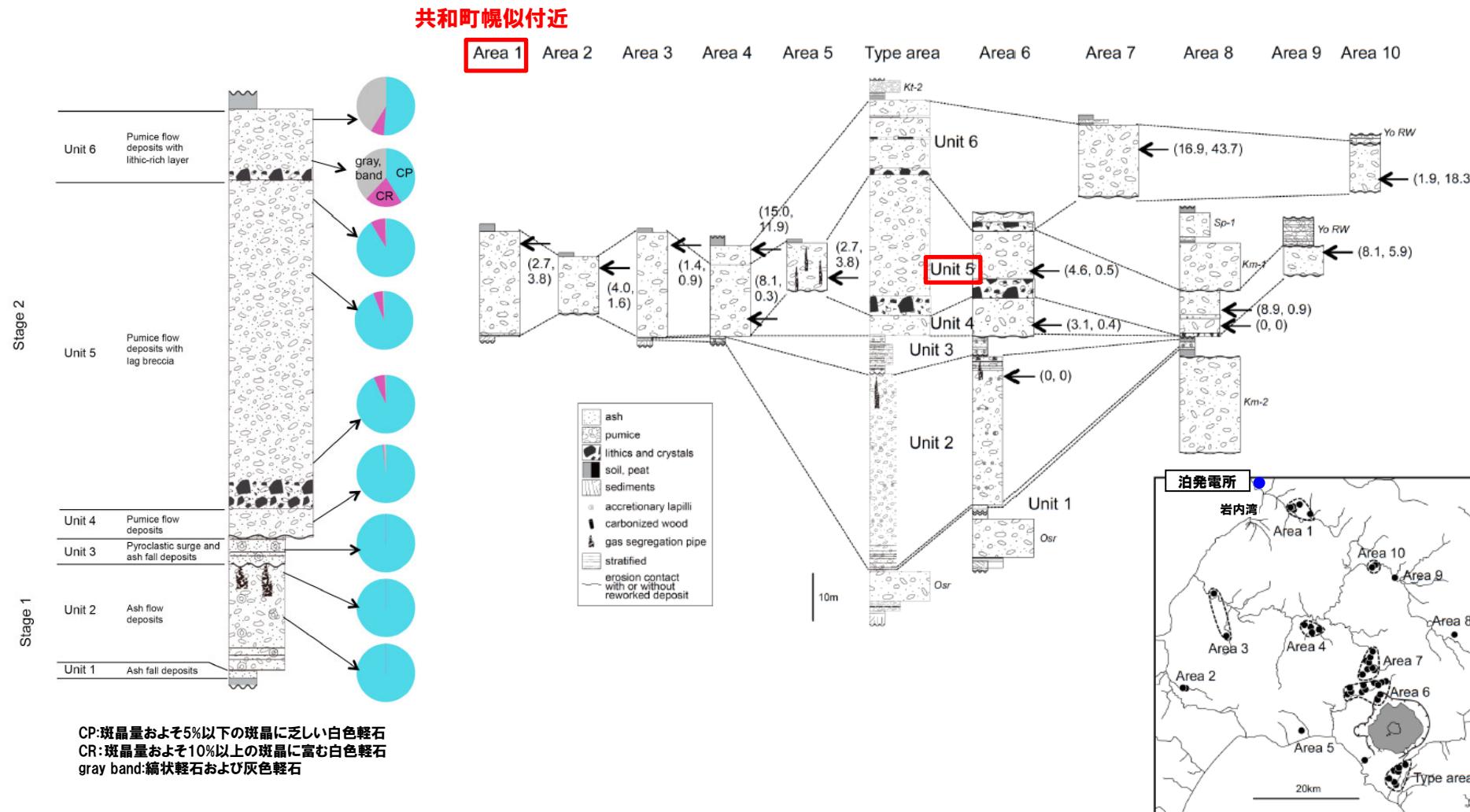
洞爺火碎流のタイプ別の軽石写真  
(産業技術総合研究所、2022)

◀ (次頁へ続く)

## 洞爺 (とうや) カルデラ

## 火山噴出物の分布（降下火碎物を除く）（8 / 12）

再掲 (R5/1/20審査会合)

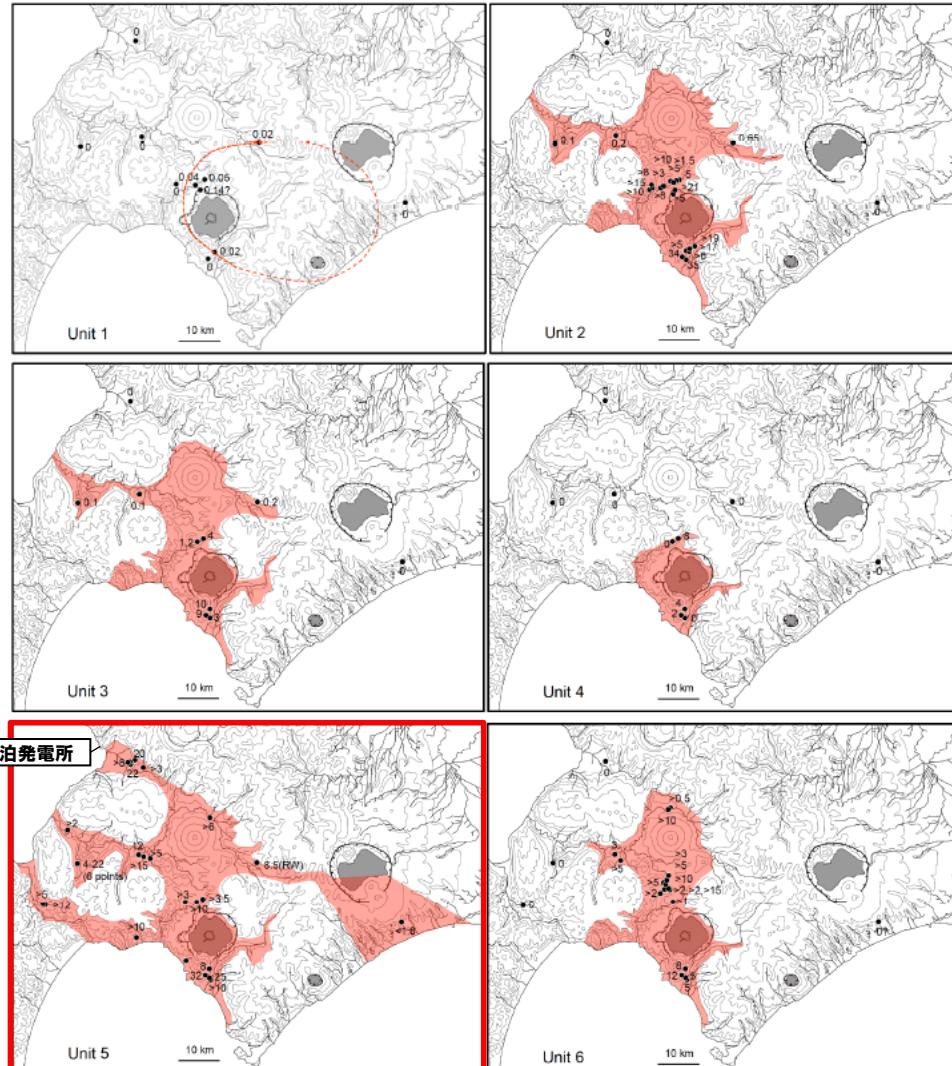


# 洞爺火碎流の総合柱状図及び模式地域における構成物量比 (産業技術総合研究所(2022)に加筆)

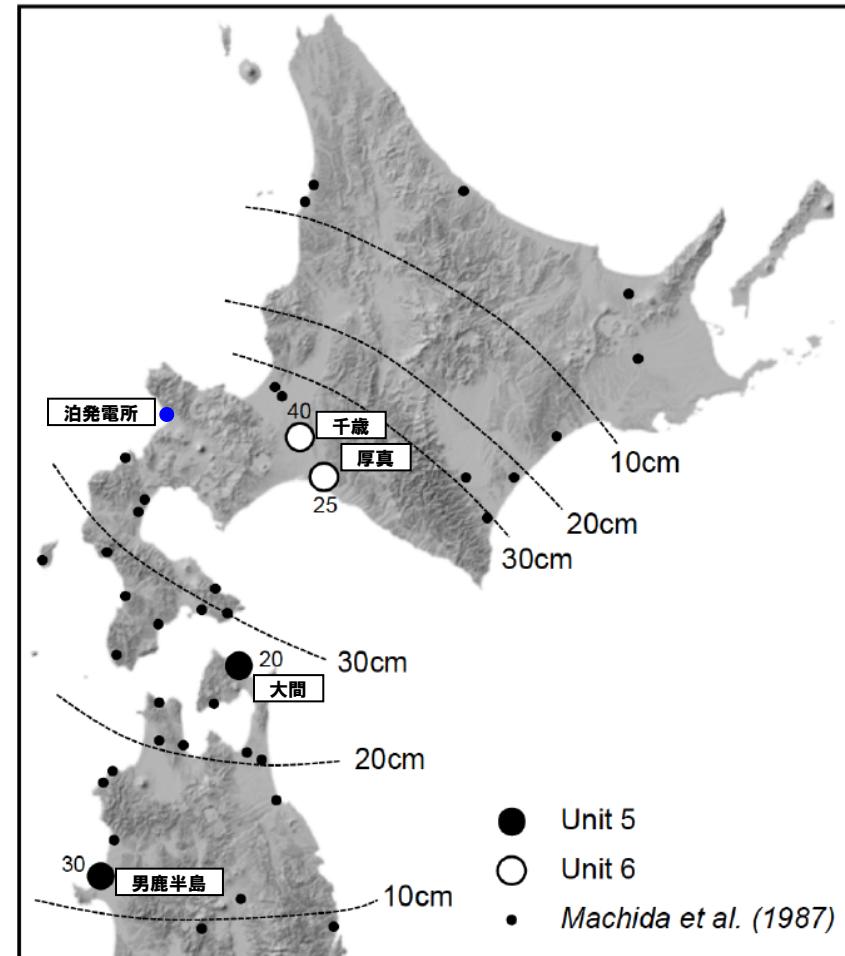
## 洞爺(とうや)カルデラ

火山噴出物の分布(降下火碎物を除く)(9/12)

再掲(R5/1/20審査会合)



ユニットごとの層厚及び分布図(産業技術総合研究所(2022)に加筆)

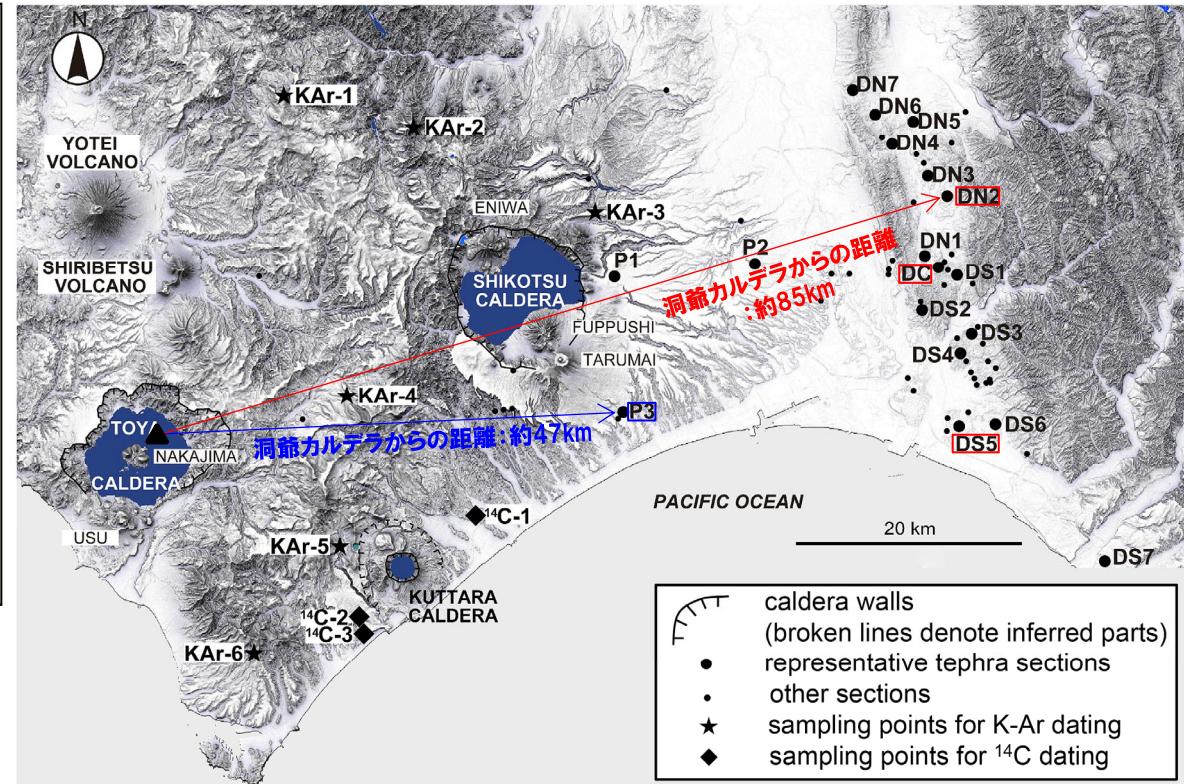
洞爺火山灰(co-ignimbrite ash)のユニット対比結果  
(産業技術総合研究所(2022)に加筆)

# 洞爺(とうや)カルデラ

火山噴出物の分布(降下火碎物を除く)(10/12)

一部修正(R5/1/20審査会合)

- 【Amma-Miyasaka et al. (2020) 確認結果】
- 同文献に示される洞爺火碎流堆積物の最大到達距離は、洞爺カルデラから東方向に位置する苫小牧市錦岡(P3地点)までの約47kmであり、層厚は1.75mである。
  - 同文献において、洞爺カルデラから東～北東方向に位置する調査地点(DN2, DC及びDS5地点)で確認される洞爺カルデラ形成噴火噴出物は、数mm以下の軽石を含む基質支持の堆積物であることから、火碎サージ堆積物<sup>※1</sup>であるとされている。
  - 当該火碎サージ堆積物の最大到達距離は、洞爺カルデラから北東方向に位置する安平町追分春日(DN2地点)までの約85kmであり、層厚は0.25m以下である。



□ : Tp (pumice flow deposit) <sup>※2</sup>確認地点

□ : Tp (pyroclastic surge deposit) <sup>※2</sup>確認地点

調査地点(Amma-Miyasaka et al. (2020)に加筆)

※1 原子力発電所の火山影響評価ガイドによれば、火碎サージは、以下のとおりとされている。

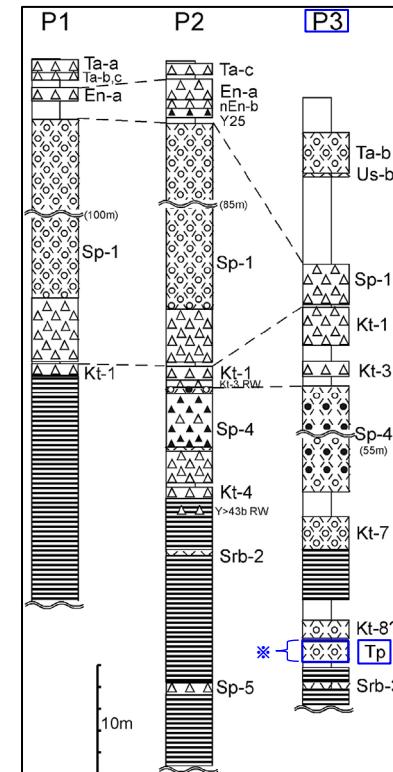
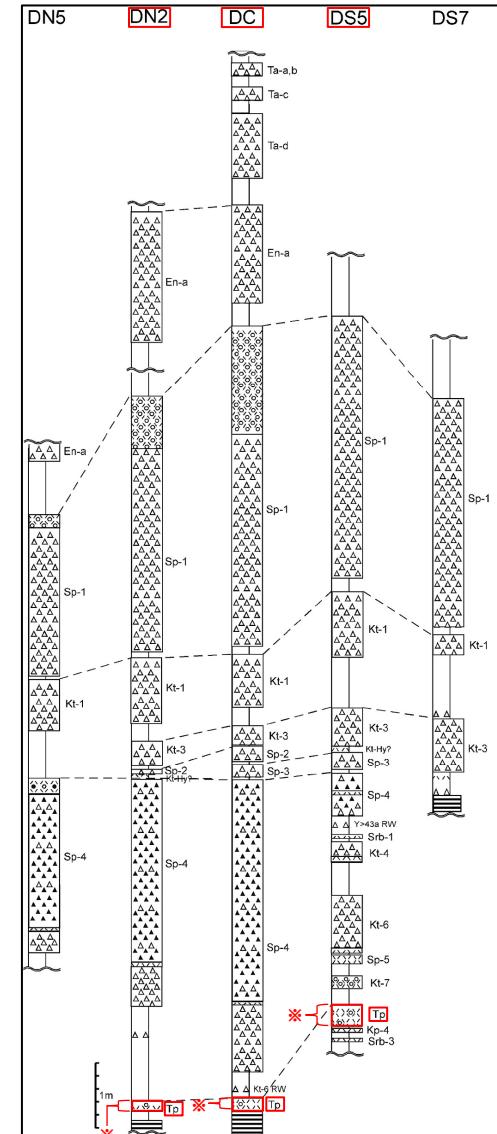
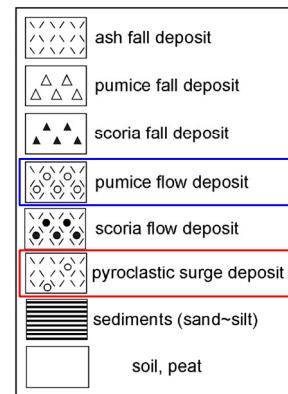
「火碎物密度流のうち、比較的流れの密度が小さく乱流性が高いもの。また、火碎サージは爆発的噴火により火口から直接発生する場合や、濃度の高い火碎流から分離して生じることもある。火碎サージは、大半の火碎流よりも地形の勾配による制約を受けない。」

※2 洞爺火碎流堆積物を指す。

## 洞爺(とうや)カルデラ

## 火山噴出物の分布(降下火碎物を除く)(11/12)

一部修正(R5/1/20審査会合)



※洞爺火碎流堆積物を指す。

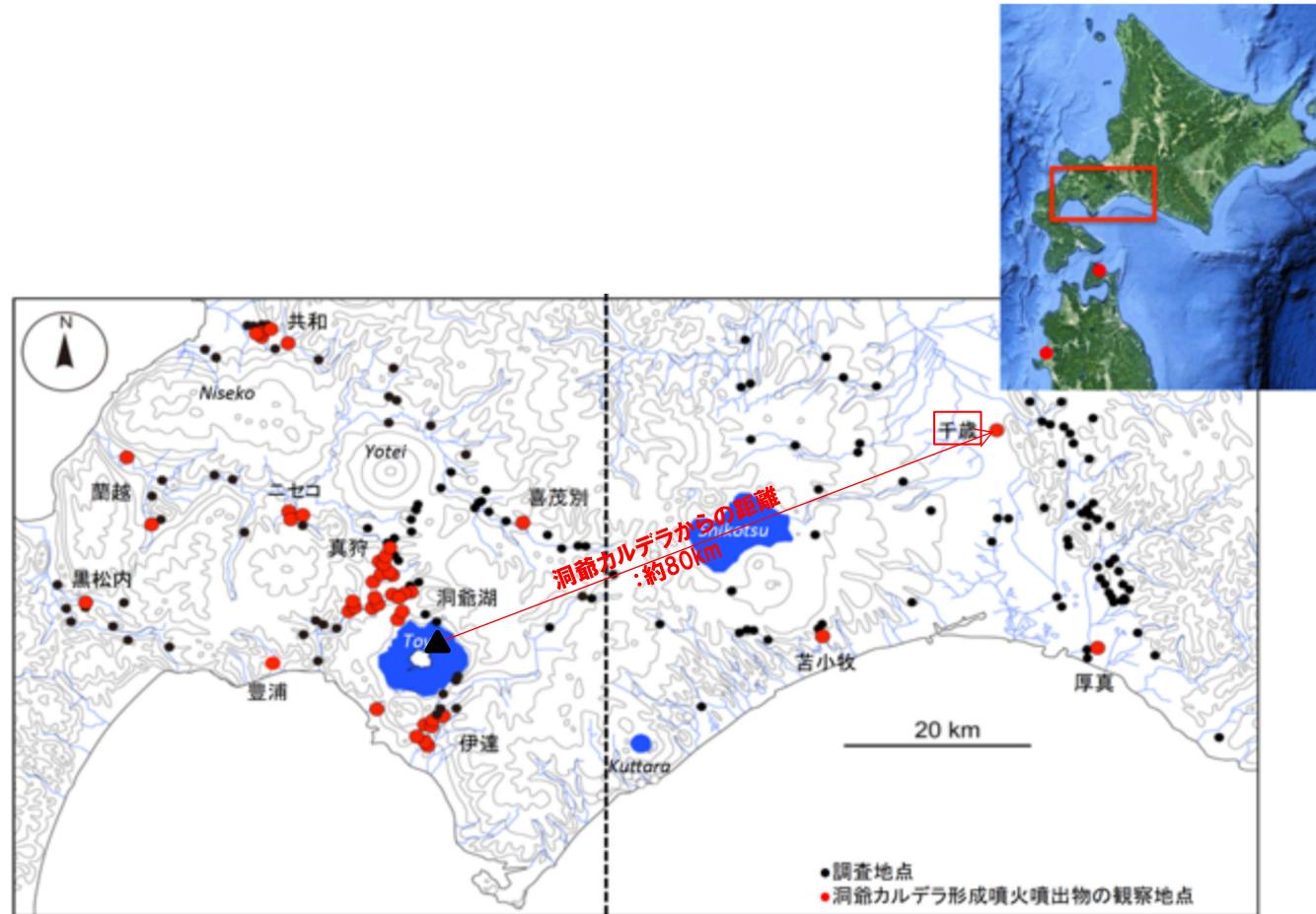
# 洞爺(とうや)カルデラ

## 火山噴出物の分布(降下火碎物を除く)(12/12)

一部修正(R5/1/20審査会合)

### 【産業技術総合研究所(2021)確認結果】

○同文献に基づくと、洞爺カルデラ形成噴火噴出物である火碎サージ堆積物の最大到達距離は、洞爺カルデラから北東方向に位置する千歳市までの約80kmであり、層厚は約0.4mである。

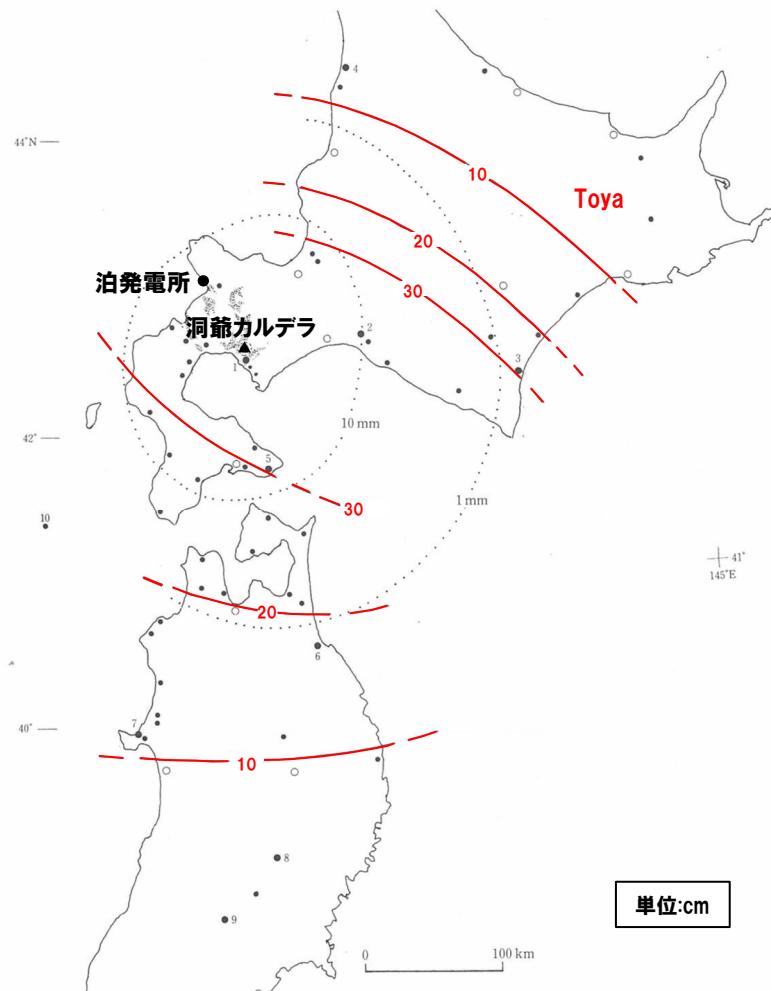


洞爺カルデラ形成噴火噴出物の調査地点(産業技術総合研究所(2021)に加筆)

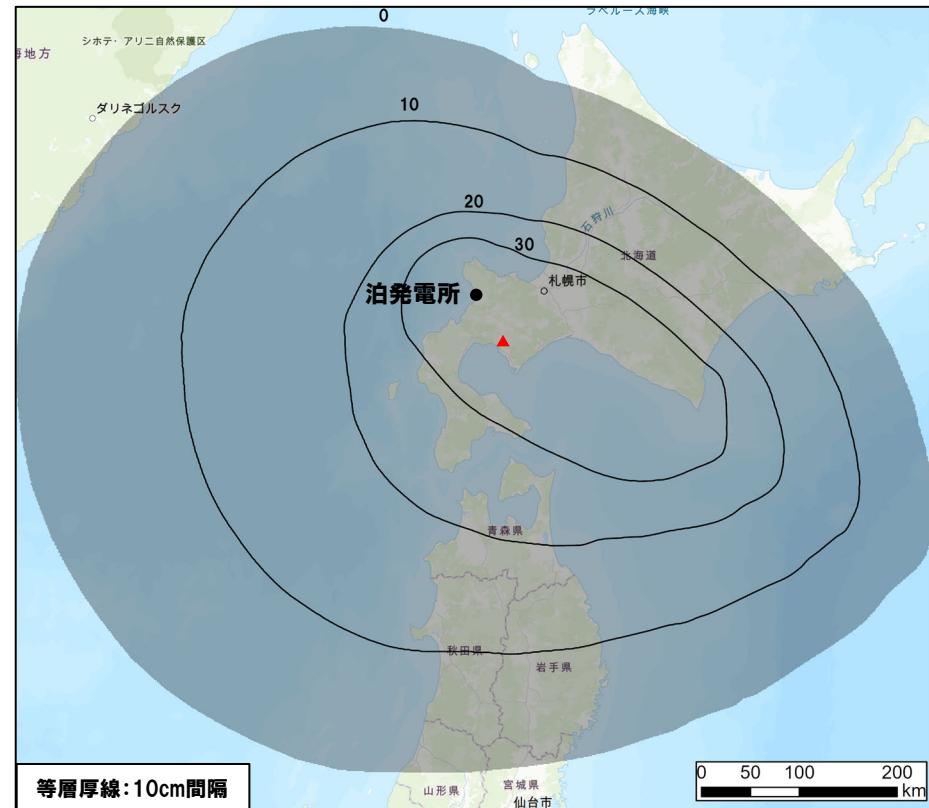
余白

## 降下火碎物の分布(1/6)

再掲(R5/7/7審査会合)



Toyako  
(町田・新井(2011)に加筆)

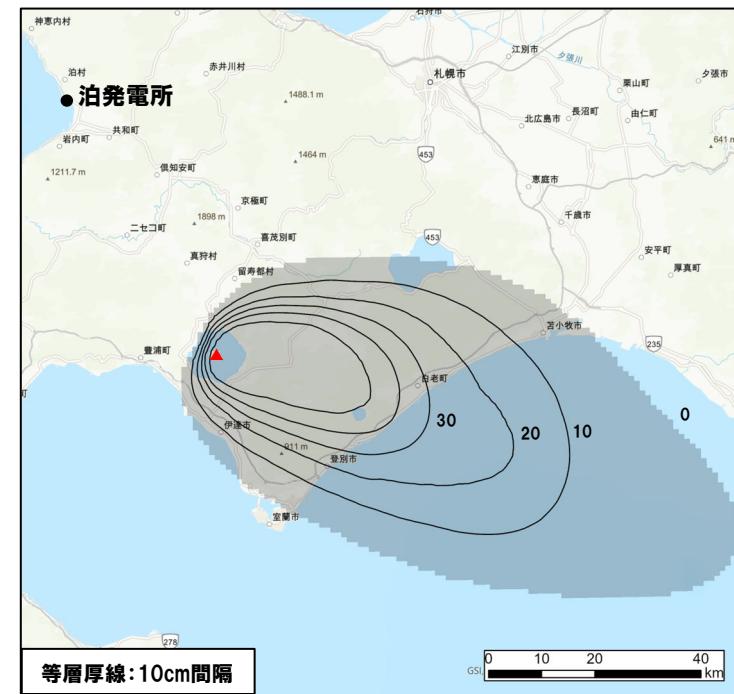
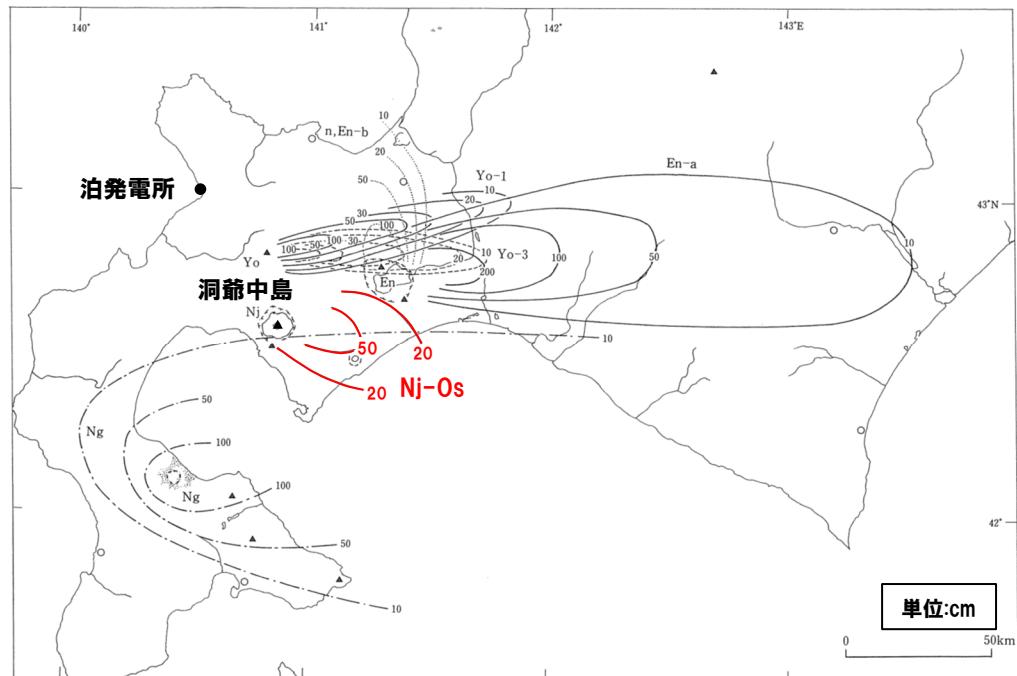


Toyako  
(Uesawa (2023)を基に作成)

洞爺カルデラの降下火碎物の分布範囲

## 降下火碎物の分布 (2/6)

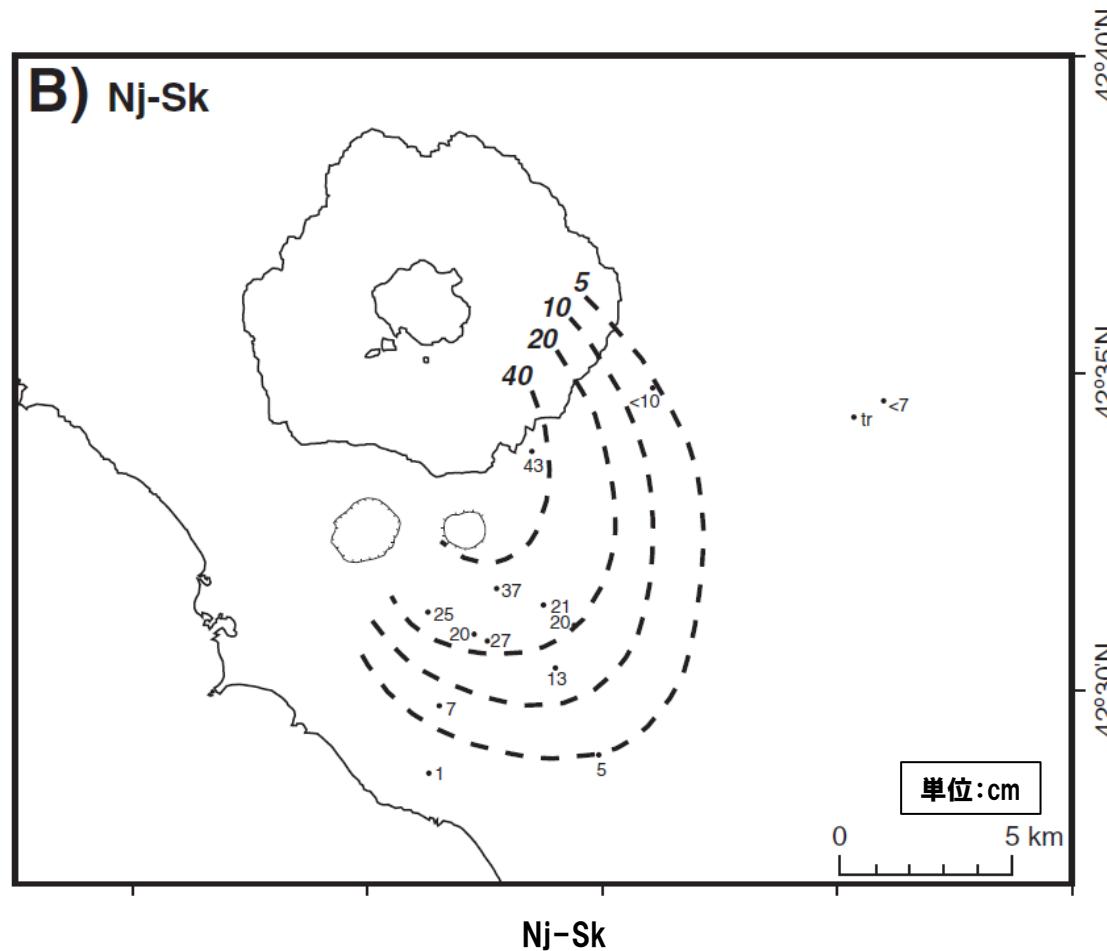
再掲 (R5/7/7審査会合)



洞爺中島の降下火碎物の分布範囲

## 降下火碎物の分布 (3/6)

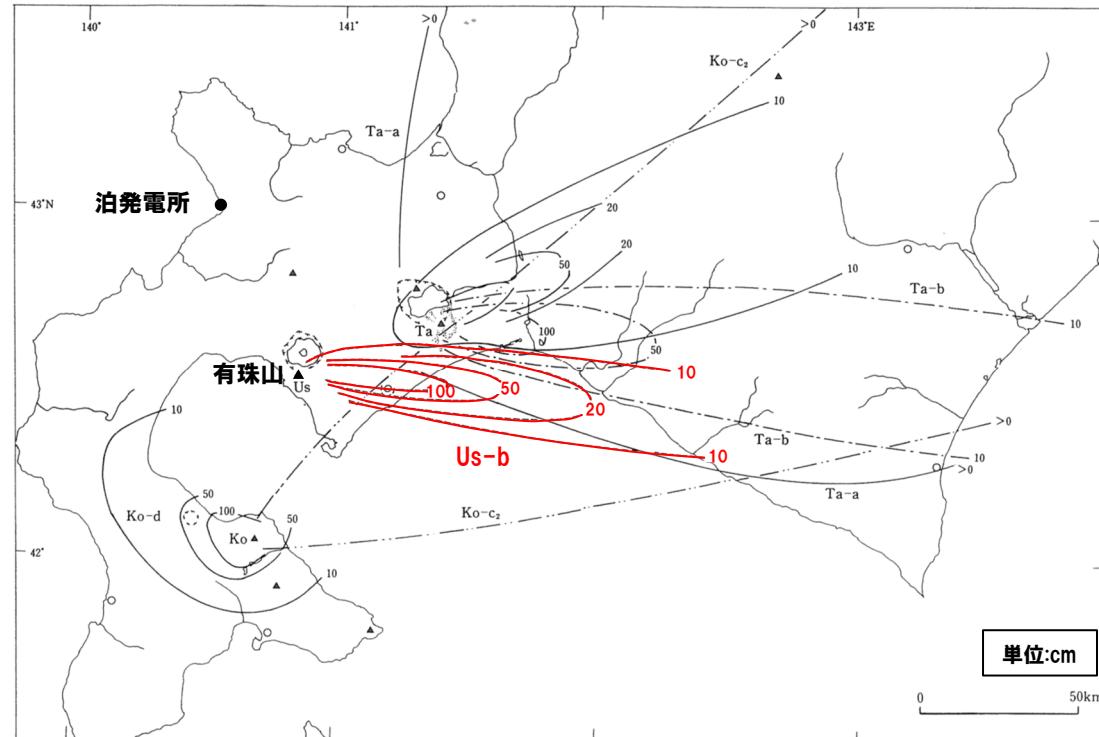
再掲 (R5/7/7審査会合)



個別に収集した文献に基づく洞爺中島の降下火碎物の分布範囲  
(Miyabuchi et al. (2014) に加筆)

## 降下火碎物の分布 (4/6)

再掲 (R5/7/7審査会合)

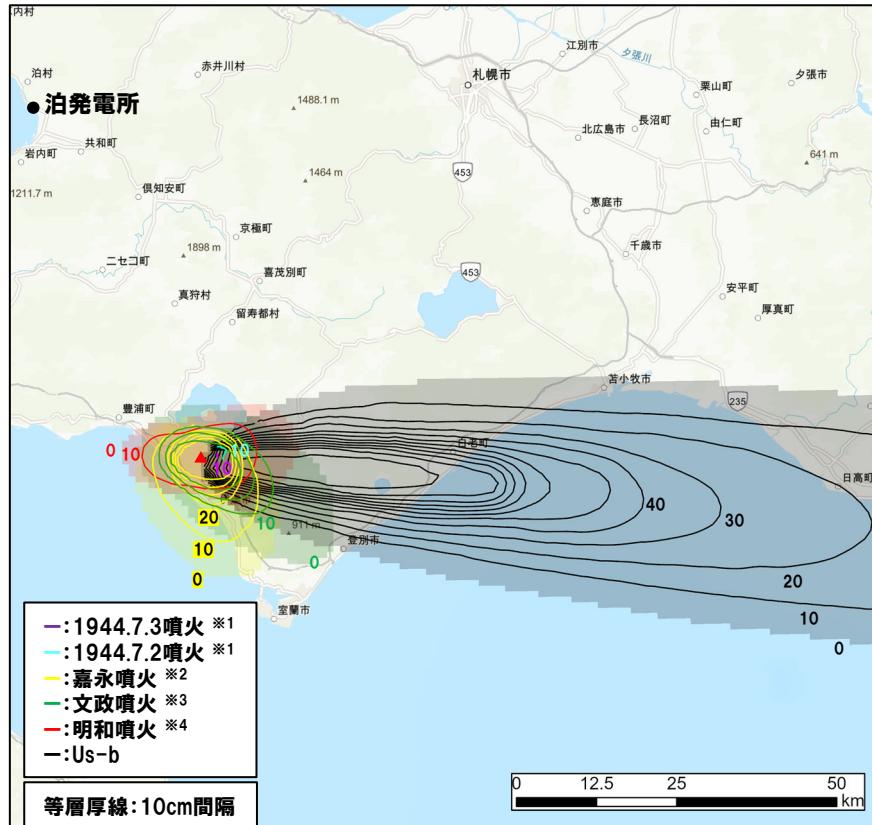


Us-b

有珠山の降下火碎物の分布範囲  
(町田・新井 (2011) に加筆)

## 降下火碎物の分布(5/6)

再掲(R5/7/7審査会合)



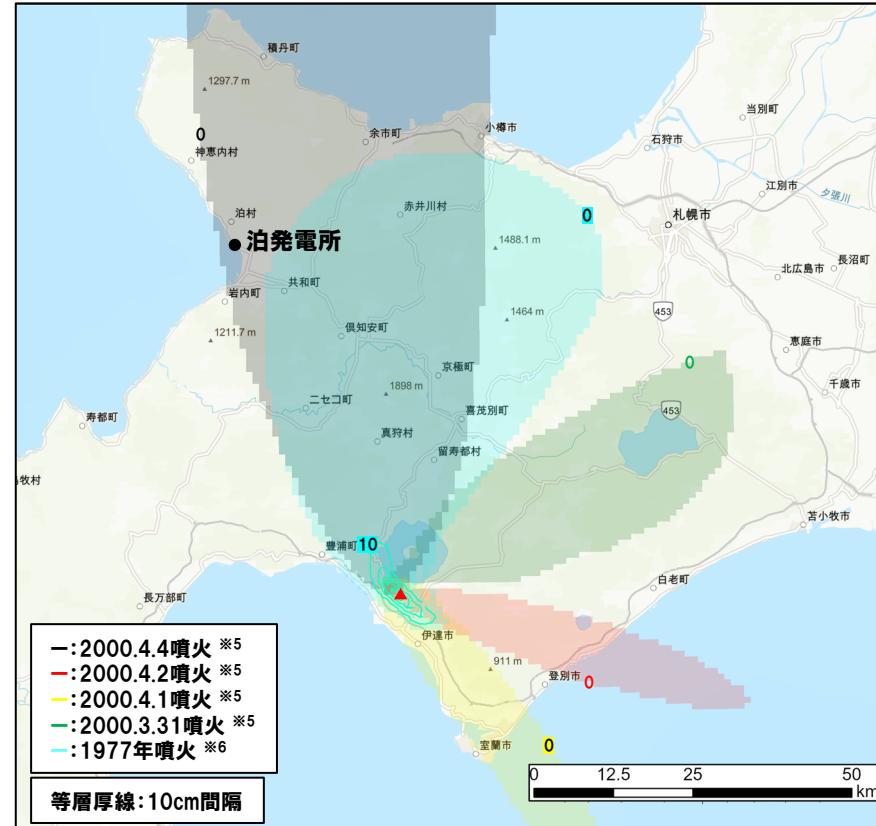
1944.7.3噴火※1, 1944.7.2噴火※1, 嘉永噴火※2,  
文政噴火※3, 明和噴火※4, Us-b

※1 活動履歴表(P52)の1943-1945年噴火に対応する。

※2 活動履歴表(P52)のUs-IIIaに対応する。

※3 活動履歴表(P52)のUs-IVaに対応する。

※4 活動履歴表(P52)のUs-Vaに対応する。



2000.4.4噴火※5, 2000.4.2噴火※5, 2000.4.1噴火※5,  
2000.3.31噴火※5, 1977年噴火※6

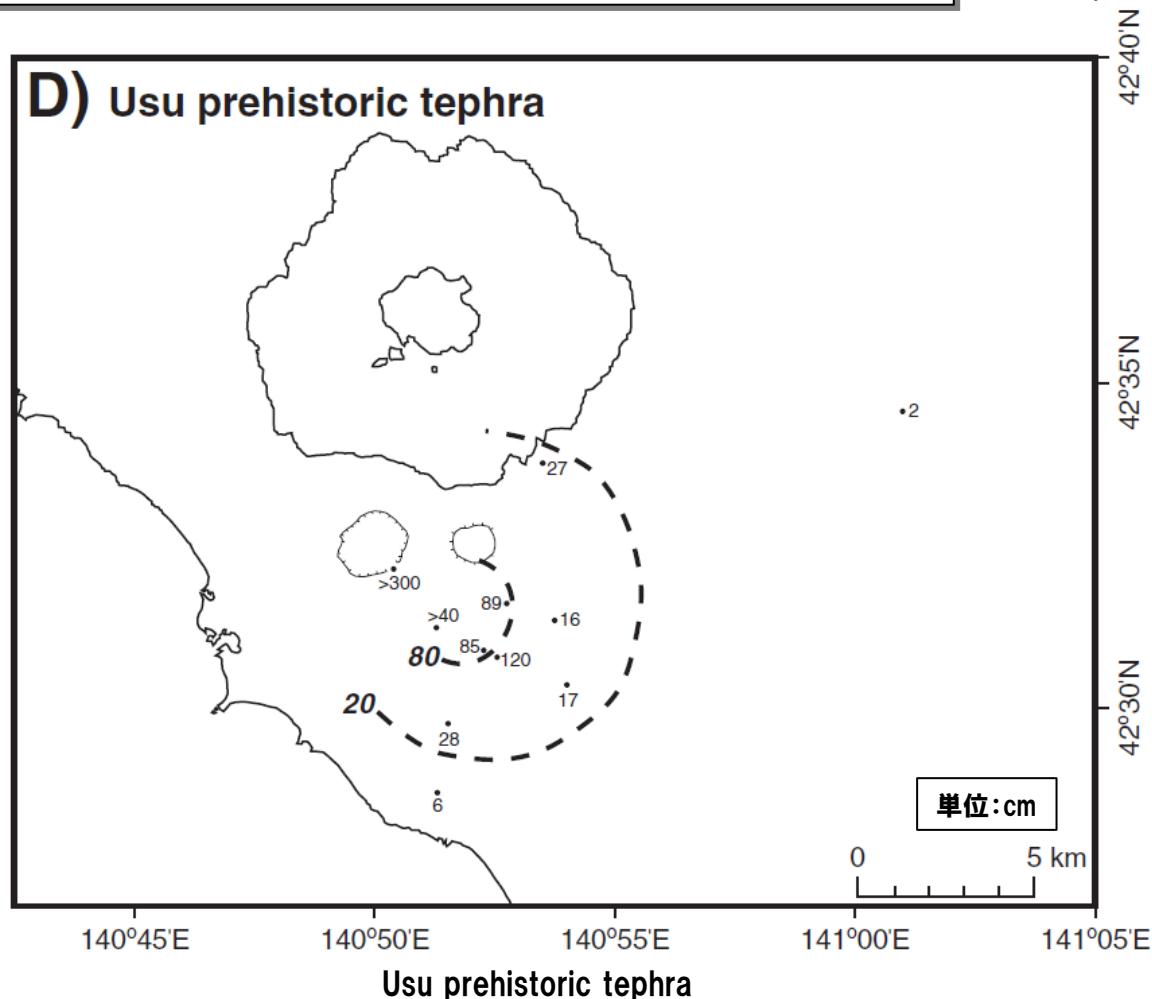
※5 活動履歴表(P52)の2000年噴火に対応する。

※6 活動履歴表(P52)の1977-1978年噴火に対応する。

有珠山の降下火碎物の分布範囲  
(Uesawa (2023) を基に作成)

## 降下火碎物の分布 (6/6)

再掲 (R5/7/7審査会合)



個別に収集した文献に基づく有珠山の降下火碎物の分布範囲  
(Miyabuchi et al. (2014) に加筆)

# 尻別岳 (しりべつだけ)

## 活動可能性評価 (1/2)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

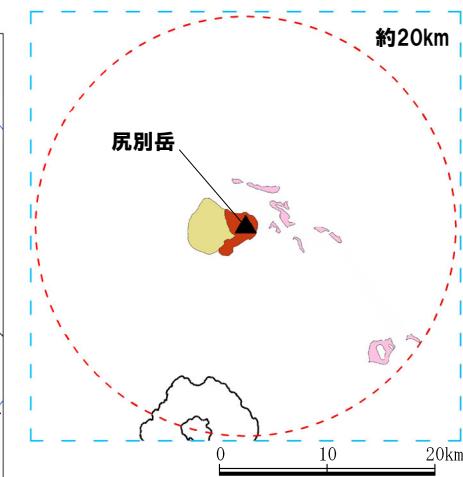
### 尻別岳の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C23 尻別岳
敷地からの距離	43.6km
火山の形式 <sup>※1, ※2</sup>	溶岩ドーム
活動年代 <sup>※3</sup>	約70-5万年前
評価	最大休止期間よりも最新活動年代からの経過期間が短いため、将来の活動可能性が否定できない火山として抽出する。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編 (2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

※3 次頁に示す尻別岳の活動履歴に基づく。



凡 例	
○	火山噴出物 (落下火砕物を除く) の最大到達距離
■	岩屑なだれ堆積物 (完新世)
■	火山岩 (後期更新世、中間質)
■	火碎流堆積物 (後期更新世)

尻別岳  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) より作成)

# 尻別岳 (しりべつだけ)

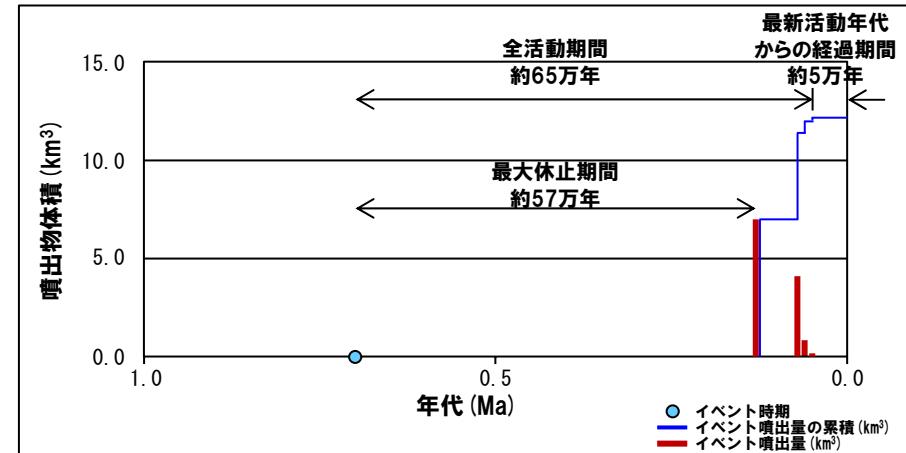
## 活動可能性評価 (2/2)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

### 尻別岳活動履歴

年代	噴出物名	噴出物 体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			新エルギー総合開発機構 (1986)
	更新世 50±20ka	989-m peak (dacite lavas)	0.15	第四紀火山カタログ委員会編 (2000)
	60±20ka	West Shiribetsu (dacite lavas)	0.87	
	70±20ka	East Shiribetsu (dacite lavas)	0.74	
	70±20ka	Km-1 deposit (pyroclastic flow) <sup>※4</sup>	3.4	Goto et al. (2020)
	130±30ka	Km-2 deposit (pyroclastic flow) <sup>※4</sup>	7.0	
	0.7±0.5Ma	尻別岳溶岩	不明	

※4 Amma-Miyasaka (2020)においては、Km-1とKm-2に鉱物組成が類似し、尻別火山からの噴出物であることが推定されるテフラとして、Srb-1 (ca.75-61ka) 及びSrb-3 (>120-115ka)を示しておらず、ガラス組成がKm-2のフィールドにプロットされるものとしてSrb-2 (ca.84-75)も示しているが、層状構造を呈していることから、ある程度再堆積されたものとしている。



R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点	<ul style="list-style-type: none"> <li>Goto et al. (2020) に示された溶岩流 (989-m peak, West Shiribetsu 及び East Shiribetsu) の知見を追記した。</li> <li>R3.10.14審査会合資料において示していた、中川ほか (2011) に基づく喜茂別火碎流の知見 (FT法年代値 <math>0.052 \pm 0.014</math> Ma (Km-pf1) 及び <math>0.053 \pm 0.014</math> Ma (Km-pf2) ) を、以下の理由から、Goto et al. (2020) に示された知見に見直した。 <ul style="list-style-type: none"> <li>上記の喜茂別火碎流両ユニットは、Goto et al. (2020) におけるKm-1 及びKm-2にそれぞれ対比されるものである。</li> <li>Goto et al. (2020) においては、洞爺火碎流堆積物との層位関係 (Km-1が洞爺火碎流堆積物の上位、Km-2が下位) を露頭で確認している。</li> </ul> </li> <li>Km-1及びKm-2については、Marsden et al. (2021)において、(U-Th) /He法を用いた新しい年代測定を報告 (Km-1: 59-79ka, Km-2: <math>96 \pm 5</math> ka) しているが、活動履歴には層序とフィッショントラック法年代測定の結果から、尻別岳の噴火史を明らかにしているGoto et al. (2020) の年代値を採用することとした。</li> <li>尻別火山からの噴出物であることが推定される又は再堆積したテフラに関するAmma-Miyasaka et al. (2020) の知見を、参考として注釈4に付した。</li> <li>第四紀火山カタログ委員会編 (2000) に示された火山体体積を追記した。</li> </ul>
---------------------------	---

## 活動可能性評価 (1/3)

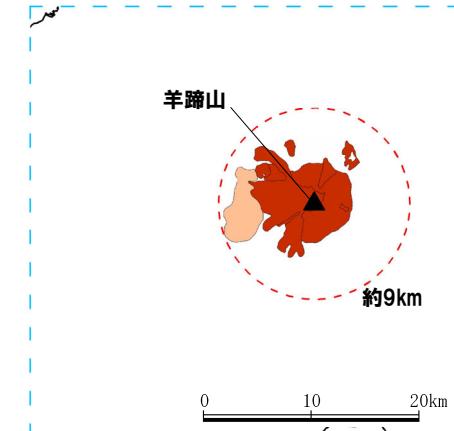
一部修正 (H28/2/5審査会合)

## 羊蹄山の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C24 羊蹄山
敷地からの距離	33.8km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山, 火碎丘, 溶岩ドーム
活動年代 <sup>※2</sup>	10万ないし数万年前以降
評価	約1万年前以降に活動しており, 完新世に活動した火山として抽出する。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編 (2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。



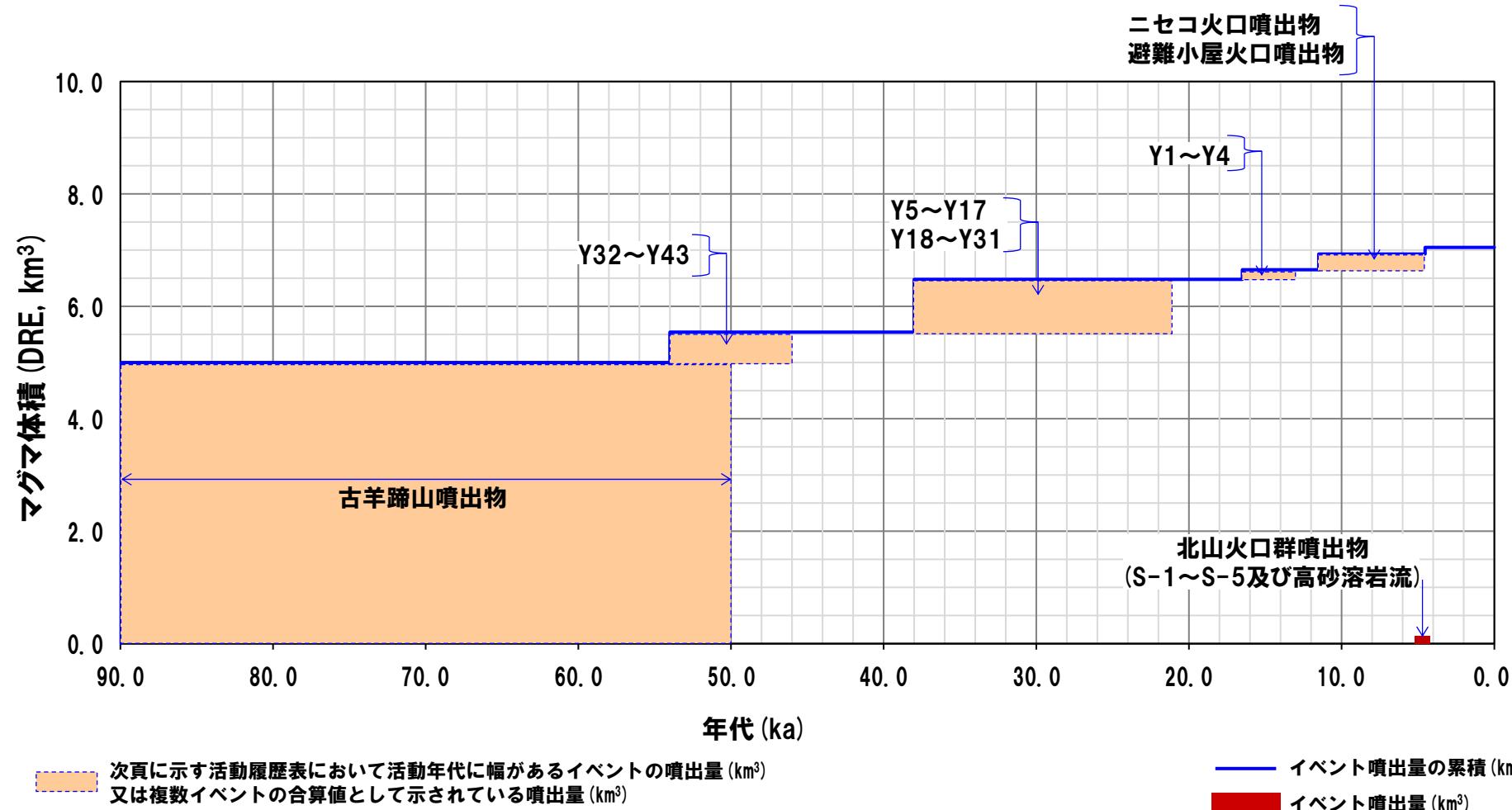
凡 例	
○	: 火山噴出物 (降下火碎物を除く) の最大到達距離
■	: 火山岩 (後期更新世, 中間質)
□	: 岩屑なだれ堆積物 (後期更新世)

羊蹄山  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) より作成)

余白

## 活動可能性評価(2/3)

一部修正(H28/2/5審査会合)



# 羊蹄山(ようていざん)

## 活動可能性評価(3/3)

一部修正(H28/2/5審査会合)

### 羊蹄山活動履歴※3

年代	噴出物名	マグマ体積 (DRE, km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献	R3.10.14審査会合資料 からの活動履歴の変更点	
第四紀	完新世 4,530~4,417 yBP <sup>※4</sup>	北山火口群噴出物 (S-1~S-5(降下火碎物) 及び高砂溶岩流)	0.12 <sup>※5</sup>	第四紀火山カタログ委員会 編(2000) 江草ほか (2003) 上澤ほか (2011) Uesawa et al. (2016)	R3.10.14審査会合資料 からの活動履歴の変更点	○R3.10.14審査会合資料においては、佐藤(1969)、柏原(1970)、佐々 木ほか(1971)、大貫ほか(1977)、江草ほか(2003)、上澤ほか (2011)等に基づき活動履歴を整理していたが、完新世の活動について は、層序を基に噴火史の再検討を実施している上澤ほか(2011)に、更 新世の活動については、43のテフラユニットを層序に基づき検討している Uesawa et al. (2016)にそれぞれ見直した。 ○Amma-Miyasaka et al. (2020)に示されたY1~Y43よりも古い羊蹄火 山由来のテフラ(Y>43a及びY>43b)に関する知見を追記した。 ○羊蹄山の活動可能性評価(完新世に活動した火山との評価)に影響はな いが、より新しい噴出年代が示されている知見である廣瀬ほか(2007) について、注釈3に付した。 ○第四紀火山カタログ委員会編(2000)に示された火山体体積を追記した。
	不明	ニセコ火口噴出物	0.18			
	不明	避難小屋火口噴出物	0.10以上			
	不明	山頂火口噴出物	不明			
	更新世 ステージII-3 ~ ca.16.5 cal.ka BP	Y1~Y4 <sup>※6</sup> (pfa)	0.17			
	ステージII-1~II-2 ca.21cal. ka BP ~ ca.38cal. ka BP	ステージII-2 Y5~Y17 <sup>※6</sup> (pfa,afa) ステージII-1 Y18~Y31 <sup>※6</sup> (pfa)	0.33 0.61			
	ステージI ca.46cal. ka BP ~ ca.54cal. ka BP	Y32~Y43 (pfa,afa,pdc)	0.54			
	>50ka	古羊蹄山噴出物	5			
	ca.75~61ka	Y>43a	不明			
	ca.84~75ka	Y>43b	不明			

※3 羊蹄山の山麓側火口のうち半月湖スコリア丘について、西麓の腐植土中に降下火山灰が認められ、当該降下火山灰層直下から $1,060 \pm 40$ yBP(補正<sup>14</sup>C年代)の放射年代が得られたとする知見(廣瀬ほか, 2007)もある。

※4 S-2降下火山灰中の草木由来と考えられる炭化物の年代。

※5 上澤ほか(2011)に示された噴出物量について、山元(2014)に基づき、DRE換算した値。

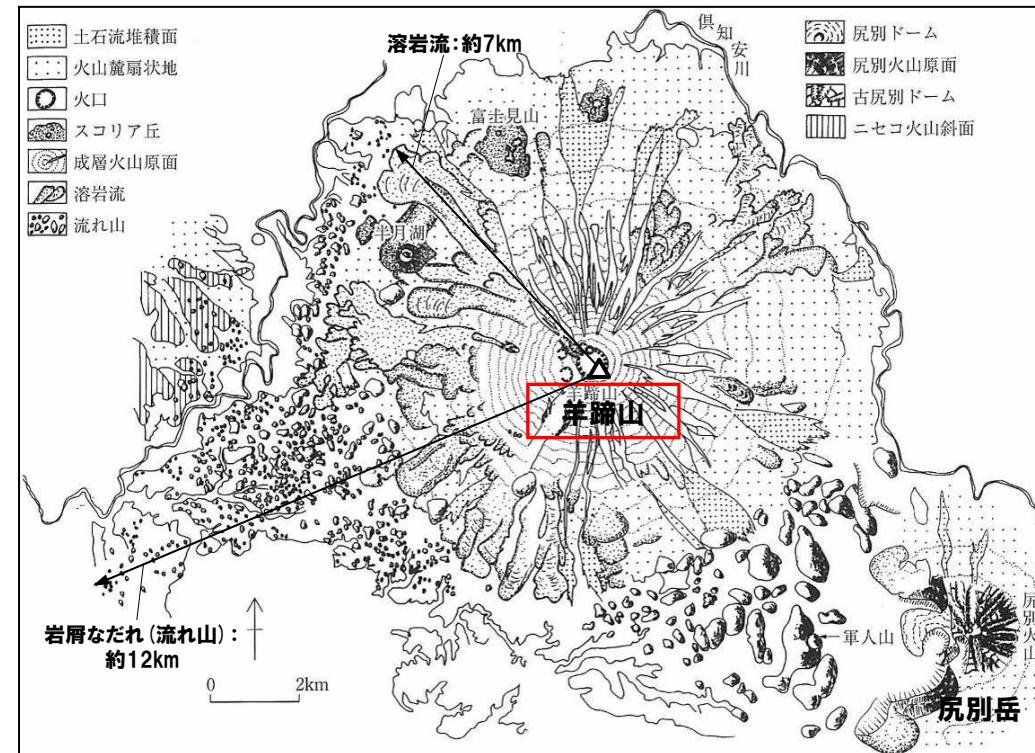
※6 Uesawa et al. (2016)に示される各テフラユニットと大貫ほか(1977)に示される軽石・スコリア層との対応関係は以下のとおり。

Uesawa et al. (2016)	大貫ほか (1977)
Y1	北岡軽石・スコリア層 (K-Ps)
Y11	羊蹄第1軽石・スコリア層 (Yo.Ps-1)
Y16	羊蹄第2軽石・スコリア層 (Yo.Ps-2)
Y25	羊蹄第3軽石・スコリア層 (Yo.Ps-3)

# 羊蹄山(ようていざん)

火山噴出物(降下火碎物を除く)の分布

再掲(R5/7/7審査会合)



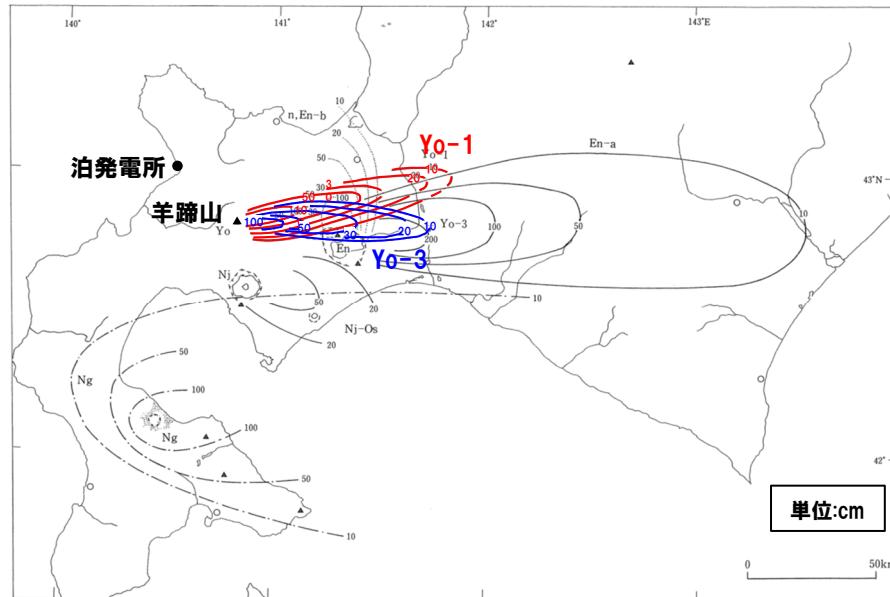
羊蹄山の地形分類図

羊蹄山の火山噴出物(降下火碎物を除く)の分布範囲  
(小疇ほか編(2003)に加筆)

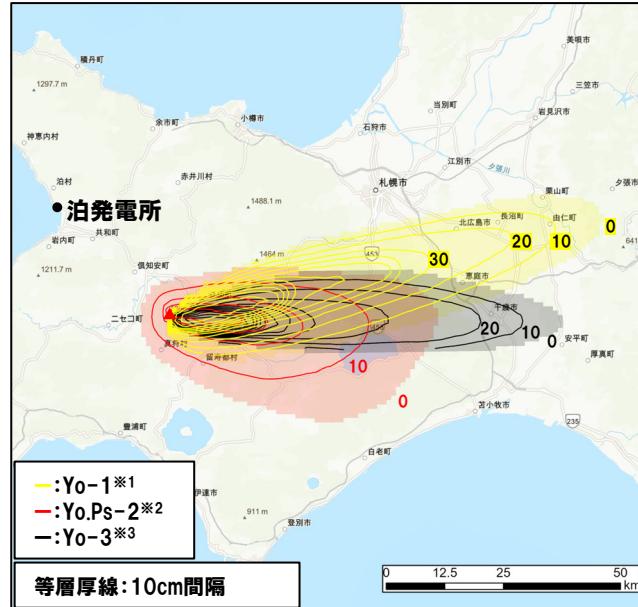
# 羊蹄山(ようていざん)

## 降下火碎物の分布

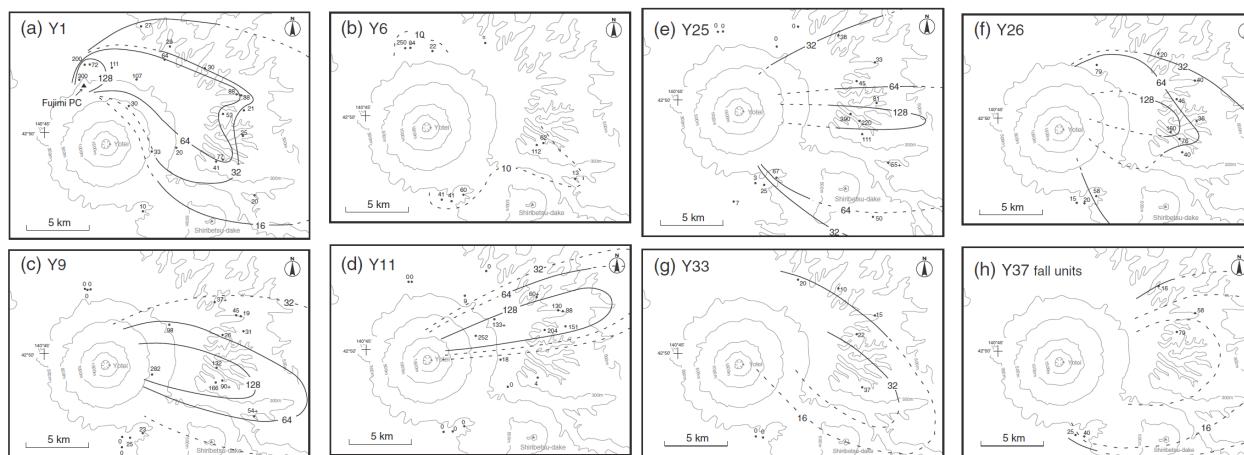
再掲 (R5/7/7審査会合)



Yo-1 (Yo.Ps-1)※1, Yo-3 (Yo.Ps-3)※3 (町田・新井(2011)に加筆)



Yo-1 (Yo.Ps-1)※1, Yo-2 (Yo.Ps-2)※2, Yo-3 (Yo.Ps-3)※3  
(Uesawa (2023)を基に作成)



Y1, Y6, Y9, Y11, Y25, Y26, Y33, Y37 (fall units) (単位はcm)

個別に収集した文献に基づく羊蹄山の降下火碎物の分布範囲 (Uesawa et al., 2016)

※1 活動履歴表 (P77) のY11に対応する。

※2 活動履歴表 (P77) のY16に対応する。

※3 活動履歴表 (P77) のY25に対応する。

羊蹄山の降下火碎物の分布範囲

# ニセコ・雷電(らいでん)火山群

## 活動可能性評価(1/3)

一部修正(H28/2/5審査会合)

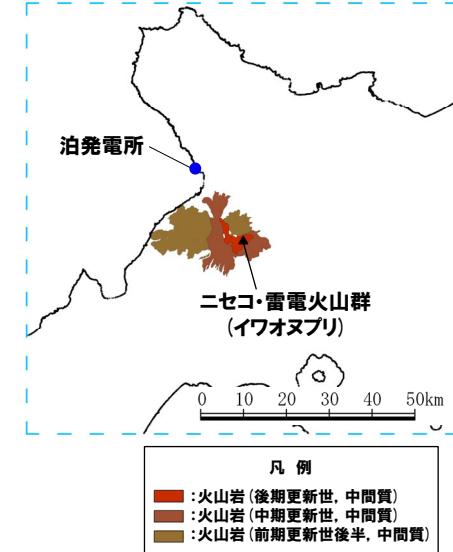
### ニセコ・雷電火山群の概要

火山名※1	C25 ニセコ・雷電火山群
敷地からの距離	19.7km
火山の形式※2	成層火山, 溶岩ドーム
活動年代	<p>(雷電火山群) 岩内岳 目国内岳 雷電山</p> <p>(ニセコ火山群) イワオヌプリ ニトヌプリ チセヌプリ 白樺山 シャクナゲ岳 ニセコアンヌプリ ワイスホルン</p> <p>約160-50万年前※3</p> <p>約150万年前以降※3</p>
評価	約1万年前以降に活動しており、完新世に活動した火山として抽出する。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

※3 P83に示すニセコ・雷電火山群の活動履歴に基づく。



### ニセコ・雷電火山群 (産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)

R3.10.14審査会合資料  
からの活動履歴  
(P83参照)の変更点

- ニセコ・雷電火山群の活動可能性評価(完新世に活動した火山との評価)に影響はないが、より新しい噴出年代が示されている知見である松尾・中川(2017)について、注釈4に付した。
- ニセコ・雷電火山群の活動履歴については、山元(2014)に基づき整理しているが、イワオヌプリの活動開始は、松尾・中川(2017)に示された9.500年前が妥当と考えられる旨を注釈5に付した。
- Oka et al. (2023)において、以下のとおり、個々の溶岩を対象に絶対年代であるK-Ar法及び<sup>40</sup>Ar-<sup>39</sup>Ar法を適用し、ニセコ・雷電火山群の新しい推定活動年代を示しているが、これらの試料が、山元(2014)に示されたニセコ・雷電火山群起源の火山噴出物のどの層位に対比されるものであるかは明確ではないことから、Oka et al. (2023)の知見は活動履歴に採用しないこととした。

山体名	活動年代	山体名	活動年代
ニトヌプリ	0.41±0.34Ma (K-Ar), 0.4±0.4Ma (K-Ar)	岩内岳	0.99±0.28Ma (K-Ar)
チセヌプリ	0.57±0.48Ma (K-Ar), 0.66±0.44 (K-Ar), 167.3±36.2ka ( <sup>40</sup> Ar- <sup>39</sup> Ar)	ワイスホルン	1.48±0.08Ma (K-Ar)
ニセコアンヌプリ	0.18±0.03Ma (K-Ar), 353.5±34.0ka ( <sup>40</sup> Ar- <sup>39</sup> Ar)	モイワ山	0.64±0.04Ma (K-Ar)

モイワ山:P83に示す活動履歴表におけるニセコアンヌプリ噴出物の分布範囲に位置する山体  
ニトヌプリ、チセヌプリ: K-Ar等の年代測定適用には若い年代のため、信頼度は低いとされている。

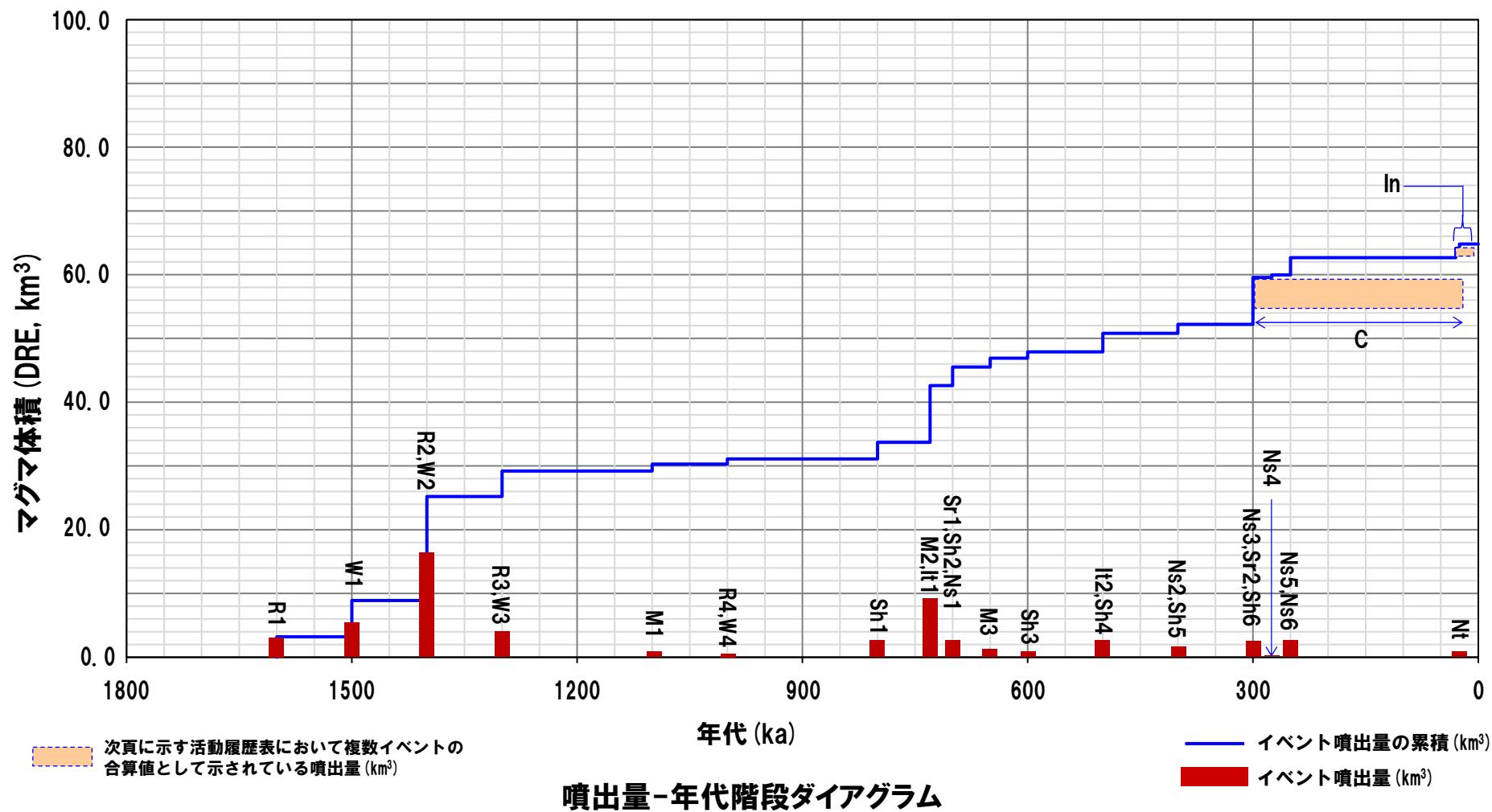
○第四紀火山カタログ委員会編(2000)に示された火山体体積を追記した。

余白

## 活動可能性評価(2/3)

一部修正(H28/2/5審査会合)

- 1.雷電山:R 6.ニセコアンヌプリ:Ns  
 2.ワイスホルン:W 7.シャクナゲ岳:Sh  
 3.目国内岳:M 8.チセヌプリ:C  
 4.岩内岳:It 9.ニトヌプリ:Nt  
 5.白樺山:Sr 10.イワオヌプリ:In



# ニセコ・雷電(らいでん)火山群

## 活動可能性評価(3/3)

一部修正(H28/2/5審査会合)

### ニセコ・雷電火山群活動履歴(イワオヌプリ※4・ニトヌプリ)

年代	噴出物名	マグマ体積(DRE, km <sup>3</sup> )	火山体体積(km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世 6.88ka (完新世～更新世) 不明 (完新世～更新世) 不明 (完新世～更新世) 不明 (完新世～更新世) 不明 更新世 25ka 30ka <sup>※5</sup>	イワオヌプリ:第6期噴出物 イワオヌプリ:第5期噴出物 イワオヌプリ:第4期噴出物 イワオヌプリ:第3期噴出物 イワオヌプリ:第2期噴出物 ニトヌプリ火山噴出物 イワオヌプリ:第1期噴出物	0.22 0.02 0.24 0.40 0.20 0.68 0.40	山元(2014) 第四紀火山 カタログ委員 会編(2000)
	17.1 <sup>※6</sup>			

### ニセコ・雷電火山群活動履歴(チセヌプリ・ニセコアンヌプリ)

年代	噴出物名	マグマ体積(DRE, km <sup>3</sup> )	火山体体積(km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	更新世 不明 20ka 不明 不明 不明 不明 300ka 250ka 250ka 275ka 300ka 400ka 700ka	チセヌプリ:第7期噴出物 チセヌプリ:第6期噴出物 チセヌプリ:第5期噴出物 チセヌプリ:第4期噴出物 チセヌプリ:第3期噴出物 チセヌプリ:第2期噴出物 チセヌプリ:第1期噴出物 ニセコアンヌプリ:第6期噴出物 ニセコアンヌプリ:第5期噴出物 ニセコアンヌプリ:第4期噴出物 ニセコアンヌプリ:第3期噴出物 ニセコアンヌプリ:第2期噴出物 ニセコアンヌプリ:第1期噴出物	(泥流) 0.24 0.50 0.90 1.10 0.90 1.20 1.50 1.20 0.40 1.70 0.70 2.10	山元(2014) 第四紀火山 カタログ委員 会編(2000)
	17.1 <sup>※6</sup>			

### ニセコ・雷電火山群活動履歴(白樺山・シャクナゲ岳)

年代	噴出物名	マグマ体積(DRE, km <sup>3</sup> )	火山体体積(km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	更新世 300ka 300ka 400ka 500ka 600ka 700ka 700ka 800ka	白樺山:第2期噴出物 シャクナゲ岳:第6期噴出物 シャクナゲ岳:第5期噴出物 シャクナゲ岳:第4期噴出物 シャクナゲ岳:第3期噴出物 白樺山:第1期噴出物 シャクナゲ岳:第2期噴出物 シャクナゲ岳:第1期噴出物	0.80 0.02 0.70 0.80 1.00 0.20 0.60 2.60	山元(2014) 第四紀火山 カタログ委員 会編(2000)
	17.1 <sup>※6</sup>			

### ニセコ・雷電火山群活動履歴(岩内岳・目国内岳)

年代	噴出物名	マグマ体積(DRE, km <sup>3</sup> )	火山体体積(km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	更新世 500ka 650ka 730ka 730ka 1,100ka	岩内岳:第2期噴出物 目国内岳:第3期噴出物 岩内岳:第1期噴出物 目国内岳:第2期噴出物 目国内岳:第1期噴出物	2.10 1.40 1.80 7.10 1.10	山元(2014) 第四紀火山カタログ委員会編(2000)
	31.0 <sup>※7</sup>			

### ニセコ・雷電火山群活動履歴(ワイスホルン・雷電山)

年代	噴出物名	マグマ体積(DRE, km <sup>3</sup> )	火山体体積(km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	更新世 1,000ka 1,000ka 1,300ka 1,300ka 1,400ka 1,400ka 1,500ka 1,600ka	ワイスホルン:第4期噴出物 雷電山:第4期噴出物 ワイスホルン:第3期噴出物 雷電山:第3期噴出物 ワイスホルン:第2期噴出物 雷電山:第2期噴出物 ワイスホルン:第1期噴出物 雷電山:第1期噴出物	0.20 0.60 1.10 2.90 0.40 15.9 5.70 3.20	雷電山: 31.0 <sup>※7</sup> ワイスホルン: 5.3
	1,000ka	ワイスホルン:第4期噴出物	0.20	
	1,000ka	雷電山:第4期噴出物	0.60	
	1,300ka	ワイスホルン:第3期噴出物	1.10	
	1,300ka	雷電山:第3期噴出物	2.90	
	1,400ka	ワイスホルン:第2期噴出物	0.40	
	1,400ka	雷電山:第2期噴出物	15.9	
	1,500ka	ワイスホルン:第1期噴出物	5.70	
	1,600ka	雷電山:第1期噴出物	3.20	

※4 イワオヌプリ火山の最後のマグマ噴火は、山頂部から大イワオヌプリ上部溶岩類の流出であるが、水蒸気噴火はその後も発生している可能性が高く、実際に五色温泉近くでの爆発角礫岩層の年代としてmodernという炭素年代測定結果が得られたとある(山元, 2017)。

※5 ニセコ・雷電火山群の活動履歴は、主に、新エネルギー総合開発機構(1986)及び日本地質学会編(2010)を引用し、同火山群の「噴出量-時間階段図」を作成している山元(2014)に基づいているが、イワオヌプリの活動開始については、松尾・中川(2017)に示されたイワオヌプリに関する以下のとおりである。

・被覆関係と噴火様式、噴出中心の違いから、①イワオヌプリ大火口火碎岩類、②小イワオヌプリ溶岩ドーム、③大イワオヌプリ下部溶岩ドーム、④大イワオヌプリ上部溶岩類及び⑤イワオヌプリ水蒸気噴火碎岩類の5つのユニットに区分できる。

・最初の活動である①イワオヌプリ大火口火碎岩類を形成した活動は、まず水蒸気噴火から始まり、その後はマグマ噴火に移行し爆発的噴火により噴煙柱を形成し、その過程で断続的に火碎流が発生した。

・当該火碎流から試料を採取し測定を行った結果、火碎流中の炭化木片からは9480cal.yBPの<sup>14</sup>C年代が得られた。よって、イワオヌプリ火山の活動開始は約9500年前であることが明らかになった。

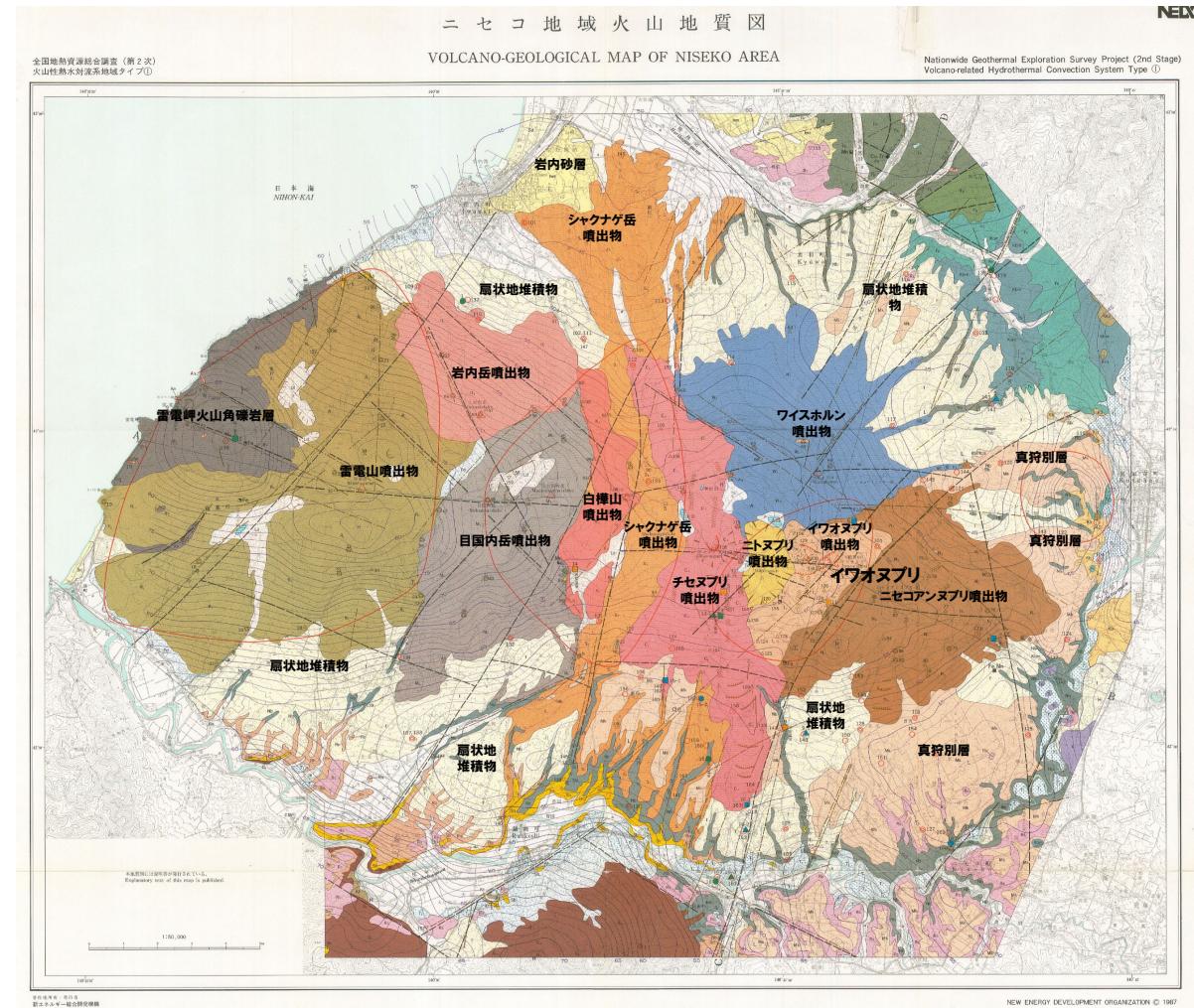
※6 ニセコアンヌプリ、イワオヌプリ、ニトヌプリ、チセヌプリ、シャクナゲ岳及び白樺山を合わせた火山体積。

※7 雷電山、岩内岳及び目国内岳を合わせた火山体積。

# ニセコ・雷電(らいでん)火山群

火山噴出物(降下火碎物を除く)の分布(1/2)

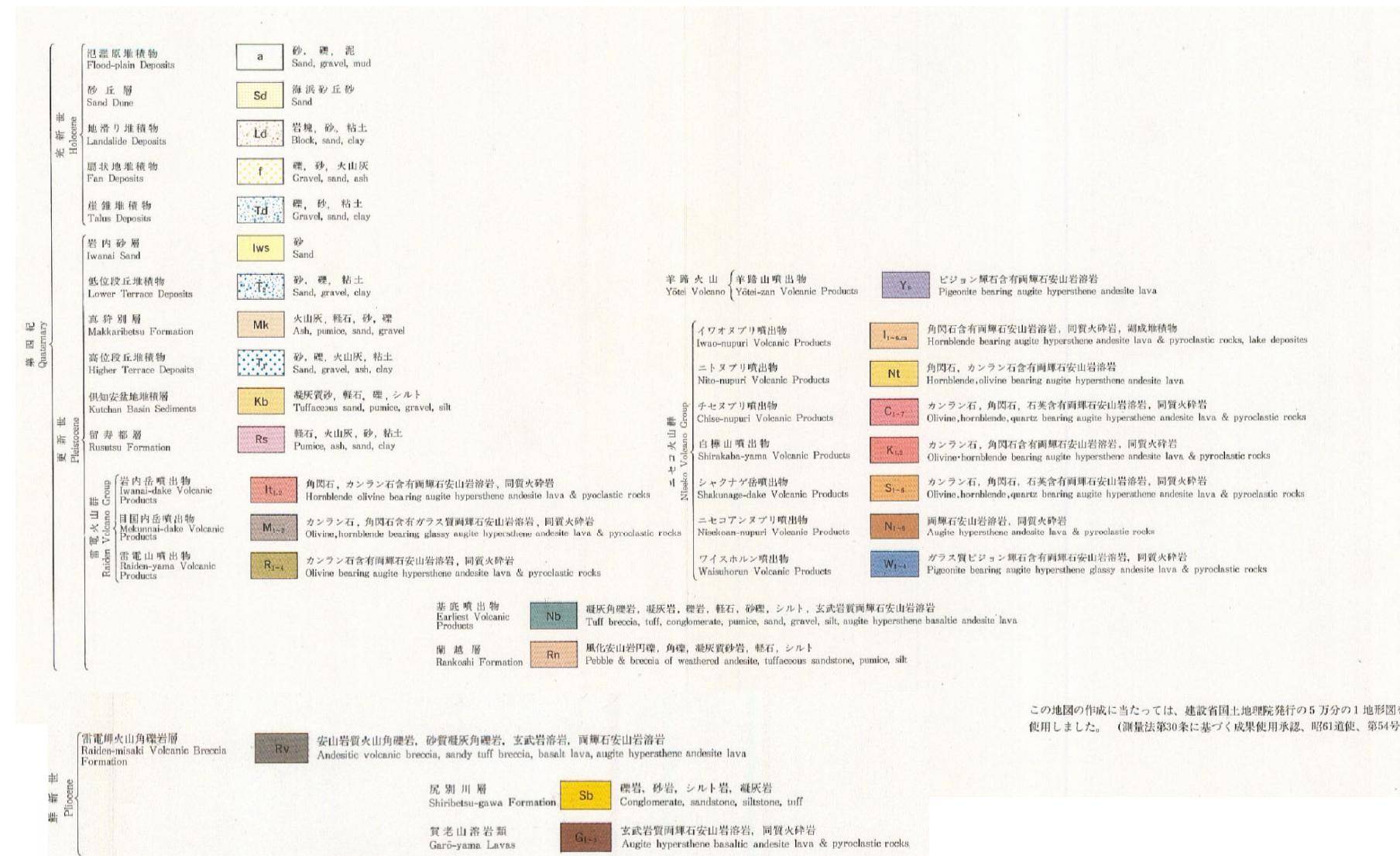
一部修正(R5/7/7審査会合)



ニセコ・雷電火山群の火山噴出物(降下火碎物を除く)の分布範囲  
(新エネルギー総合開発機構(1987a)に加筆, 凡例は次頁参照)

## 火山噴出物(落下火砕物を除く)の分布(2/2)

一部修正 (R5/7/7審査会合)

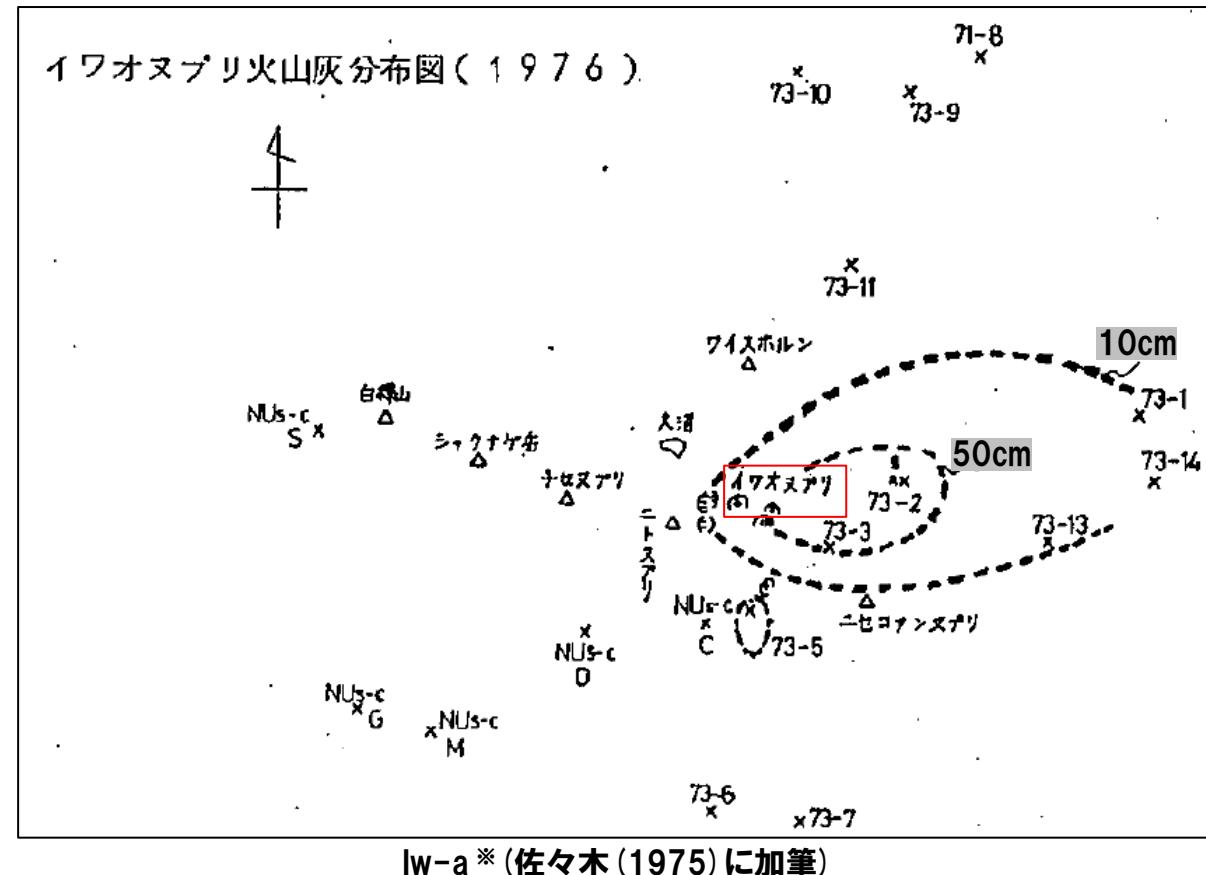


## ニセコ地域火山地質図(凡例)(新エネルギー総合開発機構(1987a)より抜粋)

## ニセコ・雷電(らいでん)火山群

## 降下火碎物の分布

## 再掲 (R5/7/7審査会合)



※活動履歴表(P83)のイワオヌプリ第2期～第6期噴出物のいずれかに対応するものと考えられる。

## 個別に収集した文献に基づくニセコ・雷電火山群の降下火碎物の分布範囲

余白

# 写万部山 (しゃまんべやま)

## 活動可能性評価

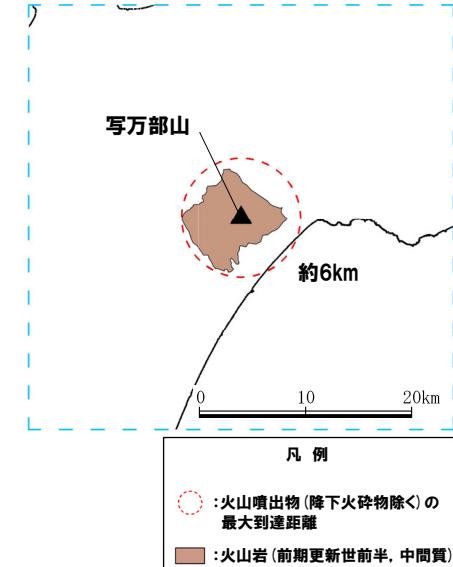
一部修正 (H28/2/5審査会合)

### 写万部山の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C26 写万部山
敷地からの距離	50.5km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山
活動年代 <sup>※1, ※2</sup>	約260-250万年前
評価	全活動期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編 (2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。



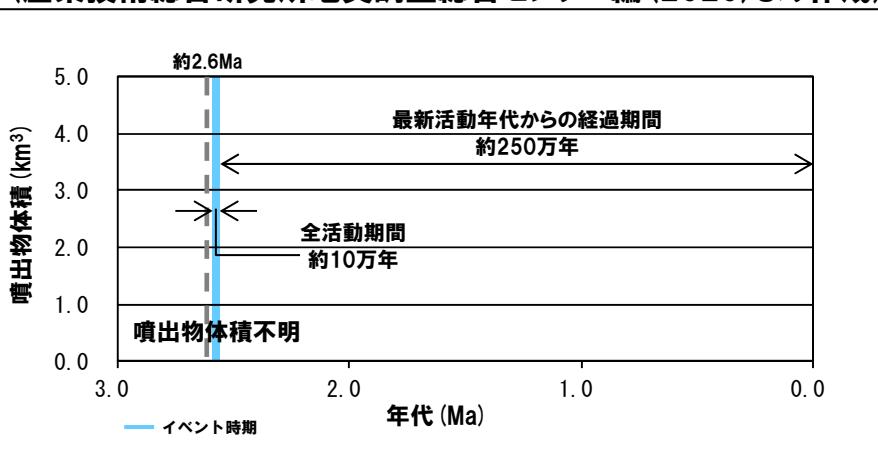
### 写万部山活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀 完新世				久保ほか (1988)
	写万部山火山岩類: 紫蘇輝石 普通輝石安山岩	不明	不明	

R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

○R3.10.14審査会合資料においては、久保ほか (1988) に示されたK-Ar年代値 ( $2.63 \pm 0.15$  Ma及び $2.54 \pm 0.16$  Ma) のうち $2.54 \pm 0.16$  Maを記載していたが、測定対象試料は同一であり、かつ、同文献において、両年代値に基づくK-Ar年代評価として、 $2.59 \pm 0.11$  Maを示していることから、修正を実施した。

### 写万部山 (産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) より作成)



噴出量-年代階段ダイアグラム

## 活動可能性評価

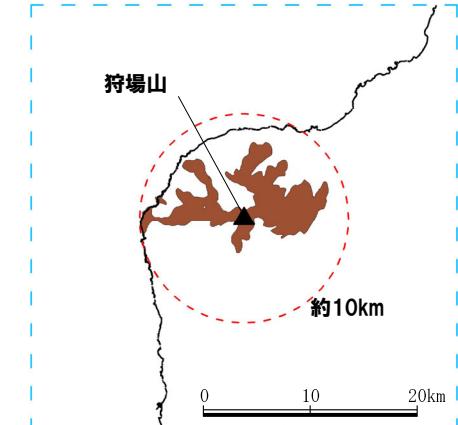
一部修正(H28/2/5審査会合)

## 狩場山の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C27 狩場山
敷地からの距離	66.1km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山
活動年代 <sup>※1, ※2</sup>	約80-25万年前
評価	最大休止期間よりも最新活動年代からの経過期間が短いため、将来の活動可能性が否定できない火山として抽出する。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

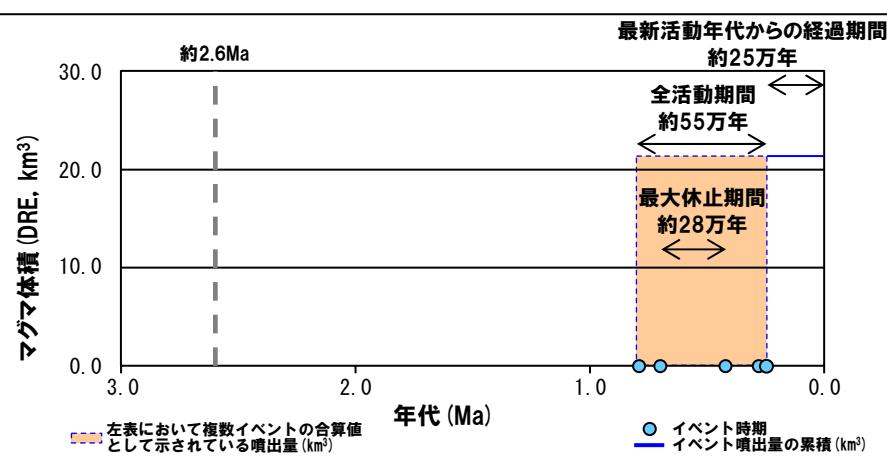


## 狩場山活動履歴

年代	噴出物名	マグマ体積 (DRE, km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献	
第四紀	完新世			Kaneoka et al. (1987) 第四紀火山カタログ委員会編 (2000)	
	更新世 0.252±0.015Ma 0.30±0.02Ma	狩場山溶岩 :石英安山岩	21.4		
	0.42±0.05Ma				
	0.700±0.028Ma 0.79±0.03Ma	穴床前溶岩 :玄武岩 山頂溶岩	21.4		

R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

- R3.10.14審査会合資料においては、第四紀火山カタログ委員会編(1999)に示されたK-Ar法年代値( $0.700\pm 0.028$ Ma及び $0.79\pm 0.03$ Ma)をいずれも穴床前溶岩の年代値として記載していたが、 $0.79\pm 0.03$ Maは、山頂溶岩の年代値であるため、修正を実施した。
- 第四紀火山カタログ委員会編(2000)に示されたマグマ体積及び火山体体積を追記した。

狩場山  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)

噴出量-年代階段ダイアグラム

# カスベ岳 (かすべだけ)

## 活動可能性評価

一部修正 (H28/2/5審査会合)

### カスベ岳の概要

火山名※1	C28 カスベ岳
敷地からの距離	69.4km
火山の形式※1,※2	成層火山
活動年代※1	前期更新世
評価	<p>山岸・黒沢 (1987) によれば、下位より、カスベ岳溶岩、穴床前溶岩 (約70万年前)、狩場山溶岩 (約30万年前) の層位関係であるとされている (穴床前溶岩及び狩場山溶岩については、前頁参照)。</p> <p>産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」において、活動年代は「前期更新世」とされているが、明瞭な活動期間が示されていないことから、十分に長い活動期間は有さないものと考えられる。</p> <p>全活動期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。</p> <p>なお、兼岡・井田編 (1997) によれば、日本のような島弧火山は数十万年程度が平均的な活動期間と考えてよいとされている。</p>

※1 産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編 (2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

### カスベ岳活動履歴

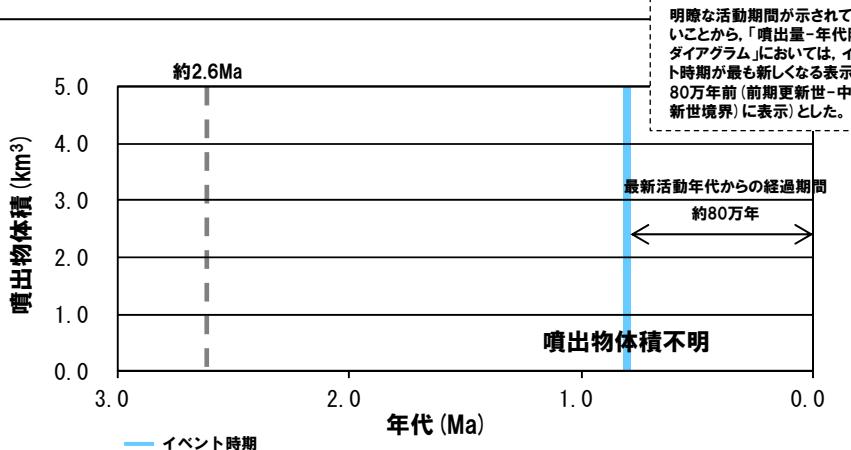
年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			山岸・黒沢 (1987)
	更新世 不明	カスベ岳溶岩 :輝石安山岩	不明	

R3.10.14審査会合資料からの  
活動履歴の変更点

○なし。



カスベ岳  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) より作成)



噴出量-年代階段ダイアグラム

# 勝潤山 (かつまやま)

## 活動可能性評価

一部修正 (H28/2/5審査会合)

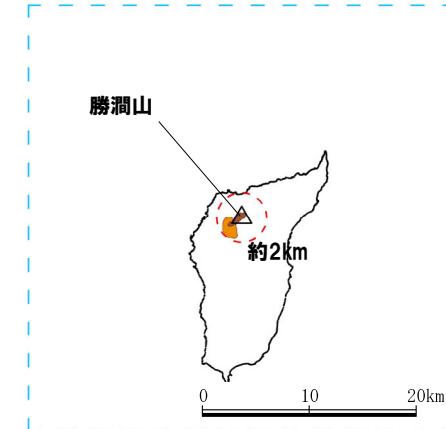
### 勝潤山の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C29 勝潤山
敷地からの距離	126.4km
火山の形式 <sup>※1, ※2</sup>	溶岩ドーム？
活動年代 <sup>※3</sup>	約70-20万年前
評価	最大休止期間よりも最新活動年代からの経過期間が短いため、将来の活動可能性が否定できない火山として抽出する。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編 (2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

※3 下表に示す勝潤山の活動履歴に基づく。



凡例

- : 火山噴出物 (降下火碎物を除く) の最大到達距離
- : 火山岩 (中期更新世, 中間質)
- : 火山岩 (中期更新世, 珪長質)

### 勝潤山活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
完新世				
更新世	不明			
0.20±0.06Ma	流紋岩火山碎屑物 <sup>※4</sup>	0.01		玉生 (1978) 鷹澤 (1992) 新エネルギー総合開発機構 (1994)
0.31±0.09Ma	勝潤山溶岩			第四紀火山カタログ委員会 (2000)
0.71±0.11Ma	勝潤山溶岩	0.1	0.2	鹿野ほか (2006)
不明	勝潤山溶岩			
	流紋岩火山碎屑物	0.5		

※4 鹿野ほか (2006)によれば、当該流紋岩火山碎屑物は、勝潤山溶岩を直接被覆しており、両者の間には、土壤が認められないことから、勝潤山溶岩噴出後まもなく当該流紋岩火山碎屑物を噴出した火碎噴火が起きたことを意味するとされている。

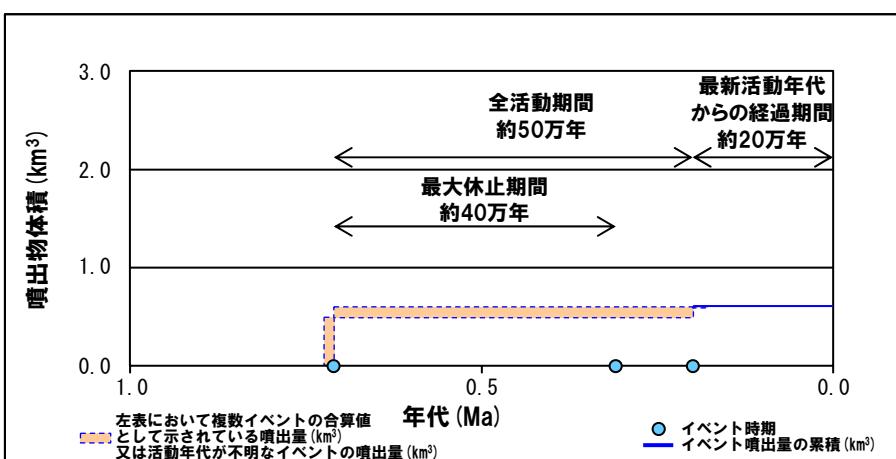
R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

○R3.10.14審査会合資料においては、鹿野ほか (2006) に示された噴出物のうち溶岩のみを記載し、流紋岩火山碎屑物を記載していないことから追記するとともに、溶岩の名称についても、適正に記載できていなかったことから修正を実施した。

○また、噴出物名と噴出物体積の対応関係に誤りがあったことから、修正を実施した。

○第四紀火山カタログ委員会編 (2000) に示された火山体体積を追記した。

勝潤山  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) より作成)



噴出量-年代階段ダイアグラム

## 活動可能性評価

一部修正(H28/2/5審査会合)

## 長磯の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C30 長磯
敷地からの距離	105.7km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山?
活動年代 <sup>※3</sup>	約220-140万年前
評価	最大休止期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

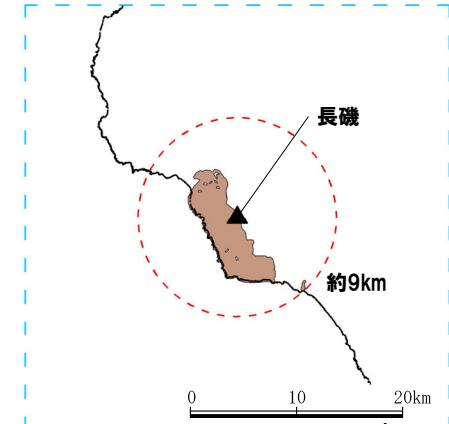
※3 下表に示す長磯の活動履歴に基づく。

## 長磯活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			
	更新世 1.37±0.07Ma 長磯火山岩類 :安山岩			能條ほか (1997) 新エネルギー総合開発機構 (1999) 第四紀火山 カタログ委員会 (2000) 広瀬ほか (2000)
	1.72±0.33Ma 長磯安山岩類 長磯安山岩 :黒雲母含む单斜輝石 斜方輝石角閃石安山岩	不明	0.9	
	1.87±0.13Ma 長磯安山岩 :角閃石安山岩溶岩・ 火山角礫岩			
	2.17±0.08Ma			

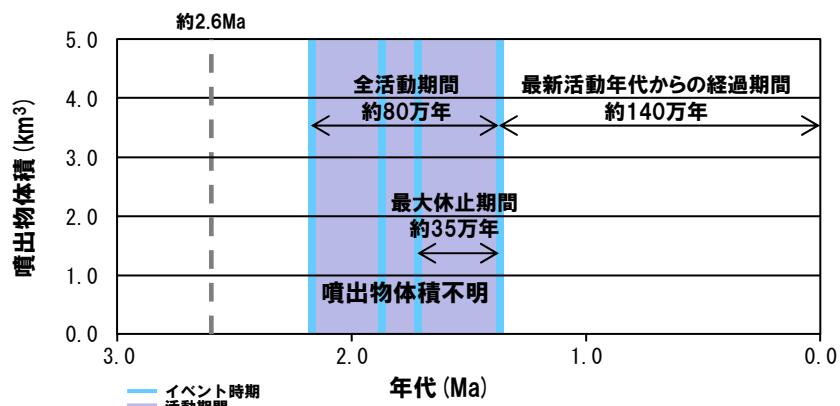
R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

- 能條ほか(1997)に示された長磯火山岩類の知見を追記した。
- R3.10.14審査会合資料においては、新エネルギー総合開発機構(1999)に示された長磯安山岩の知見を記載していたが、同文献に示された長磯安山岩類の知見を反映していなかったことから追記した。
- 第四紀火山カタログ委員会編(2000)に示された火山体体積を追記した。



凡 例

- :火山噴出物(降下火砕物除く)の最大到達距離
- :火山岩(前期更新世前半、中間質)

長磯  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)

噴出量-年代階段ダイアグラム

## 活動可能性評価

一部修正 (H28/2/5審査会合)

## 砂蘭部岳の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C31 砂蘭部岳
敷地からの距離	102.2km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山
活動年代 <sup>※1, ※2</sup>	約180万年前
評価	<p>西来ほか編 (2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」等において、活動年代は約180万年前とされているが、明瞭な活動期間が示されていないことから、十分に長い活動期間は有さないものと考えられる。</p> <p>全活動期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。</p> <p>なお、兼岡・井田編 (1997)によれば、日本のような島弧火山は数十万年程度が平均的な活動期間と考えてよいとされている。</p>

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

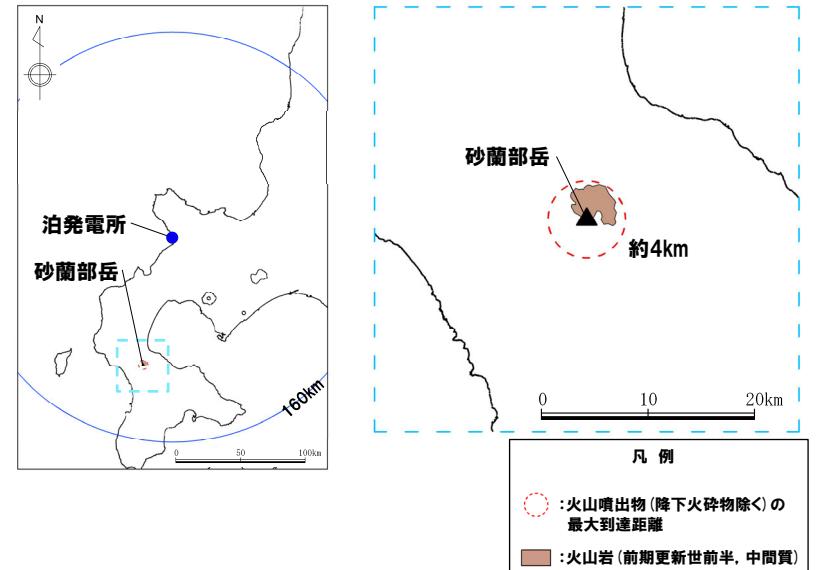
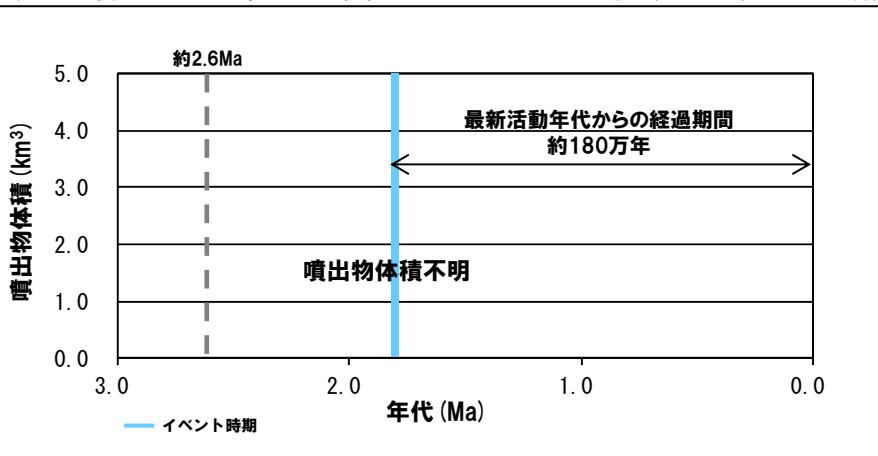
※2 西来ほか編 (2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

## 砂蘭部岳活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			新エネルギー総合開発機構 (1990)
	更新世 1.73±0.09Ma 1.85±0.15Ma	不明	不明	

R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

OR3.10.14審査会合資料においては、新エネルギー総合開発機構 (1990) に示されたK-Ar年代値 (1.73±0.09Ma及び1.85±0.15Ma) に基づき、2つの噴火イベントとして記載していたが、測定対象試料 (両輝石安山岩) が同一であり、新エネルギー総合開発機構 (1990) では、前述の年代値を踏まえ、本岩のK-Ar年代は、1.8Maとされていることから、1つの噴火イベントに修正を実施した。

砂蘭部岳  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) より作成)

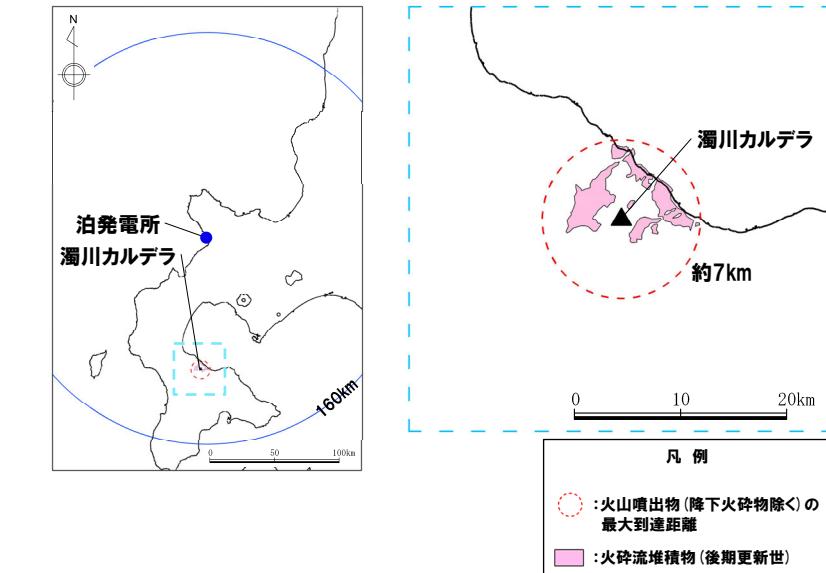
噴出量-年代階段ダイアグラム

## 活動可能性評価(1/2)

一部修正(H28/2/5審査会合)

## 濁川カルデラの概要

火山名 <sup>※1</sup>	C32 濁川カルデラ
敷地からの距離	101.9km
火山の形式 <sup>※1, ※2</sup>	火碎流台地-カルデラ
活動年代 <sup>※3</sup>	約2万-1万3000年前
評価	<p>濁川カルデラについては、以下の理由から、完新世(約11700年前以降)に活動した火山として抽出しない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>金田・長谷川(2022)において、後カルデラ活動期の噴出物であるNg-8は、カルデラを埋める湖成堆積物中のテフラに対比できる可能性があり、同湖成堆積物の最上部から採取した木片の<sup>14</sup>C年代値が12.6~11.3 cal ka BPであることから、この木片が噴火によるものであるならば、後カルデラ活動は完新世にまで及んでいた可能性があるとされている。</li> <li>しかし、現状、可能性の段階であると考えられることに加え、同文献を引用している産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2022)「大規模噴火データベース」の濁川カルデラの噴火史においても、上述の<sup>14</sup>C年代値は取り扱われていない。</li> </ul> <p>濁川カルデラについては、最大休止期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。</p>



濁川カルデラ  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

※3 次頁に示す濁川カルデラの活動履歴に基づく。

## 活動可能性評価(2/2)

一部修正(H28/2/5審査会合)

## 濁川カルデラ活動履歴

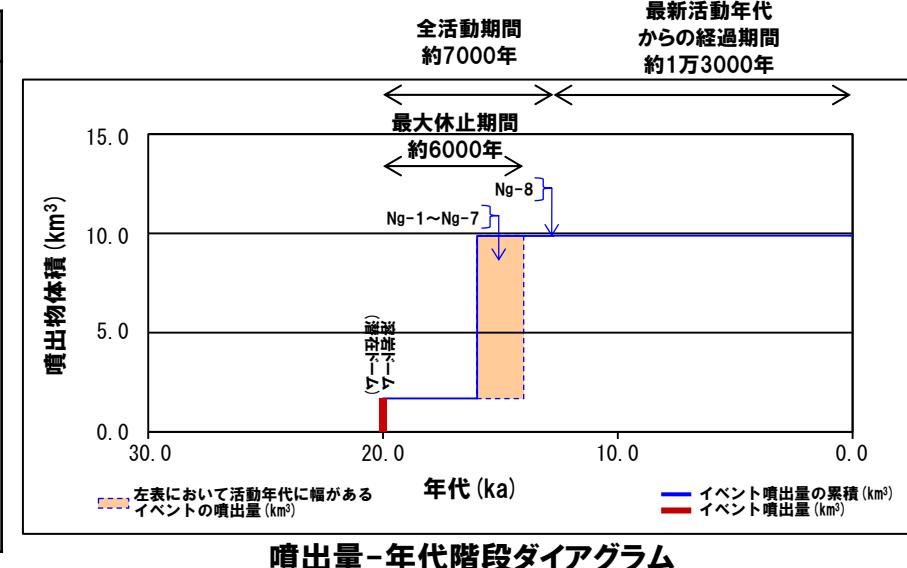
年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			
	更新世 後カルデラ活動期(ステージ2) 12,901~12,750 cal BP <sup>※4</sup>	Ng-8:pyroclastic flow 貫入岩及び溶岩ドーム	0.01以下 不明	
	不明			
	カルデラ形成期(ステージ1) 16~14 cal ka BP <sup>※5</sup>	Ng-7:pyroclastic surge Ng-6c:pyroclastic fall Ng-6b:pyroclastic flow Ng-6a:pyroclastic flow Ng-5:pumice fall Ng-4:pyroclastic flow Ng-3:pumice fall Ng-2:pyroclastic flow Ng-1b:pyroclastic fall/flow Ng-1a:pyroclastic fall	0.07 6.35 0.75 0.25 0.07 0.01 0.02 0.02以下 0.53 0.11	2.5
				第四紀火山カタログ委員会編(2000) 金田・長谷川(2022)
	カルデラ形成期前 約2万年前	溶岩ドーム(あるいは潜在ドーム)	1.7	

※4 Ng-8の下位に位置する土壤の<sup>14</sup>C年代値。

金田・長谷川(2022)によれば、Ng-8は、層厚0.5cmの当該土壤を介在してNg-7の上位に堆積するとされている。

また、同文献によれば、Ng-8は、カルデラを埋める湖成堆積物中のテフラに対比できる可能性があるとされており、同湖成堆積物の最上部から採取した木片の<sup>14</sup>C年代値が12.6~11.3 cal ka BPであることから、この木片が噴火によるものであるならば、後カルデラ活動は完新世にまで及んでいた可能性があるとされている。

※5 金田・長谷川(2022)によれば、カルデラ形成期の噴出物は、一回の噴火からなる降下火碎堆積物、火碎流及び火碎サージ堆積物(Ng-1~Ng-7)で構成されるとされている。

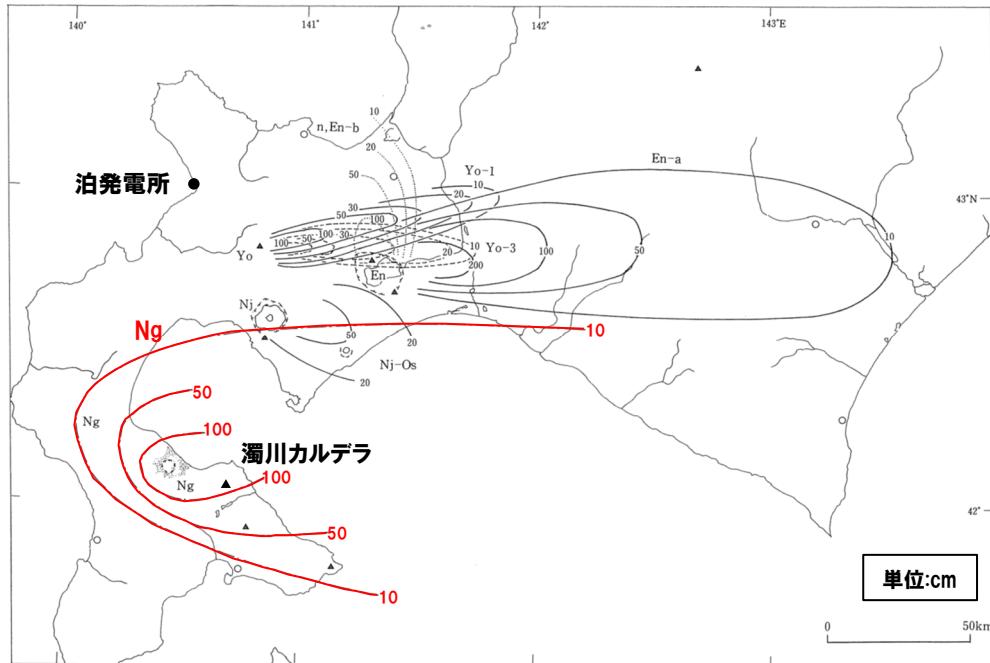


R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

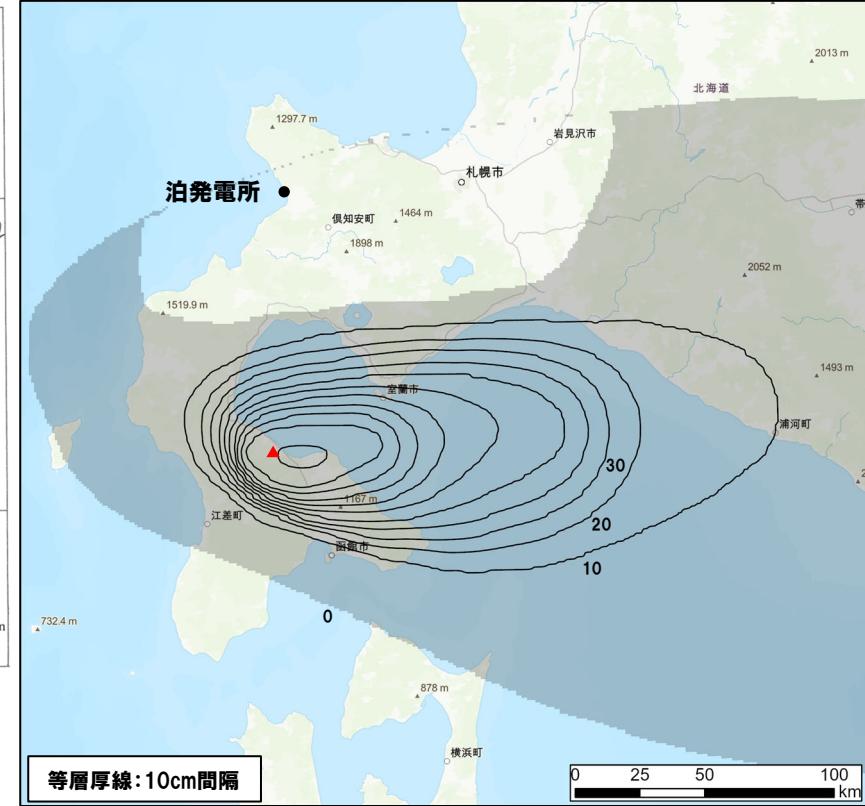
- R3.10.14審査会合資料においては、佐藤(1969)、五十嵐ほか(1978)、柳井ほか(1992)及び黒墨・土井(2003)に基づき活動履歴を整理していたが、層序を基にカルデラ形成期の前後を含む濁川火山全体の噴火活動の変遷を明らかにした金田・長谷川(2022)に基づき見直した。
- 第四紀火山カタログ委員会編(2000)に示された火山体体積を追記した。

## 降下火碎物の分布(1/2)

再掲(R5/7/7審査会合)



Ng<sup>\*</sup>  
(町田・新井(2011)に加筆)



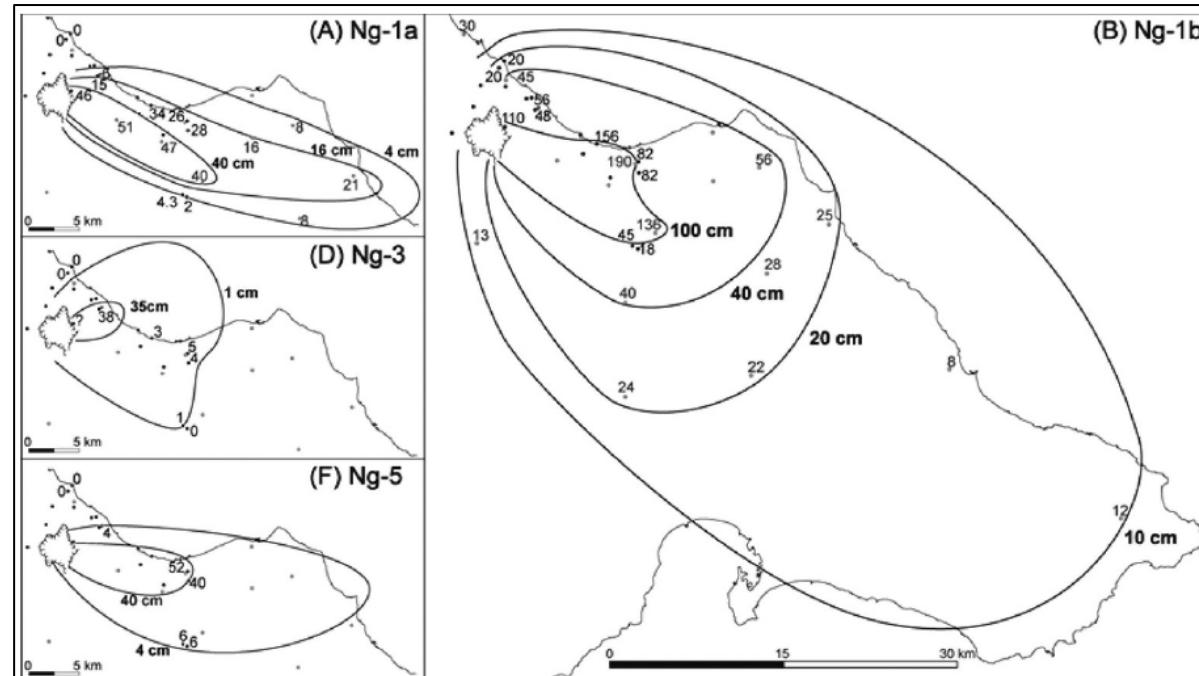
Ng<sup>\*</sup>  
(Uesawa (2023)を基に作成)

\*活動履歴表(前頁)のNg-6cに対応する。

濁川カルデラの降下火碎物の分布範囲

## 降下火碎物の分布(2/2)

再掲(R5/7/7審査会合)



Ng-1a, Ng-1b, Ng-3, Ng-5

個別に収集した文献に基づく濁川カルデラの降下火碎物の分布範囲  
(金田・長谷川, 2022)

# 渡島毛無山 (おしまけなしやま)

## 活動可能性評価

一部修正 (H28/2/5審査会合)

### 渡島毛無山の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C33 渡島毛無山
敷地からの距離	105.3km
火山の形式 <sup>※1, ※2</sup>	溶岩流
活動年代 <sup>※1</sup>	ジェラシアン-カラブリアン (前期更新世前半-前期更新世後半)
評価	<p>産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」において、活動年代は「ジェラシアン-カラブリアン」とされているが、明瞭な活動期間が示されていないことから、十分に長い活動期間は有さないものと考えられる。</p> <p>全活動期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。</p> <p>なお、兼岡・井田編(1997)によれば、日本のような島弧火山は数十万年程度が平均的な活動期間と考えてよいとされている。</p>

※1 産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

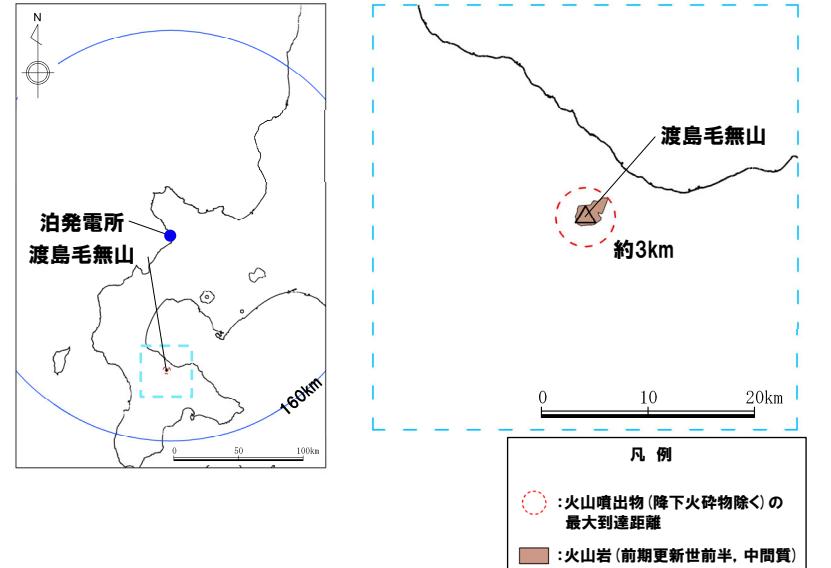
### 渡島毛無山活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			松下ほか(1973)
	更新世 不明	毛無山溶岩 <sup>※3</sup>	不明	

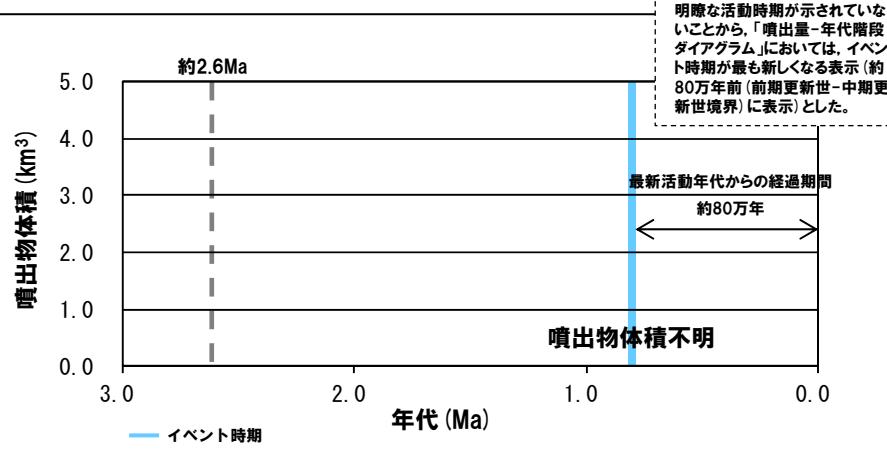
※3 松下ほか(1973)によれば、毛無山溶岩は鮮新世に対比されているが、同文献は、2009年の第四紀境界の変更以前の文献であることから、現在の地質年代では、一部更新世に対比される。

R3.10.14審査会資料からの  
活動履歴の変更点

○なし。



明瞭な活動期間が示されていないことから、「噴出量-年代階段ダイアグラム」においては、イベント時期が最も新しくなる表示（約80万年前（前期更新世-中期更新世境界）に表示）とした。



# 北海道駒ヶ岳 (ほっかいどうこまがたけ)

## 活動可能性評価 (1/3)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

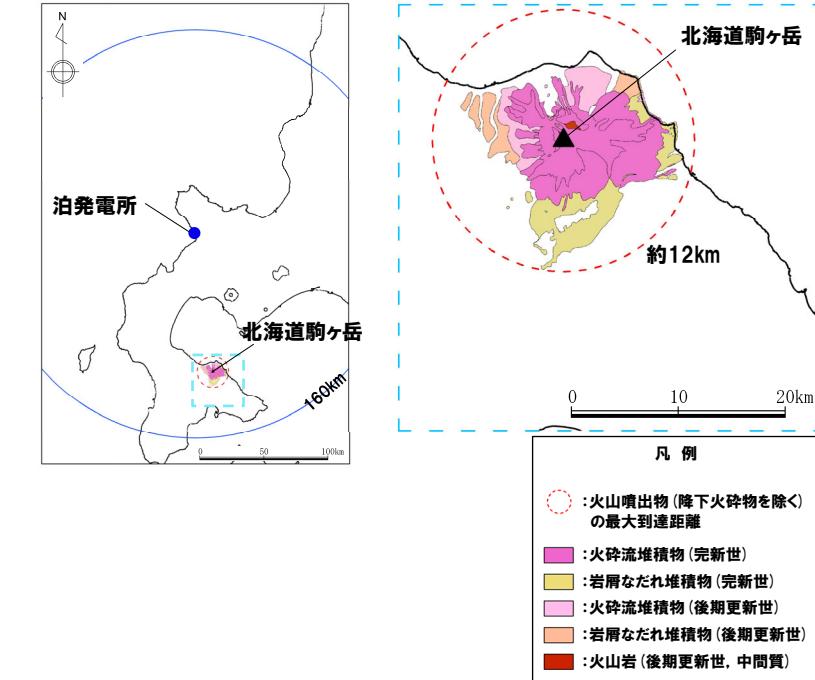
### 北海道駒ヶ岳の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C34 北海道駒ヶ岳
敷地からの距離	109.0km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山
活動年代 <sup>※1, ※3</sup>	約4万年前以前に活動開始
評価	約1万年前以降に活動しており、完新世に活動した火山として抽出する。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

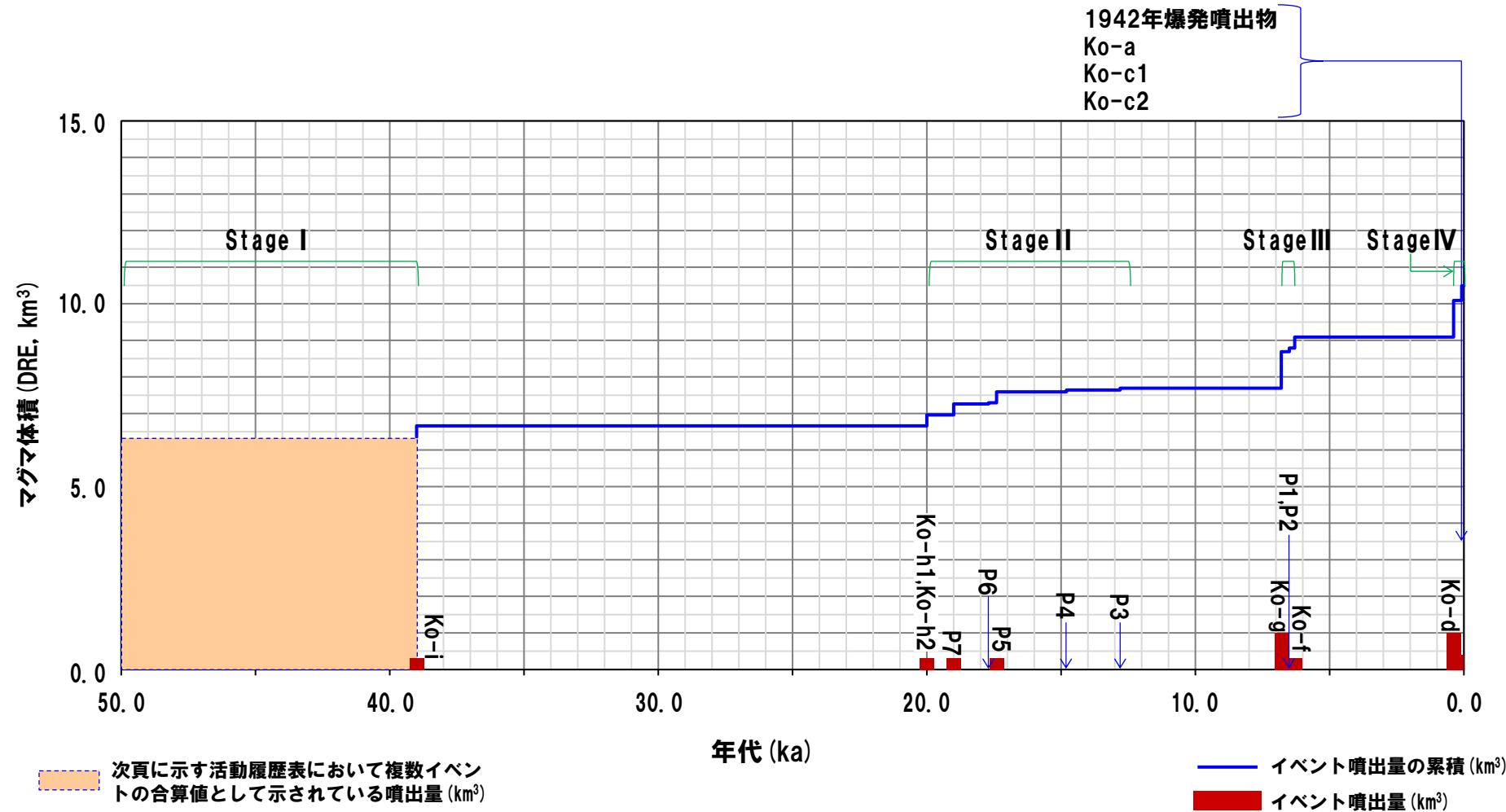
※3 P101に示す北海道駒ヶ岳の活動履歴に基づく。



北海道駒ヶ岳  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) より作成)

## 活動可能性評価 (2/3)

一部修正 (H28/2/5審査会合)



噴出量-年代階段ダイアグラム

# 北海道駒ヶ岳 (ほっかいどうこまがたけ)

## 活動可能性評価 (3/3)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

### 北海道駒ヶ岳活動履歴

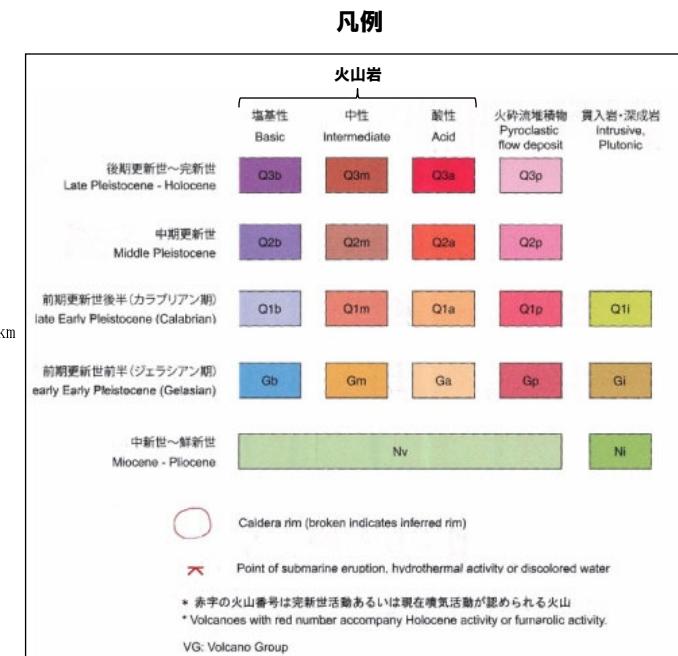
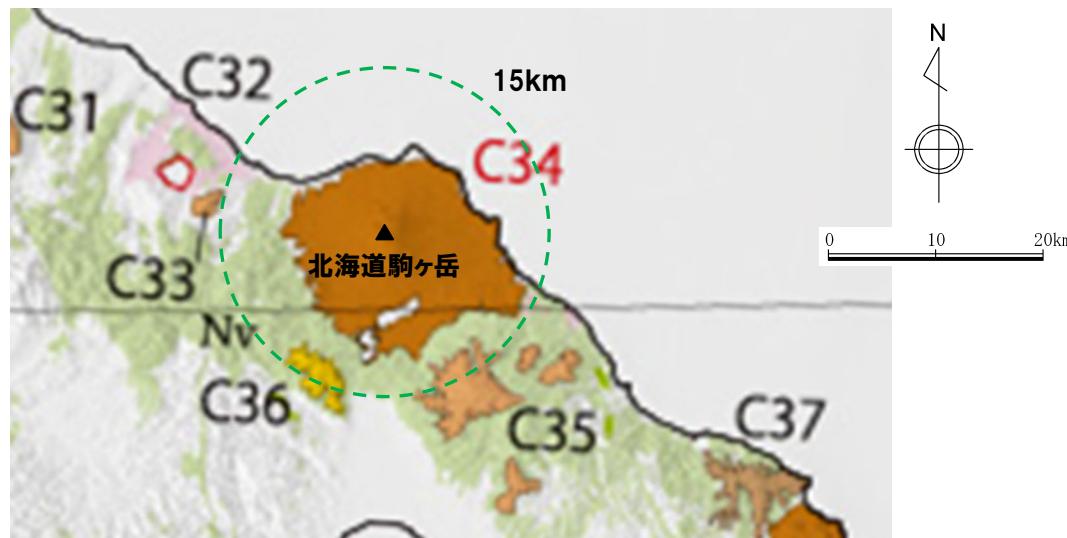
年代	噴出物名	マグマ体積 (DRE, km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
完新世	A.D.2000 2000～2001年噴火	(水蒸気爆発)	13.8	第四紀火山カタログ委員会編 (2000) 山元 (2014)
	A.D.1998 1998年噴火	(水蒸気爆発)		
	A.D.1996 1996年噴火	(水蒸気爆発)		
	A.D.1942 1942年爆発噴出物	0.001		
	A.D.1929 Ko-a	0.2		
	A.D.1856 Ko-c1	0.1		
	A.D.1694 Ko-c2	0.1		
	A.D.1640 クルミ坂岩屑なだれ, Ko-d	1		
	6.3ka Ko-f	0.3		
	6.4ka P1	0.05		
	6.5ka P2	0.05		
	6.8ka Ko-g	1		
更新世	12.8ka P3	0.05		
	14.8ka P4	0.05		
	17.4ka P5	0.3		
	17.7ka P6	0.03		
	19ka P7	0.3		
	20ka Ko-h1, Ko-h2, 駒ヶ岳岩屑なだれ	0.3		
	39ka Ko-i	0.3		
	不明 沼尻岩屑なだれ	不明		
	不明 P8			
	不明 松屋崎岩屑なだれ			
不明 剣ヶ峰溶岩, 駒ヶ岳溶岩, 砂原岳アグルチネート		6.36		

R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

○第四紀火山カタログ委員会編 (2000) に示された火山体体積を追記した。

## 火山噴出物 (落下火砕物を除く) の分布

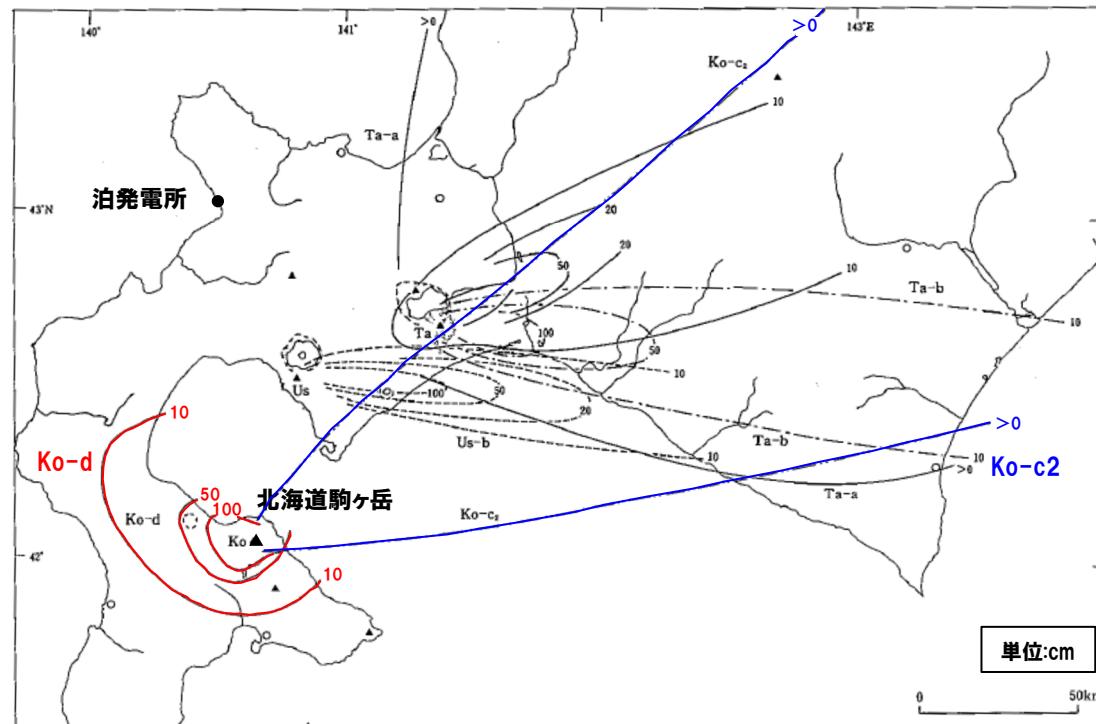
再掲 (R5/7/7審査会合)



北海道駒ヶ岳の火山噴出物 (落下火砕物を除く) の分布範囲  
(中野ほか編 (2013) に加筆)

## 降下火碎物の分布 (1/3)

再掲 (R5/7/7審査会合)



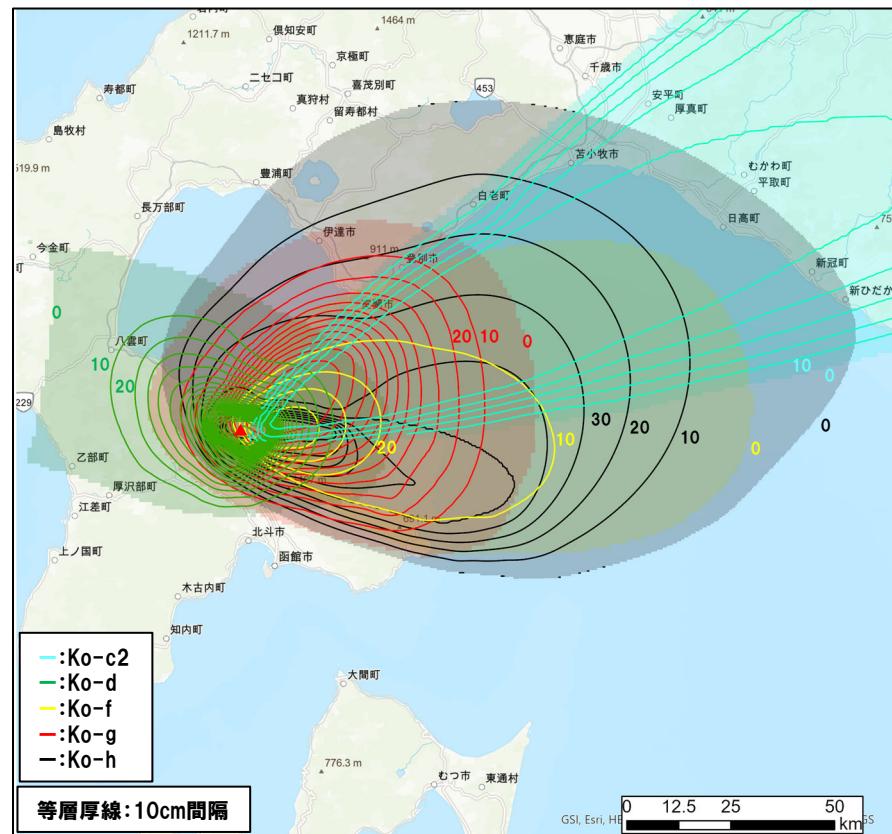
Ko-c2, Ko-d

北海道駒ヶ岳の降下火碎物の分布範囲  
(町田・新井 (2011) に加筆)

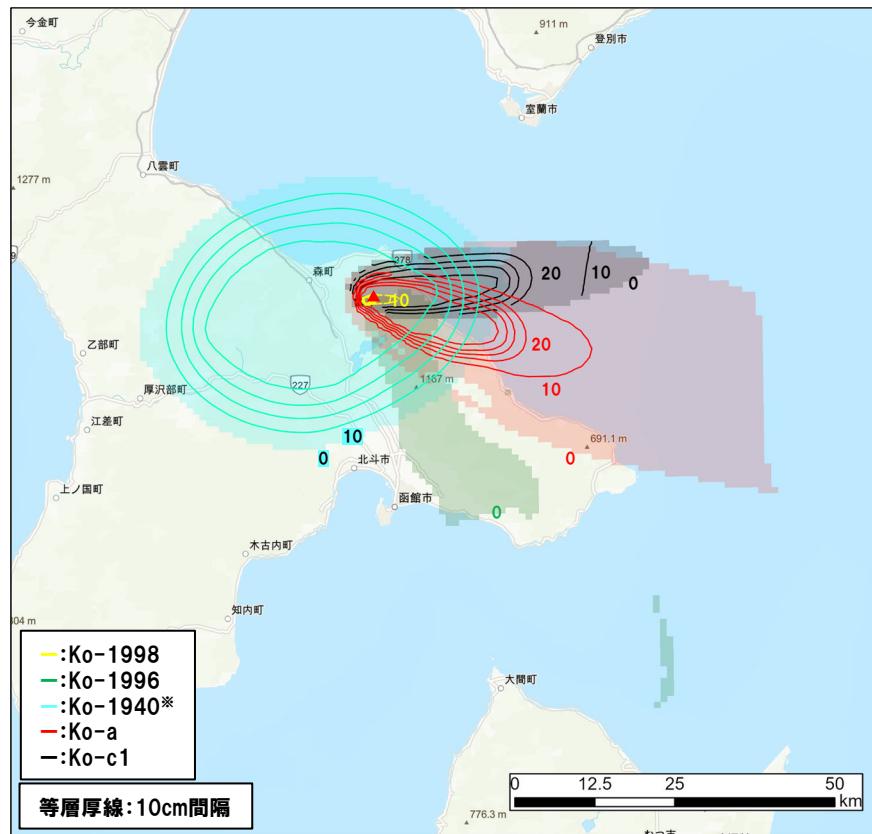
# 北海道駒ヶ岳 (ほっかいどうこまがたけ)

## 降下火碎物の分布 (2/3)

再掲(R5/7/7審査会合)



Ko-c2, Ko-d, Ko-f, Ko-g, Ko-h



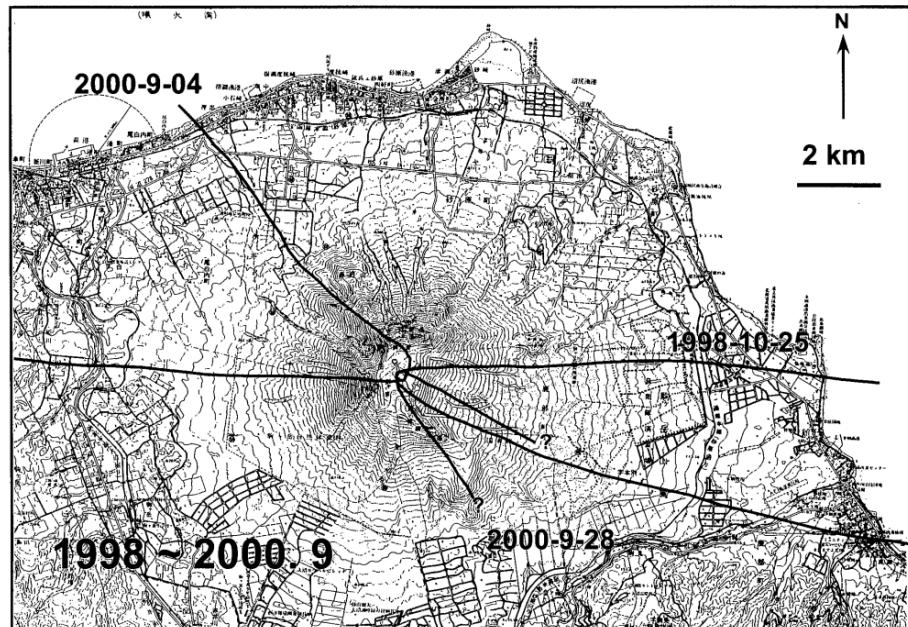
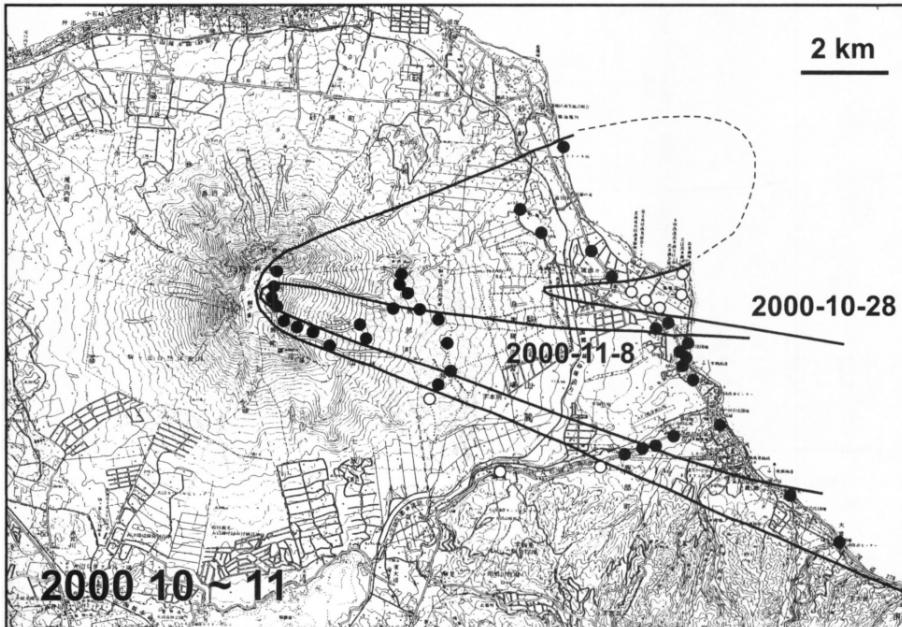
1998年噴火, 1996年噴火, 1940年噴火\*, Ko-a, Ko-c1

※活動履歴表(P101)の1942年爆発噴出物に対応する。

## 北海道駒ヶ岳の降下火碎物の分布範囲 (Uesawa (2023) を基に作成)

## 降下火碎物の分布 (3/3)

再掲 (R5/7/7審査会合)

1998.10.25噴火<sup>※1</sup>, 2000.9.4噴火<sup>※2</sup>, 2000.9.28噴火<sup>※2</sup>2000.10.28噴火<sup>※2</sup>, 2000.11.8噴火<sup>※2</sup>

※1 活動履歴表 (P101) の1998年噴火に対応する。  
 ※2 活動履歴表 (P101) の2000～2001年噴火に対応する。

個別に収集した文献に基づく北海道駒ヶ岳の降下火碎物の分布範囲  
 (中川ほか, 2001)

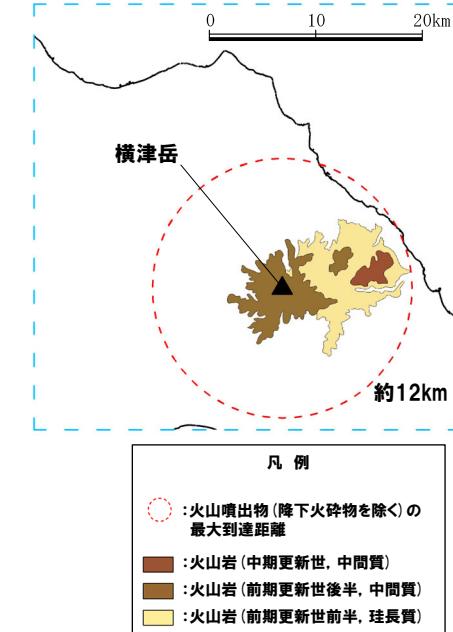
# 横津岳 (よこつだけ)

## 活動可能性評価 (1/2)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

### 横津岳の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C35 横津岳
敷地からの距離	123.7km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山
活動年代 <sup>※3</sup>	約170-14万年前
評価	<p>高田・中川 (2016)において、横津岳の活動年代は大きく3つのグループに分けられ、活動年代が最も古いグループ1 (1.05~1.71 Ma) については、1.7 Maの時期と1.1 Maの時期に細分できるかもしれないとしているが、現状、可能性の段階であると考えられることを踏まえ、最大休止期間は、グループ2の0.78 Maとグループ1の1.71 Maの差分である約93万年とした。</p> <p>最大休止期間よりも最新活動年代からの経過期間が短いため、将来の活動可能性が否定できない火山として抽出する。</p>



※1 産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編 (2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

※3 次頁に示す横津岳の活動履歴に基づく。

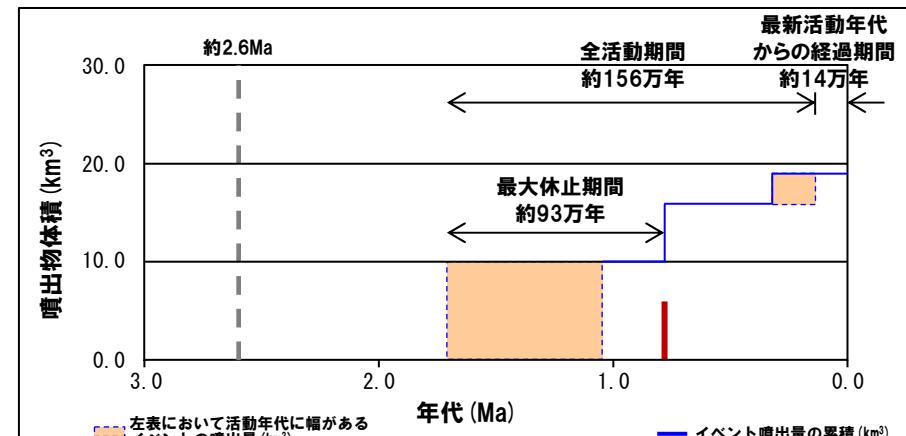
横津岳  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) より作成)

## 活動可能性評価 (2/2)

一部修正 (H28/2/5審査会合)

横津岳活動履歴				
年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			新エネルギー総合開発機構 (1988) 第四紀火山カタログ委員会 (2000) 高田・中川 (2016)
	更新世 0.14±0.04Ma	(グループ3) 熊泊山北部, 泣面山	3以上	
	0.24~0.32Ma			
	0.78Ma	(グループ2) 横津岳	6以上	
	1.05~1.71Ma	(グループ1 <sup>※4</sup> ) 七飯岳, 鳴川岳, 袴腰岳など	10以上	

※4 高田・中川 (2016)によれば、グループ1は、1.7Maの時期と1.1Maの時期の2つに細分できるかもしれないとしている。



噴出量-年代階段ダイアグラム

R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

○R3.10.14審査会合資料においては、新エネルギー総合開発機構 (1988)、中川ほか (未発表)、匯澤 (1992) 等に基づき活動履歴を整理していたが、地表踏査等を行った上で、横津火山群における活動様式とマグマ化学組成の時間変遷についてとりまとめた高田・中川 (2016)に基づき見直した。  
○第四紀火山カタログ委員会編 (2000) に示された火山体体積を追記した。

# 木地挽山 (きじびきやま)

## 活動可能性評価

一部修正 (H28/2/5審査会合)

### 木地挽山の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C36 木地挽山
敷地からの距離	120.6km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山
活動年代 <sup>※1, ※2</sup>	約190万年前以降
評価	<p>産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」等において、活動年代は約190万年前以降とされているが、明瞭な活動期間が示されていないことから、十分に長い活動期間は有さないものと考えられる。</p> <p>全活動期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。</p> <p>なお、兼岡・井田編(1997)によれば、日本のような島弧火山は数十万年程度が平均的な活動期間と考えてよいとされている。</p>

※1 産業技術総合研究所「日本の火山 (DB)」2024年7月確認。

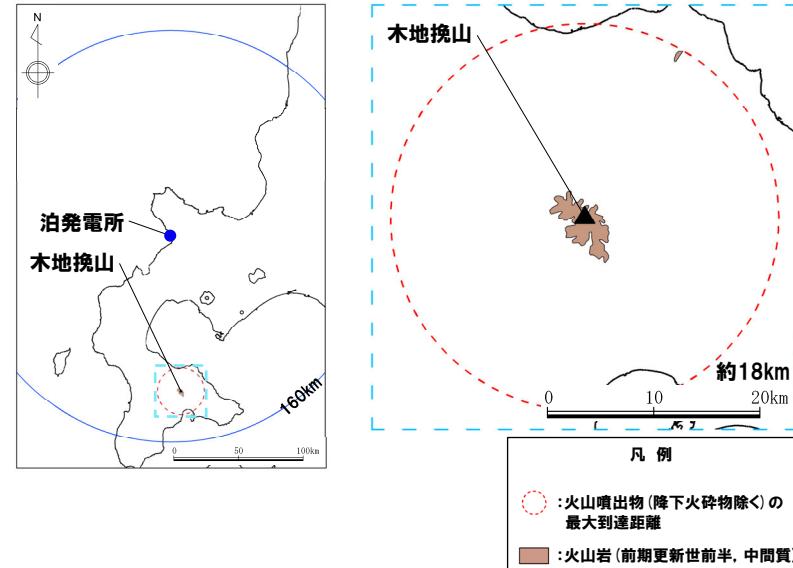
※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

### 木地挽山活動履歴

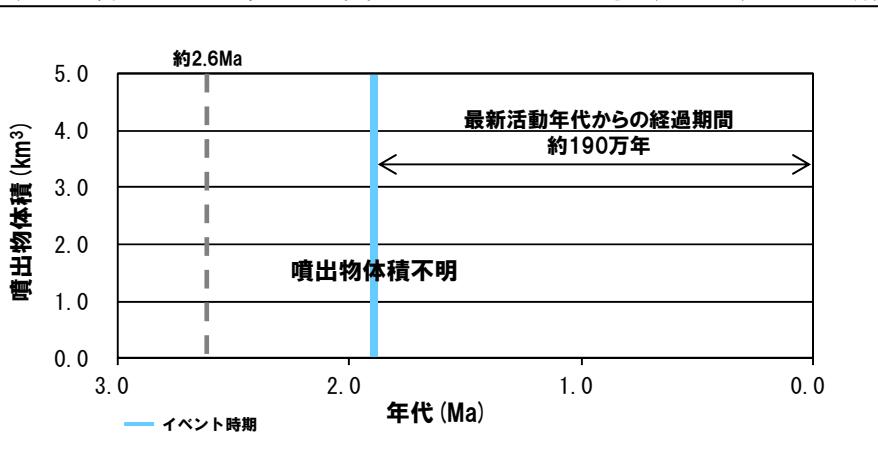
年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			三谷ほか(1966) 第四紀火山カタログ 委員会編(2000)
	1.93±0.10Ma 木地挽山溶岩 :両輝石安山岩	不明	2.0	

R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

○第四紀火山カタログ委員会編(2000)に示された火山体体積を追記した。



木地挽山  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)



噴出量-年代階段ダイアグラム

## 活動可能性評価

一部修正(H28/2/5審査会合)

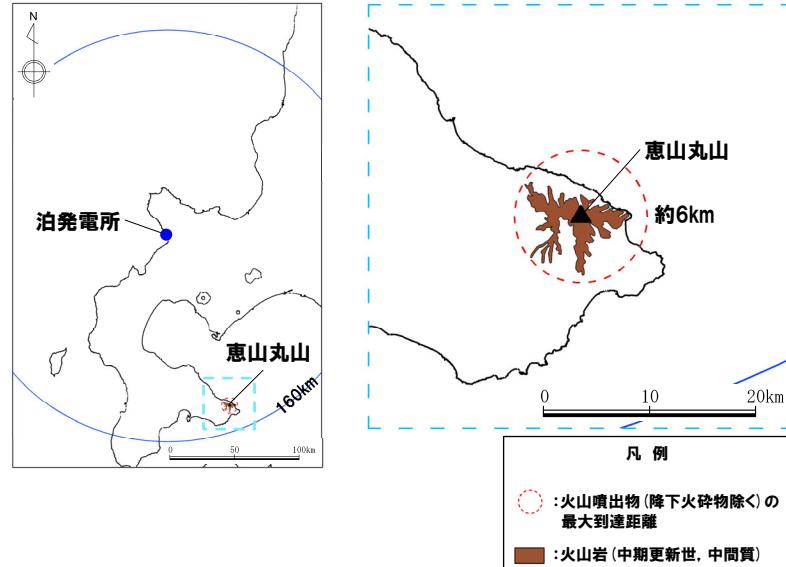
## 恵山丸山の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C37 恵山丸山
敷地からの距離	139.9km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山
活動年代 <sup>※1,※2</sup>	約20万年前
評価	<p>産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」等において、活動年代は約20万年前とされているが、明瞭な活動期間が示されていないことから、十分に長い活動期間は有さないものと考えられる。</p> <p>全活動期間<sup>※3</sup>よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。</p>

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

※3 第四紀火山カタログ委員会編(2000)において示されている年代範囲も、「0.21Ma」とされている。

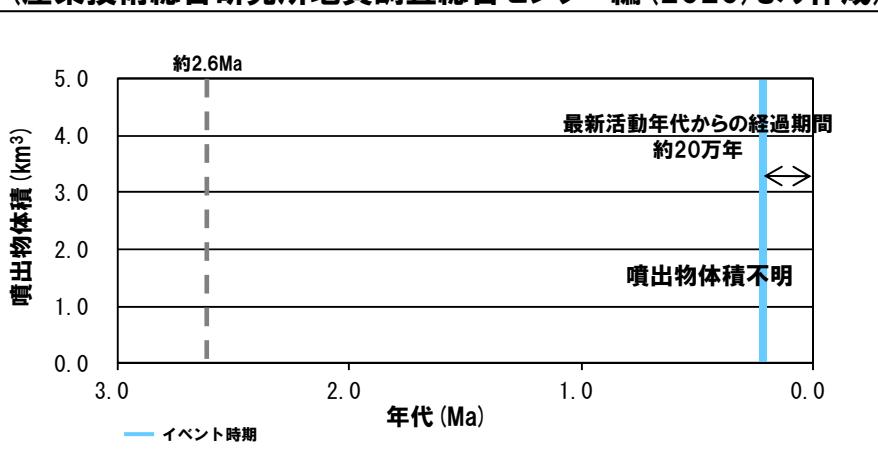


## 恵山丸山活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			藤原・国府谷 (1969) 第四紀火山カタログ委員会編 (2000)
	更新世 0.21±0.06Ma 丸山火山噴出物: ガラス質含石英 普通輝石しづ輝石安山岩	不明	1.5	

R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

○第四紀火山カタログ委員会編(2000)に示された火山体体積を追記した。

恵山丸山  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)

噴出量-年代階段ダイアグラム

## 活動可能性評価(1/2)

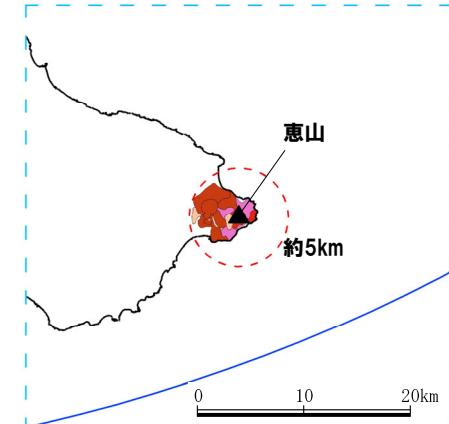
一部修正(H28/2/5審査会合)

## 恵山の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C38 恵山
敷地からの距離	146.9km
火山の形式 <sup>※1, ※2</sup>	溶岩ドーム
活動年代 <sup>※1, ※2</sup>	約5万年前以降
評価	約1万年前以降に活動しており、完新世に活動した火山として抽出する。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。



凡 例	
○	:火山噴出物(降下火砕物を除く)の最大到達距離
■	:火山岩(完新世, 珪長質)
■	:火砕流堆積物(完新世)
■	:火山岩(後期更新世, 中間質)
■	:岩屑なだれ堆積物(後期更新世)

恵山  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)

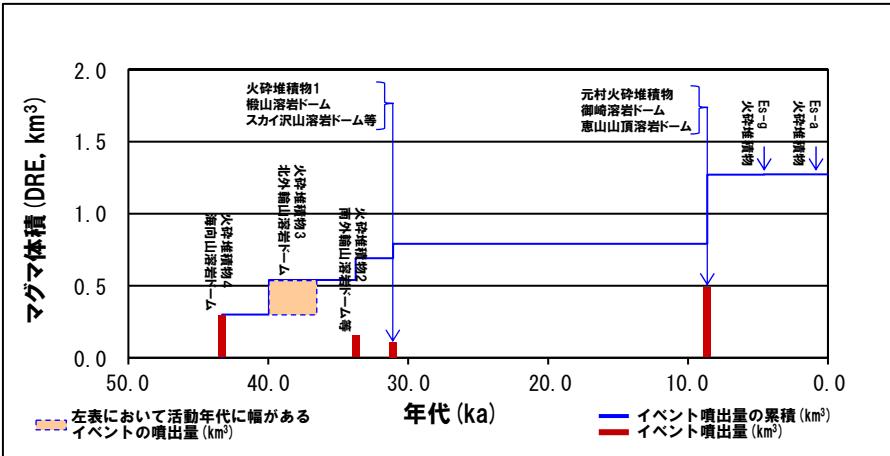
# 恵山 (えさん)

## 活動可能性評価 (2/2)

一部修正(H28/2/5審査会合)

## 惠山活動履歷

年代	噴出物名	マグマ体積 (DRE, km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			
	A.D.1874	Es-1874火碎堆積物	(水蒸気噴火)	
	A.D.1846	Es-1846火碎堆積物	(水蒸気噴火)	
	920~800cal yBP <sup>※3</sup>	Es-a火碎堆積物	0.0001	
	約1,100年前 <sup>※4</sup>	Es-b火碎堆積物	不明	
	2,680~2,350cal yBP <sup>※3</sup>	Es-c火碎堆積物	不明	
	2,920~2,780cal yBP <sup>※3</sup>	Es-d火碎堆積物	不明	
	3,210~3,010cal yBP <sup>※3</sup>	Es-e火碎堆積物	不明	
	3,840~3,700cal yBP <sup>※3</sup>	Es-f火碎堆積物	不明	
	4,570~4,420cal yBP <sup>※3</sup>	Es-g火碎堆積物	0.002	
	不明	Es-h火碎堆積物	不明	
	不明	Es-i火碎堆積物	不明	
	5,650~5,590cal yBP <sup>※3</sup>	Es-j火碎堆積物	不明	
	不明 <sup>※5</sup>	Es-k火碎堆積物	不明	
	不明	Es-l火碎堆積物	不明	
	8,620±30cal yBP	元村火碎堆積物 (EsMP), 御崎溶岩ドーム, 恵山山頂溶岩ドーム	0.48	1.3
	11,610 ~11,260cal yBP <sup>※3</sup>	Es-m火碎堆積物	不明	第四紀 山カタログ 委員会編 (2000) 山元 (2014) 三浦ほか (2022)
更新世	火碎堆積物1 (EsHD1), 椴山溶岩ドーム,スカイ沢 山溶岩ドーム等	0.10		
	31,080±100cal yBP			
	火碎堆積物2 (EsHD2) <sup>※6</sup> , 南外輪山溶岩ドーム等	0.15		
	33,740±350cal yBP			
	火碎堆積物3 (EsHD3), 北外輪山溶岩ドーム	0.24		
全新世	火碎堆積物4 (EsHD4), 海向山溶岩ドーム	0.30		
	Es-P1pfl,Es-P2pfl	不明		



### 噴出量-年代階段ダイアグラム

※3 三浦ほか(2022)に示される本噴出物直下の古土壤から得られた<sup>14</sup>C年代値。

※4 三浦ほか(2022)によれば、Es-b火碎堆積物は、厚さ2cmの黒色古土壤を挟んで白頭山一苦小牧火山灰(B-Tm)に覆われることから、約1,100年前頃に噴出したものと考えられるとしている。

※5 三浦ほか(2022)によれば、Es-k火碎堆積物は、厚さ10~15cmの黒色古土壤を挟んで、北海道駒ヶ岳f降下火碎堆積物(Ko-f:約6千3百年前、P101参照)を覆うものとされている。

※6 三浦ほか(2022)によれば、火碎堆積物2(EsHD2)のうち、降下火山灰の上部については、北海道駒ヶ岳降下火碎堆積物(Ko-i; 約3万9千年前、P101参照)に対比される可能性があるとされている。

### R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

- R3.10.14審査会合資料においては、山元（2014）に基づき活動履歴を整理していたが、層序を基に恵山の噴火活動史を体系的にとりまとめている三浦ほか（2022）「恵山火山地質図」に基づき見直した。

○三浦ほか(2022)に示される各火碎堆積物と山元(2014)に示されるEs-1～Es-6との対応関係は以下のとおり。

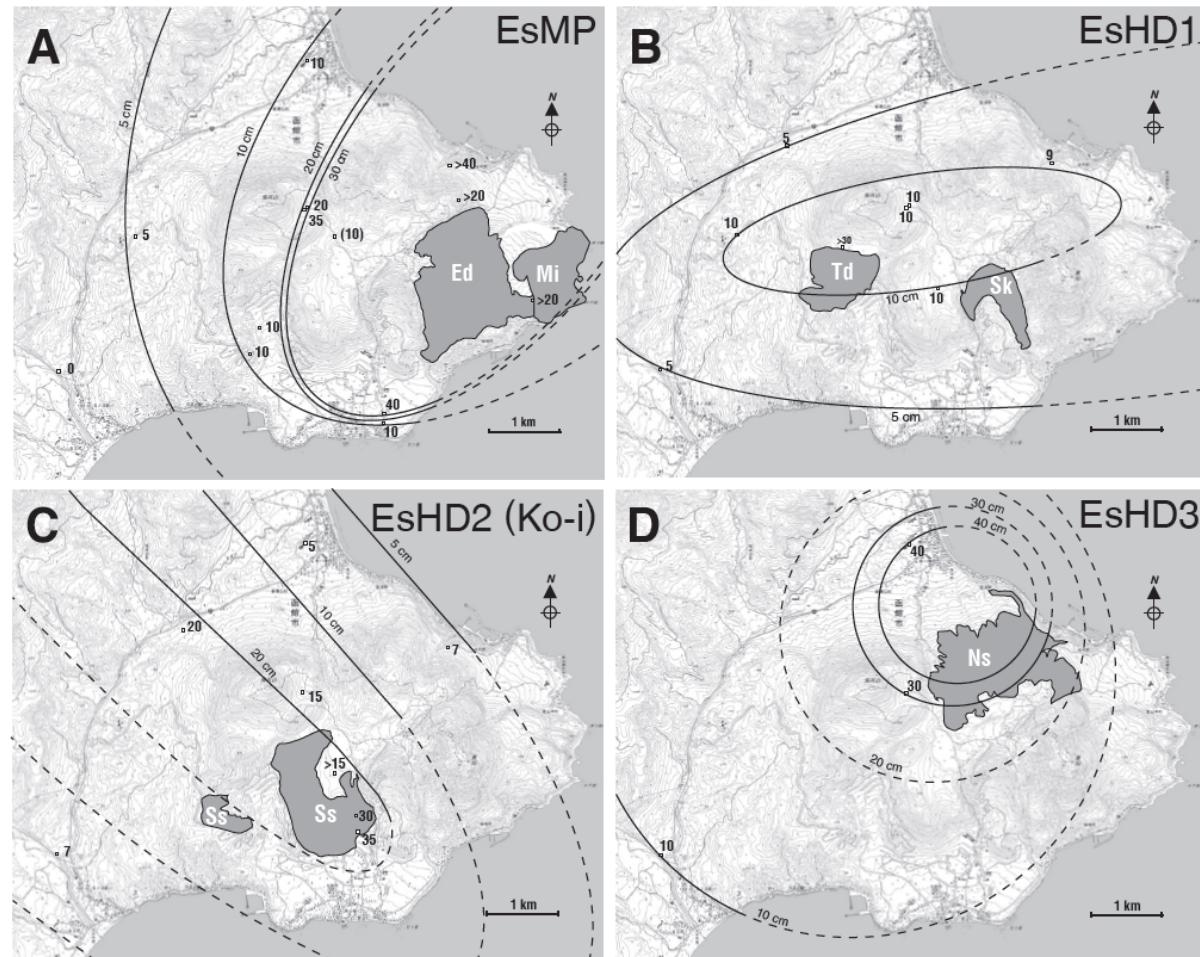
三浦ほか(2022)	山元(2014)
Es-1874火碎堆積物	Es-6
Es-1846火碎堆積物	Es-5
Es-a火碎堆積物	Es-4
Es-c火碎堆積物	Es-3
Es-d火碎堆積物	
Es-e火碎堆積物	
Es-f火碎堆積物	
Es-g火碎堆積物	Es-2
Es-h火碎堆積物	Es-1
Es-i火碎堆積物	
Es-j火碎堆積物	

○第四紀火山カタログ委員会編(2000)に示された火山体体積を追記した。

余白

再掲(R5/7/7審査会合)

## 降下火碎物の分布



EsMP, EsHD1, EsHD2 (Ko-i), EsHD3

個別に収集した文献に基づく恵山の降下火碎物の分布範囲  
(三浦ほか, 2022)

余白

## 活動可能性評価

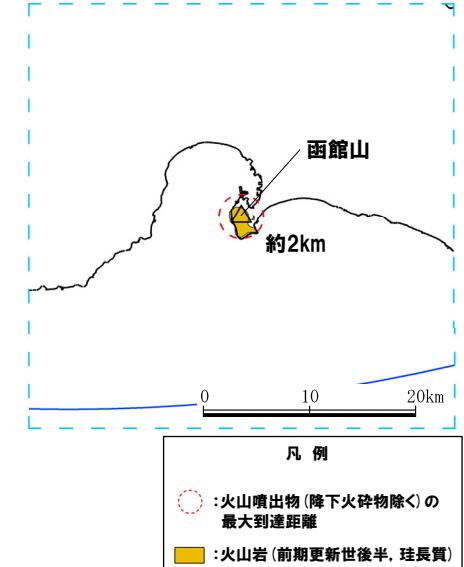
一部修正(H28/2/5審査会合)

## 函館山の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C39 函館山
敷地からの距離	142.7km
火山の形式 <sup>※2</sup>	成層火山
活動年代 <sup>※1,※2</sup>	約120-90万年前
評価	最大休止期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

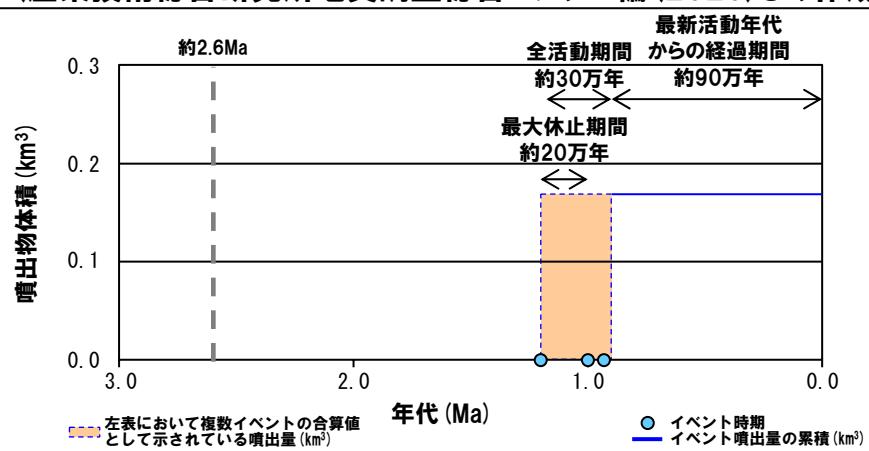


## 函館山活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			鷹澤(1992) 第四紀火山カタログ委員会編(2000)
	更新世 0.93±0.11Ma	函館山		
	1.0±0.1Ma	函館山火山岩類: デイサイト溶岩	0.09 (集塊岩)	
	1.2±0.1Ma	函館山火山岩類: デイサイト溶岩	0.08 (溶岩流)	
			0.17	

R3.10.14審査会合資料からの活動履歴の変更点

- 第四紀火山カタログ委員会編(2000)に示された函館山を給源とする噴出物のK-Ar年代値(0.93±0.11Ma)を追記した。
- 第四紀火山カタログ委員会編(2000)に示された噴出物体積及び火山体体積を追記した。

函館山  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)より作成)

噴出量-年代階段ダイアグラム

## 活動可能性評価

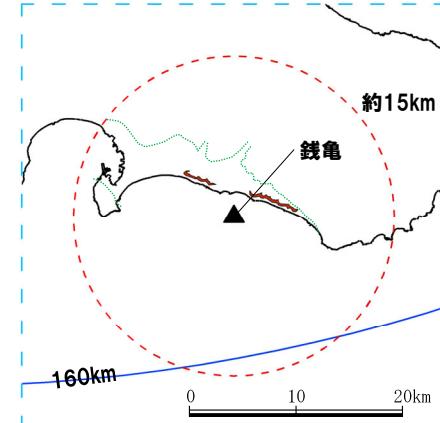
一部修正(H28/2/5審査会合)

## 銭亀の概要

火山名 <sup>※1</sup>	C40 銭亀
敷地からの距離	146.7km
火山の形式 <sup>※2</sup>	火碎流-カルデラ
活動年代 <sup>※2</sup>	4万5000-3万3000年前の間
評価	全活動期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。

※1 産業技術総合研究所「日本の火山(DB)」2024年7月確認。

※2 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。



凡 例

- : 火山噴出物(降下火碎物除く)の最大到達距離
- : 火山岩(後期更新世、中間質)
- (産業技術総合研究所地質調査総合センター編、2020)
- : 銭亀沢火碎流堆積物のおよその分布限界(山縣ほか、1989)

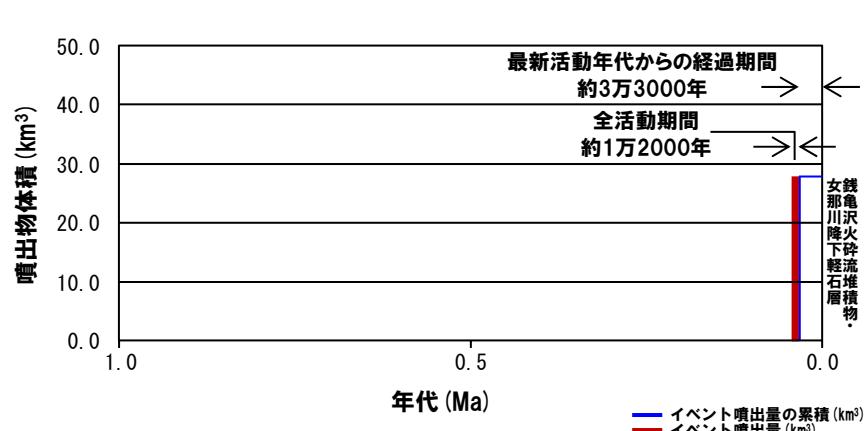
## 銭亀活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			山縣ほか (1989) 第四紀火山力 タログ委員会 編(2000)
	更新世 0.045- 0.033Ma	銭亀沢火碎流堆積物 ・女那川降下軽石層 (Z-M)	9(火碎流) 19(降下テフラ)	28

R3.10.14審査会合資料からの  
活動履歴の変更点

- R3.10.14審査会合資料においては、山縣ほか(1989)に基づき、噴出物体積を「1km<sup>3</sup>未満」と記載していたが、この値は、現在の地表で確かめられる銭亀火碎流堆積物の体積のみを示しているものであった。
- このため、同文献において算出されている降下テフラ及び火碎流の噴出物体積に修正を実施した。
- 第四紀火山力タログ委員会編(2000)に示された火山体体積を追記した。

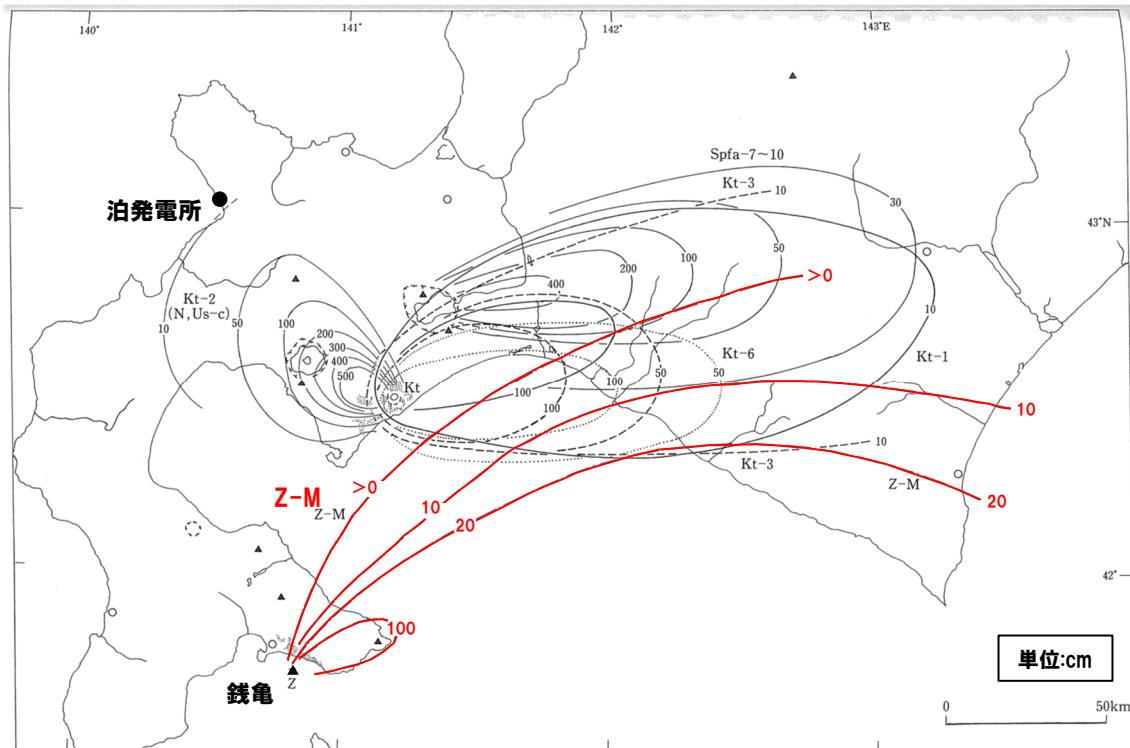
銭亀  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編(2020)及び山縣ほか(1989)より作成)



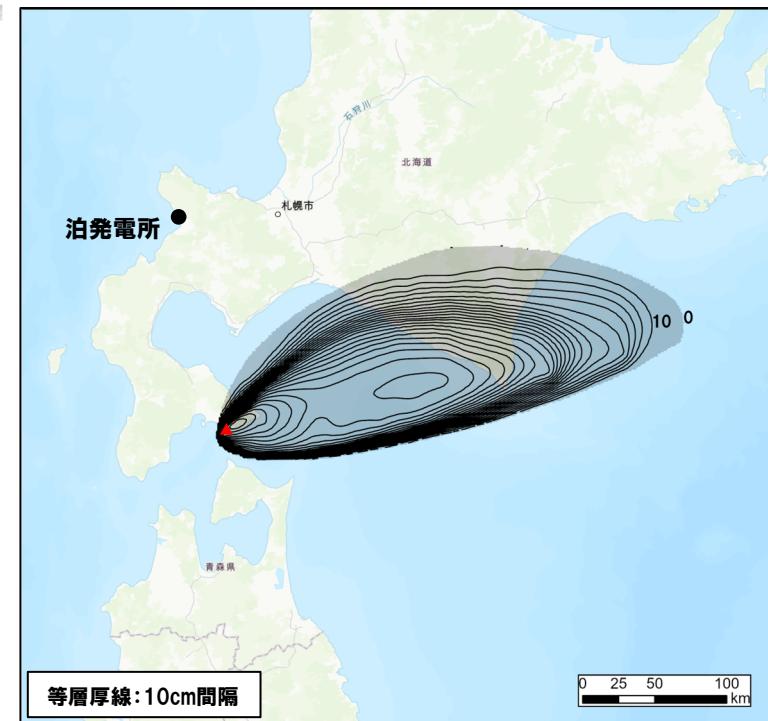
## 銭亀 (ぜにかめ)

## 降下火碎物の分布

## 再掲 (R5/7/7審査会合)



Z-M  
(町田・新井(2011)に加筆)



Z-M  
(Uesawa (2023) を基に作成)

## 銭亀の降下火碎物の分布範囲

# 後志海山(しりべしかいざん)

## 活動可能性評価

一部修正(R5/1/20審査会合)

### 後志海山の概要

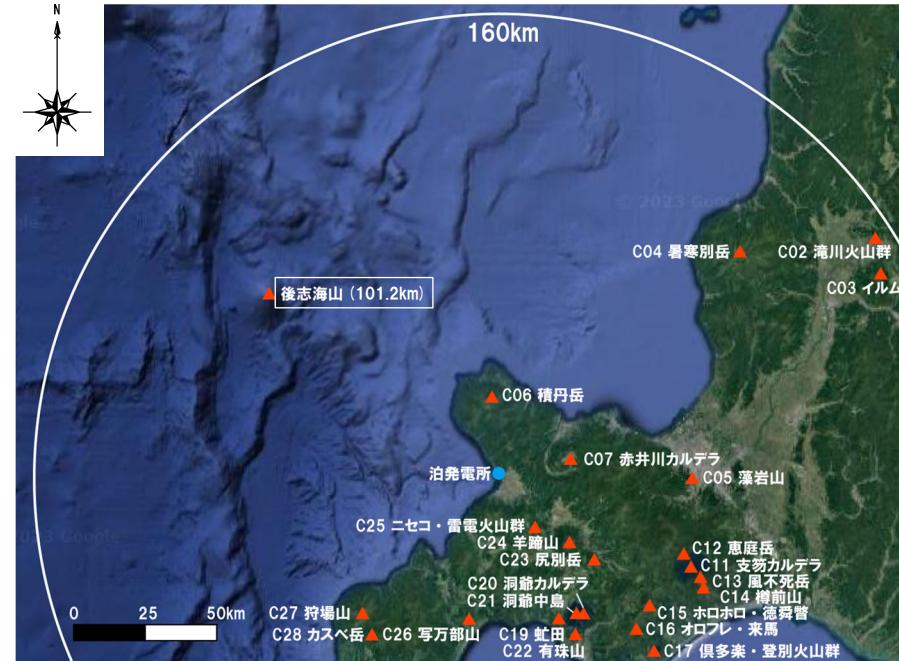
火山名 <sup>※1</sup>	後志海山
敷地からの距離	101.2km
火山の形式 <sup>※1</sup>	海底火山(成層火山)
活動年代 <sup>※1</sup>	約90万年前後(古くても130万年)
評価	<p>西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」において、活動年代は約90万年前後(古くても130万年)とされているが、明瞭な活動期間が示されていないことから、十分に長い活動期間は有さないものと考えられる。</p> <p>全活動期間よりも最新活動年代からの経過期間が長いことから、将来の活動可能性が十分小さいと評価される。</p> <p>なお、兼岡・井田編(1997)によれば、日本のような島弧火山は数十万年程度が平均的な活動期間と考えてよいとされている。</p>

※1 西来ほか編(2012)「第四紀火山岩体・貫入岩体データベース」2024年7月確認。

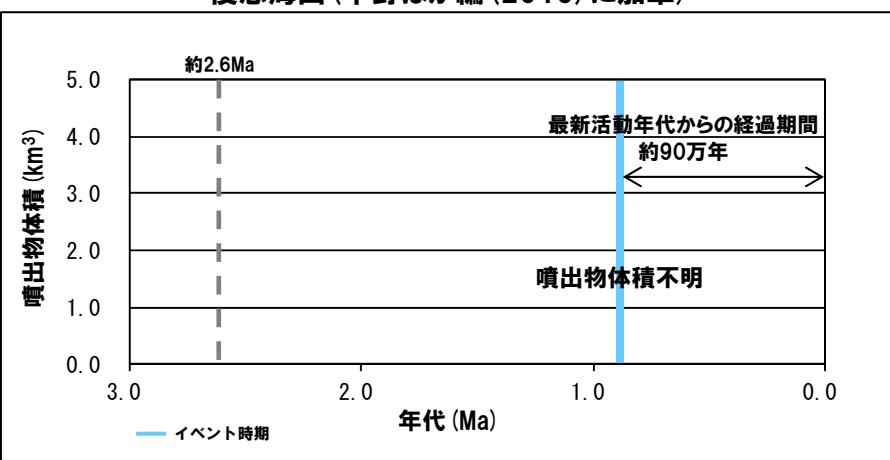
### 後志海山活動履歴

年代	噴出物名	噴出物体積 (km <sup>3</sup> )	火山体体積 (km <sup>3</sup> )	参考文献
第四紀	完新世			Tsuchiya et al. (1989)
	更新世			
	0.9±0.2Ma <sup>※2</sup>	Olivine-augite andesite	不明	

※2 Tsuchiya et al. (1989)においては、後志海山山頂付近から多量の安山岩・石英安山岩・玄武岩などを採取し、これらの火山岩礫のうち、最も大きく新鮮なかんらん石普通輝石安山岩についてK-Ar年代測定を行ったとされている。測定値の平均は0.9±0.2Maであり、初生Ar同位体比の大気組成からのそれは年代決定に大きな影響を与えるが、それを考慮しても、後志海山の活動年代については、古くても約130万年前とされている。



後志海山(中野ほか編(2013)に加筆)



噴出量-年代階段ダイアグラム

余白

## 目 次

1. 敷地から半径160km以内の範囲(地理的領域)にある第四紀火山カタログ	P. 3
2. 支笏カルデラ及び洞爺カルデラにおいて噴出した火碎流が敷地に到達した可能性評価	P.120
2. 1 支笏火碎流	P.122
2. 2 洞爺火碎流	P.132
参考文献	P.142

## 2. 支笏カルデラ及び洞爺カルデラにおいて噴出した火碎流が敷地に到達した可能性評価

### 【まとめ】

一部修正 (R5/7/7審査会合)

- 地理的領域にある32火山のうち、火碎流堆積物が給源から敷地方向に数十kmにわたって分布する火山は、支笏カルデラ及び洞爺カルデラである (R6.2.16審査会合本編資料4.1章参照)。
- 上記2火山の最大規模の噴出物は、それぞれSp-1 (支笏火碎流堆積物 (Spf1)) 及び支笏第1降下軽石 (Spfa-1)) 及びTp (洞爺火山灰 (Toya) 及び洞爺火碎流堆積物) である。
- Sp-1及びTpのうち、設計対応不可能な火山事象である火碎流が敷地に到達した可能性について、下表のとおり評価を行った。

支笏カルデラ及び洞爺カルデラにおいて噴出した設計対応不可能な火山事象である火碎流が敷地に到達した可能性に関する評価結果

火山	敷地から の距離	最大規模の 噴出物	文献に基づく最大到達地点	敷地方向の最大到達地点			敷地方向の分布状況		評価結果		
				給源から の方角	給源から の距離	給源から の方角	給源からの距離 (敷地からの距離)	特記事項			
支笏 カルデラ	74.8km	Sp-1: 支笏火碎流 堆積物 (Spf1), 支笏第1降下 軽石 (Spfa-1))	伊達市館山町			北西	約48km (約28km)	○古俱知安湖に直接 又は間接的に流入 した支笏火碎流が 湖底に厚く堆積した 再堆積層 ○当該地点を含む俱 知安盆地のうち、敷 地に最も近い俱知 安盆地北西端地点 の給源からの距離 約54km (敷地から の距離は約22km)	なし: 俱知安峠 ～敷地	なし: 敷地近傍 ～敷地	○支笏火碎流堆積物 (Spf1) は、給源から敷地方向に層厚を減 じながら尻別川沿いを流下したものと考えられ、羊蹄山北側 地点においては、再堆積層が認められる。 ○羊蹄山北側地点を含む俱知安盆地については、盆地全体が 支笏火碎流堆積物に覆われ、敷地に最も近い俱知安盆地北 西端地点まで火碎流が到達していた可能性は否定できない。 ○しかし、当該地点よりもさらに敷地方向に位置する俱知安峠 を越えてから、敷地までの間には支笏火碎流堆積物又はその 二次堆積物の分布を示した文献等も認められないことから、 敷地には到達していないと判断される。
洞爺 カルデラ	54.8km	Tp: 洞爺火山灰 (Toya), 洞爺火碎流堆積物	安平町追分春日			北～北西	約48km (約8km)	敷地近傍のうち共和町幌似付近 C-2ボーリング地点	あり: 敷地近傍 (共和町幌 似付近)	あり: 敷地近傍 (共 和町幌似付 近)	○洞爺火碎流堆積物は、敷地方向に向かって堀川沿いを流 下し敷地のうちMm1段丘より低標高側に洞爺火碎流本体が、 Mm1段丘より高標高側については火碎サージが到達した可能 性を否定できないものと評価した。



- 支笏カルデラは、最大規模の噴火に伴う設計対応不可能な火山事象が敷地に到達した可能性は十分小さいと判断される。
- 洞爺カルデラは、最大規模の噴火に伴う設計対応不可能な火山事象が敷地に到達した可能性を否定できない。

## 目 次

1. 敷地から半径160km以内の範囲(地理的領域)にある第四紀火山カタログ	.....	P. 3
2. 支笏カルデラ及び洞爺カルデラにおいて噴出した火碎流が敷地に到達した可能性評価	.....	P.120
2. 1 支笏火碎流	.....	P.122
2. 2 洞爺火碎流	.....	P.132
参考文献	.....	P.142
①まとめ	.....	P. 123
②文献に示される支笏火碎流の最大到達距離と層厚の確認	.....	P. 124
③文献及び当社地質調査結果を踏まえた敷地周辺における支笏火碎流堆積物の分布状況確認	.....	P. 125

## 2. 1 支笏火碎流

### ① まとめ

一部修正 (R5/7/7審査会合)

- 支笏カルデラの最大規模の噴出物であるSp-1のうち、支笏火碎流堆積物 (Spfl) が敷地に到達した可能性について検討を行った。
- 検討は、文献に示される支笏火碎流堆積物 (Spfl) の最大到達距離と層厚の確認（次頁参照）並びに文献及び当社地質調査を踏まえた、敷地周辺における支笏火碎流堆積物 (Spfl) の分布状況の確認 (P125～P131参照) に基づき実施した。



- 支笏火碎流は、給源から敷地方向に層厚を減じながら尻別川沿いを流下したものと考えられ、給源から約42km（敷地からの距離約40km）の真狩村付近まで火碎流堆積物が認められる。
- より敷地に近い羊蹄山北側地点（給源から約48km、敷地から約28km）付近においては、古俱知安湖に直接又は間接的に流入した支笏火碎流が湖底に厚く堆積したrework（再堆積層）が認められる。
- 再堆積層が認められる各地点の地質状況、標高及び地形状況を踏まえると、盆地全体が古俱知安湖に直接または間接的に流入した支笏火碎流堆積物に覆われ、敷地に最も近い俱知安盆地北西端地点まで火碎流が到達していた可能性は否定できず、この場合、敷地方向における支笏火碎流の最大到達距離は約54km（敷地からの距離約22km）となる。
- 俱知安盆地北西端地点よりもさらに敷地方向に位置する俱知安峠（現河床との比高約80m）を越えてから、敷地までの間には支笏火碎流堆積物 (Spfl) 又はその二次堆積物の分布を示した文献等も認められないことから、敷地には到達していないと判断される。

## 2. 1 支笏火碎流

### ② 文献に示される支笏火碎流の最大到達距離と層厚の確認

一部修正 (R5/7/7審査会合)

- 支笏火碎流堆積物 (Spfl) の分布範囲を確認するため、支笏カルデラの火山噴出物の分布を示す代表文献である宝田ほか (2022)、敷地方向の最大到達地点付近の支笏火碎流堆積物 (Spfl) の分布・性状を明らかにしている嵯峨山ほか (2021) 及び井上ほか (2022) を確認した (P24～P28 参照)。
- 支笏火碎流堆積物 (Spfl) は、支笏カルデラ周辺に広範囲に認められ、敷地方向においては、宝田ほか (2022) に示される給源から約 42km (敷地からの距離約40km) の羊蹄山南東側の真狩村付近まで認められ、層厚は0.15～0.05mである。
- 真狩村付近からさらに敷地方向に向かって、給源から約48kmの地点である羊蹄山北側地点※ (敷地からの距離約28km) においては、宝田ほか (2022) によって rework (再堆積層) が認められ、層厚は5mである。
- また、羊蹄山北側地点の約1.5km～3km南西の地点※においては、嵯峨山ほか (2021) 及び井上ほか (2022) によって、層厚は不明であるものの、支笏火碎流堆積物 (Spfl) の再堆積物が記載されている。
- 支笏カルデラから全方向を考慮した場合、文献に示される火碎流堆積物確認地点に基づく支笏火碎流堆積物 (Spfl) の最大到達距離は、宝田ほか (2022) に示される支笏カルデラから南西方向に位置する伊達市館山町までの約52kmであり、層厚は1mである。



- 支笏火碎流堆積物 (Spfl) は支笏カルデラ周辺に広範囲に認められ、rework (再堆積層) も含めた、火碎流堆積物確認地点に基づく敷地方向の最大到達地点は、宝田ほか (2022) に示される羊蹄山北側地点※ (約48km) である。
- 支笏カルデラから全方向を考慮した場合、火碎流堆積物確認地点に基づく支笏火碎流堆積物 (Spfl) の最大到達距離は、宝田ほか (2022) に示される支笏カルデラから南西方向に位置する伊達市館山町までの約52kmであり、層厚は1mである。

※これらの地点の支笏火碎流堆積物は、rework或いは再堆積層とされているが、Nakagawa et al. (2016) による記載も踏まると、古俱知安湖に直接又は間接的に流入した支笏火碎流が、湖底に厚く堆積した堆積物と考えられることから、敷地方向の最大到達地点と評価した (P26～P27 参照)。

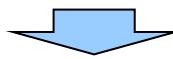
## 2. 1 支笏火碎流

③ 文献及び当社地質調査結果を踏まえた敷地周辺における支笏火碎流堆積物の分布状況確認 (1/6)

一部修正 (R5/7/7審査会合)

○文献に示される、火碎流堆積物確認地点に基づく敷地方向の支笏火碎流堆積物 (Spfl) の最大到達地点 (羊蹄山北側地点) より、さらに敷地方向に向かって、支笏火碎流が到達した可能性について、以下の検討を行った。

- ・支笏カルデラから敷地方向に向かい、尻別川沿い及び堀株川沿いの地形断面図を作成し、文献に示される火碎流堆積物確認地点を投影することで、流路に沿った地形状況と火碎流堆積物の層厚変化を把握した(次頁参照)。
- ・文献に示される火碎流堆積物確認地点周辺の地質図幅、分布標高及び地形状況を基に、支笏火碎流の到達が否定できない範囲を推定した(P127参照)。
- ・文献及び当社地質調査結果を踏まえた敷地周辺における支笏火碎流堆積物の分布状況を確認した。



○支笏火碎流堆積物 (Spfl) は、給源から真狩村付近に向かって層厚を減じながら尻別川沿いを流下したものと考えられ、その層厚は真狩村付近で0.15~0.05m程度まで減少している\*。

○真狩村付近より敷地方向の羊蹄山北側地点(敷地からの距離約28km)付近においては、宝田ほか(2022)、嵯峨山ほか(2021)及び井上ほか(2022)により、支笏火碎流堆積物の再堆積層(層厚最大5m)が示されているが、Nakagawa et al. (2016)による記載も踏まえると、これらの堆積物については、古俱知安湖に直接又は間接的に流入した支笏火碎流が、湖底に厚く堆積したものと考えられる。

○上記の再堆積層が確認される各地点は、地質図幅において古俱知安湖に堆積したと考えられる俱知安盆地堆積物 (Kc) とされる地質分布域に属しており、各地点の標高及び俱知安盆地の地形状況も踏まえると、盆地全体が古俱知安湖に直接または間接的に流入した支笏火碎流堆積物に覆われ、敷地に最も近い俱知安盆地北西端地点まで火碎流が到達していた可能性は否定できない(P127参照)。

○この場合、敷地方向における支笏火碎流の最大到達距離は約54km(敷地からの距離約22km)となる(P127参照)。

○しかし、俱知安盆地北西端地点よりもさらに敷地方向に位置する俱知安峠(現河床との比高約80m)を越えてから、敷地までの間には支笏火碎流堆積物 (Spfl) 又はその二次堆積物の分布を示した文献は認められない。

○また、当社地質調査の結果、敷地及び敷地近傍に支笏火碎流堆積物 (Spfl) は認められない(P128~P131参照)。

\*このことは、支笏火碎流堆積物の火口からの距離と層厚の関係には、距離の増加に応じ層厚がさらに小さくなる傾向が認められるとする山元(2016)及び宝田ほか(2022)のレビュー結果(R5.7.7審査会合補足説明資料2の3章)と調和的である。

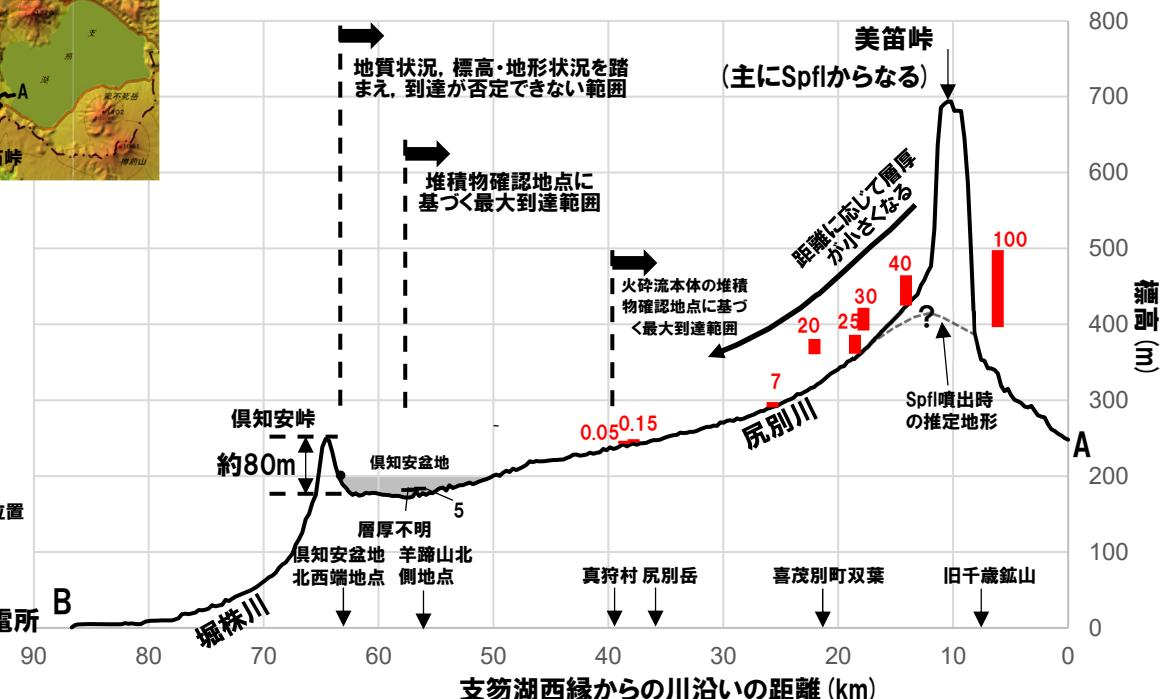
## 2. 1 支笏火碎流

### ③ 文献及び当社地質調査結果を踏まえた敷地周辺における支笏火碎流堆積物の分布状況確認(2/6)

一部修正 (R5/7/7審査会合)



### A-B測線の地形断面位置図 (地理院地図を基に作成)



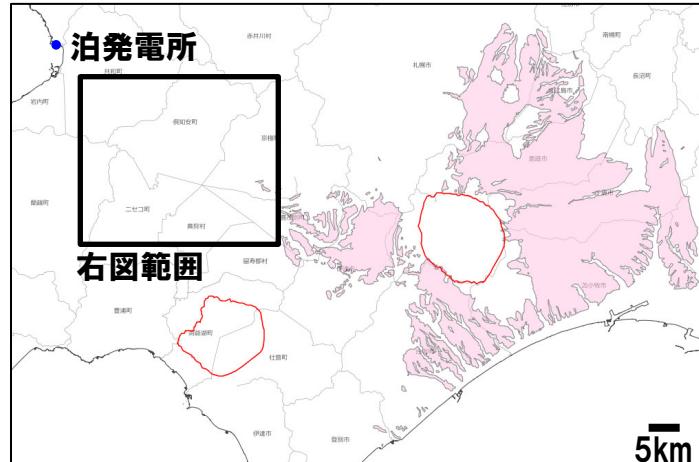
## A-B測線の地形断面図※と火碎流堆積物の分布（地理院地図を基に作成）

※地形断面図の作成に当たっては、宝田ほか(2022)、山元(2016)、嵯峨山ほか(2021)及び井上ほか(2022)で示される支笏火碎流堆積物(Spfl)の位置を投影し、その層厚をプロットした。ここでは、支笏火碎流堆積物の標高が火碎流堆積物の底面であると仮定し、尻別川沿いに投影している。

## 2. 1 支笏火碎流

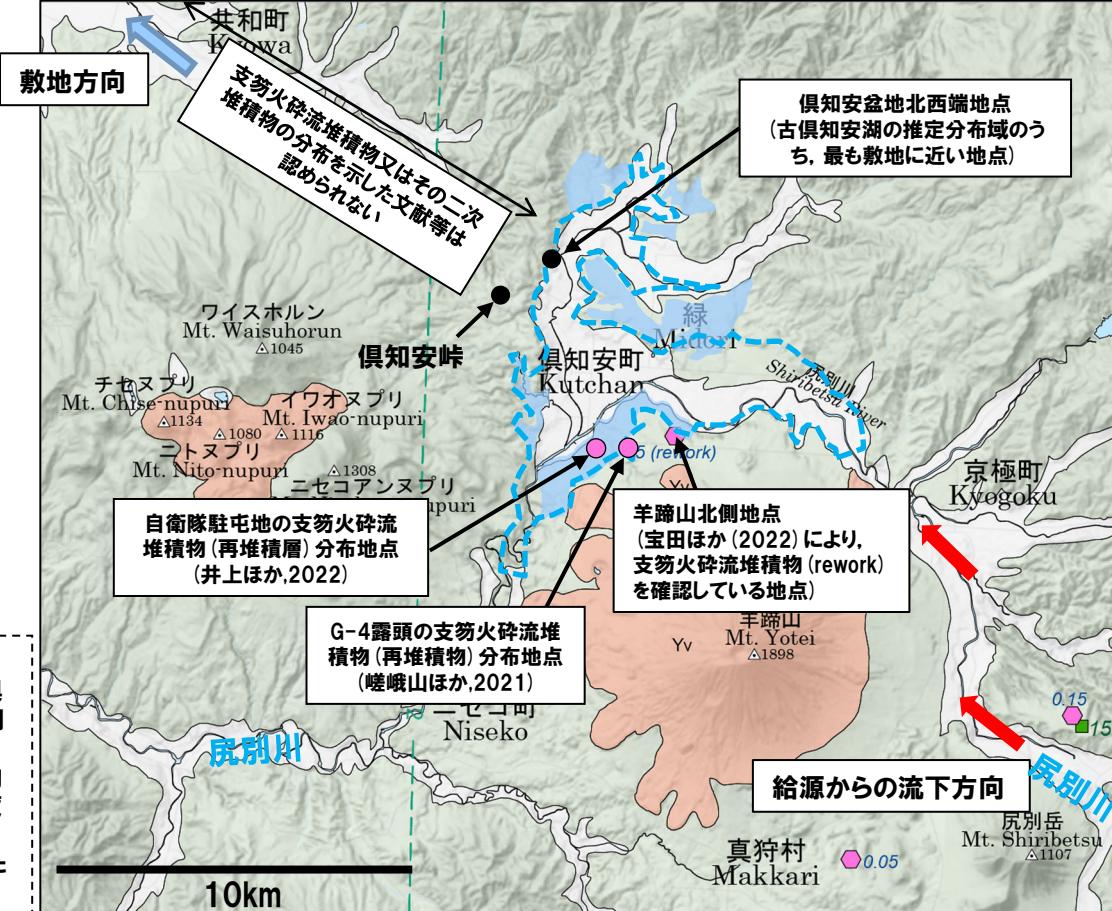
③ 文献及び当社地質調査結果を踏まえた敷地周辺における支笏火碎流堆積物の分布状況確認 (3/6)

一部修正 (R5/7/7審査会合)



支笏火碎流堆積物の分布  
(産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) に加筆)

- 20万分の1地質図幅「岩内 (第2版)」(石田ほか, 1991)によれば、俱知安盆地堆積物 (Kc) と呼ばれる凝灰質砂、軽石、礫及びシルト層が、現在の俱知安市街地を取り囲むように、標高180~210m程度に分布するとされ、同範囲に広がっていた古俱知安湖に堆積したものと考えられる。
- 支笏火碎流堆積物の再堆積層が認められる各地点は、俱知安盆地堆積物の分布範囲上に位置しており、各地点の標高が以下の通り概ね200m程度であることを踏まえると、少なくとも俱知安盆地の標高約200m程度までは古俱知安湖に水没していたと考えられ、盆地全体が古俱知安湖に直接または間接的に流入した支笏火碎流堆積物に覆われ、敷地に最も近い俱知安盆地北西端地点まで火碎流が到達していた可能性は否定できない。
- 羊蹄山北側地点 (宝田ほか, 2022) : 露頭の具体的な標高は当該文献中に記されていないものの、地形図から読み取った露頭基部の標高は約198mと推定される。
- G-4露頭地点 (嵯峨山ほか, 2021) : 当該文献によると、作業場面 (露頭基部) の標高は199mとされている。
- 自衛隊駐屯地地点 (井上ほか, 2022) : 当該文献によると、支笏火碎流堆積物の再堆積層が認められる法面の標高は、181.88~188.88mとされている。
- この場合、敷地方向における支笏火碎流の最大到達距離は約54km (敷地からの距離約22km) となる。



羊蹄山周辺の支笏火碎流堆積物の分布 (宝田ほか (2022) に加筆)

■ 境界地、干拓地、沖積層、段丘堆積物、扇状地堆積物及び崖錐堆積物  
Reclaimed land, alluvium, terrace deposits, fan deposits, and talus deposits

■ YY  
支笏火碎流堆積物の小規模分布 (層厚: m)  
Limited area exposure points of Shikotsu Ignimbrite

■ 7  
支笏第1降下テフラの層厚 (cm) ?は推定値  
Thickness of Shikotsu Tephra Fall Deposit 1 (cm)  
問記号 (?) indicates estimated value

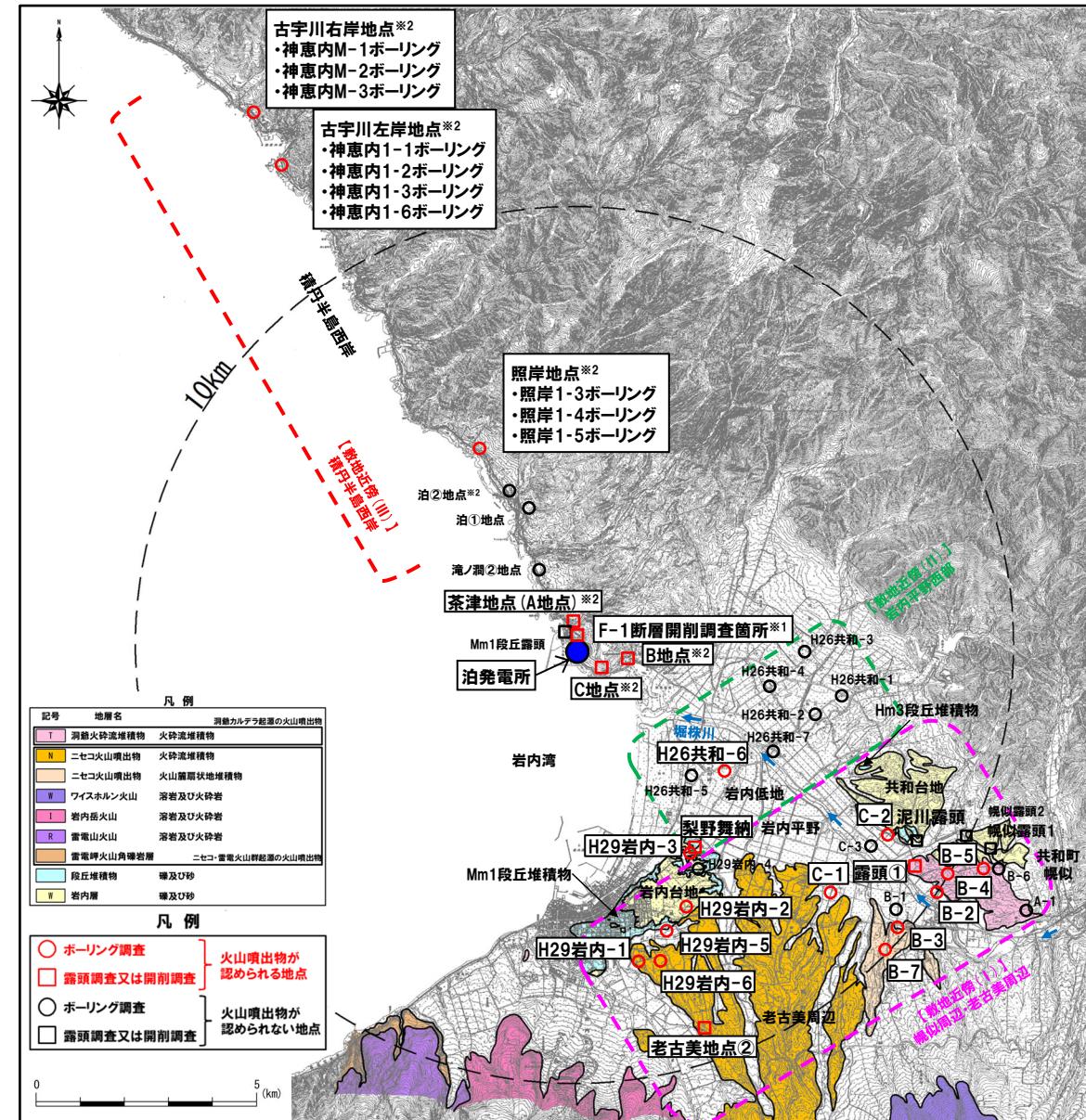
■ 140  
石田ほか (1991)による俱知安盆地堆積物 (Kc) の分布範囲  
Kuchinotsu Basin distribution range of Kuchinotsu Ignimbrite (Kc)

■ 水色の点線  
尻別川沿いの標高200m以下のおよびその範囲 (支笏火碎流到達時の古俱知安湖の推定分布域)  
Distribution range of Shikotsu Ignimbrite (Kc) estimated based on the 200m elevation of the Shirietsu River and its surroundings (Estimated distribution range of the ancient Kuchinotsu Lake at the time of Shikotsu Ignimbrite (Kc) arrival)

## 2. 1 支笏火碎流

③ 文献及び当社地質調査結果を踏まえた敷地周辺における支笏火碎流堆積物の分布状況確認(4/6)

一部修正(R5/7/7審査会合)



## 2. 1 支笏火碎流

③ 文献及び当社地質調査結果を踏まえた敷地周辺における支笏火碎流堆積物の分布状況確認(5/6)

一部修正(R6/2/16審査会合)

各調査地点において認められる火山噴出物及びその層厚<sup>※3</sup>

調査範囲	調査地点	敷地との距離(km)	洞爺カルデラ				支笏カルデラ				ニセコ・雷電火山群		阿蘇カルデラ		給源不明	
			洞爺火碎流堆積物		洞爺火山灰(Toya) <sup>※4</sup>		支笏火碎流堆積物		支笏第1降下軽石(Spfa-1)		ニセコ火山噴出物(火碎流堆積物)		ニセコ火山噴出物に対比される火山灰(対象火山灰)			
			文献調査	地質調査	文献調査	地質調査	文献調査	地質調査	文献調査	地質調査	文献調査	地質調査	文献調査	地質調査		
敷地近傍(I)	H29岩内-1ボーリング	7.1	— — — — — — — — — —	— 33cm (二次堆積物b), 10cm (純層) <sup>※8</sup> 合計16cm (純層又は 二次堆積物b) 少なくとも 70cm (純層) — 15m以上 13.1m (二次堆積物) — 19.9m 22.0m — 2.2m (二次堆積物), 1.0m —	— — — — — — — — — —											
	H29岩内-2ボーリング	6.3														
	H29岩内-3ボーリング	5.1														
	H29岩内-5ボーリング	6.5														
	H29岩内-6ボーリング	7.2														
	老古美地点(2)	約9 <sup>※5</sup>														
	露頭①	約10 <sup>※5</sup>														
	B-2ボーリング	9.8														
	B-3ボーリング	9.6														
	B-4ボーリング	10.5														
幌似周辺	B-5ボーリング	9.7														
	B-7ボーリング	9.7														
	C-1ボーリング	7.9														
	C-2ボーリング	8.1														
	梨野舞納露頭	5.1 <sup>※5</sup>														
	H26共和-6ボーリング	4.3														

※3 本表に示す層厚は、R6.7.19審査会合資料コメント回答資料に示す指摘事項No.14に関する回答を踏まえ更新済み。

※4 洞爺火山灰(Toya)の火山ガラスを多く含む堆積物は、本頁及び次頁において降下火碎物由来として示しているが、火碎サージ由来か降下火碎物由来かを厳密に区分することは難しいと評価している(詳細はR5.7.7審査会合補足説明資料2の1章参照)。

※5 老古美地点(2)及び露頭①地点については、露頭調査地点のため、おおよその距離を示す。また、梨野舞納露頭については、露頭調査地点とほぼ同位置で実施したボーリング実施箇所における距離を示す。

※6 各調査地点において、文献調査で分布が示されていない火山噴出物及び地質調査において認められない火山噴出物については、「-」と表記している。

※7 Goto et al. (2018)において、共和町幌似周辺には、層厚6m、11m及び12mの洞爺火碎流堆積物の分布が示されている。

※8 H29岩内-2ボーリングにおいては純層(10cm)の直上に認められる二次堆積物b(33cm)よりも上位に断続的に二次堆積物a又は二次堆積物bが認められるが、純層の直上ではないことから、当該表ではこれらについて記載していない。

※9 石田ほか(1991)においては、老古美周辺にニセコ火山群の火碎流堆積物(当社は、「ニセコ火山噴出物(火碎流堆積物)」と呼称)の分布が示されているものの、層厚は記載されていないことから、「○」と表記している。

余白

## 2. 1 支笏火碎流

③ 文献及び当社地質調査結果を踏まえた敷地周辺における支笏火碎流堆積物の分布状況確認 (6/6)

一部修正 (R6/2/16審査会合)

(P129からの続き)

### 各調査地点において認められる火山噴出物及びその層厚

調査範囲	調査地点	敷地との距離(km)	洞爺カルデラ				支笏カルデラ				ニセコ・雷電火山群				阿蘇カルデラ		給源不明 H26共和-6 火山灰	
			洞爺火碎流堆積物		洞爺火山灰(Toya)		支笏火碎流堆積物		支笏第1降下軽石(Spfa-1)		ニセコ火山噴出物(火碎流堆積物)		ニセコ火山噴出物に対比される火山灰(対象火山灰)		阿蘇4火山灰(Aso-4)			
			文献調査	地質調査	文献調査	地質調査	文献調査	地質調査	文献調査	地質調査	文献調査	地質調査	文献調査	地質調査	文献調査	地質調査		
敷地近傍 (III)	照岸1-3 ボーリング	5.2	—*	—	30cm 以上	20cm(二次堆積物a)	—	2cm 以下	—	—	—	—	—	15cm 以上 若しくは 15~20cm	—	—		
	照岸1-4 ボーリング	5.3				40cm(二次堆積物b)												
	照岸1-5 ボーリング	5.3				40cm(二次堆積物a)												
	神恵内1-1 ボーリング	13.1				10cm(二次堆積物b), 20cm(二次堆積物a)												
	神恵内1-2 ボーリング	13.1				20cm(純層)												
	神恵内1-3 ボーリング	13.1				50cm(純層)												
	神恵内1-6 ボーリング	13.1				17cm(純層)												
	神恵内M-1 ボーリング	14.2				10cm(純層)												
	神恵内M-2 ボーリング	14.1				13cm(二次堆積物b)												
	神恵内M-3 ボーリング	14.2				10cm(二次堆積物b), 15cm(二次堆積物a), 5cm(純層)												
敷地	A地点	—				堆積物中に洞爺火山灰(Toya)に対比される火山ガラスが混在	—	—	堆積物中に支笏第1降下軽石(Spfa-1)に対比される火山ガラスが混在	—	—	堆積物中に対象火山灰に対比される火山ガラスが混在	—	—	—	—		
	B地点	—																
	C地点	—																

※各調査地点において、文献調査で分布が示されていない火山噴出物及び地質調査において認められない火山噴出物については、「—」と表記している。

## 目 次

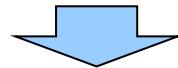
1. 敷地から半径160km以内の範囲(地理的領域)にある第四紀火山カタログ	P. 3
2. 支笏カルデラ及び洞爺カルデラにおいて噴出した火碎流が敷地に到達した可能性評価	P.120
2. 1 支笏火碎流	P.122
2. 2 洞爺火碎流	P.132
参考文献	P.142
① まとめ	P. 133
② 文献に示される洞爺火碎流堆積物の最大到達距離と層厚の確認	P. 134
③ 文献及び当社地質調査結果を踏まえた敷地及び敷地近傍における洞爺火碎流堆積物の分布状況確認	P. 135

## 2. 2 洞爺火碎流

### ① まとめ

一部修正 (R5/7/7審査会合)

- 洞爺カルデラの最大規模の噴出物であるTpのうち、洞爺火碎流堆積物が敷地に到達した可能性について検討を行った。
- 検討は、文献に示される洞爺火碎流堆積物の最大到達距離と層厚の確認（次頁参照）並びに文献及び当社地質調査を踏まえた、敷地及び敷地近傍における洞爺火碎流堆積物の分布状況の確認（P135～P141参照）に基づき実施した。



- 敷地のうちMm1段丘より低標高側に洞爺火碎流本体が到達した可能性を否定できない。
- また、敷地のうち、Mm1段丘より高標高側については、火碎サージが到達した可能性を否定できない。

## 2. 2 洞爺火碎流

### ② 文献に示される洞爺火碎流堆積物の最大到達距離と層厚の確認

再掲 (R5/7/7審査会合)

○洞爺火碎流堆積物の分布範囲を確認するため、以下の文献を確認した。

【産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) 確認結果】(P48参照)

○同文献に基づくと、洞爺火碎流堆積物は、洞爺カルデラ周辺に広範囲に認められ、敷地方向（北～北西方向）では共和町幌似付近まで認められる。

○洞爺火碎流堆積物の最大到達距離は、洞爺カルデラから敷地方向（北～北西方向）に位置する共和町幌似付近までの約47kmである。

【Goto et al. (2018) 及び産業技術総合研究所 (2022) 確認結果】(P53～P61参照)

○これらの文献に基づくと、敷地方向（北～北西方向）では共和町幌似付近まで洞爺火碎流堆積物（層厚は最大で22m；産業技術総合研究所、2022）が確認され、この状況は産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) と調和的である。

○これらの文献に基づくと、堆積物は確認されていないものの、推定に基づき、共和町幌似付近を越えて岩内湾まで洞爺火碎流堆積物が分布が示されている。

○Goto et al. (2018) によれば、共和町幌似付近で確認される洞爺火碎流堆積物は、最も広範囲に広がっていることが示唆されるUnit2に区分されるものである。

○一方で、産業技術総合研究所 (2022) によれば、共和町幌似付近で確認される洞爺火碎流堆積物は、最も広範囲に広がっていることが示唆されるUnit5に区分されるものである。

【Amma-Miyasaka et al. (2020) 確認結果】(P62～P63参照)

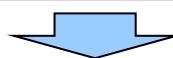
○同文献に示される洞爺火碎流堆積物の最大到達距離は、洞爺カルデラから東方向に位置する苫小牧市錦岡 (P3地点) までの約47kmであり、層厚は1.75mである。

○同文献において、洞爺カルデラから東～北東方向に位置する調査地点 (DN2, DC及びDS5地点) で確認される洞爺カルデラ形成噴火噴出物は、数mm以下の軽石を含む基質支持の堆積物であることから、火碎サージ堆積物であるとしている。

○当該火碎サージ堆積物の最大到達距離は、洞爺カルデラから北東方向に位置する安平町追分春日 (DN2地点) までの約85kmであり、層厚は0.25m以下である。

【産業技術総合研究所 (2021) 確認結果】(P64参照)

○同文献に基づくと、洞爺カルデラ形成噴火噴出物である火碎サージ堆積物の最大到達距離は、洞爺カルデラから北東方向に位置する千歳市までの約80kmであり、層厚は約0.4mである。



○洞爺火碎流堆積物は、洞爺カルデラ周辺の広範囲に認められ、敷地方向の最遠方分布地点としては、敷地近傍に位置する共和町幌似付近（洞爺カルデラから約47km）まで認められる（最大層厚22m）。

○洞爺火碎流堆積物の最大到達距離は、Amma-Miyasaka et al. (2020) に示される洞爺カルデラから東方向に位置する安平町追分春日までの約85km（火碎サージ堆積物を確認）であり、給源から敷地までの距離（54.8km）と比較して大きく、層厚は0.25m以下である。

## 2. 2 洞爺火碎流

③ 文献及び当社地質調査結果を踏まえた敷地及び敷地近傍における洞爺火碎流堆積物の分布状況確認 (1/6)

一部修正 (R5/7/7審査会合)

○敷地及び敷地近傍の当社地質調査における洞爺火碎流堆積物の分布は以下のとおり (R5.7.7審査会合補足説明資料2の1章参照)。

[敷地近傍]

- 共和町幌似付近に、軽石混じり火山灰の層相を呈する洞爺火碎流堆積物 (最大層厚約22m) が認められる。
- 共和町幌似付近よりもより敷地に近接する岩内平野西部及び敷地を越えた積丹半島西岸に認められるMIS5eの海成段丘 (Mm1段丘) 堆積物上位に、洞爺火山灰 (Toya) の火山ガラスを多く含む堆積物が認められ、当該堆積物を火碎サージ由来か降下火碎物由来か厳密に区分することは難しい (以降、火碎サージと軽石が混じる洞爺火碎流を区別して取り扱う場合は、後者を「火碎流本体」と呼称する)。

[敷地]

- 主に火山碎屑物からなる堆積物若しくは軽石を含む堆積物は認められない。
- Mm1段丘堆積物 (上面標高約24m) 上位の陸上堆積物には、その上面、基底面又は当該堆積物中に、洞爺火碎流の到達を示唆する侵食面は認められない。

○共和町幌似付近以西において洞爺火碎流堆積物を確認している文献はないが、推定に基づき、岩内湾までの分布を示す文献が認められる (前頁参照)。

○当社地質調査及び文献調査による検討の結果、洞爺火碎流堆積物の火口からの距離と層厚の関係には、洞爺カルデラから概ね敷地方向 (北～北西方向) に位置する地点に限定した場合、明瞭な傾向は認められないが、大局的には、距離の増加に応じ層厚が小さくなる傾向が認められる (詳細はR5.7.7審査会合補足説明資料2の3章参照)。

○このため、共和町幌似付近において火碎流本体の最大層厚が約22mあることを踏まえると、火碎流本体は層厚を減じながら幌似付近を越えた範囲に到達していた可能性も考えられる。

○また、岩内平野西部において、堀株川付近に、洞爺火碎流堆積物堆積以降に堆積した沖積層が認められる。

○これらの状況に加え、断面図を用いた検討の結果 (次頁～P140参照) を踏まえると、火碎流本体は、岩内平野西部において確認されないものの、共和町幌似付近を越えて堀株川沿いの低地を流下し、現在の岩内湾に到達した後、削剥された可能性を否定できない。

○敷地近傍の共和町幌似付近では、軽石が混じる火碎流本体が認められる。

○火碎流本体は、より敷地に近接する岩内平野西部には認められないが、沖積層が分布すること等から、堀株川沿いの低地を流下し、現在の岩内湾に到達した後、削剥された可能性を否定できない。

○堀株川沿いの延長方向に敷地は位置し、敷地には火碎流本体又は火碎サージの到達を示唆する堆積物等は認められないが、敷地のうちMm1段丘 (MIS5e) より低標高側 (海側) については、1,2号炉建設前は、標高0m付近に波食棚が分布する状況であったことから (P141参照)、MIS5e (Mm1段丘) より新しい時代の堆積物は保存されておらず、堀株川沿いの低地に流下した火碎流本体が敷地に到達した可能性について検討できない状況である。

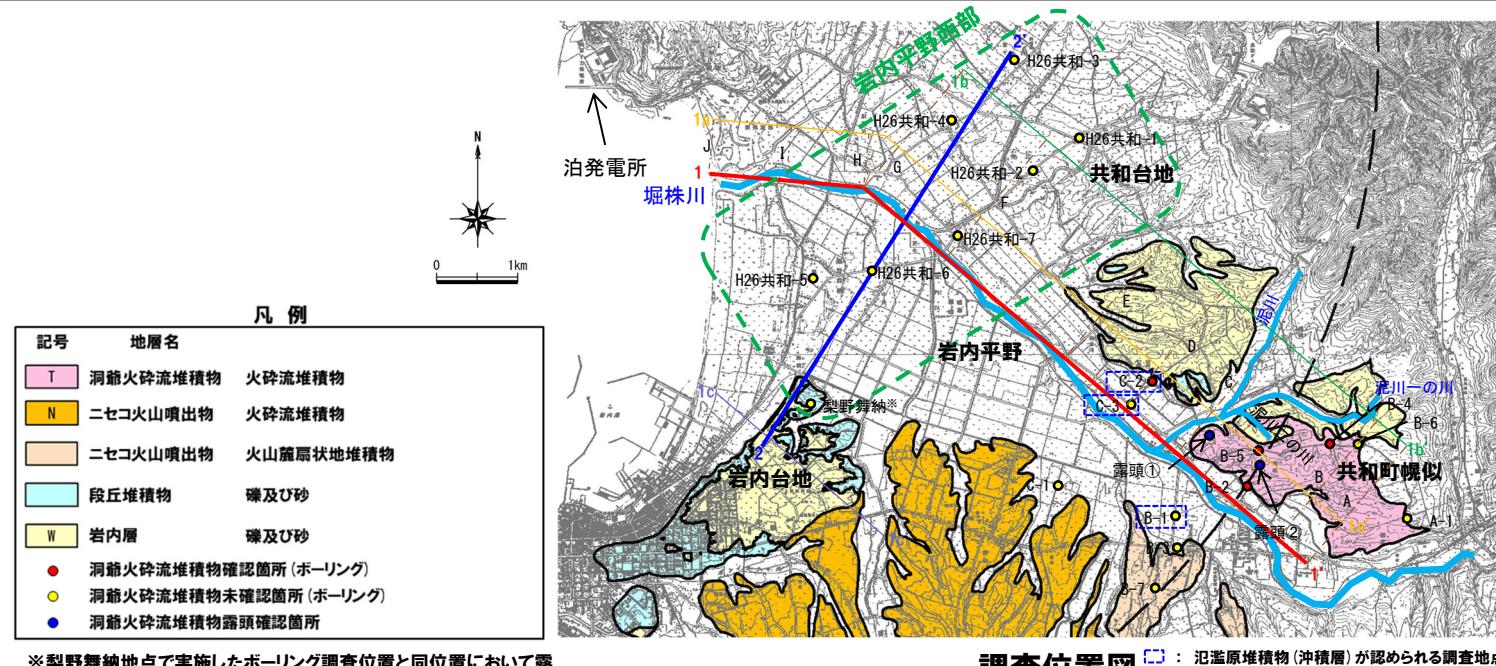
○また、敷地を挟む岩内平野西部及び積丹半島西岸においては、Mm1段丘堆積物上位に洞爺火山灰 (Toya) の火山ガラスを多く含む堆積物が認められ、当該堆積物を火碎サージ由来か降下火碎物由来か厳密に区分することは難しい。

## 2.2 洞爺火碎流

### ③ 文献及び当社地質調査結果を踏まえた敷地及び敷地近傍における洞爺火碎流堆積物の分布状況確認(2/6)

一部修正 (R5/1/20審查會合)

- 共和町幌似付近から堀株川沿いに下流に向かう1-1' 断面図及び岩内平野西部において堀株川に直交する2-2' 断面図を作成し、堀株川付近の堆積物の確認を行った。
  - 断面図作成に当たっては、以下の地点における露頭調査及びボーリング調査結果を用いた（露頭調査及びボーリング調査結果の詳細は、R6.7.19審査会合補足説明資料2.3章並びにR5.7.7審査会合補足説明資料2の1.1章及び1.3章参照）。
    - ・1-1' 断面：B-5地点、C-2地点、C-3地点、H26共和-7地点
    - ・2-2' 断面：梨野舞納地点、H26共和-5地点、H26共和-6地点、H26共和-4地点、H26共和-3地点
  - なお、堀株川沿いの1-1' 断面図については、周囲の地形状況も把握するため、以下に示す同じく堀株川に平行な地形断面についても、併せて示した。
    - ・1a-1a' 断面：軽石が混じる火碎流本体が認められるB-5地点及びC-2地点付近を通る断面
    - ・1b-1b' 断面：1a-1a' 断面よりも山側において共和台地を通る断面
    - ・1c-1c' 断面：岩内台地を通る断面



※梨野舞納地点で実施したボーリング調査位置と同位置において露頭を確認しており、その露頭では、火碎サージ由来か降下火碎物由来かを厳密に区分することは難しい洞爺火山灰(Toya)の火山ガラスを多く含む堆積物を確認している。

余白

## 2. 2 洞爺火碎流

③ 文献及び当社地質調査結果を踏まえた敷地及び敷地近傍における洞爺火碎流堆積物の分布状況確認 (3/6)

一部修正 (R5/1/20審査会合)

### 【1-1' 断面】(次頁参照)

- 幌似付近のB-5及びC-2地点においては、軽石が混じる火碎流本体が認められ、C-2地点付近で層厚が急減する。
- また、C-2地点においては、氾濫原堆積物(沖積層)も認められ、軽石が混じる火碎流本体及びその二次堆積物を覆って堆積する。
- C-2地点と近接するC-3地点においては、岩内層の上位に氾濫原堆積物(沖積層)が認められる。
- C-3地点より下流側に位置するH26共和-7地点においては、岩内層の上位に海成堆積物(沖積層)が認められる。

### 【2-2' 断面】(P140参照)

- 岩内台地に位置する梨野舞納地点においては、Mm1段丘堆積物(上面標高約22m)の上位に、陸成層が認められる。
- 陸成層の上位には、火山灰質砂質シルト層が整合関係で認められる。
- 火山灰質砂質シルト層については、火山灰分析(組成分析及び屈折率測定)の結果、火碎サージ由来か降下火碎物由来か厳密に区分することは難しい洞爺火山灰(Toya)の火山ガラスを多く含む堆積物に区分される(R5.7.7審査会合補足説明資料2の1.3章参照)。
- 火山灰質砂質シルト層の上面、基底面又は当該層中に侵食面は認められないことから、火碎流本体は到達していないものと判断される。
- 堀株川付近に位置するH26共和-5及びH26共和-6地点においては、岩内層の上位に、海成堆積物(沖積層)が認められる。
- 堀株川付近に位置するH26共和-4地点においては、岩内層の上位に扇状地性堆積物が認められる。
- H26共和-3地点においては、発足層の上位に、扇状地性堆積物が認められる。

## 2. 2 洞爺火碎流

③ 文献及び当社地質調査結果を踏まえた敷地及び敷地近傍における洞爺火碎流堆積物の分布状況確認(4/6)

一部修正(R5/1/20審査会合)

凡例

△	軽石混じり砂
●	礫混じり砂
■	シルト
▲	有機質シルト
■	腐植質シルト
■	火山灰質シルト
■	砂質シルト
●	礫混じり砂質シルト
●	礫混じりシルト
■	砂
■	腐植質砂
■	シルト混じり砂

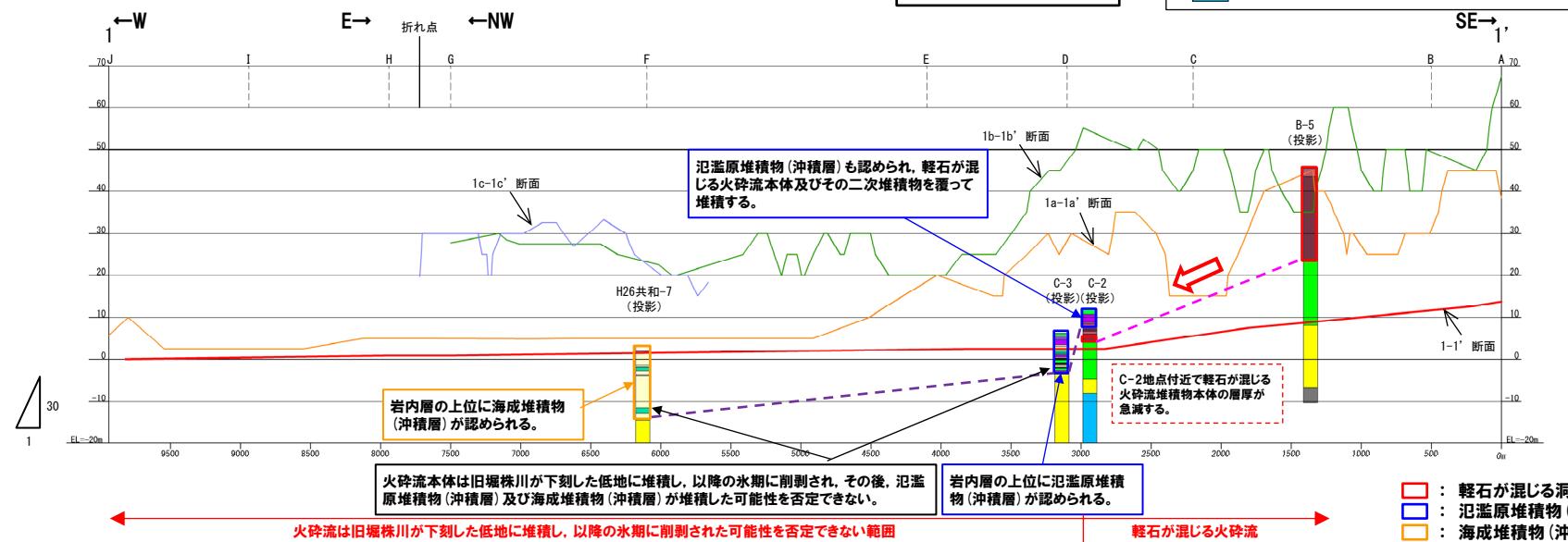
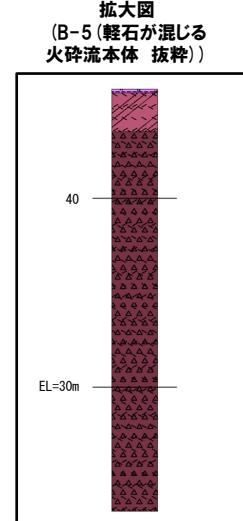
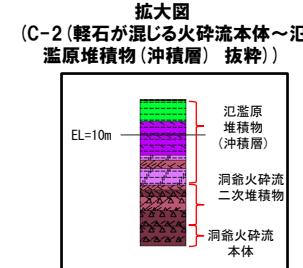
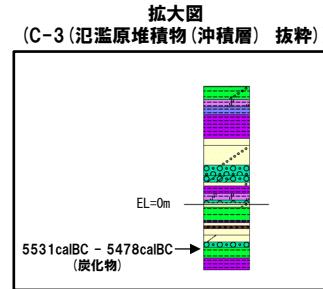
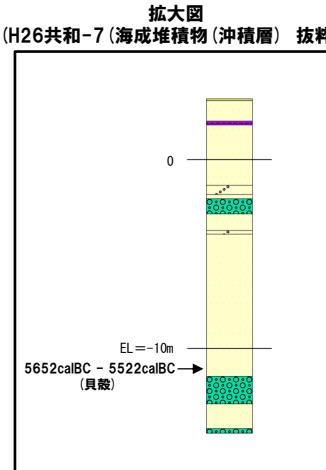
(層相区分)

△	軽石混じり砂
●	礫混じり砂
■	シルト
▲	有機質シルト
■	腐植質シルト
■	火山灰質シルト
■	砂質シルト
●	礫混じり砂質シルト
●	礫混じりシルト
■	砂
■	腐植質砂
■	シルト混じり砂

(地層区分)

■	発足層
■	岩内層
■	野塚層(下部層相当)

■	余別層
■	古平層

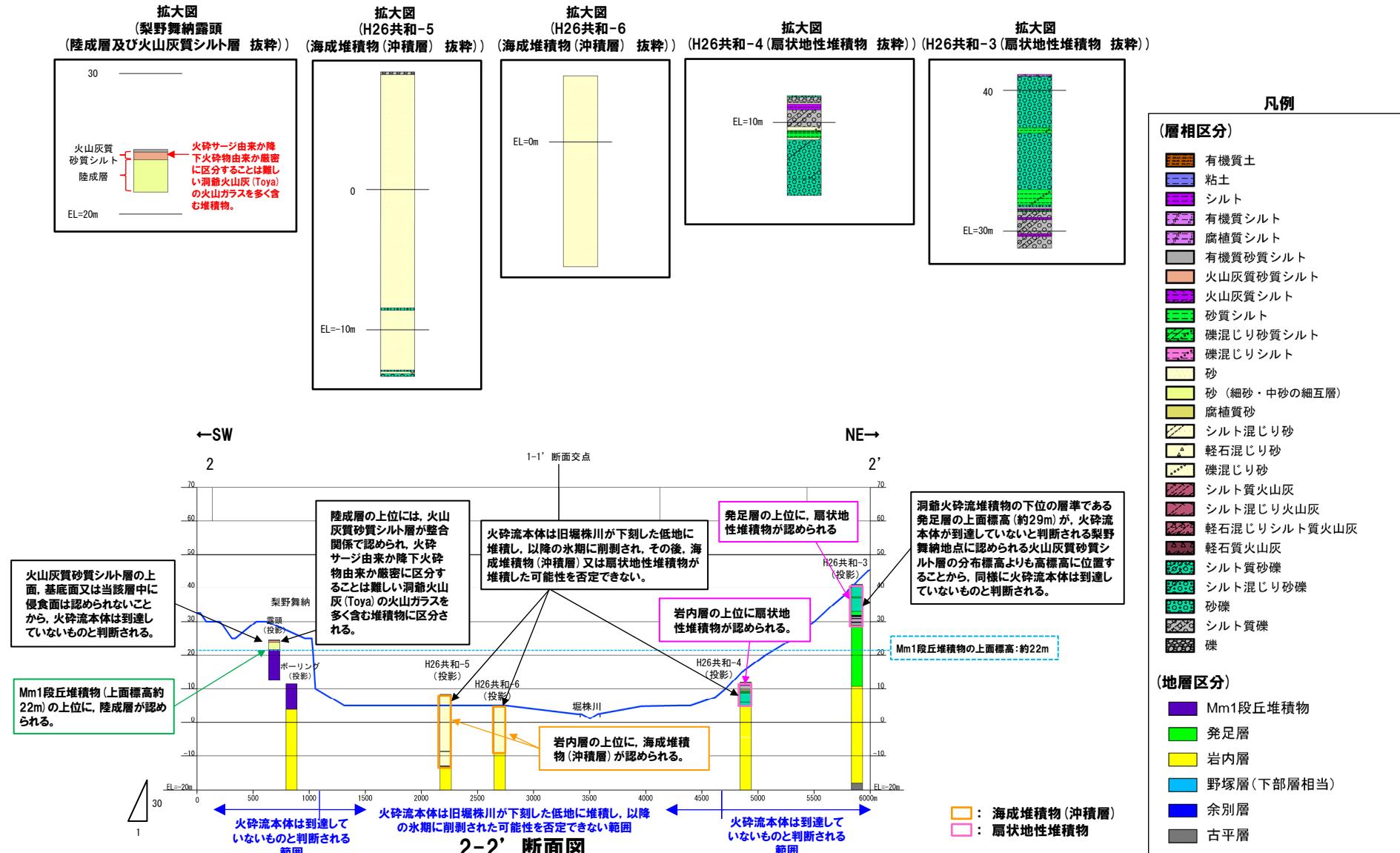


1-1' 断面図

## 2.2 洞爺火碎流

### ③ 文献及び当社地質調査結果を踏まえた敷地及び敷地近傍における洞爺火碎流堆積物の分布状況確認(5/6)

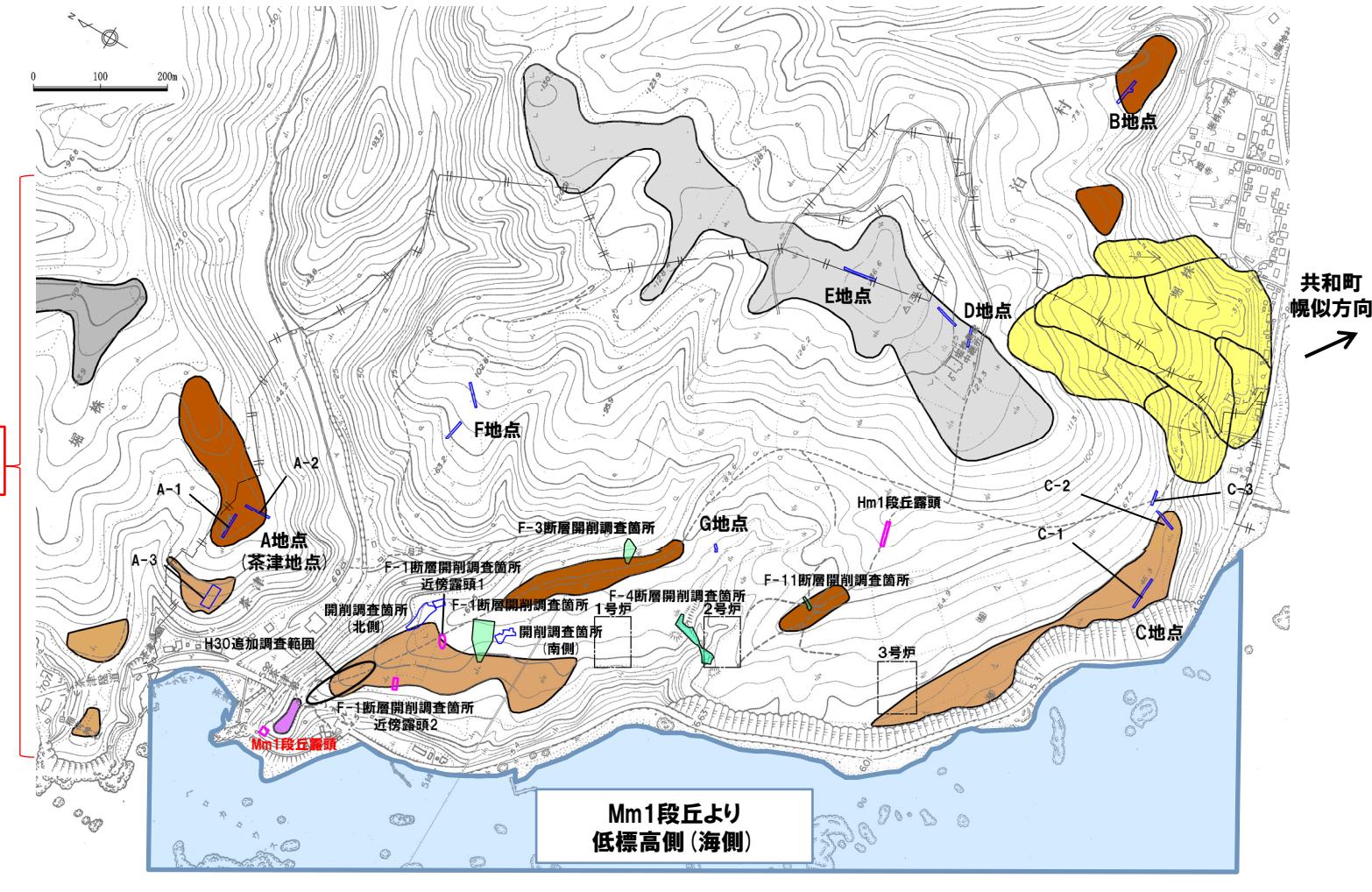
一部修正 (R5/1/20審查會合)



## 2. 2 洞爺火碎流

③ 文献及び当社地質調査結果を踏まえた敷地及び敷地近傍における洞爺火碎流堆積物の分布状況確認 (6/6)

一部修正 (H30/5/11審査会合)



# 参考文献

- (1) 中野俊・西来邦章・宝田晋治・星住英夫・石塚吉浩・伊藤順一・川辺禎久・及川輝樹・古川竜太・下司信夫・石塚治・山元孝広・岸本清行編 (2013) :日本の火山(第3版), 200万の1地質編集図, No.11, 産業技術総合研究所 地質調査総合センター.
- (2) 西来邦章・伊藤順一・上野龍之編 (2012, 2015) :第四紀火山岩体・貫入岩体データベース.
- (3) 産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2022) :大規模噴火データベース, 産総研地質調査総合センター.
- (4) 第四紀火山カタログ委員会編 (2000) :日本の第四紀火山カタログ, 日本火山学会.
- (5) 町田洋・新井房夫 (2011) :新編火山灰アトラス [日本列島とその周辺], 東京大学出版会.
- (6) Uesawa, S., Toshida, K., Takeuchi, S., and Miura, D. (2022) :Creating a digital database of tephra fallout distribution and frequency in Japan, *Journal of Applied Volcanology*, 11, 14. (TephraDB\_Prototype\_ver1.2)
- (7) 中川光弘・後藤芳彦・新井計雄・和田恵治・板谷徹丸 (1993) :中部北海道, 滝川地域の中中新世-鮮新世玄武岩のK-Ar年代と主成分化学組成: 東北日本弧-千島弧, 島弧会合部の玄武岩単成火山群, 岩鉱, 第88巻, 第8号, pp.390-401.
- (8) 佐川昭・松井和典・山口昇一 (1988) :北海道イルムケップ火山群のK-Ar年代と古地磁気, 地質調査所月報, 第39巻, 第6号, pp.423-428.
- (9) 広瀬亘・岩崎深雪・中川光弘 (2000) :北海道中央部～西部の新第三紀火成活動の変遷: K-Ar年代, 火山活動様式および全岩化学組成から見た東北日本弧北端の島弧火成活動の変遷, 地質学雑誌, 第106巻, 第2号, pp.120-135.
- (10) 八木健三・柴田賢・蟹沢聰史 (1987) :北海道西部の暑寒別岳地域火山岩類のK-Ar年代, 日本火山学会講演予稿集, 2, p.38.
- (11) 重野聖之・垣原康之・岡村 聰・青柳大介 (2007) :"3年代測定の結果", 札幌市大型動物化石総合調査報告書～サッポロカイギュウとその時代の解明～, 札幌市博物館活動センター編, 札幌市, pp.49-51.
- (12) Watanabe, Y. (1990) :Pliocene to Pliocene volcanism and related vein-type mineralization in Sapporo-Iwanai district, southwest Hokkaido, Japan, *Mining Geology*, 40 (5), pp.289-298.
- (13) 横山光・八幡正弘・岡村 聰・西戸裕嗣 (2003) :西南北海道, 赤井川カルデラの火山層序とカルデラ形成史, 岩石鉱物科学, 第32巻, 第2号, pp.80-95.
- (14) 山元孝広 (2014) :日本の主要第四紀火山の積算マグマ噴出量階段図, 地質調査総合センター研究資料集, No.613, 産総研地質調査総合センター.
- (15) 金田泰明・後藤義瑛・西野佑紀・宝田晋治・下司信夫 (2020) :支笏・洞爺・濁川・大山火山の大規模噴火の前駆活動と噴火推移, 産総研地質調査総合センター研究資料集, No. 699, 産総研地質調査総合センター, 75p.
- (16) Amma-Miyasaka, M., Miura, D., Nakagawa, M., Uesawa, S., Furukawa, R. (2020) :Stratigraphy and chronology of silicic tephras in the Shikotsu-Toya Volcanic Field, Japan: Evidence of a Late Pleistocene ignimbrite flare-up in SW Hokkaido, *Quaternary International*, 562, pp.58-75.
- (17) 宝田晋治・中川光弘・宮坂瑞穂・山元孝広・山崎 雅・金田泰明・下司信夫 (2022) :支笏カルデラ支笏火碎流堆積物分布図, 大規模火碎流分布図, no. 2, 産総研地質調査総合センター, 34p.
- (18) 春日井昭・石橋敦子・大貫康行・柏原信・鈴木久恵・田中秀樹・松田紘一 (1974) :恵庭火山の降下軽石層-分布と層準についての改定-, 地球科学, 28巻, 4号, pp.115-127.
- (19) 山縣耕太郎 (1994) :支笏およびクッタラ火山のテフロクロノロジー, 地学雑誌, 第103巻, 第3号, pp.268-285.

# 参考文献

- (20) 産業技術総合研究所編 (2003) : 20万分の1数値地質図幅集「北海道南部」。
- (21) 山元孝広 (2016) : 支笏カルデラ形成噴火のマグマ体積, 地質調査総合センター研究資料集, No.632, 産総研地質調査総合センター。
- (22) 井上隆・関根達夫・岡村聰・小田桐亮・嵯峨山積 (2022) : 北海道俱知安町高砂の法面に現れた古俱知安湖堆積物, 総合地質, 6-1, pp.47-56.
- (23) 嵯峨山積・星野フサ・井島行夫・近藤玲介・関根達夫・小田桐亮・宮入陽介・横山祐典 (2021) : 古俱知安湖の検証－その2－: 北海道俱知安町の上部更新統真狩別層の14C年代値, 火山灰, 花粉および珪藻の分析, 総合地質, 5-1, pp.71-80.
- (24) Uesawa, S., Nakagawa, M., Umetsu, A. (2016) : Explosive eruptive activity and temporal magmatic changes at Yotei volcano during the last 50,000 years, southwest Hokkaido, Japan, *J. Volcanol. Geotherm. Res.* 325, 27-44.
- (25) Nakagawa, M., Miura, D., Uesawa, S., Amma-Miyasaka. (2016) : IWCC 6 Excursion Guide Book CALDERAS AND ACTIVE VOLCANOES IN SOUTHWESTERN HOKKAIDO, JAPAN, IWCC 6 Hokkaido Japan 2016.
- (26) 嵯峨山積・関根達夫・星野フサ (2020) : 古俱知安湖の検証: 北海道俱知安町の後期更新世堆積物の微化石分析, 総合地質, 4-1, pp.1-7.
- (27) 町田洋・新井房夫・宮内崇裕・奥村晃史 (1987) : 北日本を広くおおう洞爺火山灰, 第四紀研究, 26, 2, pp.129-145.
- (28) 山縣耕太郎・町田 洋 (1996) : 北海道伊達における洞爺テフラとその上位の諸テフラ, 第四紀露頭集－日本のテフラ, 日本第四紀学会, 50.
- (29) Goto, Y., Suzuki, K., Shinya, T., Yamauchi, A., Miyoshi, M., Danhara, T., Tomiya, A. (2018) : Stratigraphy and lithofacies of the Toya ignimbrite in southwestern Hokkaido, Japan: Insights into the caldera-forming eruption at Toya caldera, *Journal of Geography*, 127 (2), 191-227.
- (30) 古川竜太・中川光弘 (2010) : 樽前火山地質図, 地質調査総合センター。
- (31) 山口昇一・五十嵐昭明・千葉義明・齊藤清次・西村 進 (1978) : 北海道有珠郡北湯沢地熱地域の熱水変質帯, 地質調査所報告, No.259, pp.43-84.
- (32) Nakagawa, M. (1992) : Spatial variation in chemical composition of Pliocene and quaternary volcanic rocks in southwestern Hokkaido, northeastern Japan arc, *Jour. Fac. Sci. Hokkaido Univ. Ser.4*, 23 (2), pp.175-197.
- (33) 森泉美穂子 (1998) : クッタラ火山群の火山発達史, 火山, 第43巻, 第3号, pp.95-111.
- (34) Miura, D., Yoshinaka, K., Takeuchi, S., Uesawa, S. (2022) : Proximal deposits of the Kuttara-Hayakita tephra at Kuttara caldera volcano, northern Japan: A record of precursor volcanism, *Bull. Volcanol. Soc. Japan*, 67 (3), 273-294.
- (35) 後藤芳彦・佐々木央岳・鳥口能誠・畠山 信 (2013) : 北海道クッタラ(登別)火山の噴火史, 日本火山学会講演予稿集, p.129.
- (36) Goto, Y., Toriguchi, Y., Sasaki, H. and Hatakeyama, A. (2015a) : Multiple Vent-forming Phreatic Eruptions after AD 1663 in the Noboribetsu Geothermal Field, Kuttara Volcano, Hokkaido, Japan, *Bull. Volcanol. Soc. Japan*, Vol. 60, No. 2, pp. 241-249.
- (37) 兼岡一郎・井田喜明編 (1997) : 火山とマグマ, 東京大学出版会。
- (38) 太田良平 (1956) : 5万分の1地質図幅説明書「虻田」, 地質調査所, p.76.

# 参考文献

- (39) 土居繁雄・松井公平・藤原哲夫 (1958) :5万分の1地質図幅説明書「豊浦」, 北海道開発庁, p.40.
- (40) 北海道立地質研究所 (2003) :有珠山火山活動災害復興支援土地条件等調査報告, 北海道立地質研究所, p.196.
- (41) 李仁雨 (1993) :洞爺カルデラ火碎噴火の噴出物:全岩化学組成の特徴, 日本火山学会講演予稿集, p.87.
- (42) Lee, I.W. (1996) :Formation of Toya Caldera, Southwest Hokkaido, Japan, 神戸大学博士論文.
- (43) 腹澤好博・臼井理沙・田中瞳・東剛 (2007) :SAR法による洞爺火碎流堆積物の赤色熱ルミネセンス年代測定, 地質学雑誌, 第113, pp.470-478.
- (44) Sanjo, R., and Sugai, T (2023) : Post-caldera boundary fault reactivation by regional tectonic stress at Akaigawa Caldera (Hokkaido, Japan), Geomorphology, Volume 440, 2023, 108866, ISSN 0169-555X.
- (45) 産業技術総合研究所 (2021) :令和2年度原子力規制庁委託成果報告書 巨大噴火プロセス等の知見整備に係る研究.
- (46) 後藤芳彦・孫入匠・檀原徹・東宮昭彦 (2021) :北海道洞爺カルデラ地域における先カルデラ期の火碎流堆積物の発見:立香火碎流堆積物, 日本火山学会講演予稿集, p.49.
- (47) 東宮明彦・宮城磯治 (2020) :洞爺噴火の年代値, 火山, 第65巻, 第1号, pp.13-18.
- (48) Marsden, R.C., Danišík, M., Ito, H., Kirkland, C.L., Evans, N.J., Miura, D., Friedrichs, B., Schmitt, A.K., Uesawa, S., Daggitt, M.L. (2021) :Considerations for double-dating zircon in secular disequilibrium with protracted crystallisation histories, Chemical Geology, 581, 120408.
- (49) Miyabuchi, Y., Okuno, M., Torii, M., Yoshimoto, M., Kobayashi, T. (2014) :Tephrostratigraphy and eruptive history of post-caldera stage of Toya Volcano, Hokkaido, northern Japan, J. Volcanol. Geotherm. Res., 281, 34-52.
- (50) 産業技術総合研究所 (2022) :令和3年度原子力規制庁委託成果報告書 巨大噴火プロセス等の知見整備に係る研究.
- (51) 曽屋龍典・勝井義雄・新井田清信・堺幾久子・東宮昭彦 (2007) :有珠火山地質図(第2版), 地質調査総合センター.
- (52) Nakagawa, M., Matsumoto, A., Yoshizawa, M. (2022) :Re-investigation of the sector collapse timing of Usu volcano, Japan, inferred from reworked ash deposits caused by debris avalanche, Front. Earth Sci., 10: 967043.
- (53) 藤根 久・遠藤邦彦・鈴木正章・吉本充宏・鈴木 茂・中村賢太郎・伊藤 茂・山形秀樹・Lomtatidze Zaur・横田彰宏・千葉達朗・小杉 康 (2016) :有珠山善光寺岩屑なだれの発生年代の再検討-有珠南麓の過去2万年間の環境変遷との関連で-, 第四紀研究, 第55巻, 第6号, pp.253-270.
- (54) Goto, Y., Danhara, T., Tomiya, A. (2019) :Catastrophic sector collapse at Usu volcano, Hokkaido, Japan: failure of a young edifice built on soft substratum, Bull Volcanol, 81: 37.
- (55) 新エネルギー総合開発機構 (1986) :昭和60年度全国地熱資源総合調査(第2次) 火山性熱水対流系地域タイプ①(ニセコ地域)調査 火山岩分布年代調査報告書 要旨.
- (56) Goto, Y., Miyoshi, M., Danhara, T., Tomiya, A. (2020) :Evolution of the Quaternary silicic volcanic complex of Shiribetsu, Hokkaido, Japan: an example of ignimbrite shield volcanoes in an island arc setting, International Journal of Earth Sciences, 109, pp.2619-2642.
- (57) 中川光弘・上澤真平・坪井宏太 (2011) :南西北海道, 尻別火山起源の喜茂別火碎流と洞爺火碎流の偽層序関係, 日本火山学会講演予稿集, p.66.

# 参考文献

- (58) 江草匡倫・中川光弘・藤田豪平 (2003) : 西南北海道, 羊蹄火山の活動史: 埋積された古羊蹄火山の発見と噴出率の時間変化, 日本火山学会講演予稿集, p.57.
- (59) 上澤真平・中川光弘・江草匡倫 (2011) : 南西北海道, 羊蹄火山の完新世噴火史の再検討, 火山, 第56巻, 第2・3合併号, pp.51-63.
- (60) 佐藤博之 (1969) : 最近測定された北海道の火山活動に関する<sup>14</sup>C 年代測定, 地質ニュース, 178, pp.30-35.
- (61) 柏原 信 (1970) : 野幌丘陵南部における低位段丘堆積物の<sup>14</sup>C年代-日本の第四紀層の<sup>14</sup>C年代 (58) -, 地球科学, 第24巻, 第4号, pp.149-150.
- (62) 佐々木竜男・片山雅弘・富岡悦郎・佐々木清一・矢沢正士・山田忍・矢野義治・北川芳男 (1971) : 北海道における腐植質火山灰の編年に関する研究, 第四紀研究, 第10巻, 第3号, pp.117-123.
- (63) 大貫康行・井島行夫・春日井昭・佐藤博明 (1977) : „N, US-C“降下軽石層の<sup>14</sup>C年代-羊蹄火山のテフラとの層位関係について (115) -, 地球科学, 第31巻, 第2号, pp.87-89.
- (64) 廣瀬亘・大津直・川上源太郎 (2007) : 羊蹄火山における完新世側噴火の<sup>14</sup>C年代, 日本地質学会連合大会講演要旨集, V156, p.27
- (65) 小疋尚・野上道男・小野有五・平川一臣編 (2003) : 日本の地形2 北海道, 東京大学出版会.
- (66) 松尾良子・中川光弘 (2017) : 北海道南西部ニセコ火山群, イワオヌプリ火山の形成史と活動年代, 日本地質学会連合2017年大会講演要旨, SVC50-P13.
- (67) Oka, D., Tamura, M., Mogi, T., Nakagawa, M., Takahashi, H., Ohzono, M., and Ichiyanagi, M. (2023) : Conceptual model of supercritical geothermal system in Shiribeshi Region, Hokkaido, Japan, Geothermics, 108, 102617.
- (68) 日本地質学会編 (2010) : 日本地質誌1 北海道地方, 朝倉書店.
- (69) 新エネルギー総合開発機構 (1987a) : 昭和61年度全国地熱資源総合調査 (第2次) 火山性熱水対流系地域タイプ①(ニセコ地域) 地熱調査成果図集.
- (70) 佐々木龍男 (1975) : イワオヌプリ火山放出物(火山灰), 北海道農試農芸化学部試験研究成績書, pp.37-40.
- (71) 久保和也・柴田 賢・石田正夫 (1988) : 西南北海道, 長万部地域の新第三紀火山岩類のK-Ar年代, 地質学雑誌, 第94巻, 第10号, pp.789-792.
- (72) Kaneoka, I., Yamagishi, H. and Yahata, M. (1987) : K-Ar Ages of the neogene submarine volcanic rocks and overlying quaternary subaerial lavas from the Mt. Karibayama area, southwest Hokkaido, Bull. Volcanol. Soc. Japan, Ser.2, Vol.32, No.4, pp.329-333.
- (73) 第四紀火山カタログ委員会編 (1999) : 日本の第四紀火山カタログ, 日本火山学会.
- (74) 山岸宏光・黒沢邦彦 (1987) : 5万分の1地質図幅説明書「原歌および狩場山」, 北海道立地下資源調査所.
- (75) 玉生志郎 (1978) : ガラスによるフィッショントラック年代測定, 日本地質学会学術大会講演要旨, 85, p.288.
- (76) 鷹澤好博 (1992) : 西南北海道渡島半島の新第三系層序と古地理, 地質学論集, 37, pp.11-23.
- (77) 新エネルギー総合開発機構 (1994) : 地熱開発促進調査報告書No.33, 奥尻地域.

# 参考文献

- (78) 鹿野和彦・吉村洋平・石山大三・Geoffrey J. Orton・大口健志 (2006) : 北海道奥尻島, 勝澗山火山の噴出物と構造, 火山, 第51巻, 第4号, pp.211-229.
- (79) 能條 歩・都郷義寛・鈴木明彦・嶋田智恵子・板木拓也 (1997) : 西南北海道日本海熊石-乙部地域の鮮新統~更新統の堆積年代, 地球科学, 第51巻, 第3号, pp.245-250.
- (80) 新エネルギー総合開発機構 (1999) : 地熱開発促進調査報告書No.B-3, 熊石地域.
- (81) 新エネルギー総合開発機構 (1990) : 地熱開発促進調査報告書No.19, 八雲地域.
- (82) 金田泰明・長谷川健 (2022) : 北海道南西部, 潟川火山におけるカルデラ形成期~後カルデラ期の噴出物層序及び噴火推移, 火山, 第67巻, 第1号, pp.1-19.
- (83) 五十嵐昭明・佐藤 浩・井手俊夫・西村 進・角 清愛 (1978) : 北海道茅部郡濁川地熱地域の熱水変質帯, 地質調査所報告, No.259, pp.85-180.
- (84) 柳井清治・鴈澤好博・古森康晴 (1992) : 最終氷期末期に噴出した濁川テフラの層序と分布, 地質学雑誌, 第98巻, 第2号, pp.125-136.
- (85) 黒墨秀行・土井宣夫 (2003) : 濁川カルデラの内部構造, 火山, 第48巻, 第3号, pp.259-274.
- (86) 松下勝秀・鈴木 守・高橋功二 (1973) : 5万分の1地質図幅説明書「濁川」, 北海道立地下資源調査所.
- (87) 中川光弘・野上健治・石塚吉浩・吉本充宏・高橋良・石井英一・江草匡倫・宮村淳一・志賀透・岡崎紀俊・石丸聰 (2001) : 北海道駒ヶ岳, 2000年的小噴火とその意義: 噴出物と火山灰付着性成分の時間変化から見たマグマ活動活発化の証拠, 火山, 46巻, 6号, pp.295-304.
- (88) 高田倫義・中川光弘 (2016) : 南西北海道, 横津火山群の地質と岩石: 150万年間の活動様式とマグマ化学組成の時間変遷, 日本地質学会第123年学術大会講演要旨, R3-0-2.
- (89) 新エネルギー総合開発機構 (1988) : 地熱開発促進調査報告書No.13, 南茅部地域.
- (90) 三谷勝利・鈴木 守・松下勝秀・国府谷盛明 (1966) : 5万分の1地質図幅説明書「大沼公園」, 北海道立地下資源調査所.
- (91) 藤原哲夫・国府谷盛明 (1969) : 5万分の1地質図幅説明書「恵山」, 北海道立地下資源調査所.
- (92) 三浦大助・古川竜太・荒井健一 (2022) : 恵山火山地質図, 地質調査総合センター.
- (93) 山縣耕太郎・町田 洋・新井房夫 (1989) : 錢亀-女那川テフラ: 津軽海峡函館沖から噴出した後期更新世のテフラ, 地理学評論 Ser.A, 第62巻, 第3号, pp.195-207.
- (94) Tsuchiya, N., Ishii, J., Yamazaki, T., Shuto, K. (1989) : A newly discovered Quaternary volcano from northeast Japan Sea : K-Ar age of andesite dredged from the Shiribeshi Seamount, Jour. Min. Petr. Econ. Geol., 84, 391-397.
- (95) 石田正夫・三村弘二・広島俊男 (1991) : 20万分の1地質図幅「岩内」, 通商産業省工業技術院地質調査所.

# 参考文献

(WEB)

- (96) 産業技術総合研究所 日本の火山データベース:<https://gbank.gsj.jp/volcano/>
- (97) 産業技術総合研究所地質調査総合センター編 (2020) 20万分の1日本火山図 (ver. 1.0d), 産総研地質調査総合センター:  
<https://gbank.gsj.jp/volcano/vmap/>
- (98) Uesawa, S. (2023) :TephraDB\_Prototype\_ver1.3 (1.3) [Data set]. Zenodo. <https://doi.org/10.5281/zenodo.7857457>